

茨城県教育財団文化財調査報告 VI

鹿島線関係遺跡発掘調査報告書

昭和55年3月

財團法人

茨城県教育財団

序

国鉄鹿島線建設ルート内の埋蔵文化財包蔵地の調査は、既に昭和48年度より茨城県教育委員会が分布調査並びに包蔵地の発掘調査を行なってまいりました。昭和53年度に、茨城県教育委員会において調査未了となった鉾田町畠田遺跡の発掘調査を茨城県教育財団が実施いたしました。

本報告書は、茨城県教育委員会により設立された鹿島線遺跡調査会が発掘調査した徳宿遺跡、塙遺跡、安房西占墳群、安塚遺跡並びに茨城県教育財団が実施した畠田遺跡の調査結果を集録したものであります。

この報告書に登載された記録や資料が、原始・古代文化を解明するために益するものがあろうかと考えます。その意味からも、本書がより多くの方々に御活用いただけるよう希望いたします。

なお、この事業推進にあたって御協力いただいた茨城県教育委員会、鉾田町教育委員会はじめ関係機関ならびに地元関係者各位に深く感謝の意を表します。

昭和55年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 竹内藤男

例 言

- 本書は、日本鉄道建設公団東京支社と茨城県教育財団との埋蔵文化財発掘調査出土遺物整理にかかる委託契約に基づき、昭和50年9月に発足した鹿島線遺跡調査会が実施した発掘調査、茨城県鹿島郡鉢田町所在の徳宿遺跡、塙遺跡、安房西古墳群、安塚遺跡並びに昭和53年度に茨城県教育財団が実施した茨城県鹿島郡鉢田町所在の畠田遺跡の発掘調査の報告書である。
- 鹿島線遺跡調査会にかかる出土遺物等の整理は、茨城県教育財団調査課嘱託橋本勉が担当し、畠田遺跡にかかる出土遺物等の整理は茨城県教育財団副参事高橋杏二が担当した。
- 本書は鹿島線遺跡調査会にかかる章は橋本勉が執筆し、畠田遺跡にかかる章は高橋杏二が執筆した。
- 記載の順序は発掘遺跡の順に従った。
- 遺跡の略号として、徳宿遺跡 K L27.1・塙遺跡 K L27.4・安房西古墳群 K L28.2・畠田遺跡 K L31.1・安塚遺跡 K L32.5を用いた。
- 御指導を賜わった茨城県教育委員会、発掘調査にあたり御協力をいただいた鉢田町教育委員会並びに地元研究者各位に感謝致します。
- 鹿島線遺跡調査会が実施した発掘調査の期間及び構成は下記のとおりである。

遺 跡 名	調 査 期 間	発 掘 調 査 担 当 者
徳宿遺跡	昭和50年10月6日～10月16日	細谷弘一、高根信和、瓦吹堅
塙遺跡	昭和50年10月20日～12月19日	細谷弘一、高根信和、瓦吹堅
安房西古墳群	昭和51年7月20日～8月31日	高根信和、瓦吹堅
安塚遺跡	昭和51年9月～昭和52年3月	高根信和、瓦吹堅、佐藤正好、海老沢稔

目 次

序

例 言

目 次

挿図目次

図版目次

第1章 調査の経緯.....	1
第1節 調査にいたる経過.....	1
1. 国鉄鹿島線.....	1
2. 鹿島線遺跡調査会の設立.....	3
3. 鹿島線遺跡調査会の解散.....	12
4. 烟田（かまた）遺跡.....	12
第2章 遺跡の立地と環境.....	17
第3章 徳宿遺跡.....	19
第1節 調査の経過.....	19
第2節 遺跡の位置と環境.....	20
第3節 遺構・遺物.....	22
第4節 グリット出土遺物.....	27
第5節 まとめ.....	38
第4章 墓遺跡.....	40
第1節 調査の経過.....	40
第2節 遺跡の位置と環境.....	41
第3節 遺構・遺物.....	44
第4節 グリット出土遺物.....	83
第5節 まとめ.....	105
第5章 安房西古墳群.....	110
第1節 調査の経過.....	110
第2節 遺跡の位置と環境.....	112
第3節 遺構・遺物.....	113
第4節 まとめ.....	125

第6章 安塚遺跡	127
第1節 遺跡の位置と環境	127
第2節 調査の経過	128
第3節 遺構・遺物	130
第4節 グリット出土遺物	185
第5節 まとめ	217
第7章 煙田遺跡	224
第1節 遺跡の位置と環境	224
第2節 調査の経過	226
第3節 遺構・遺物	231
第4節 まとめ	396

挿 図 目 次

徳宿遺跡

第1図 徳宿遺跡位置図	19
第2図 徳宿遺跡地形図	20
第3図 徳宿遺跡全体図	21
第4図 土壙実測図-1	23
第5図 土壙実測図-2	25
第6図 土壙出土遺物	26
第7図 グリット出土遺物-1	28
第8図 グリット出土遺物-2	29
第9図 グリット出土遺物-3	31
第10図 グリット出土遺物-4	32
第11図 グリット出土遺物-5	33
第12図 グリット出土遺物-6	34
第13図 グリット出土遺物-7	35
第14図 グリット出土遺物-8	36
第15図 グリット出土遺物-9	37

塙遺跡

第1図 塙遺跡位置図	40
第2図 塙遺跡地形図	42
第3図 塙遺跡全体図	43
第4図 第1A号住居址、第1B号住居址実測図	45
第5図 第1A号住居址、第1B号住居址出土遺物	46
第6図 第1A号住居址出土遺物-1	47
第7図 第1A号住居址出土遺物-2	48
第8図 第1A号住居址出土遺物-3	49
第9図 第1A号住居址出土遺物-4	50
第10図 第1A号住居址出土遺物-5	51
第11図 第1B号住居址出土遺物	52

第12図	第2号住居址実測図	53
第13図	第2号住居址出土遺物-1	54
第14図	第2号住居址出土遺物-2	54
第15図	第2号住居址出土遺物-3	55
第16図	第3号住居址実測図	57
第17図	第3号住居址カマド実測図	58
第18図	第3号住居址出土遺物-1	59
第19図	第3号住居址出土遺物-2	60
第20図	第3号住居址出土遺物-3	60
第21図	第4号住居址実測図	61
第22図	第4号住居址出土遺物-1	62
第23図	第4号住居址出土遺物-2	63
第24図	第4号住居址出土遺物-3	64
第25図	第5号住居址実測図	68
第26図	第5号住居址出土遺物-1	69
第27図	第5号住居址出土遺物-2	70
第28図	第5号住居址出土遺物-3	71
第29図	第5号住居址出土遺物-4	71
第30図	土壤実測図-1(第1号土壤~第6号土壤)	74
第31図	土壤実測図-2(第7号土壤~第12号土壤)	76
第32図	土壤実測図-3(第13号土壤, 第14号土壤, 第16号土壤, 第20号土壤~第22号土壤)	78
第33図	土壤実測図-4(第15号土壤, 第17号土壤)	79
第34図	土壤実測図-5(第18号土壤, 第19号土壤)	80
第35図	土壤出土遺物	81
第36図	グリット出土遺物-1	83
第37図	グリット出土遺物-2	84
第38図	グリット出土遺物-3	85
第39図	グリット出土遺物-4	87
第40図	グリット出土遺物-5	88
第41図	グリット出土遺物-6	89
第42図	グリット出土遺物-7	90
第43図	グリット出土遺物-8	91

第44図	グリット出土遺物-9	92
第45図	グリット出土遺物-10	94
第46図	グリット出土遺物-11	95
第47図	グリット出土遺物-12	97
第48図	グリット出土遺物-13	98
第49図	グリット出土遺物-14	99
第50図	グリット出土遺物-15	100
第51図	グリット出土遺物-16	102
第52図	グリット出土遺物-17	103
第53図	グリット出土遺物-18	104

安房西古墳群

第1図	安房西古墳群位置図	110
第2図	安房西古墳群地形図	111
第3図	安房西古墳群全体図	113
第4図	第1号墳地形図	114
第5図	第1号墳実測図	115
第6図	第1号墳出土遺物-1	116
第7図	第1号墳出土遺物-2	117
第8図	第2号墳実測図	118
第9図	第3号方形周溝造構実測図	120
第10図	第3号方形周溝造構出土遺物	120
第11図	第4号特殊周溝造構実測図	121
第12図	第4号特殊周溝造構実測図	122
第13図	グリット出土遺物	122
第14図	須恵器底部拓影図(第1号墳、第4号墳)	123

安塚遺跡

第1図	安塚遺跡位置図	127
第2図	安塚遺跡全体図	129
第3図	第1号住居址実測図	131
第4図	第1号住居址出土遺物-1	132
第5図	第1号住居址出土遺物-2	133

第 6 図 第 1 号住居址出土遺物 - 3	134
第 7 図 第 1 号住居址出土遺物 - 4	134
第 8 図 第 2 号住居址、第 8 号 - 第 11 号土壤実測図	135
第 9 図 第 2 号住居址出土遺物 - 1	136
第10図 第 2 号住居址出土遺物 - 2	137
第11図 第 2 号住居址出土遺物 - 3	138
第12図 第 2 号住居址出土遺物 - 4	139
第13図 第 2 号住居址出土遺物 - 5	139
第14図 第 2 号住居址出土遺物 - 6	139
第15図 第 3 号住居址実測図	141
第16図 第 3 号住居址出土遺物 - 1	141
第17図 第 3 号住居址出土遺物 - 2	142
第18図 第 4 号住居址実測図	143
第19図 第 4 号住居址出土遺物 - 1	144
第20図 第 4 号住居址出土遺物 - 2	145
第21図 第 4 号住居址出土遺物 - 3	146
第22図 第 4 号住居址出土遺物 - 4	146
第23図 第 5 号住居址実測図	147
第24図 第 5 号住居址出土遺物 - 1	148
第25図 第 5 号住居址出土遺物 - 2	149
第26図 第 5 号住居址出土遺物 - 3	150
第27図 第 5 号住居址出土遺物 - 4	151
第28図 第 5 号住居址出土遺物 - 5	152
第29図 第 6 号住居址実測図	153
第30図 第 6 号住居址出土遺物 - 1	154
第31図 第 6 号住居址出土遺物 - 2	155
第32図 第 6 号住居址出土遺物 - 3	156
第33図 第 6 号住居址出土遺物 - 4	157
第34図 第 6 号住居址出土遺物 - 5	158
第35図 第 6 号住居址出土遺物 - 6	160
第36図 第 6 号住居址出土遺物 - 7	161
第37図 第 6 号住居址出土遺物 - 8	162

第38図	第6号住居址出土遺物-9	163
第39図	第6号住居址出土遺物-10	164
第40図	第6号住居址出土遺物-11	165
第41図	第7号住居址実測図	166
第42図	第7号住居址出土遺物-1	167
第43図	第7号住居址出土遺物-2	168
第44図	第7号住居址出土遺物-3	169
第45図	第7号住居址出土遺物-4	170
第46図	溝(第1号、第2号、第3号)実測図	171
第47図	溝土層断面図	172
第48図	第3号溝出土遺物	172
第49図	第4号溝出土遺物-1	173
第50図	第4号溝出土遺物-2	175
第51図	第4号溝出土遺物-3	176
第52図	第4号溝出土遺物-4	177
第53図	第4号溝出土遺物-5	178
第54図	炉穴、土坑実測図-1	179
第55図	土壤実測図-2	181
第56図	上墻、溝出土遺物	182
第57図	第16号上墻出土遺物	183
第58図	第1号埴実測図	184
第59図	グリット出土遺物-1	186
第60図	グリット出土遺物-2	187
第61図	グリット出土遺物-3	188
第62図	グリット出土遺物-4	189
第63図	グリット出土遺物-5	190
第64図	グリット出土遺物-6	191
第65図	グリット出土遺物-7	192
第66図	グリット出土遺物-8	192
第67図	グリット出土遺物-9	193
第68図	グリット出土遺物-10	195
第69図	グリット出土遺物-11	196

第70図 グリット出土遺物-12	197
第71図 グリット出土遺物-13	199
第72図 グリット出土遺物-14	200
第73図 グリット出土遺物-15	201
第74図 グリット出土遺物-16	202
第75図 グリット出土遺物-17	203
第76図 グリット出土遺物-18	204
第77図 グリット出土遺物-19	205
第78図 グリット出土遺物-20	206
第79図 グリット出土遺物-21	208
第80図 グリット出土遺物-22	209
第81図 グリット出土遺物-23	210
第82図 グリット出土遺物-24	211
第83図 グリット出土遺物-25	212
第84図 グリット出土遺物-26	213
第85図 グリット出土遺物-27	214

挿 図 目 次

烟田遺跡	
第1図 大調査区名稱図	14
第2図 小調査区名稱図	14
第3図 烟田遺跡位置図（A）	225
第4図 烟田遺跡位置図（B）	226
第5図 烟田遺跡全體図	229
第6図 第1号住居址実測図	231
第7図 第1号住居址貯藏穴	232
第8図 第2号住居址・第4号住居址実測図	233
第9図 第2号住居址貯藏穴	234
第10図 第2号住居址カマド実測図	234
第11図 第4号住居址カマド実測図	235
第12図 第3号住居址実測図	236
第13図 第3号住居址炉址	237
第14図 第6号住居址実測図	238
第15図 第6号住居址貯藏穴	239
第16図 第6号住居址カマド実測図	239
第17図 第7号住居址実測図	240
第18図 第7号住居址貯藏穴	241
第19図 第7号住居址カマド実測図	241
第20図 第8号住居址実測図	242
第21図 第9号住居址実測図	243
第22図 第9号住居址貯藏穴	244
第23図 第9号住居址焼土ブロック	244
第24図 第10号住居址実測図	245
第25図 第10号住居址貯藏穴	246
第26図 第10号住居址カマド実測図	246
第27図 第11号住居址実測図	247
第28図 第11号住居址貯藏穴	248

第29図	第12号住居址・第12号住居址実測図	249
第30図	第12号住居址カマド実測図	250
第31図	第12号住居址土壙尖端測図	250
第32図	第13号住居址実測図	251
第33図	第13号住居址貯蔵穴	252
第34図	第13号住居址カマド実測図	252
第35図	第14号住居址実測図	253
第36図	第14号住居址貯蔵穴	254
第37図	第14号住居址カマド実測図	254
第38図	第15号住居址実測図	255
第39図	第15号住居址貯蔵穴	256
第40図	第15号住居址カマド実測図	256
第41図	第16号住居址・第19号住居址実測図	257
第42図	第16号住居址貯蔵穴	258
第43図	第17号住居址実測図	260
第44図	第17号住居址貯蔵穴	260
第45図	第17号住居址カマド実測図	261
第46図	第18号住居址実測図	262
第47図	第20号住居址・第21号住居址実測図	263
第48図	第20号住居址貯蔵穴	265
第49図	第21号住居址貯蔵穴	265
第50図	第22号住居址実測図	266
第51図	第22号住居址貯蔵穴	267
第52図	第22号住居址カマド実測図	267
第53図	第23号住居址実測図	268
第54図	第23号住居址貯蔵穴	269
第55図	第23号住居址カマド実測図	269
第56図	第24号住居址実測図	270
第57図	第24号住居址貯蔵穴	271
第58図	第24号住居址カマド実測図	271
第59図	第25号住居址実測図	272
第60図	第25号住居址貯蔵穴	273

第61図	第25号住居址カマド実測図	273
第62図	第26号住居址実測図	274
第63図	第26号住居址貯蔵穴	275
第64図	第26号住居址カマド実測図	275
第65図	第27号住居址・第27号住居址・第28号住居址実測図	277
第66図	第27号住居址貯蔵穴	279
第67図	第27号住居址カマド実測図	279
第68図	第29号住居址実測図	280
第69図	第29号住居址貯蔵穴	281
第70図	第29号住居址カマド実測図	281
第71図	第30号住居址・第31号住居址・第32号住居址・第33号住居址実測図	283
第72図	第32号住居址カマド実測図	286
第73図	第33号住居址カマド実測図	286
第74図	第34号住居址実測図	287
第75図	第34号住居址貯蔵穴	288
第76図	第34号住居址カマド実測図	288
第77図	第35号住居址・第25号土壙(地下式壙)実測図	289
第78図	第37号住居址実測図	291
第79図	第37号住居址カマド実測図	292
第80図	第38号住居址実測図	292
第81図	第36号住居址・第39号住居址実測図	295
第82図	第36号住居址貯蔵穴	294
第83図	第36号住居址カマド実測図	294
第84図	第39号住居址カマド実測図	294
第85図	第24号土壙(地下式壙)実測図	300
第86図	第17号土壙・第18号壙・第19号土壙実測図	301
第87図	第1号溝実測図	304
第88図	各住居址出土土器(その1)	306
第89図	各住居址出土土器(その2)	308
第90図	各住居址出土土器(その3)	309
第91図	各住居址出土土器(その4)	312
第92図	各住居址出土土器(その5)	314

第 93図	各住居址出土上器(その6).....	318
第 94図	各住居址出土土器(その7).....	320
第 95図	各住居址出土土器(その8).....	322
第 96図	各住居址出土土器(その9).....	324
第 97図	各住居址出土上器(その10).....	327
第 98図	各住居址出土土器(その11).....	329
第 99図	各住居址出土上器(その12).....	332
第100図	各住居址出土土器(その13).....	334
第101図	各住居址出土土器(その14).....	336
第102図	第30号住居址出土土器(弥生式変形土器)展開図.....	338
第103図	第25号土塙(地下式塙)出土遺物.....	339
第104図	各住居址出土遺物(手捏土器・土玉).....	343
第105図	各住居址出土遺物(土玉).....	344
第106図	各住居址出土遺物(土玉).....	345
第107図	各住居址出土遺物(土玉).....	346
第108図	各住居址出土遺物(管状土錐).....	347
第109図	各住居址出土遺物(土器片錐).....	349
第110図	各住居址出土遺物(石製紡錘車・石製模造品・砥石).....	350
第111図	各住居址出土遺物(砥石).....	351
第112図	各住居址出土遺物(軽石・石鐵・剝片).....	353
第113図	各造構出土土器拓影(その1).....	375
第114図	各造構出土土器拓影(その2).....	376
第115図	各造構出土土器拓影(その3).....	377
第116図	各造構出土土器拓影(その4).....	378
第117図	各造構出土土器拓影(その5).....	379
第118図	各造構出土土器拓影(その6).....	380
第119図	各造構出土土器拓影(その7).....	381
第120図	各造構出土土器拓影(その8).....	382
第121図	各造構出土土器拓影(その9).....	383
第122図	各造構出土土器拓影(その10).....	384
第123図	各造構出土土器拓影(その11).....	385
第124図	各造構出土土器拓影(その12).....	386

第125図	各遺構出土土器拓影(その13)	387
第126図	各遺構出土土器拓影(その14)	388
第127図	各遺構出土土器拓影(その15)	389
第128図	各遺構出土土器拓影(その16)	390
第129図	各遺構出土土器拓影(その17)	391
第130図	各遺構出土土器拓影(その18)	392
第131図	各遺構出土土器拓影(その19)	393
第132図	各遺構出土土器拓影(その20)	394
第133図	各遺構出土土器拓影(その21)	395

図版目次

徳宿遺跡

P L 1	(1)徳宿遺跡遠景	400
	(2)徳宿遺跡全景－1	400
P L 2	(1)徳宿遺跡全景－2	401
	(2)層位	401
P L 3	(1)第1号土壙	402
	(2)第2号土壙	402
	(3)第3号土壙	402
P L 4	(1)第4号土壙	403
	(2)第5号土壙	403
	(3)第6号土壙	403
P L 5	(1)第7号土壙	404
	(2)第8号土壙	404
	(3)第9号土壙	404
P L 6	(1)第10号土壙	405
	(2)第11号土壙	405
	(3)第12号土壙	405
P L 7	(1)第13号土壙	406
	(2)第14号土壙	406
	(3)第15号土壙	406
P L 8	(1)第16号土壙	407
	(2)第17号土壙	407
P L 9	(1)出土遺物－1	408
	(2)出土遺物－2	408
P L 10	(1)出土遺物－3	409
	(2)出土遺物－4	409
P L 11	(1)出土遺物－5	410
	(2)出土遺物－6	410

墳遺跡

P L 1	(1)墳遺跡遠景.....	412
	(2)第1 A号住居址、第1 B号住居址.....	412
P L 2	(1)第1 B号住居址カマド.....	413
	(2)第1 A号住居址遺物出土狀況－1.....	413
	(3)第1 A号住居址遺物出土狀況－2.....	413
P L 3	(1)第2号住居址.....	414
	(2)第2号住居址遺物出土狀況－1.....	414
P L 4	(1)第2号住居址遺物出土狀況－2.....	415
	(2)第2号住居址遺物出土狀況－3.....	415
	(3)第2号住居址遺物出土狀況－4.....	415
P L 5	(1)第3号住居址.....	416
	(2)第3号住居址貯藏穴.....	416
P L 6	(1)第3号住居址遺物出土狀況－1.....	417
	(2)第3号住居址遺物出土狀況－2.....	417
	(3)第3号住居址遺物出土狀況－3.....	417
P L 7	(1)第4号住居址.....	418
	(2)第4号住居址遺物出土狀況－1.....	418
P L 8	(1)第4号住居址遺物出土狀況－2.....	419
	(2)第4号住居址遺物出土狀況－3.....	419
P L 9	(1)第4号住居址遺物出土狀況－4.....	420
	(2)第4号住居址遺物出土狀況－5.....	420
	(3)第4号住居址遺物出土狀況－6.....	420
P L 10	(1)第5号住居址.....	421
	(2)第5号住居址遺物出土狀況－1.....	421
P L 11	(1)第5号住居址遺物出土狀況－2.....	422
	(2)第5号住居址遺物出土狀況－3.....	422
	(3)第1号土壤.....	422
P L 12	(1)第2号土壤.....	423
	(2)第3号土壤.....	423
	(3)第4号土壤.....	423
P L 13	(1)第5号土壤.....	424

(2)第6号土壤	424
(3)第7号土壤	424
P L14 (1)第8号土壤	425
(2)第9号土壤	425
(3)第10号土壤	425
P L15 (1)第11号土壤	426
(2)第12号土壤	426
(3)第13号土壤	426
P L16 (1)第14号土壤	427
(2)第15号土壤	427
(3)第16号土壤	427
P L17 (1)第17号土壤	428
(2)第18号土壤	428
(3)第19号土壤	428
P L18 (1)第20号土壤	429
(2)第21号土壤	429
(3)第22号土壤	429
P L19 (1)第2号住居址出土遺物	430
(2)第3号住居址出土遺物	430
P L20 (1)第4号住居址出土遺物	431
P L21 (1)第5号住居址出土遺物	432
P L22 (1)グリット出土遺物-1	433
P L23 (1)グリット出土遺物-2	434
P L24 (1)グリット出土遺物-3	435
P L25 (1)グリット出土遺物-4	436
P L26 (1)グリット出土遺物-5	437
P L27 (1)グリット出土遺物-6	438
P L28 (1)グリット出土遺物-7	439
P L29 (1)グリット出土遺物-8	440
安井西古墳群	
P J. 1 (1)第1号墳墳丘	442

(2)安房西古墳群遠景（北より）	442
P L 2 (1)第1号墳（南より）	443
P L 3 (1)第1号墳（北より）	444
(2)第1号墳墳丘土層断面	444
P L 4 (1)第1号墳主体部及び敷石	445
(2)第1号墳主体部	445
P L 5 (1)第1号墳周溝上敷石	446
(2)第1号墳周溝上敷石	446
P L 6 (1)第1号墳周溝上敷石部土層断面	447
(2)第1号墳周溝上層断面	447
P L 7 (1)第1号墳周溝内土壙	448
(2)第1号墳周溝内土壙	448
P L 8 (1)第2号墳	449
(2)第2号墳周溝土層断面	449
P L 9 (1)第3号方形周溝遺構	450
(2)第3号方形周溝遺構	450
P L 10 (1)第3号方形周溝遺構周溝内遺物出土状況	451
(2)第3号方形周溝遺構周溝土層断面	451
P L 11 (1)第3号方形周溝遺構周溝土層断面	452
(2)第4号特殊周溝遺構・第3号方形周溝遺構	452
P L 12 (1)第4号特殊周溝遺構（東より）	453
(2)第4号特殊周溝遺構（南より）	453
P L 13 (1)第4号特殊周溝遺構周溝土層断面	454
(2)第4号特殊周溝遺構周溝内遺物出土状況	454
P L 14 (1)第1号墳出土遺物	455
(2)第3号方形周溝遺構出土遺物	455
P L 15 (1)第4号特殊周溝遺構出土遺物	456
(2)グリット出土遺物	456

安塚遺跡

P L 1 (1)安塚遺跡遠景	458
(2)安塚遺跡全貌（南より）	458

P L 2	(1)第1号住居址.....	459
	(2)第2号住居址.....	459
P L 3	(1)第6号住居址.....	460
	(2)第3号炉穴.....	460
P L 4	(1)第6号炉穴.....	461
	(2)第6号土壤.....	461
P L 5	(1)第12号土壤.....	462
	(2)第16号土壤.....	462
P L 6	(1)第1号溝.....	463
	(2)第3号溝.....	463
P L 7	(1)第1号墳.....	464
	(2)第1号墳周溝土層斷面.....	464
P L 8	(1)第1号住居址出土遺物—1.....	465
	(2)第1号住居址出土遺物—2.....	465
P L 9	(1)第2号住居址出土遺物—1.....	466
	(2)第2号住居址出土遺物—2.....	466
P L 10	(1)第2号住居址出土遺物—3.....	467
	(2)第2号住居址出土遺物—4.....	467
	(3)第3号住居址出土遺物—5.....	467
P L 11	(1)第4号住居址出土遺物—1.....	468
	(2)第4号住居址出土遺物—2.....	468
P L 12	(1)第5号住居址出土遺物—1.....	469
	(2)第5号住居址出土遺物—2.....	469
P L 13	(1)第5号住居址出土遺物—3.....	470
	(2)第5号住居址出土遺物—4.....	470
P L 14	(1)第6号住居址出土遺物—1.....	471
	(2)第6号住居址出土遺物—2.....	471
P L 15	(1)第6号住居址出土遺物—3.....	472
	(2)第6号住居址出土遺物—4.....	472
P L 16	(1)第6号住居址出土遺物—5.....	473
	(2)第6号住居址出土遺物—6.....	473
P L 17	(1)第6号住居址出土遺物—7.....	474

P L.18	(1)第7号住居址出土遺物-1	475
	(2)第7号住居址出土遺物-2	475
P L.19	(1)第7号住居址出土遺物-3	476
P L.20	(1)第16号土壤出土遺物	477
P L.21	(1)第4号溝出土遺物-1	478
	(2)グリット出土遺物-6	478
P L.22	(1)第4号溝出土遺物-2a	479
	(2)第4号溝出土遺物-2b(裏面)	479
P L.23	(1)第4号溝出土遺物-3	480
	(2)第4号溝出土遺物-4	480
P L.24	(1)グリット(住居址覆土)出土遺物-1	481
	(2)グリット(住居址覆土)出土遺物-2	481
P L.25	(1)グリット(住居址覆土)出土遺物-3a	482
	(2)グリット(住居址覆土)出土遺物-3b(裏面)	482
P L.26	(1)グリット(住居址覆土)出土遺物-4a	483
	(2)グリット(住居址覆土)出土遺物-4b(表面)	483
P L.27	(1)グリット(住居址覆土)出土遺物-5a	484
	(2)グリット(住居址覆土)出土遺物-5b(裏面)	484
P L.28	(1)グリット(住居址覆土)出土遺物-7	485
	(2)グリット(住居址覆土)出土遺物-8	485
P L.29	(1)グリット出土遺物-9	486
	(2)グリット出土遺物-10	486
P L.30	(1)グリット出土遺物-11	487
	(2)グリット出土遺物-12	487
P L.31	(1)グリット出土遺物-13	488
	(2)グリット出土遺物-14	488
P L.32	(1)グリット出土遺物-15	489
P L.33	(1)グリット出土遺物-16	490
P L.34	(1)グリット出土遺物-17	491
	(2)グリット出土遺物-18	491

烟田遗跡

P L 1	(1)烟田遺跡全景.....	494
	(2)C区・D区・E区発掘状況.....	494
P L 2	(1)C区・D区・E区各遺跡.....	495
	(2)第1号住居址遺物出土状況.....	495
P L 3	(1)第3号住居址.....	496
	(2)第8号住居址.....	496
P L 4	(1)第9号住居址.....	497
	(2)第10号住居址.....	497
P L 5	(1)第11号住居址・第12号住居址・第12'住居址.....	498
	(2)第12号住居址土壤.....	498
P L 6	(1)第13号住居址.....	499
	(2)第18号住居址.....	499
P L 7	(1)第19号住居址.....	500
	(2)第16号住居址・第19号住居址.....	500
P L 8	(1)第17号住居址・第1号溝.....	501
	(2)第17号住居址遺物出土状況.....	501
P L 9	(1)第20号住居址・第21号住居址.....	502
	(2)第23号住居址・第22号住居址・第25号住居址.....	502
P L 10	(1)第23号住居址.....	503
	(2)第24号住居址・第25号住居址・第22号住居址.....	503
P L 11	(1)第24号住居址.....	504
	(2)第22号住居址・第25号住居址・第24号住居址.....	504
P L 12	(1)第26号住居址.....	505
	(2)同上.....	505
P L 13	(1)第27号住居址・第27号住居址・第28号住居址.....	506
	(2)第29号住居址.....	506
P L 14	(1)第30号住居址.....	507
	(2)第30号住居址・第31号住居址.....	507
P L 15	(1)第32号住居址・第33号住居址.....	508
	(2)第34号住居址.....	508
P L 16	(1)第37号住居址.....	509

(2)第24号土壤	509
P L17 (1)第25号土壤遺物出土状況	510
(2)同上	510
P L18 第1号溝	511
P L19 各住居址出土遺物 杯形土器(1)~(6), 縮尺不同	512
P L20 各住居址出土遺物 杯形土器(1)~(5), 器台(6), 縮尺不同	513
P L21 各住居址出土遺物 杯形土器(1)~(5), 梗形土器(6), 縮尺不同	514
P L22 各住居址出土遺物 碗形土器(1), (4), 杯形土器(2)・(3), 鉢形土器(5), 縮尺不同	515
P L23 各住居址出土遺物 高杯形土器(1)~(5), 縮尺不同	516
P L24 各住居址出土遺物 鉢形土器(1), 杯形土器(2)・(3), 縮尺不同	517
P L25 各住居址出土遺物 瓢形土器(1)~(5), 縮尺不同	518
P L26 各住居址出土遺物 弧生式壺形土器(1)~(5), 縮尺不同	519
P L27 各住居址出土遺物 壺形土器(1)・(2), 增形土器(3)~(5), 縮尺不同	520
P L28 各住居址出土遺物 鉢形土器(1), 豆形土器(2)~(4), 縮尺不同	521
P L29 各住居址出土遺物 豆形土器(1)~(5), 縮尺不同	522
P L30 第25号土壤（地下式塙）出土遺物	523
P L31 (1)各遺構出土 土器片類	524
(2)各遺構出土 土玉	524
P L32 (1)各遺構出土 砥石	525
(2)各遺構出土 繩文式土器	525

第1章 調査の経緯

第1節 調査にいたる経過

1 国鉄鹿島線

(沿革)

地域開発の進展に伴い、中央と地方とを結ぶ地方幹線の強化が必要とされ、さらに地方都市の過疎現象を解決するため地方開発線の促進が望まれている。

鹿島線はこのような要望を背景として常磐線水戸から分岐して鹿島灘に沿い南進し、鉢山・鹿島を経て成田線香取に至る路線で、昭和39年9月28日に工事線に指定された。

この線は、東北地区と京葉地区を結ぶ準幹線となるもので、鹿島臨海工業地帯及び沿線の産業開発に寄与し、かつ大洗町を中心とする海岸線及び霞ヶ浦周辺の水郷地帯の観光資源開発に期待を持たれている。

(工事の概要)

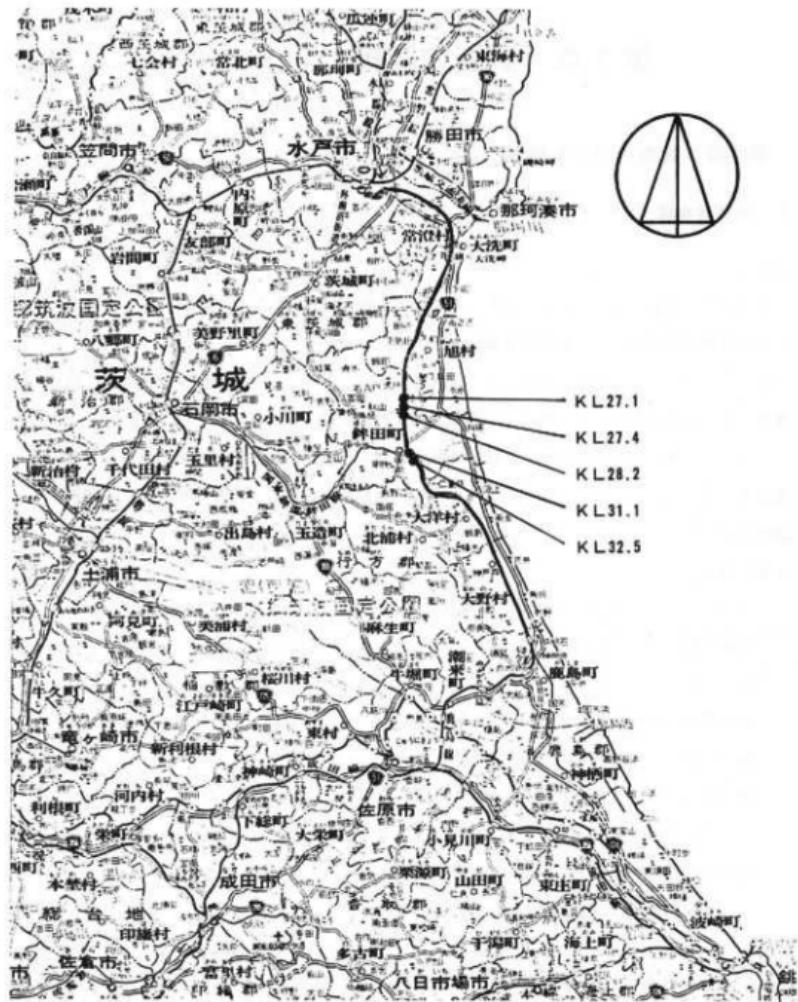
区間	水戸～香取 70.2km
線路規格	乙線 単線
最急勾配	10／1,000
最小曲線半径	500m
橋梁延長	196カ所 26,105m
最大橋梁	第1戸沢高架橋 1,571m
トンネル延長	8カ所 2,475m
最大トンネル	大貫トンネル 1,380m

(注) 線路規格、最急勾配及び最小曲線半径以外は概数

(現況)

昭和45年8月20日北鹿島～香取間17.4キロメートルが開通した。その後、昭和46年に大野村及び大洋村で着工し、昭和49年6月道水路等の付替工事を除き、ほぼ全線にわたり施工中で、昭和47年に常滑村、昭和48年に旭村、常滑村と水戸市の一部高架橋はすでに完成しており、国道51号線から望見されるようになった。

(鹿島線1978日本鉄道建設公團東京支社)



1 : 50 : 000

鹿島線建設にかかる鹿島郡鉾田町地区内遺跡

K L 27.1 德宿遺跡

K L 31.1 烟田遺跡

K L 27.4 墓 遺 蹤

K L 32.5 安塚遺跡

K L 28.2 安房西古墳群

2 鹿島線遺跡調査会の設立

昭和51年5月に鹿島線遺跡調査会より、中間報告1として鹿島線内遺跡報告（昭和50年度徳宿・塙遺跡調査略報）が発刊されている。その抜録をもって調査にいたる経過にかえる。

〈抜録〉

(1) 発掘調査までの経過

茨城県教育委員会は、日本鉄道建設公団から昭和48年7月17日付けで国鉄鹿島線建設に伴う水戸市～鉢田町間の鉄道建設予定地及びその付帯工事予定地内の埋蔵文化財の分布調査の依頼を受け、昭和50年10月6日鉢田町徳宿遺跡の発掘調査開始まで概ね次のような経過をたどった。

昭和48年度

- (1) 昭和48年7月17日 日本鉄道建設公団から水戸市～鉢田町間鹿島線建設ルート内の埋蔵文化財の分布調査の依頼を受ける。
- (2) 昭和48年9月3日～5日 分布調査実施。
- (3) 昭和48年9月10日 分布調査についての回答を発送。
- (4) 昭和48年10月から昭和42年2月 当該埋蔵文化財の取扱い（保存）について協議。
13遺跡中4遺跡は山岳式トンネルによって遺跡を現状保存。1遺跡を盛土による保存。8遺跡を発掘調査による記録保存とすることについて日本鉄道建設公団東京支社と合意を見る。
- (5) 昭和49年3月12日 国鉄鹿島線建設に伴う埋蔵文化財分布調査結果について文化庁長官宛報告する。
- (6) 昭和49年3月20日 日本鉄道建設公団東京支社長から鹿島線に伴う埋蔵文化財の取扱いについて照会文書を受理する。

昭和49年度

- (7) 昭和49年4月4日 前記の照会文書の回答を発送。
- (8) 昭和49年4月5日 国鉄鹿島線建設に伴う埋蔵文化財の取扱いについて日本鉄道建設公団東京支社長宛回答した報告を文化庁長官宛発送。
- (9) 昭和49年4月から昭和50年6月まで発掘調査について日本鉄道建設公団東京支社と協議。特に大洗駅の用地確保に伴う大洗町桜道土地区画整理事業地内の鷺釜遺跡の取扱いと

費用負担について日本鉄道建設公団東京支社および大洗町と協議。

昭和50年度

- (1) 昭和50年 6月23日 鹿島線建設に伴う遺跡の取扱いについて文化庁と協議。盛土保存の遺跡については確認調査をするよう指示され、日本鉄道建設公団東京支社へも協議内容を伝え、最終的に13遺跡中、山岳式トンネルによって現状保存するもの4遺跡、発掘調査によって記録保存するもの8遺跡、確認調査により記録をとり盛土保存のもの1遺跡とすることで協議・合意をみる。
- (2) 昭和50年 7月 7日 鉢川町教育委員会・施行教育事務所に対して鹿島線関連遺跡の保存について経過報告と今後の見とおしについて説明協議する。
- (3) 昭和50年 7月11日 鹿島線内遺跡調査経費について日本鉄道建設公団東京支社と合意をみる。
- (4) 昭和50年 7月14日 水戸教育事務所において鹿島線内遺跡調査について今後の見とおしについて説明協議する。
- (5) 昭和50年 7月16日 日本鉄道建設公団東京支社長より「鹿島線建設に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査の依頼について」の文書を受理する。
- (6) 昭和50年 7月17日 日本鉄道建設公団東京支社から提出された発掘届を文化庁へ進呈する。
- (7) 昭和50年 7月 18日 発掘調査依頼の回答文書を日本鉄道建設公団東京支社長宛発送。
- (8) 昭和50年 7月～8月 鹿島線遺跡調査会の発足諸準備ならびに委託契約案について日本鉄道建設公団東京支社と協議。
- (9) 昭和50年 9月 4日 鹿島線遺跡調査会発足・総会。鹿島線遺跡調査会の発足によって、調査関係の業務は事实上県教育委員会から鹿島線遺跡調査会に移された。日本鉄道建設公団東京支社と発掘調査の委託契約締結。
- (10) 昭和50年 9月11日～12日 発掘調査についての現地協議。
- (11) 昭和50年 9月13日～30日 発掘調査の器材発注および設営。
- (12) 昭和50年10月 1日 徳宿遺跡において搬入式。
- (13) 昭和50年10月 2日～3日 発掘器材搬入。
- (14) 昭和50年10月 4日 徳宿遺跡の杭打作業。

鹿島線建設予定地（水戸市～鉢田町）埋蔵文化財の取扱い

遺跡名	所在地	現況	種別	時代	面積 (m ²)	取扱い	
						全	体
1 安塚遺跡	鉢田町安塚	畠	土師集落跡	古墳時代	50,000	3,000	発掘調査による記録保存
2 煙田遺跡	鉢田町烟田	畠	土師集落跡	古墳時代	200,000	6,550	発掘調査による記録保存
3 安房西古墳群	鉢田町安房西	山林・畠	古墳群	古墳時代	3基	3基	発掘調査による記録保存
4 塙遺跡	鉢田町塙	畠	土生集落跡	弥生時代	10,000	1,000	確認調査後盛上による保存
5 德宿遺跡	鉢田町徳宿	山林	弥生集落跡	弥生時代	5,000	500	発掘調査による記録保存
6 大前遺跡	大洗町成田町	山林	土師・須恵集落跡	奈良・平安時代	20,000	3,200	山岳式トンネルによる現状保存
7 小前遺跡	大洗町成田町	山林	土師集落跡	奈良時代	7,000	2,400	発掘調査による記録保存
8 ヨナ川遺跡	大洗町成田町	畠	弥生・土器・須恵器集落	奈良・平安時代	57,000	8,000	山岳式トンネルによる現状保存
9 南極太郎遺跡	大洗町成田町	畠	土師集落跡	奈良時代	38,600	11,250	発掘調査による記録保存
10 下天崩遺跡	大洗町成田町	畠	繩文・土師・須恵器集落跡	縄文・奈良・平安時代	75,600	8,000	発掘調査による記録保存
11 中畑B遺跡	人気町大貫町	畠	繩文・土師・須恵器集落跡	縄文・奈良・平安時代	10,500	7,500	山岳式トンネルによる現状保存
12 中畑A遺跡	人気町大貫町	畠	土師・須恵器集落跡	古墳・奈良・平安時代	100,000	37,500	山岳式トンネルによる現状保存
13 鮎釜池跡	大洗町鰯浜町	畠	土生集落跡	弥生・古墳・奈良・平安時代	76,000	20,625	発掘調査による記録保存

付 鹿島線遺跡調査会規約・役員及び幹事等名簿（昭和50年9月4日現在）

鹿島線遺跡調査会規約

第1章 総則

(目的)

第1条 この会は、日本鉄道建設公団の委託を受け、鹿島線の建設及びこれに伴う関連工事の区域内における遺跡の発掘調査を行い、もって文化財の保護を図ることを目的とする。

(名称)

第2条 この会は、鹿島線遺跡調査会という。

(事業)

第3条 この会は、第1条の目的を達成するため、次の各号に掲げる事業を行う。

(1) 遺跡の発掘調査

(2) 遺跡の記録の作成

(3) その他目的達成に必要な事業

(事務所)

第4条 この会の事務所は、水戸市三の丸1丁目5番38号茨城県教育庁文化課内に置く。

第2章 組織

(構成員)

第5条 この会は、この会の事業に密接な関係のある事務に従事する県及び市町村の職員を構成員とする。

(役員)

第6条 この会に次の役員を置く。

(1) 会長 1人

(2) 副会長 1人

(3) 理事 11人

(4) 監事 3人

(会長及び副会長)

第7条 会長は、茨城県教育委員会教育長の職にある者を、副会長は、茨城県教育庁教育次長の職にある者をもって充てる。

2 会長は、調査会の業務を総括し、この会を代表する。

3 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるとき、又は会長が欠けたときは、その職

務を行う。

(理事)

第8条 理事は、次の各号に掲げる職にある者をもって充てる。ただし、第4号に掲げる職にある者にあっては、その者のうちから会長が委嘱した者とする。

- (1) 茨城県総合開発部開発計画課長
- (2) 茨城県教育庁の参事、企画室長、総務課長及び文化課長並びに水戸教育事務所長及び鹿行教育事務所長
- (3) 大洗町教育委員会の教育長及び鉾田町教育委員会の教育長
- (4) 茨城県文化財専門委員

(監事)

第9条 監事は、会長が委嘱する。

2 監事は、調査会の事業の管理及びこの会の経理に関する事務を監査する。

(役員の任期)

第10条 役員の任期は、この会の解散までとする。

(幹事等)

第11条 この会に幹事・嘱託を置く。

- 2 幹事・嘱託は、会長が委嘱する。
- 3 幹事・嘱託は、会長の命を受け、この会の事務を処理する。

(調査団)

第12条 この会に調査団を置く。

- 2 調査団に団長及び調査員を置く。
- 3 団長及び調査員は、会長が委嘱する。
- 4 調査団は、発掘調査その他の専門的業務を行う。

第3章 理事会

(構成及び職務)

第13条 理事会は、会長・副会長及び理事（以下「理事等」という。）をもって構成する。

2 理事会は、次の事項を議決する。

- (1) 事業計画の決定及び事業報告の承認
- (2) 子算の決定及び決算の承認
- (3) 内部組織及び事務処理に関する基本的事項
- (4) 諸規程の制定改廃
- (5) 解散

(6) その他理事会の議決を要すると認める事項

(招集)

第14条 理事会は、会長が招集する。

(会議の運営)

第15条 理事会は、現に在任する理事等の半数以上が出席しなければ会議を開くことができない。

2 前項の場合において、当該事案について書面をもって意志表示し、又は他の理事を代理人として表決を委任した理事は、会議に出席したものとみなす。

3 理事会の議長は、会長をもって充てる。

4 理事会の議事は、特に定めがある場合を除くほか、出席理事等の過半数でこれを決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(書面決議)

第16条 会長は、やむを得ない事由があるときは、書面をもって副会長及び理事の意見をきき、会議に代えることができる。

(監事等の出席)

第17条 会長は、必要があるときは、監事、幹事、調査団長又は調査員に対し、理事会への出席を求め、その所掌事務について説明させることができる。

第4章 事務の管理、執行及び財務

(経費の支弁の方法)

第18条 この会の事業に要する経費は、日本鉄道建設公団からの委託金をもって充てる。

(歳入歳出予算の調整)

第19条 会長は、毎年度歳入歳出予算を調整し、理事会に付議しなければならない。

(予算の補正)

第20条 会長は、歳入歳出予算を補正しようとするときは、理事会に付議するものとする。

(出納及び現金の保管)

第21条 この会の歳入歳出予算は、会長が経理する。

2 この会に属する現金は、会長が理事会の議決を経て定める銀行その他の金融機関にこれを預け入れ、最も確実かつ有利な方法によって保管しなければならない。

(決算)

第22条 会長は、事業終了と共に収支決算書を作成し、速やかに監事の監査を経て理事会の認定を受けなければならない。

(会計年度)

第23条 この会の会計は、この会発足の日にはじまり、第13条第2項第5号による解散の議決のあった日に終る。

第5章 委任

第24条 この規約に定めるもののほか、この会の運営に関する必要な事項は、会長が別に定める。

付則

- 1 この規約は、昭和50年9月4日から実施する。
- 2 この会の役員及び幹事は別紙のとおりとする。

鹿島縄造跡調査会 役員及び幹事等名簿

(昭和50年9月4日現在)

役名	氏名	現職名
会長	成瀬 孟男	茨城県教育委員会教育長
副会長	大金 新一	茨城県教育庁教育次長
理事	塙 瑞比古	茨城県文化財専門委員
理事	志田 淳一	茨城県文化財専門委員
理事	塙越喜一郎	茨城県教育庁参事
理事	鈴木友之介	茨城県総合開発部開発計画課長
理事	大貫 力	茨城県教育庁企画室長
理事	川野辺四郎	茨城県教育庁総務課長
理事	板垣 久敬	茨城県教育庁文化課長
理事	後藤 文	大洗町教育委員会教育長
理事	井川 正義	鉢田町教育委員会教育長
理事	宇田 茂	水戸教育事務所長
理事	小室 啓	鹿行教育事務所長
監事	磯田 勇	茨城県教育庁総務課課長補佐
監事	大久保景明	大洗町教育委員会事務局長
監事	市村 堅	鉢田町教育委員会事務局長
幹事	高橋 杏二	茨城県教育庁文化課課長補佐
幹事	大森 信英	茨城県教育庁文化課文化財係長
幹事	田村 恵	水戸教育事務所社会教育課長
幹事	宮崎 戴	水戸教育事務所社会教育主事
幹事	小沼 善治	鹿行教育事務所社会教育課長
幹事	藤田 包雄	鹿行教育事務所社会教育主事
幹事	高野 拓	茨城県教育庁文化課庶務係長
幹事	飯島 弘道	茨城県教育庁文化課主幹
幹事	鈴木 博之	大洗町教育委員会社会教育係長
幹事	大川 宗之	鉢田町教育委員会主事
幹事	川俣吉之助	茨城県教育庁文化課文化財保護主事
幹事	細谷 弘一	茨城県教育庁文化課文化財保護主事
幹事	大塚 博	茨城県教育庁文化課文化財保護主事
幹事	高根 信和	茨城県教育庁文化課文化財保護主事
幹事	山本 貴之	茨城県教育庁文化課主事
嘱託	瓦吹 堅	茨城県文化財保護指導員

昭和51年度

鹿島線遺跡調査会中間報告II（昭和51年度安房西古墳群調査略報）によると、今年度は、鉢田地区2地点・大洗地区1地点の3地点について調査を進めるべく、諸準備をすすめた。

(1) 昭和51年6月26日鹿島線遺跡調査会理事会。

議事

第1号議案 昭和50年度事業経過及び決算について。

第2号議案 昭和51年度事業計画及び予算について。

第3号議案 規約の一部改正について。

(2) 昭和51年7月1日 鉢田町教育委員会の紹介により安房区長宅挨拶。作業員確保。調査員の宿舎鉢田町安塚原ノ前網代莊。

(3) 昭和51年7月19日 現地事務所建設、発掘器材搬入。

(4) 昭和51年7月20日 発掘調査開始。

前記(1)の第3号議案 鹿島線遺跡調査会規約

鹿島線遺跡調査会規約の一部を次のように改定する。

第6条第1項第3号を次のように改める。

(3) 理事12人

第8条各号を次のように改める。

(1) 茨城県企画部地域振興課長

(2) 茨城県教育庁の参事、企画室長、総務課長、文化課長及び文化課副参事並びに水戸教育事務所長及び、鹿行教育事務所長

(3) 大洗町教育委員会教育長及び鉢田町教育委員会教育長

(4) 茨城県文化財保護審議会委員

第22条を次のように改める。

(決算)

第22条 会長は会計年度ごとに収支決算書を作成し、会計年度終了後、速やかに監事の監査を経て、理事会の承認を受けなければならない。

第23条を次のように改める。

(会計年度)

第23条 この会の会計は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

付則

1 この規約は昭和51年4月1日から実施する。

昭和51年 8月31日 安房西古墳群（1号墳～4号墳）発掘調査終了。

昭和51年 9月1日 安塚遺跡発掘開始。

昭和51年12月 煙田遺跡は未買収のため調査に入ることができなかった。

昭和51年度に調査を予定した大洗町磯浜町の髭釜遺跡発掘調査の取扱いについて。

茨城県教育委員会は、髭釜遺跡が同町の区画整理事業地内に所在し、そのため同町では、地元の遺跡発掘調査団が既に同遺跡周辺の発掘調査を開始している等の経過からみて、今後鹿島線遺跡調査会との関連において両者の円滑な業務の推行を考慮して次のように措置した。

- (1) 鬚釜遺跡の調査については諸種の事情を堪案して、大洗町教育委員会へ一括代行方式をとる。
- (2) 組織は大洗町教育委員会内に髭釜遺跡調査班をつくり、班長に教育長、副班長に事務局長、会計主任に社会教育係長があたり責任体制を明確にする。
- (3) 調査員は班長の委嘱とし、鹿島線遺跡調査会からは委嘱しない。
- (4) 会計の現場執行業務は大洗町教育委員会（髭釜遺跡調査班）で行う。

3 鹿島線遺跡調査会の解散

昭和51年3月、茨城県教育委員会は、県内各地の開発事業の進展に係る埋蔵文化財発掘調査の需要の増加に伴い、茨城県教育委員会のそとに埋蔵文化財調査事業の実施を考慮すべき時期であると判断して、鹿島線遺跡調査会の存続を検討した結果、同年3月31日にこれを解散した。

4 煙田遺跡

昭和52年度に財團法人茨城県教育財團のなかに調査課が新設され、日本鉄道建設公団の事業に係る煙田遺跡の調査委託を受けるよう茨城県教育公から指導があったので、当遺跡調査に必要な諸事が進められたが、煙田地区内の土地買収等が進展しなかったため、当年度内の調査は不可能の状態に至った。

昭和53年度に至り、日本鉄道建設公団の煙田地区の土地買収は漸く見とおしがつき、再び茨城県教育委員会を通して煙田遺跡の調査について要請があった。

これに基づき、当教育財團は日本鉄道建設公団と協議をかね昭和53年10月1日に委託契

約を締結し、昭和53年11月20日に起工式を執行、発掘調査を開始した。

(1) 調査組織

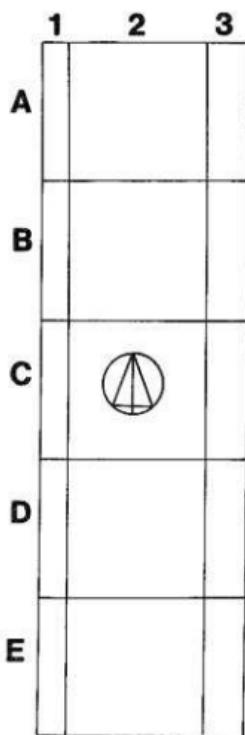
前文1の4 煙田遺跡の調査に至る経過において述べたとおり、日本鉄道建設公団と昭和53年10月1日煙田遺跡発掘調査にかかる委託契約書を締結し、同年11月20日を起工日としたが、なお若干の経緯について申しのべることとする。

- 1 従前、煙田遺跡の調査面積は 6,550m²とされていたが、茨城県教育委員会の再分布調査、並びに現地の立地条件上、西側の崖の部分は発掘作業に危険を作うこと等が考慮されて5,843 m²に変更され10月12日茨城県教育委員会指導のもとに日本鉄道建設公団東京支社、並びに日本鉄道建設公団鉢田建設所の立合いを得て調査区域の決定がなされた。
- 2 遺跡の現況は、買収手続が漸く終了したとはいえ、耕作物がとり残され、茶の木等の灌木類が粗に残されていたので、至急土物の除去について鉄建公団に要請、鉢田建設所においてこれ等が除去された。
- 3 煙田調査班の組織としては主任調査員として、茨城県教育財團副理事高橋杏二があたり、茨城県教育委員会の指導により、補助調査員として茨城県文化財保護指導員岡本保氏並びに鹿島郡大野村村史編さん委員汀安衛氏があたることとした。
- 4 作業員の募集については、鉢田町教育委員会、煙田区長、地元協力者に依頼し、起工に至るまでにこれを確保した。

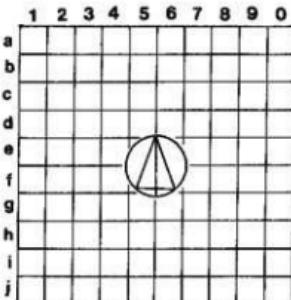
(2) 調査区画と調査法

① 調査区画と名称

(第1図、第2図)



第1図 大調査区名称図



第2図 小調査区名称図

烟田遺跡の発掘区域は、鹿島線の予定線では水戸を起点として31.1kmの地点にあり、鉄道建設公団の買取地域は標識杭によって明示されている。

発掘調査に際しての地区設定は、調査対照区域内の任意点（鉄道建設公団基準杭K L31.1）を基準として磁北線に沿い、40m四方の大調査区を設定し、さらに大調査区内を4m四方の小調査区に分割した。

遺跡の西側は丘地であるため、大調査2区A・B・C・D・E区が、北から南に延びる発掘区域の中央部になるよう配慮した。40m四方の大調査区は100個の小調査区に分割されるわけである。

大調査区の名称は、北から南へ大文字のアルファベットでA・B・C・D・Eとし、西から東へ1・2・3と表わす。小調査区は、北から南へa・b・c……i・jまで小文字のアルファベット、西から東へ1・2・3……9・0の数字で表わす。このように分割された小調査の個別名称は「A 1 a 1」・「B 1 a 1」のように表記される。

〈注〉 茨城県遺跡地図

県番号3829町番号84、名称畠山遺跡、所在地畠山山王、種別包蔵地、現況極、時代縄文、

遺跡の所在地及び面積

鹿島郡鉢出町大字畠山字畠方1222番地、他18筆 5,842.65m²、地目畠地

ただし、畠山山王は畠山字畠方より東方約0.5km離れた地点にある。

(2) 調査法

調査区画と名称については前述したが、本遺跡に設定された大調査A2・B2・C2・D2・E2区が遺跡の主要部分となるため実際に設定された小調査区は約360ほどである。

調査法としては、前期調査として遺跡全体の25%約90グリット(1,400m²)の表土層を排除し遺跡の範囲、種別、性格を掌握する。

前期調査の結果をふまえグリットの拡張・プランの検出、遺構の発掘と後期調査を進行し、昭和54年3月31日に調査を完了させる。

調査計画としては、次表の計画にもとづくこととした。

調査工程表

業務の区分	10月		11月		12月		1月		2月		3月	
	10	20	10	20	10	20	10	20	10	20	10	20
調査準備												
土物除去												
調査区設定												
遺構検出												
遺構発掘												
遺物採取												
遺構実測												
写真撮影												
出土処理												
概報作成												

〔注〕これは、日本鉄道総合技術研究所東京支社へ提出した。

調査法は、基本的には昭和52年度に茨城県教育財團調査隊が実施した、宅地開発公団から委託された松葉遺跡、日本住宅公団から委託された乙子遺跡・北今城遺跡等の調査要項の例に倣うものである。

遺構の調査については、堅穴住居址の場合、原則的に四分法で実施し、土壌等については二分法で実施した。土層図の作成にあたって、標準土色帳を用いる場合はHue7.5YRを適用することとした。

約5,800m²の遺跡であるが、発掘が開始されたのが昭和53年11月下旬であり、翌年の3月末までは実日数にして約70余日であるため前記の工程表を忠実に実施することを目標とした。

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

本文中で報告する徳宿、塙、安房西、安塙、烟田の各遺跡は、いずれも鹿島郡鉢田町内に所在する。烟田、安塙遺跡は、北浦に面し、徳宿、塙、安房西の各遺跡は、北浦に南流する七瀬川に面して位置する。全体的には、鹿島台地の北半基部に位置する。鹿島台地は、北浦と鹿島灘にはさまれた、南北に細長く伸びた台地で、海岸線は、変化が少なく単調であるが、特に北浦に面する側では複雑な地形の変化が認められる。北浦東岸は、北浦に流れ込む多くの小河川がほぼ東西に延びて、多くの谷を形成する。この谷を中心として、それぞれが、支谷、亜支谷を有し相互に入り込んだ舌状、三角形状、こぶし状等々の様々な形状の小台地を形成する。この地形は、北浦に南流する七瀬川東岸にまで連続して形成される。

北浦北半の鹿島台地側（鉢田町内）の地形は、大きく3つの台地に分割される。北から、七瀬川と烟田の北側、北東方向から流れる小河川、及び徳宿側台地の南を東方向に流れる小河川によって三角形状を示す台地で、これが安房の台地である。この台地の上半に塙、安房西の遺跡があり、北側の徳宿側の台地に徳宿遺跡がある。中位には、烟田の台地が位置する。南北両端を北東方向から流れる小河川によって分断され、細長い舌状を呈する台地である。この先端が烟田遺跡であり、北浦に面している。烟田の南位に位置するのが、安塙側の台地である。烟田の南側の小河川、及び二重作の北側の小河川によって、こぶし状の形狀を示す。この台地の中央部先端が安塙遺跡であり北浦に面している。

第2節 歴史的環境

前節で述べた複雑な地形を持つ台地上には、各時期にわたって、数多くの遺跡が存在している。ここでは、5つの遺跡が調査された北浦東岸、及び七瀬川東岸について概略を説明したい。

縄文時代に属する遺跡は、遺跡地図には、貝塚4例集落址10例と少ないが実数は、もっと多いものと思われる。縄文時代における北浦北半の地形は、漁業等の採集経済には、きわめて有利な環境であったものと思われる。安塙遺跡からは縄文時代早期撚糸文糸上器が、安塙・塙遺跡からは、早期条痕文糸上器、及び前期の土器が出土している。又、安塙、塙、烟田遺跡からは、中期～後期の遺物が少量出土している。

弥生時代に属する遺跡は、遺跡地図では極端に少ない。しかし、今回調査した5つの遺跡のう

ち、4遺跡に弥生時代に属する遺物、遺構が出土している。当地方に弥生時代の遺跡が少くない証明である。今後の調査の進展次第によっては、かなりの数にのぼるものと思われる。この傾向は、北浦東岸を調査した早稲田大学考古学研究会の調査でも明らかである（14遺跡が報告されている）。今後の調査により、那珂川流域との対比も可能かも知れない。

古墳時代に属する遺跡は、顕在化して形状より判断がつきやすいためと、当地方の古墳文化の強大さのために遺跡はかなりの数がある。古墳群と称されるものだけで24遺跡が上げられる。この傾向は、北浦東岸にかけて存在する。しかし、正式調査の行なわれたものは少なく、全体としてペールにつつまれたままである。その中でも、わずかに鹿島町宮中野古墳群の調査によって、霞ヶ浦、北浦に特有な古墳が明らかにされている。いずれにせよ、当地方が古墳時代に強大な勢力圏を有した事実が推定される。

歴史時代に属すると思われる遺跡については、館跡が比較的多い。鉢田町の館址は、畠田の台地南側、七瀬川流域東岸にまとまっている傾向をもつ。

以上、各時期について概観してきたが、当地方、北浦北岸地域は、各時期にわたって、遺跡数が多い。この事は、自然環境に左右された時代、農耕社会とともに、最適な生活環境を保証された地域であることがうかがい知れる。しかしながら、現在この地域の調査研究が進んでいない。今後の進展に期待したい。

参考文献

「茨城県遺跡地図」茨城県教育委員会 1977

早稲田大学考古学研究会 「北浦東岸における考古学的踏査及び測量調査報告」 金鈴21
1976

第3章 德宿遺跡

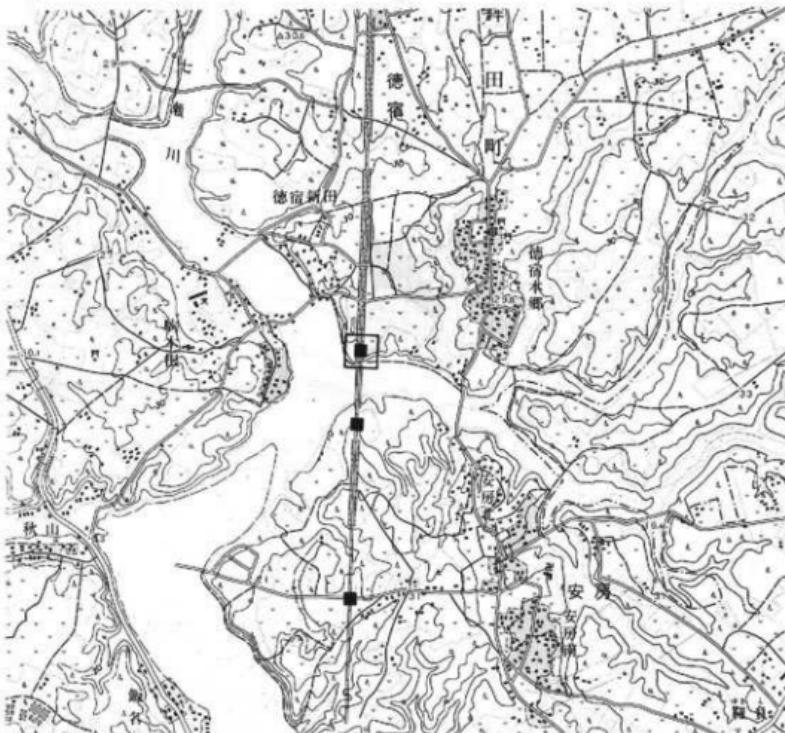
第1節 調査の経過

徳宿遺跡の発掘調査は、昭和50年10月6日より昭和50年10月16日まで行われた。

昭和50年10月6日 発掘調査開始。グリット発掘開始。

昭和50年10月7日～10月13日 グリット発掘。遺構確認作業を行う。小ピット状の土壙が確認される。他の遺構は、認められない。

昭和50年10月14日～10月16日 遺構精査、及び作図、写真撮影等を行う。

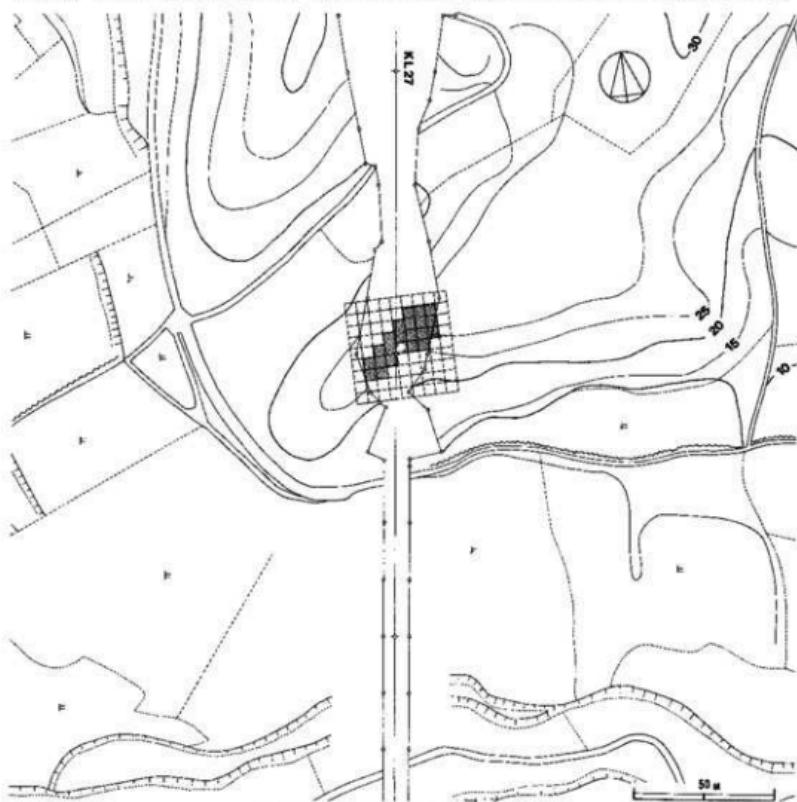


第1図 徳宿遺跡位置図 S (1:25,000)

調査区は、遺跡付近の鹿島線水戸起点(27.1km)を起点として磁北を中心¹に200mの方眼を組み、大区画を20m×20mの中区画に分割し、さらに4m×4mの小区画に分割する。グリッド。ナンバーは、北から南へアルファベットを用い、西から東へは数字とする。このグリッドを基準として、路線区内の調査を行った。

第2節 遺跡の位置と環境

徳宿遺跡は、鹿島郡鉢田町大字徳宿に所在する。北浦の北端に位置し、旭村から南流して北浦にそぞぐ七瀬川の東岸に位置する。七瀬川は、北浦河口に近づくにしたがってかなり蛇行を行

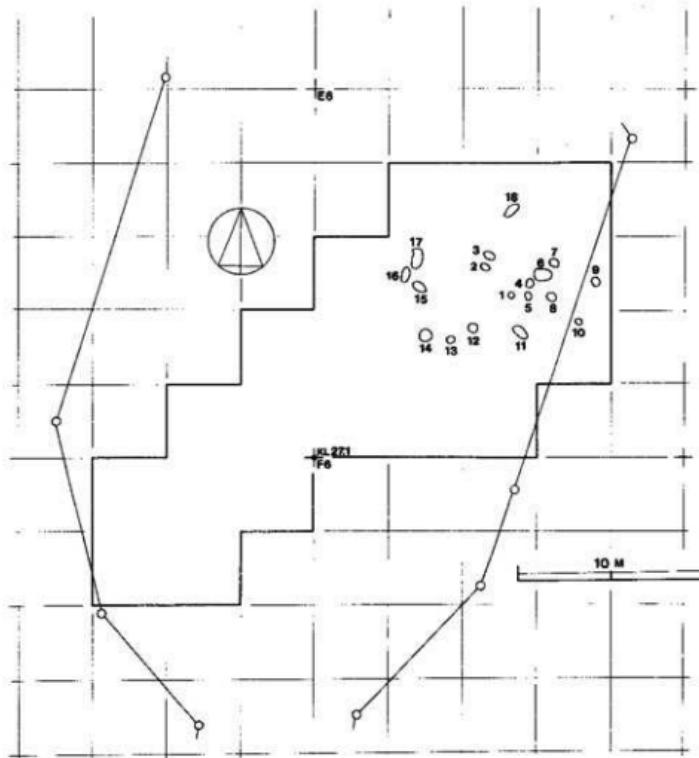


第2図 徳宿遺跡地形図

い流れを変えている。この蛇行部分に小河川が入り込み複雑な地形を呈している。

徳宿遺跡のある台地は、東側に七瀬川が蛇行して流れ、南北両端を東西方向に七瀬川にそそぐ小河川が安房側と東野側とから分断され、全体的に長方形状を呈する。徳宿遺跡は、この長方形状を示す台地の南端に位置する。遺跡のある小台地は、東西両側に北向に深く入り込んだ小支谷をもち、南側は、七瀬川、及びその支流が合流する三叉状の部分に向かって突出している。この小台地の南端部、並支谷によって舌状に突出する部分に遺跡が存在する。標高は、20m～27.5mで水田との比高差は、約20mほどである。水田は、南側、及び西側に広がっている。

付近北側には、船荷山遺跡（縄文時代）、船荷山館跡、高ばい館跡、東側には、石崎台遺跡（縄文時代）、徳宿城跡、南側対岸には、鹿島線関係で調査した墳遺跡、安房西古墳群がある。



第3図 徳宿遺跡全体図

第3節 遺構・遺物

本遺跡からの遺構の検出は、きわめてわずかである。住居址等の遺構は、確認されず、土壙が18基検出されただけである。土壙は、浅くピット状を呈するものが大部分である。

第1号土壙（第4図）

南西に伸びた舌状の台地上、調査区の東部にE C 3区に位置する。主軸方向N-5°-Eであり、長径0.42m、短径0.32mほどのほぼ円形をしている。壁面は、ゆるく立ちあがり、壁高は、0.14m内外である。床は、スリバチ状を呈する。

第2号土壙（第4図）

E 6 C 3区に位置する。主軸方向N-36°-Eであり、長径0.48m、短径0.4mほどの椭円形を呈する。壁面は、ゆるく立ちあがり、壁高は、0.08m～0.10mである。床面は、比較的フラットである。

第3号土壙（第4図）

E 6 C 3区に位置する。主軸方向N-72°-Wであり、長径0.5m、短径0.4mほどの椭円形である。壁は、0.1m～0.15mほどの壁高を有し、西壁部は、垂直ぎみに立ちあがる。床は、ほぼ平坦であるが、西へわずかに傾斜する。

第4号土壙（第4図）

E 6 C 3区に位置する。主軸方向N-30°-Eである。長径0.52m、短径0.38mほどの椭円形を呈する。壁高は、0.15mほどで、北壁は、垂直ぎみに立ちあがる。床面は、ゆるやかにくぼみ、やや南に傾斜している。遺物は、1片だけ出土している。弥生式土器の頭部無文部と思われる。

第5号土壙（第4図）

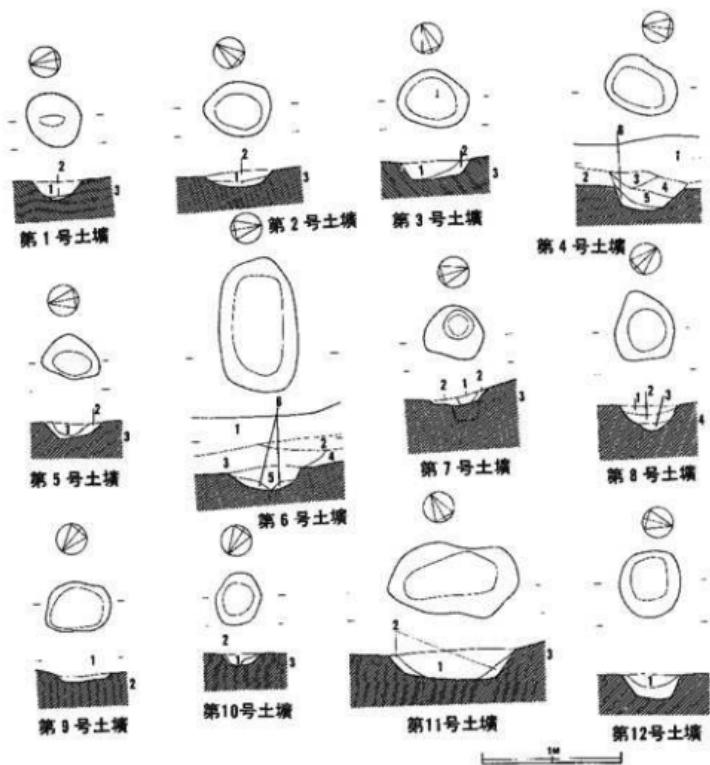
E 6 C 3区に位置する。主軸方向N-31°-Eであり、長径0.4m、短径0.28mほどの不定椭円形をなす。壁高は、0.1m～0.13mほどでゆるやかに立ちあがる。床面は、若干、北に傾斜している。

第6号土壙（第4図）

E 6 d 3区、E 6 C 3区に位置する。主軸方向は、N-84°-Wであり、長径0.95m、短径0.6mほどの隅丸方形をなす。壁高は、0.1m～0.15mほどでゆるやかに立ちあがっている。床は、ゆるやかなくぼみ状をなす。遺物は、腹土中より、弥生式土器と思われる小破片が出土しているが、図示するまでには至らない。

第7号土壙（第4図）

E 6 d 3区に位置する。主軸方向N-14°-Wであり、長径0.4m、短径0.35mで内部に直径0.2mほどのピットがある。壁上部は、ゆるやかに立ちあがる。ピットは、垂直に立ちあがっている。



第4図 土 壤 実 測 図 (1)

土層解説

第1号土壤	第5号土壤	第9号土壤
1 粘質黒褐色土 2 粘質黄褐色土 3 ローム	1 粘質黒褐色土 2 粘質黄褐色土 3 ローム	1 黑褐色土 2 ローム
第2号土壤	第6号土壤	第10号土壤
1 粘質黒褐色土 2 粘質黄褐色土 3 ローム	1 粘質黒褐色土 2 黑褐色土 3 黑褐色土 4 粘質黒褐色土 5 黑褐色土 6 黑褐色土 7 ローム	1 粘質黒褐色土 2 粘質黄褐色土 3 ローム
第3号土壤	第7号土壤	第11号土壤
1 粘質黒褐色土 2 粘質黄褐色土 3 ローム	1 黑褐色土 2 黑褐色土 3 ローム	1 粘質黒褐色土 2 粘質黄褐色土 3 ローム
第4号土壤	第8号土壤	第12号土壤
1 黑褐色土 2 黑褐色土 3 黑褐色土 4 粘質黒褐色土 5 粘質黄褐色土 6 黑褐色土 7 ローム	1 黑褐色土 2 黑褐色土 3 黑褐色土 4 ローム	1 粘質黒褐色土 2 粘質黄褐色土 3 ローム

床は、ゆるやかにくぼんでいる。

第8号土壌（第4図）

E 6 d 3区に位置する。主軸方向N-68°-Wを示し、長径0.5m、短径0.43mの楕円形を呈する。壁高は、0.2mほどで、西壁は、ゆるやかに立ちあがっている。床面は、スリバチ状を呈する。

第9号土壌（第4図）

E 6 d 3区に位置する。主軸方向N-48°-Eを示し、長径0.45m、短径0.35mの楕円形状を呈する。壁高は、0.05m内外で、床面は、ほぼ平坦である。

第10号土壌（第4図）

E 6 d 4区に位置する。主軸方向N-30°-Wを示し、長径0.38m、短径0.31mのはば円形を呈する。壁高は、0.08mほどで立ち上がり、床面は、ほぼ平坦である。

第11号土壌（第4図）

E 6 C 4区に位置する。主軸方向N-73°-Wを示し、長径0.92m、短径0.45mほどの不定方形をなす。壁高は、0.15m～0.20mほどで立ちあがる。床面は、平坦であるが、東に傾斜を示す。遺物は、朱生式土器が1片出土している。縦沈線文を配する。第II類土器である。

第12号土壌（第4図）

E 6 C 4区に位置する。主軸方向N-75°-Eを示し、長径0.48m、短径0.43mのはば円形を呈する。壁高は、0.15m～0.2mほどで立ち上がる。床は、平坦であるが、北に傾斜する。

第13号土壌（第5図）

E 6 b 4区に位置する。主軸方向N-90°-Wを示し、長径0.45m、短径0.4mほどの円形を呈する。壁高は、0.2m内外で、床は、ゆるやかなくぼみ状を示す。

第14号土壌（第5図）

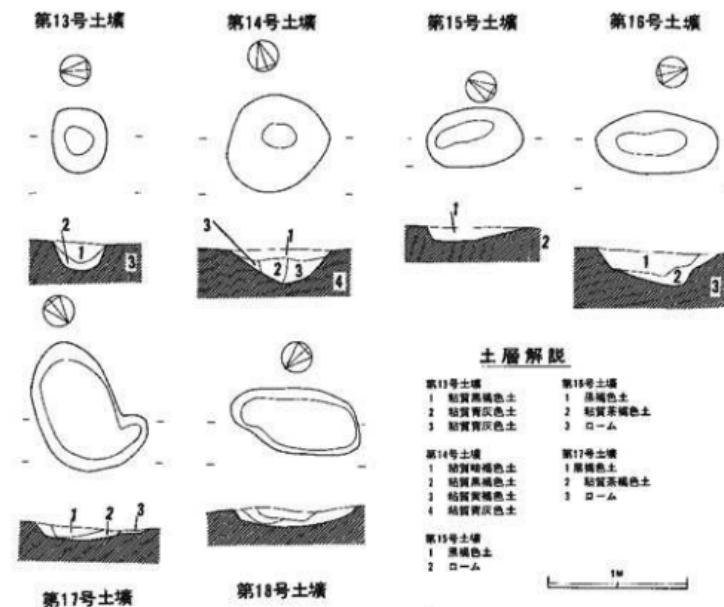
E 6 b 4区に位置する。主軸方向N-60°-Eを示し、長径0.72m、短径0.65mほどの円形をなす。壁高は、0.25mほどでスリバチ状にゆるやかに立ちあがる。床は、若干のくぼみ状を示す。

第15号土壌（第5図）

E 6 b 3区に位置する。主軸方向N-47°-Wを示し、長径0.68m、短径0.4mほどの、楕円状を呈する。壁高は、0.02m～0.1mほどで、床面は、南に若干傾斜している。

第16号土壌（第5図）

E 6 b 3区に位置する。主軸方向N-19°-Eを示し、長径0.88m、短径0.43mの長楕円形を呈する。壁高は、0.15m～0.24mほどで外側へ立ちあがる。床は、平坦であるが、北に傾斜している。



第5図 土 壤 実 測 図 (2)

第17号土壤 (第5図)

E 6 b 3 区に位置する。主軸方向 N-18°-E を示し、長径 0.96m、短径 0.57m ほどの長楕円形を示す。北西部に若干の搅乱をうけている。壁高は、0.1mほどでたちあがる。床は、平坦である。

第18号土壤 (第5図)

E 6 C 2 区に位置する。主軸方向 N-55°-E を示し、長径 0.95m、短径 0.48m ほどの不定格円形を呈する。壁高は、0.05m~0.1m ほどでゆるべかに立ちあがる。床面は、若干のくぼみをなしている。



第6図 土 壤 出 土 遺 物

(3) 土 壤 遺 物 (図6部)

内壁上に付着する細い纖維状の物質は、主として木質化した茎葉類の断片である。また、土壌中に散在する木質化した茎葉類の断片は、主として木質化した茎葉類の断片である。

内壁上に付着する細い纖維状の物質は、主として木質化した茎葉類の断片である。また、土壌中に散在する木質化した茎葉類の断片は、主として木質化した茎葉類の断片である。

第4節 グリット出土遺物

グリットから出土した遺物は、弥生式土器と少量の石器である。弥生式土器は、少量の出土であったが、当地方における縄年学上重要な土器群であると思われる。

弥生式土器

第1類土器（第7図1～8）

長頸の壺形土器と思われる。繩文を地文として、沈線文を配するという特徴的な施文順を示している。文様は、雑な渦文を描くものらしい。

1、2は、同一個体であるが、接合しなかった。器形は、長頸の壺形土器と思われる。頸部で径が急速に縮少して、細首状を呈するものと思われる。胴部上半は、最大径にむかって、大きくふくらむものと思われる。文様は、繩文を地文とし、一本描きの沈線で描かれる。3本の沈線で上部を区画し、以下に渦文を配する。渦文は、横位の2本の沈線で連結される。3～7は、同一個体と思われる。繩文を地文として沈線が描かれる。8は、底部片。底部径は、比較的小さい。繩文を地文として、3本沈線（同時施文ではない）が描かれる。

第2類土器（第7図9～14）

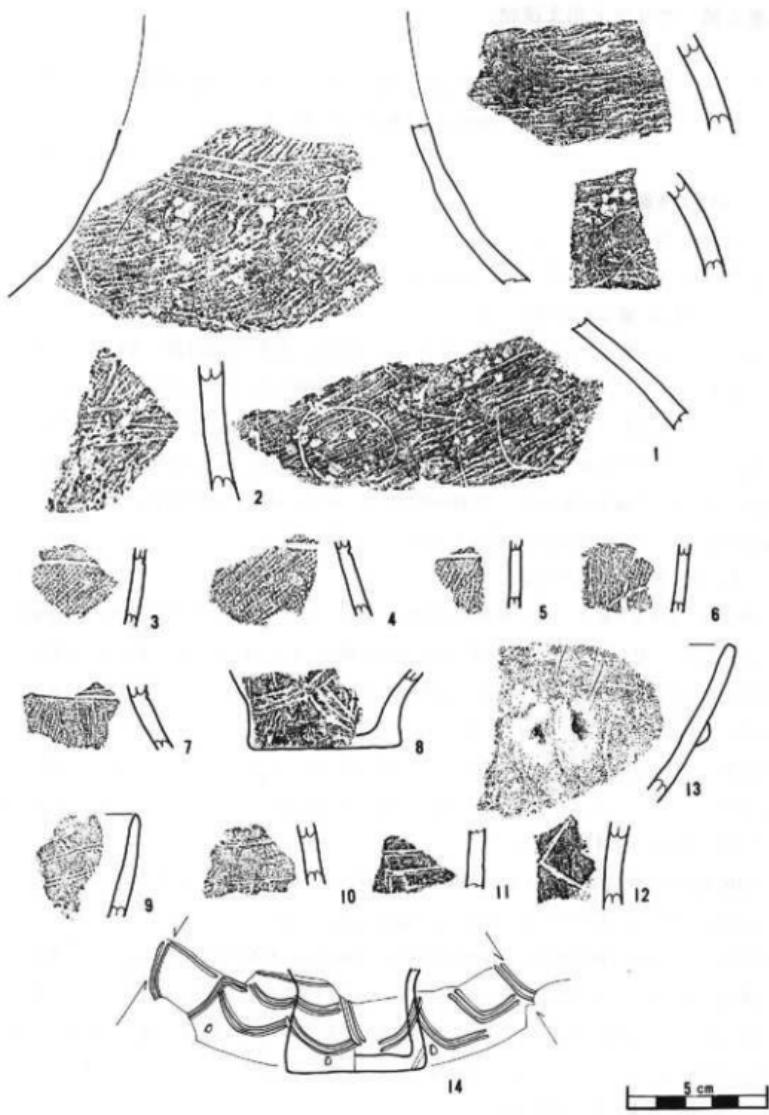
無文地に沈線文を配するもの。器形は、判然としない。9は、浅鉢状の器形と思われる。半截竹管による沈線文を配する。10、11は、壺形土器、頸部と推定される。10は、渦文を描くものと思われる。12は、一本描き沈線によって、格子状の文様を配する。13は、浅鉢形土器。2個の瘤が付着し、沈線文（一本描き）が配される。14は、底部片。胴部にかけて一端くびれる器形をもつ。文様は、半截竹管による上向きの連弧文を配する。一つの弧文をaとすれば、 $(2a+2a+a+a+a)$ で、最初の2段がくずれて、1段になっている。3個の孔が側面から底面にかけて、穿孔される。

第3類土器（第8図2～7）

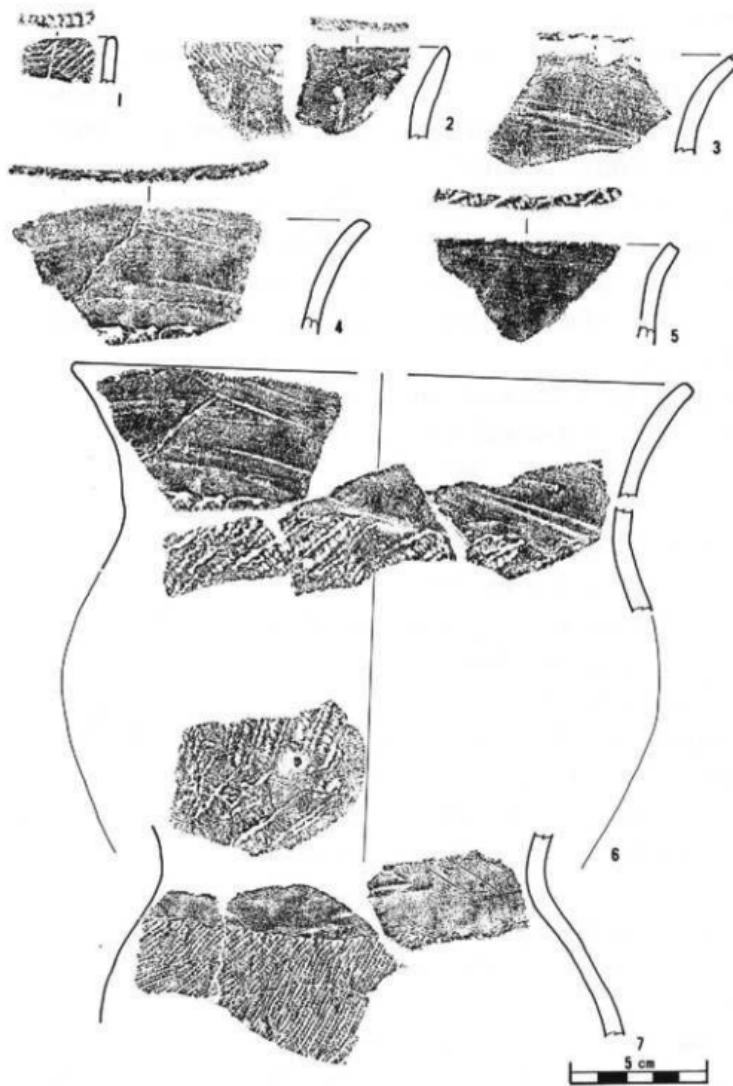
口縁下に無文帯を持つ壺形土器。頸部くびれ部付近から繩文が配される。2は、口縁部。口唇部に繩文原体による押圧があり、裏面にまで繩文が配されるもの。3～5は、口縁部。いずれも外反する。口唇部に繩文原体による押圧があり、口縁部は、無文化される。3、4は、擦痕状の調整痕が見られる。6は、器形がほぼ判明する。口径23cm前後、口縁部から頸部にかけて無文帯が配され、「く」字状に外反する。くびれ部から繩文が配されるが、横回転の繩文原体末端を効果的に使用している。7は、口縁部が欠失する。くびれ部から繩文が配される。

第4類（第8図1、第11図18）

口縁下から繩文が配されるもの。壺形と思われるが、器形は、明らかでない。1は、口唇部に繩文原体による押圧が加わる。



第7図 グリット出土遺物 (1)



第8図 グリット出土遺物（2）

第5類（第9図～第13図11）

胸部片を一括する。

- a (第9図1～14) 頸部片。無文帯を持つもの。5, 7は、擦痕状の調整痕を持つ。
- b (第9図15～21, 第10図1～6, 9) 頸部、又は、胸部上半部片である。縄文が配される。
- c (第10図7, 8, 10～25, 第11図1～17, 19～26, 第12図, 第13図1～11) 胸部片である。

第6類（第13図12～18, 第14図）

底部片である。第13図12, 第14図1は、胸部に立ちあがるに従って、若干径がすばまるもの。表面は、無文である。12は、底面に布目痕が配される。第13図16, 17は、底径が比較的小さい。16が6.6cm前後、17が5.2cm前後である。17は、底面に木葉痕が配される。本遺跡では、1片だけである。上述の他は、底径が比較的広い。第13図15, 18, 第14図4, 5, 8～12までは、底面に布目痕を持つ。

縄文について

本遺跡では、次のように種類の縄文原体が認められた。

- ① RにRを(Z)方向に附加したもの（注1）。
- ② L RにL Rを(S)方向に附加したもの。
- ③ L Rに2 Rを(S)方向に附加したもの。
- ④ RにRを2本同時に(S)方向に附加したもの。（注2）
- ⑤ RにRを「S」方向に附加したもの。
- ⑥ LにLを2本同時に(Z)方向に附加したもの。
- ⑦ LにLを(Z)方向に附加したもの。
- ⑧ 羽状縄文を配するもの。

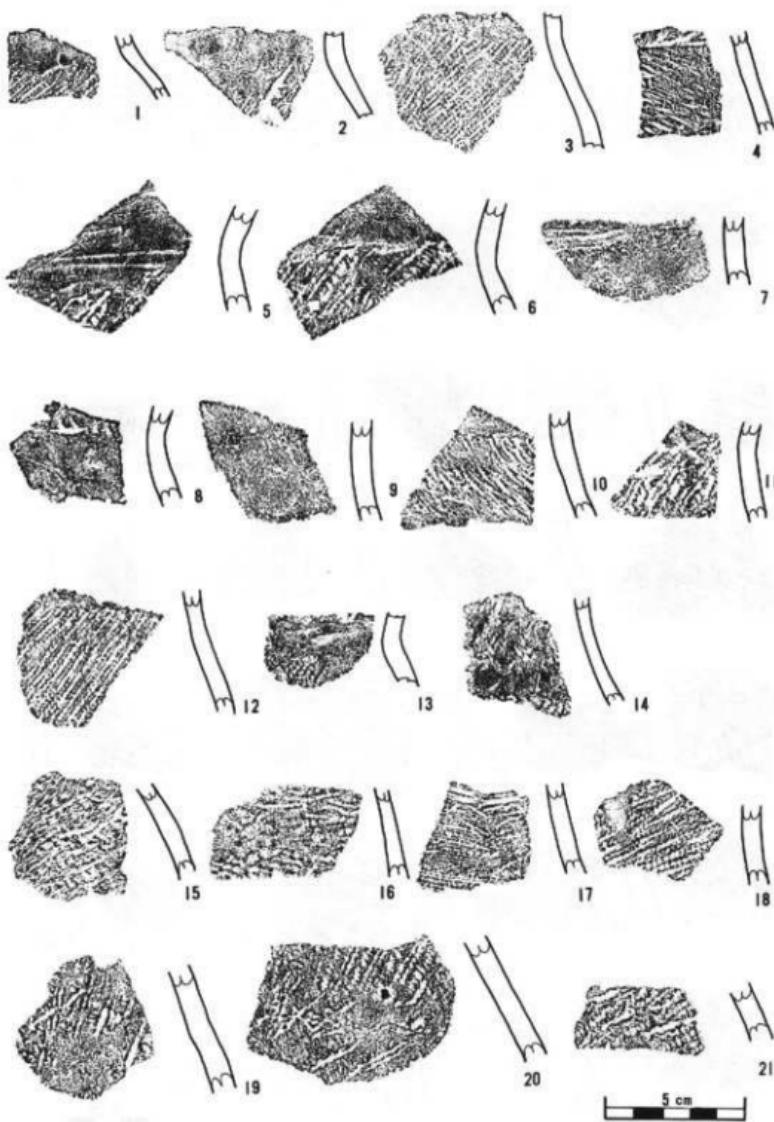
本遺跡は、出土した大部分の土器片を図化した。図示した内で、縄文原体の燃りが判断できる95個体を分析した。内容は、

①……5個	④……6個	⑦……2個
②……69個	⑤……4個	⑧……1個
③……8個	⑥……2個	

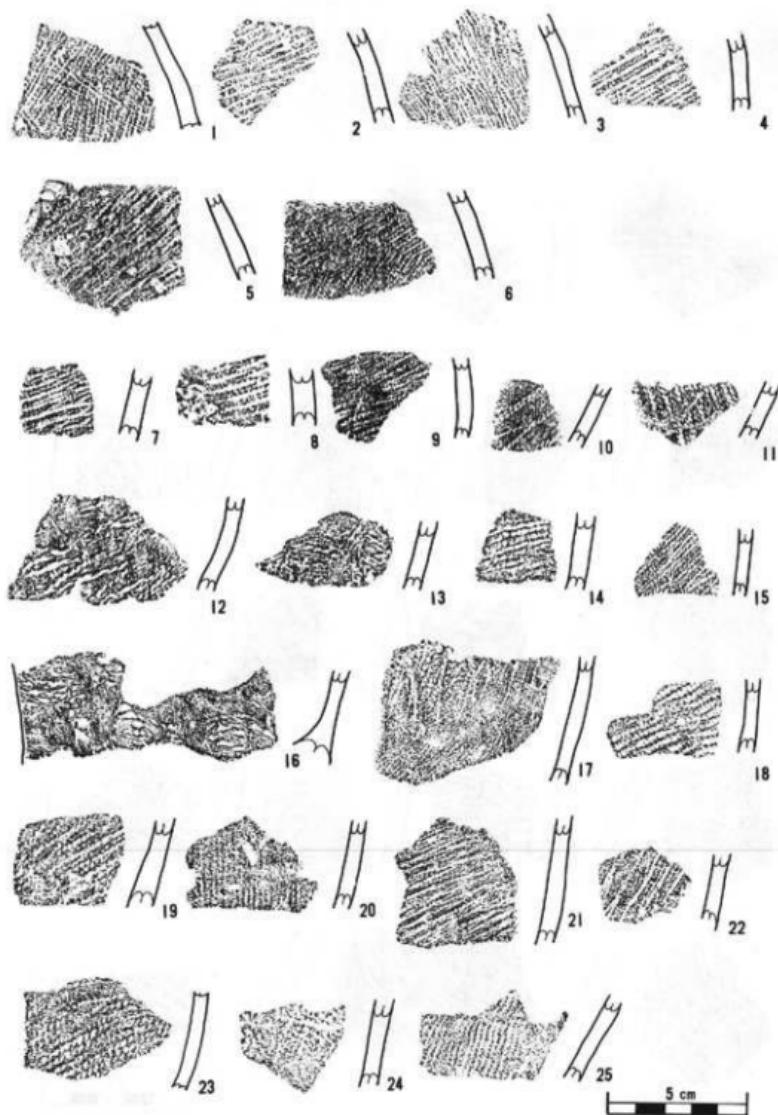
である。この内、同類と思われる①と⑥、⑤と⑦はまとめた。従って、本遺跡での縄文原体の比率は、表1のとおりである。②が71%で大部分を占めている。

石器（第15図）

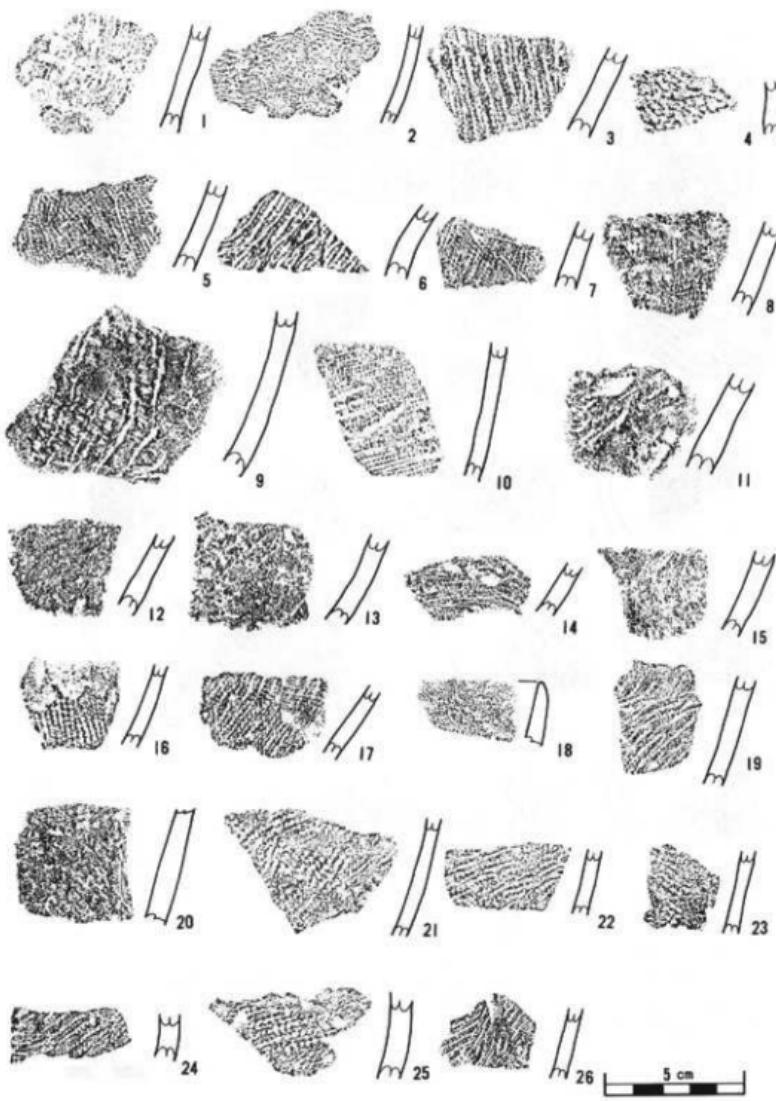
E 6区から若干の石器が出土している。1は、石鎚で二等辺三角形状を呈する。頁岩製。2は、スクレイバーと思われる。ノッチ部分がエッジと思われる。3, 4は、打製石斧である。刃部を片面からの剝離で形成する。4は、裏面に敲打痕が認められる。いずれも、砂岩である。



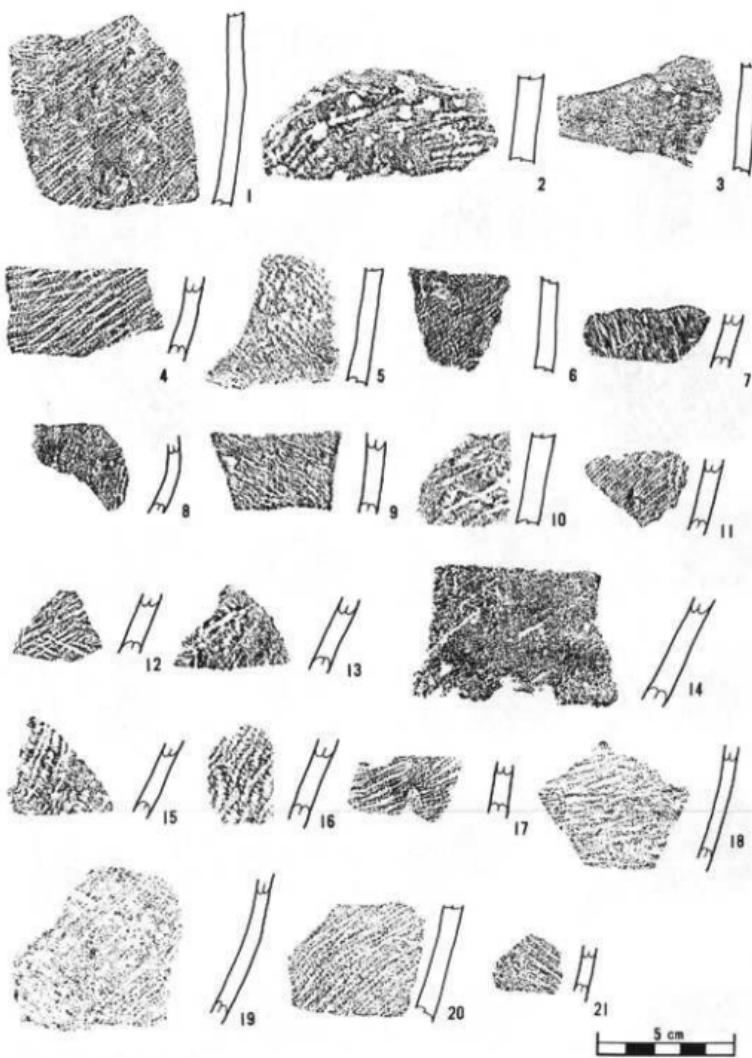
第9図 グリット出土遺物 (3)



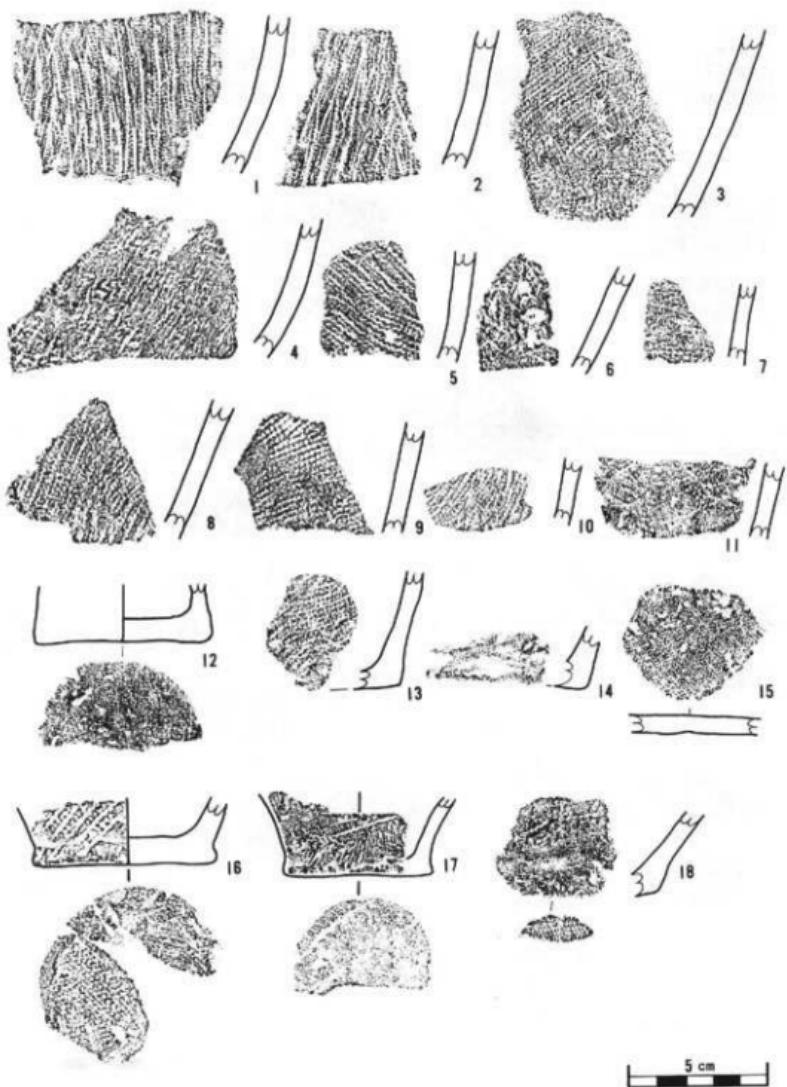
第10図 グリット出土遺物 (4)



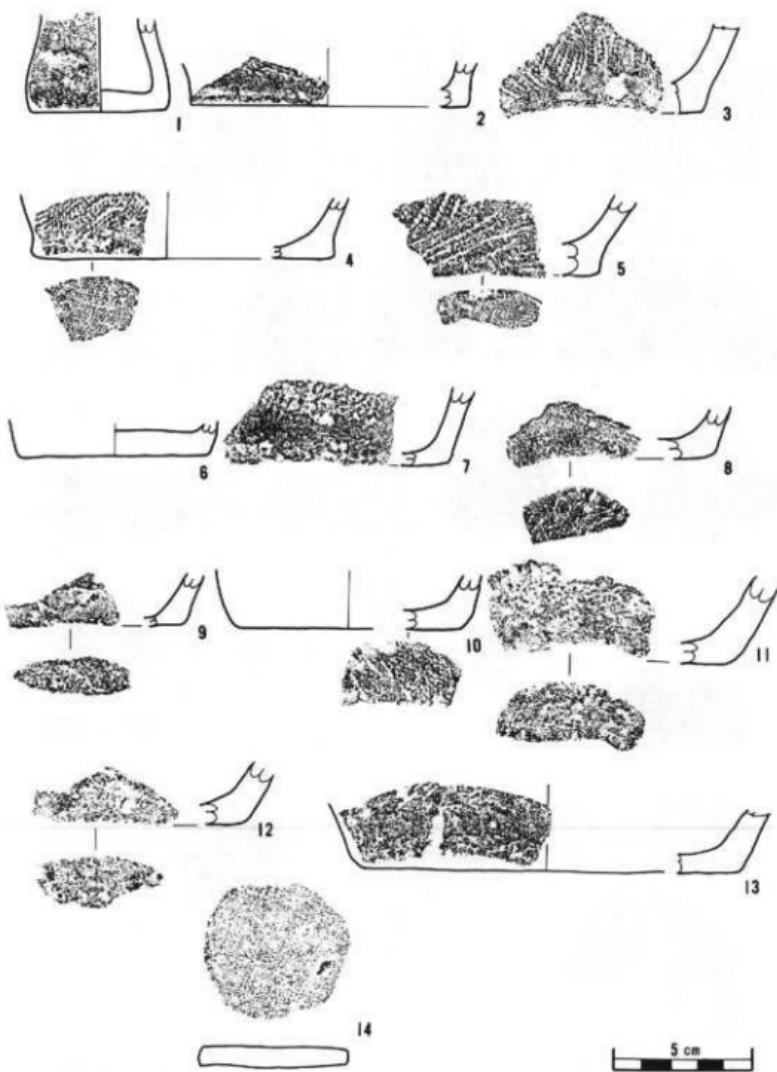
第11図 グリット出土遺物 (5)



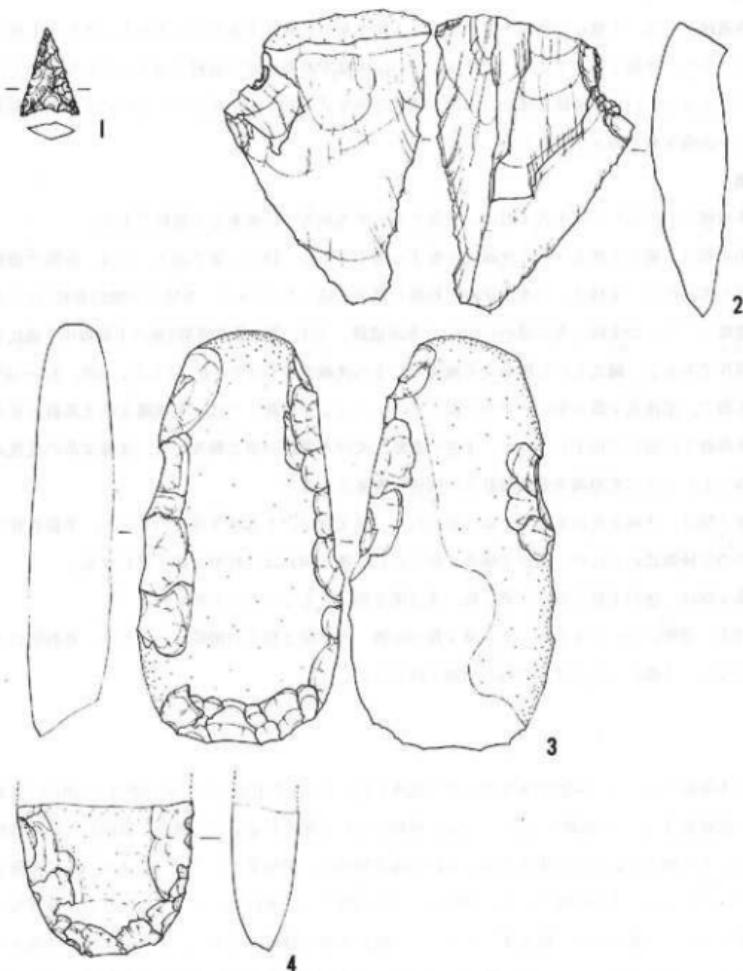
第12図 グリット出土遺物 (6)



第13図 グリット出土遺物 (7)



第14図 グリット出土遺物 (8)



第15図 グリット出土遺物 (9) (5%)

第5節 まとめ

遺構

本遺跡からは、土壙が18個出土している。大略密集して存在するが、いずれも、小ピット状のものであり、性格を推定するまでには至らない。明確な時期判定の資料が出土していないので、なんとも言えないが、遺跡全体からの出土遺物が弥生式土器しか出土していないので、消極的意味で一応弥生期と考えておきたい。

遺物

本遺跡から出土した弥生式土器は、少量であるが当地方では重要な土器群である。

第1類は、繩文を地文として沈線文を配するものである。特に、第7図1、2は、長頸の壺形土器と思われる。文様は、一本描沈線で粗雑な渦文を描くものである。本類との類似資料は、「赤浜遺跡」^{注3}、「ミシマ遺跡」^{注4}等に認められる。「赤浜遺跡」では、第6号遺構第3層の土器群中「溝状文土器片であるが、繩文ないし撚糸文を施文した上へ沈線文をつけている」とした。325、326-329の土器で、足洗式土器の中にわずかに混じている。「ミシマ遺跡」では、充填繩文系土器群と足洗糸土器群とに混じて出土している。上述の遺跡、及び本遺跡の第2類等から、沈線文系の足洗式土器、もしくは、充填繩文系土器群との関係が考慮される。^{注5}

第2類は、沈線文系の足洗式土器と思われる。施文具は、1本描き沈線のものと、半裁竹管のものの2種類認められた。幅が2個張り付けられる第7図13は、杯型土器と思われる。

第3類は、斐形土器である。第1類、又は第2類にともなうものと思われる。

以上、遺物についてまとめたが、第1類の位置、及び第2類との関係については、資料的に十分でない。子細については、資料の増加を持ちたい。

注

1. 本遺跡では、すべて附加条体系の中で処理した。すでに若干記した「反の撚り」(1976「豊都台遺跡群 I ミシマ遺跡」)については、適切でないと思われる。この機会に撤回したい。理由は、①当地方における弥生式土器における繩文原体を、附加条といいう一つの体系の中で理解したいと考える。ある段階で、「反の撚り」、ある段階では、異段といいうように撚り方が色々な方法をとるとは思えない。附加条といいう一つの流れの中で理解する方が、よりスムーズであると考える。②L L Rといいう「反の撚り」の場合、4本のRにきれいに撚りもどる可能性がかなり高いものと思われる。これに対し、例えば「赤浜遺跡」では、非常に不規則な場合が大半を占める。これは、前述、③の方法で、単節をもどしながら巻きつける方法がはるかに近いものと思われる。

2. この方法で、2種類の撚り方がある。(1)通常われわれが使用してきたもので、最初に糸に沿って巻きつけ、次に隣接する糸に巻きつけるもの。(2)「安塙遺跡」で確認されたもので、糸に沿って1本巻きつけ、同一糸に(隣接する糸でなくして)さらにもう1本加えたものである。本遺跡は、あるいは、②の結果かも知れない。

3. 川崎純徳他 「赤浜遺跡発掘調査報告」 茨城県高萩市教育委員会 1972

4. 豊郷台遺跡調査会 「豊郷台遺跡群I ミシマ遺跡」 1976

5. 光痕繩文系土器群中にも明らかに本遺跡②と同じ撚りの繩文が存在する。

参考文献

- 伊東重敏 「茨城県足洗発見の幼児墓に使用されていた弥生式土器について」 考古学雑誌40
- 4 1955
- 井上義安 「常陸足洗遺跡発見の弥生式櫛棺」 古代19・20 1956
- 井上義安 「北茨城市足洗遺跡における櫛棺調査概報」 古代32 1959
- 井上義安 「勝田市薬師台における弥生式遺跡」 ひたちじNo.4 1966
- 茂木雅博 「常陸須和間遺跡」 1969
- 馬日順一 「岩代陣場遺跡の研究」 1971
- 川崎純徳他 「赤浜遺跡発掘調査報告」 茨城県高萩市教育委員会 1972
- 銚子市教育委員会 「千葉県銚子市佐野原遺跡発掘調査概報」 1974
- 中村五郎 「東北地方南部の弥生式土器編年」 東北考古学の諸問題 1976
- 高萩市教育委員会 「リュウガイ遺跡」 1976
- 鈴木正博 「十王台式理解の為に(1), (2); 常總台地7, 8 1976

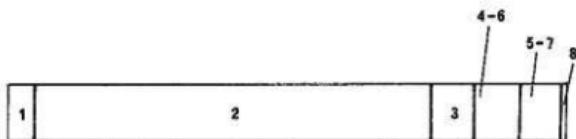


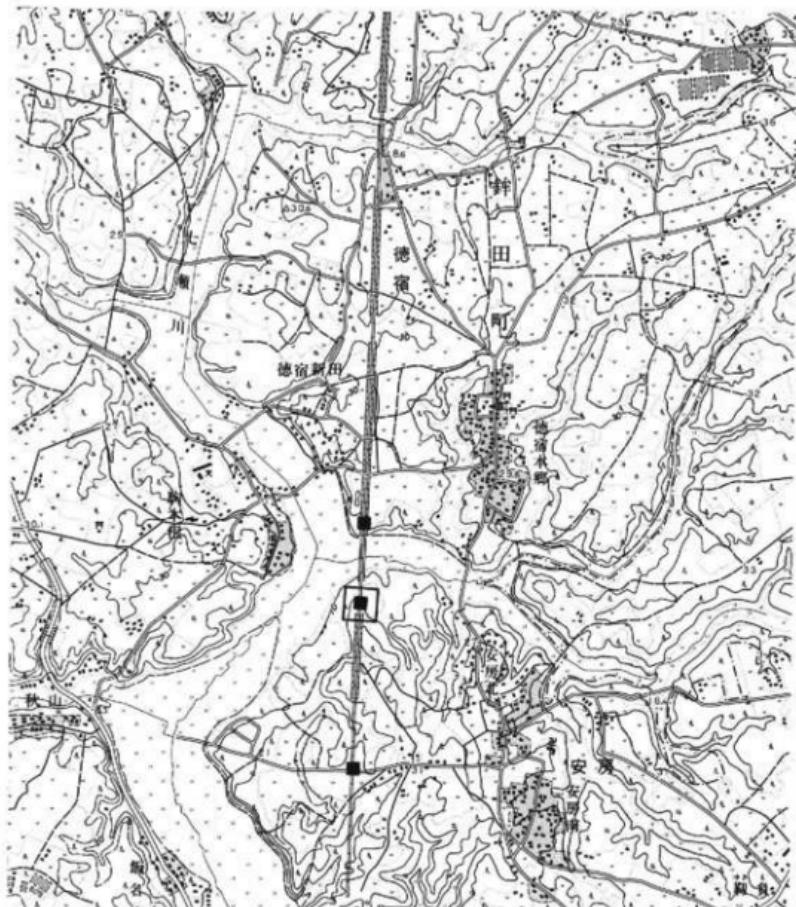
表1 繩文原体の構成

第4章 墓 遺 跡

第1節 調査の経過

墳遺跡の発掘調査は、昭和50年10月20日から昭和50年12月19日まで行われた。

昭和50年10月20日 発掘調査開始、グリット発掘。



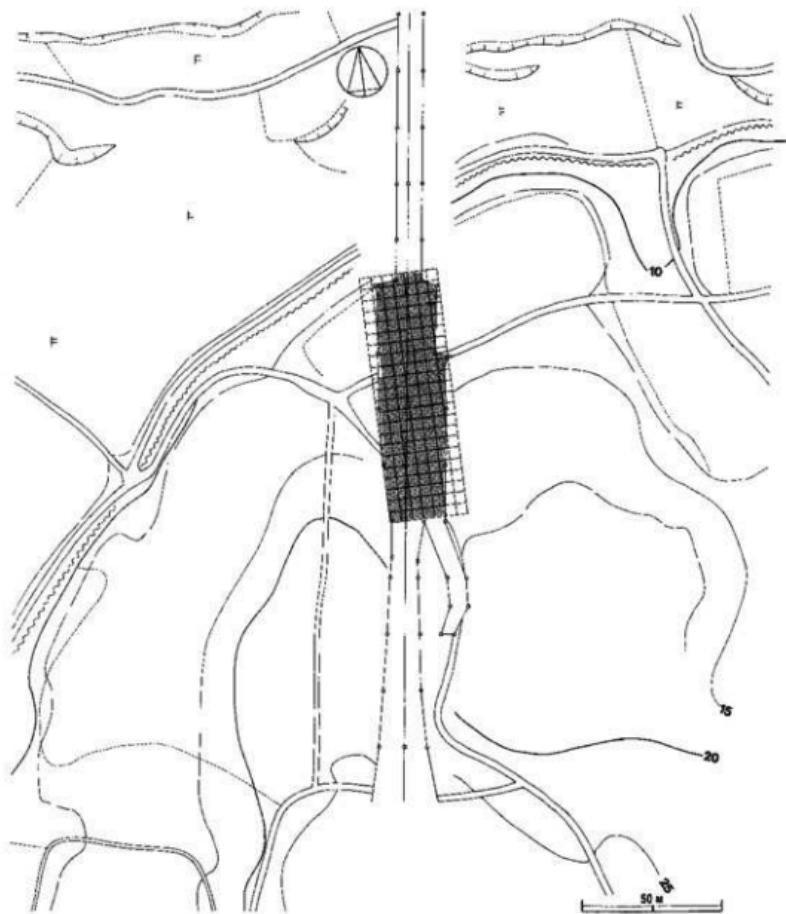
第1図 墳 遺 跡 位 置 図 (S 1 : 25,000)

- 10月21日～10月25日 B 6 区, C 6 区 グリット発掘。第1号住居址、第2号住居址
プラン確認掘り込み開始。第1号土壌～第4号土壌掘り込み、及び実
測。
- 10月27日～11月8日 引き続き C 6 区, C 5 区, D 6 区 グリット発掘。第2号住
居址実測。第5号土壌～第10号土壌掘り込み。
- 11月10日～11月15日 C 5 区, D 5 区, D 6 区, E 6 区、グリット発掘。第11号
土壌～第14号土壌まで掘り込み、実測、写真撮影。第3号住居址プラ
ン確認。第1号住居址は、弥生期と古墳期との複合であることが判明。
- 11月17日～11月22日 E 5 区, E 6 区, D 6 区 グリット発掘、第4号住居址プラ
ン確認掘り込み。第3号住居址掘り込み。
- 11月25日～11月22日 D 5 区, D 6 区, E 5 区, E 6 区, F 6 区 グリット発掘。
第3号住居址掘り込み。
- 12月1日～12月6日 D 5 区, E 5 区, E 6 区, F 5 区, F 6 区 グリット発掘。
第4号住居址掘り込み。第15号～第19号土壌まで掘り込み、及び実測。
第5号住居址プラン確認。第3号住居址実測写真。第4号住居址掘り
込み。
- 12月8日～12月13日 第4号住居址掘り込み、及び実測、写真撮影。第5号住居
址掘り込み。第21号土壌まで掘り込み、及び実測。
- 12月15日～12月19日 第5号住居址実測、及び写真撮影。土壌関係実測、及び写
真撮影。以上で、作業は、すべて完了する。

第2節 遺跡の位置と環境

墳遺跡は、鹿島郡鉢田町大字安房に所在する。南北に細長く延びる北浦の北部に位置する。北
浦北端は、巴川と七瀬川によって形成される谷を中心とし、両川、及び北浦に流れ込む小河川に
よって複雑な地形を示し、舌状の台地上には多數の遺跡が存在する。

墳遺跡のある安房の台地は、北浦に南流する七瀬川と畠田の北側、北東方向から南流する小河
川、七瀬川の支流で徳宿側台地の南側を東西に延びる小河川の3つの川によって三角形状を呈す
る。墳遺跡は、この三角形状の台地の北端部に位置する。遺跡の北側では、七瀬川が蛇行し、さ
らに東側からの支流が合流し三叉状を呈する。遺跡の東側には、支谷が深く入り込み、細い舌状

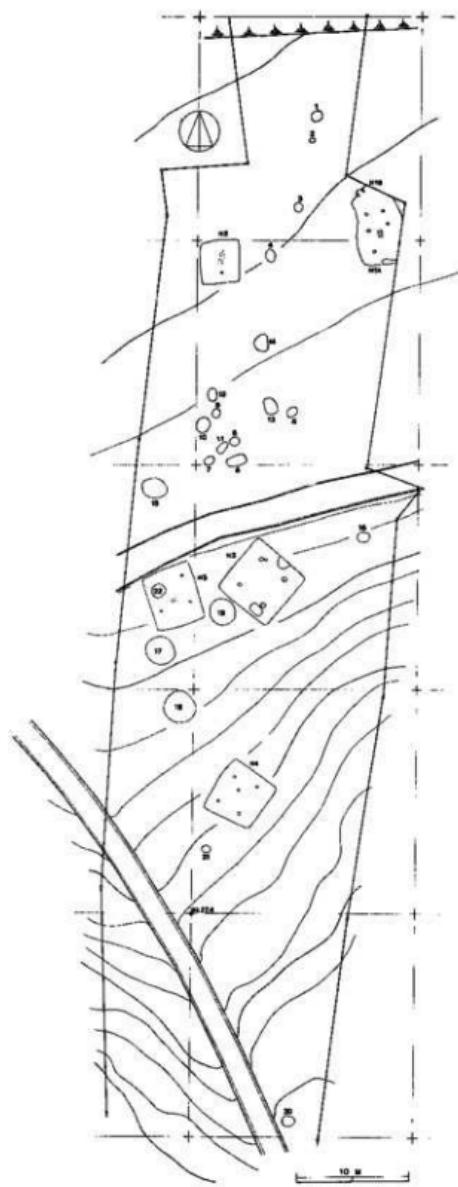


第2図 墓遺跡地形図

を示している。標高は、12.50m～17.00mほどを示し、水田との比高差は、6m前後である。

付近には、鹿島線関係で調査した徳宿遺跡、安房西古墳群がある。又、付近の集落址と思われる遺跡には、原前遺跡（縄文時代）、安祥寺遺跡（縄文時代）、引地貝塚（縄文時代）、対岸には番所遺跡（弥生時代）、秋山遺跡（縄文時代）、徳宿側台地には石崎台遺跡（縄文時代）がある。

第3図 墓遺跡全体図



第3節 遺構・遺物

第1A号住居址（第4図）

本址は、遺跡の北側に位置し、B 6区、C 6区の中間に位置する。全体に擾乱溝が入っており状況は、あまりよくない。第1B号住居址と複合して、北側を切られ、又、一部は、調査区外である。主軸方向は、N-E-Wを示す。平面形状は、長径4.5m、短径3.8（推定）m前後の隅丸長方形を示すものと思われる。壁高は、0.5m～0.6mの深さを示し、床面から75°前後の角度で立ちあがる。炉址は、中央より若干北に寄った部分に検出された。長径0.9m、短径0.5m前後の橢円形を示す。ピットは、3個所確認された。いずれも、主柱穴と思われる。調査区外にもう一個推定される。4穴と思われる。0.55m～0.65mの深さをもつ。住居址の南側に短径0.5m、長径不明な長方形のピットが検出されている。出土遺物より、弥生期と推定される。

第1A号住居址出土遺物（第5図～第9図）

出土遺物は、繩文式土器、弥生式土器、紡錘車が出上している。

繩文式土器（第5図）

ここでは、第1A号住居址、第1B号住居址より出土した繩文式土器を一括して扱う。

第I群、1類（2）口縁部で段を持つもの。条痕上に、沈線、刺突を加える。裏面に条痕が配される。

第II群、3類（3、4）纖維を胎土に有する。表面に纖文を配し、調整痕を持つ。あるいは、第III群か。

第IV群（5～13）胎土に纖維を含む。5は、口縁部に縦位に短く沈線を配し、横位に数条沈線を配する。7は、半截竹管による沈線文。他は、いずれも纖文を配する。

第V群（17）剥部。「S」字状の結節回転文を横位に配する。

第VI群（14～16、18）14、15は、沈線間に沈線を充填する。18は、三角形状の刺突を有する。

第VII群（19、20）後期初頭と思われる。2は、沈線文。

弥生式土器（第6図～第9図）

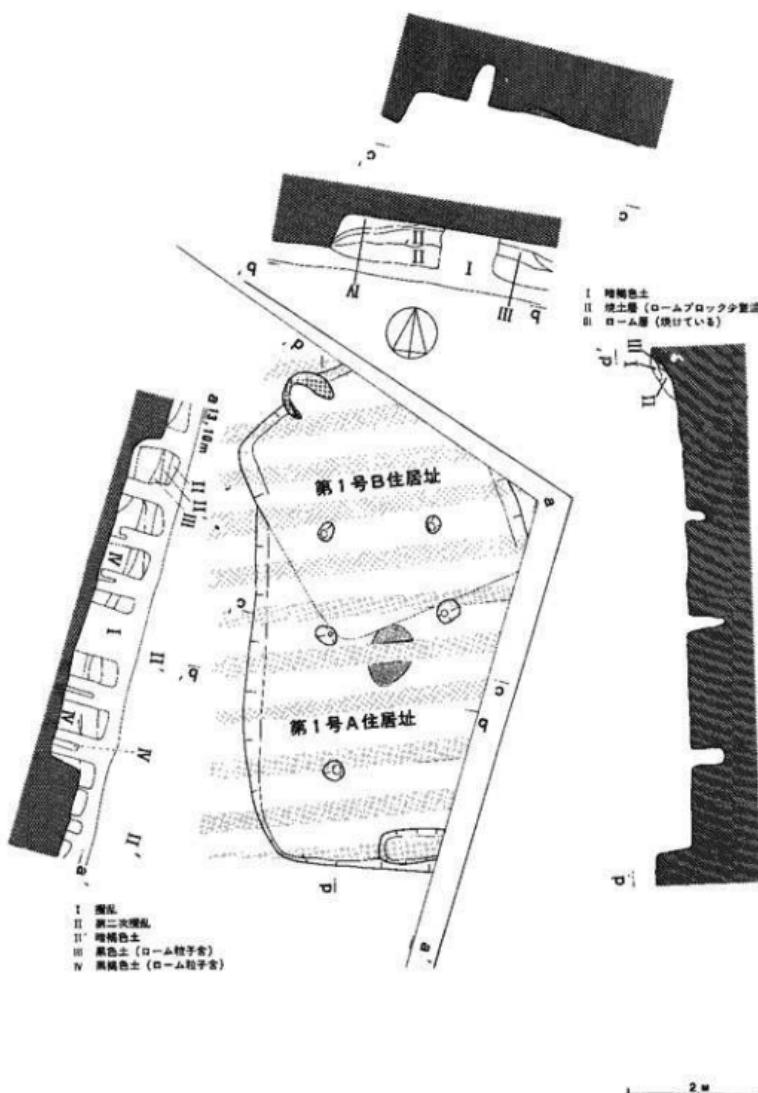
第I類（第6図8～10、18～22、第7図1～12）櫛描文を配するもの。

a 3（第6図8～10）折返し口縁を有するもの。口唇部に繩文原体による押圧がある。10は、折返し部に、斜方向の沈線文、下に波状文が配される。

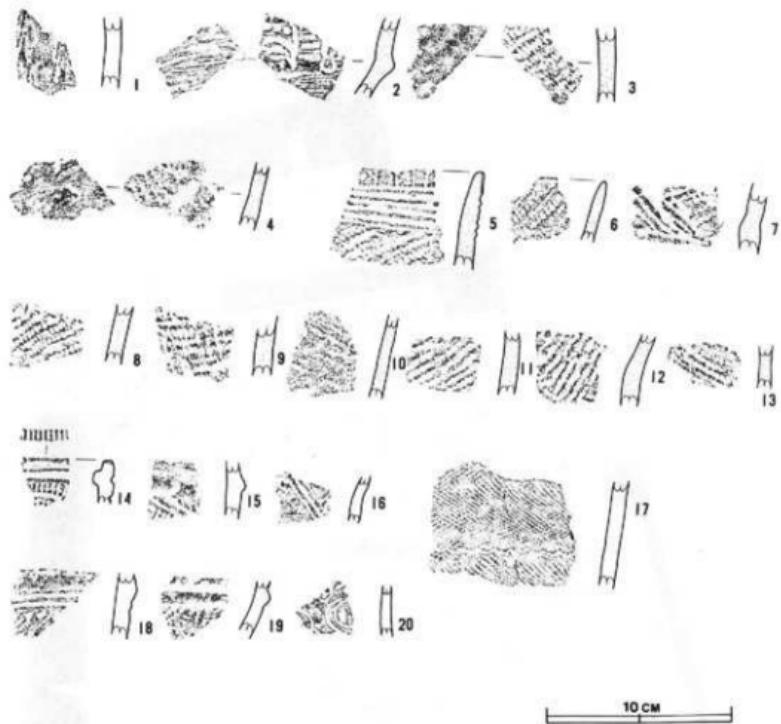
b 1（第6図18～22、第7図10、11）櫛描波状文を持つもの。

b 2（第7図1、2、9、12）櫛描波状文+縦X画を有するもの。

b 3（第7図3～8、21）櫛描文による直線的文様を配する。4は、メガネ状の文様を配する。



第4図 第1号A・第1号B住居址実測図

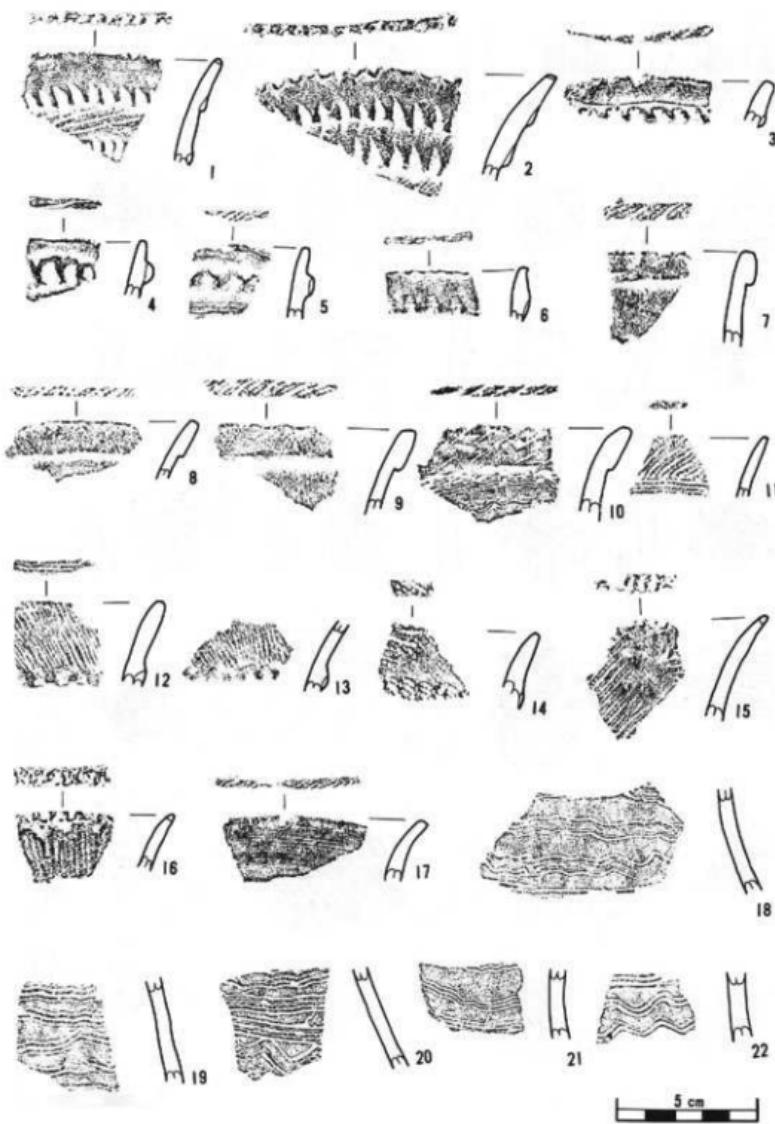


第5図 第1号A住居址 住居址出土遺物
第1号B住居址

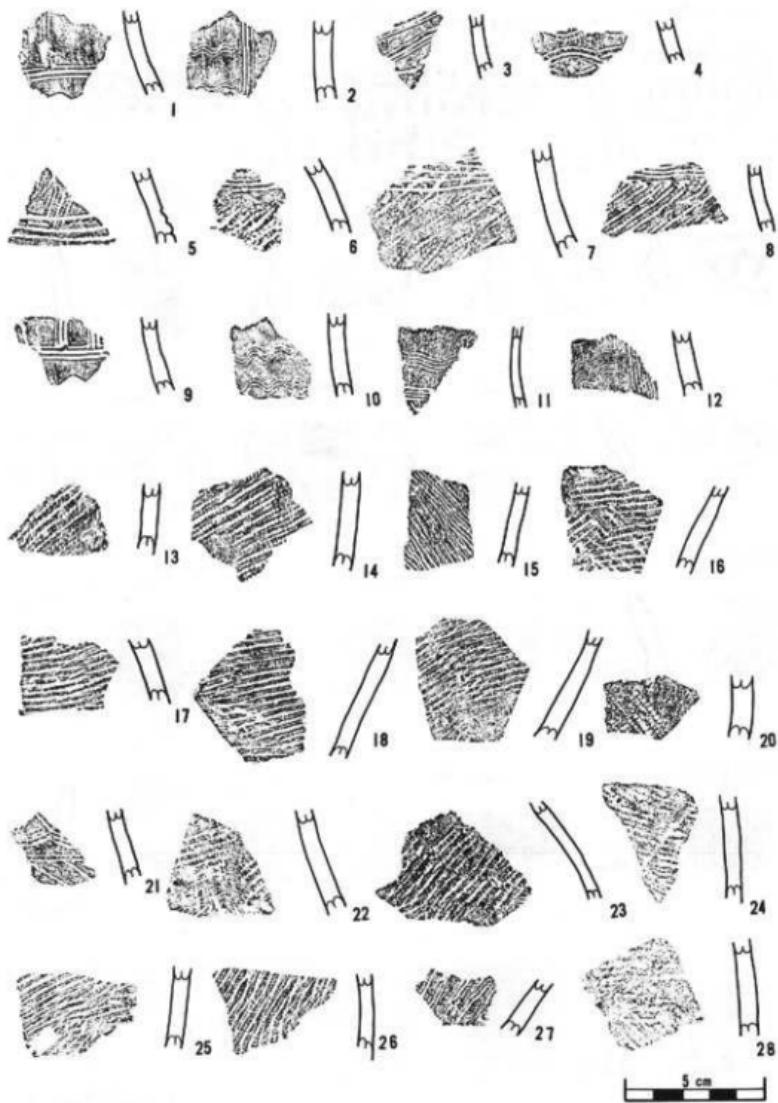
第IV類（第6図1～8, 12～17, 第7図13～28, 第8図, 第9図1～5）縄文を配するもの。
a 5（第6図1～6, 12～14）折返し口縁部に縄文原体による押圧を配するもの。1～6は、
口唇部に縄文原体による押圧文を配する。口縁以下の文様は、不明であるが、一応この類とした。
12～14は、折返し口縁部にも縄文を配する。

- a 1（第6図15）口唇部に縄文原体による圧痕、口縁下から縄文が配される。
- a 3（第6図17）口唇部に縄文原体による圧痕。口縁に無文帯がある。
- b 2（第7図17, 22, 23, 第8図2～5, 8, 9, 17, 20, 21, 23, 第9図2, 3, 5）縄文
を配するもの。頭部、又は胴部上半である。

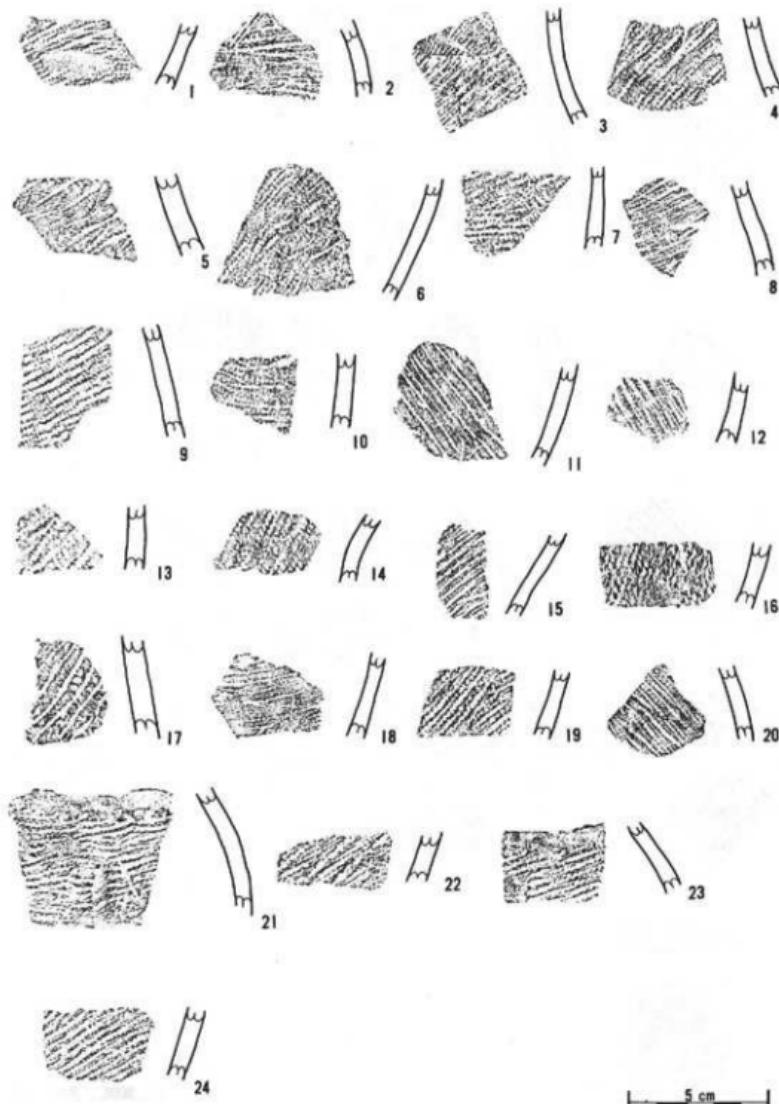
C（第7図13～16, 18～20, 24～28, 第8図1, 6, 7, 10～16, 18, 19, 22, 24, 第9図1,
4）胴部片、縄文を有するもの。



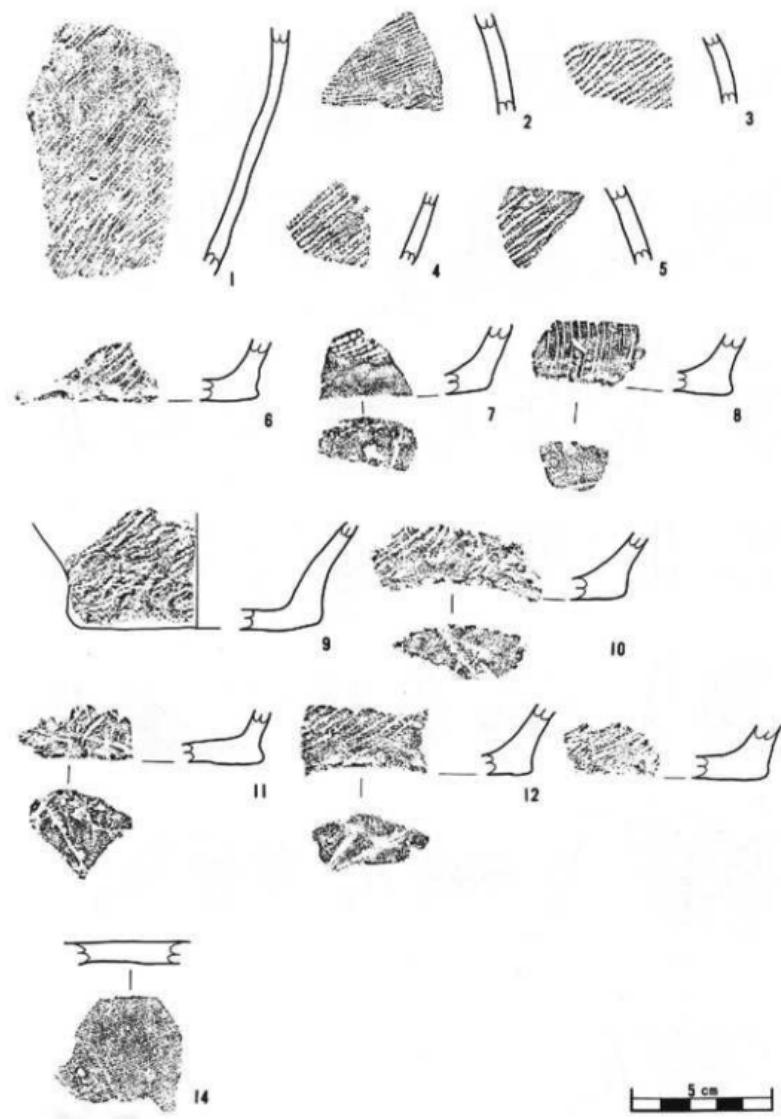
第6図 第1号A住居址出土遺物 (1)



第7図 第1号A住居址出土遺物 (2)



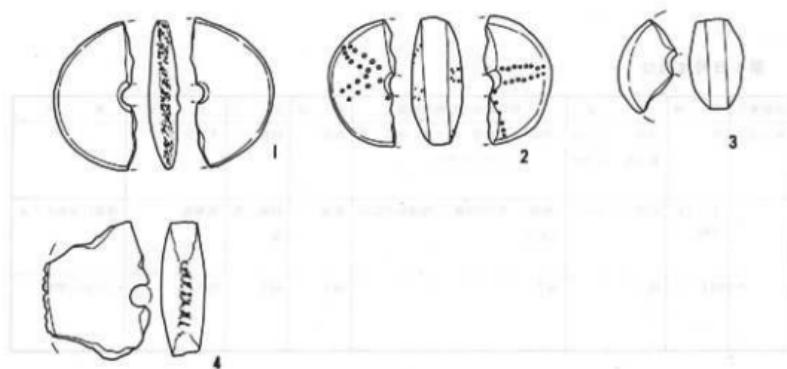
第8図 第1号A住居址出土遺物（3）



第9図 第1号A住居址出土遺物(4)

第VI類（第9図6～14）底部片である。11、12は、木葉痕。他は、いずれも布目痕を有する。

土製品（第10図1～4）紡錘車が4個体出土している。1、4は、側面に繩文が施文されている。2は、表裏両面ともに、刺突が配される。



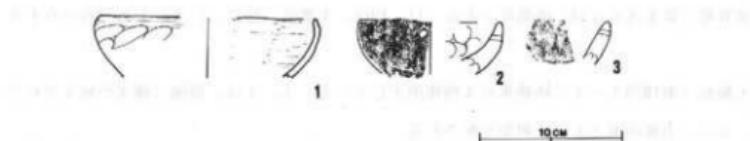
第10図 第1号A住居址出土遺物(5)(S $\frac{3}{2}$)

第1B号住居址（第4図）

本址は、第1A号住居址を切って構築されている。全体に擾乱溝が入る。一部は、調査区外である。主軸方向は、N-38°-Wを示す。平面形状は、長径3.7m、短径3.2m前後の方形と推定される。北壁中央部にカマドを有している。壁高は、0.4m前後で、壁は、ゆるやかに立ち上がる。カマドは、北壁に確認された。粘土は、みられず、単に壁面も掘り下げた感じである。ピットは、2個確認された。位置は不規則である。深さは、0.25m前後である。

第1B号住居址出土遺物（第11図）

本址からの遺物は、きわめて少ない。第11図1の杯及び、小型の手づくね状の土器が2個体分出土している。口縁部に受け部がつく。口縁部は、横ナデ。手づくね土器は、指頭状の押圧が認められる。貫通する小穿を持つ。



第11図 第1B号住居址出土遺物

第1B号住居址

団版番号	器種	法	量	墾形・柱法、形態の特徴	施成	胎土	色調	備考
第11図 1	杯	口径	—15.2cm	(外側)一ロ繩部—環ナデ。体部一荒 載大径—15.8cm いへつけすり。	良好	砂粒(少)	茶褐色	
2	手づくね 土器	口径	—9.9cm	(外側)、及び(内面)に指圧痕が認め られる。	普通	砂粒、宮 母	暗褐色	体部に穿孔がある。
3	同上	上	同上	同上	同上	同上	同上	2と同一個体

第2号住居址（第12図）

遺跡の北側、C 6区に位置する。全体に擾乱溝が入っており、状況は、よくない。主軸方向N—Wを示す。長径3.6m、短径3.5mの隅丸方形を示している。壁高は、0.1m～0.2mで比較的浅く、壁は、床面より0.6m前後の角度で立ちあがる。炉址は、中央部北側に確認された。長径1.5m、短径0.6mの長楕円形を示す。ピットは、1個だけ確認されている。位置は、不定で、深さ0.2mほどである。出土遺物より、古墳時代と思われる。

第2号住居址出土遺物（第13～第15図）

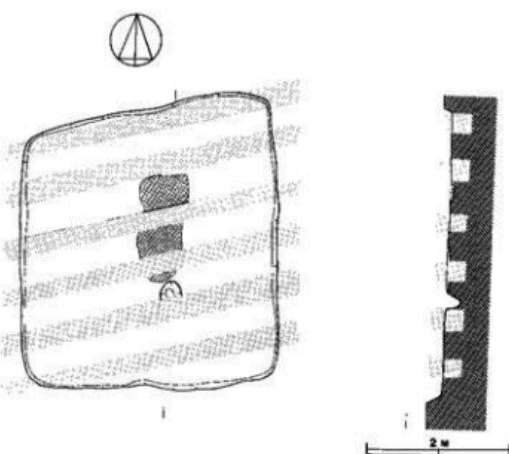
出土遺物は、縄文式土器、弥生式土器、土師器である。

縄文式土器（第13図）

第II群1類（1）屈曲部分。円形竹管文。刺突文等々を配する。表裏条痕。

第III群2類b（2～4）胎土に纖維を有するもの。縄文が配される。

第VII群（5）沈線間に沈線が配される。



第12図 第2号住居址実測図

第VII群I類a(6)一列の刺突列を配するもの。

第X群(7, 8)後期初頭に属するものか。

弦生式土器(第14図)

第I類(1)繩文を地文として、沈線文を配するもの。

第IV類C(2~7)胴部片である。繩文を配する。

第VI類(8)底部片である。

土師器(第15図)

甕(9~12)9は、小形の甕。口径12.9cm。内面ヘラけずり。「く」字状に屈曲する口縁部を持つ。10は、「く」字状に屈曲する口縁部が短い。口縁部一刷毛、ヘラけずりが行われる。11, 12は、同一個体。11は、「く」字状に口縁が外反する。12径に比して、胴部最大径が大きい。口縁部刷毛、胴部にヘラけずりが行われる。12は、胴下部、かなり彎曲して、底部に移行するものと思われる。

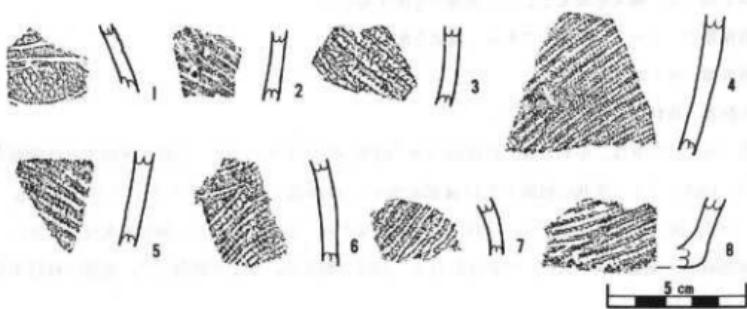
杯A(1~4, 7)1は、口径16.1cm、口縁部横ナデ、体部ヘラけずり。2は、口径16.6cm、1と同じ整形である。4は、口径15.1cm、器高6.6cm。器面は、磨耗している。7は、口径12.9cm、口縁部に刷毛、体部にヘラみがきが行われる。

杯B(5, 6, 8)いずれも、口縁部上端で、小さく外方に屈曲する。口縁部、刷毛、又は横ナデ、体部に荒いヘラみがきが行われる。

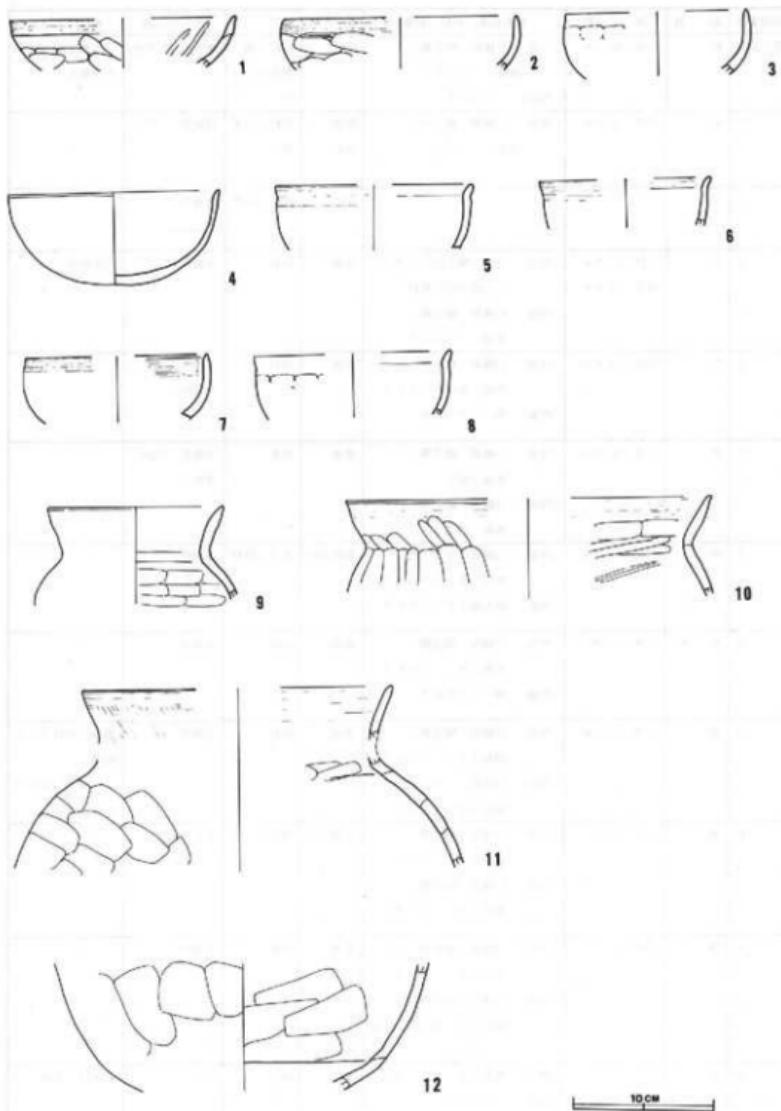


第13図 第2号住居址出土遺物(1)

（出文書室・器物・土器・陶器等）



第14図 第2号住居址出土遺物(2)



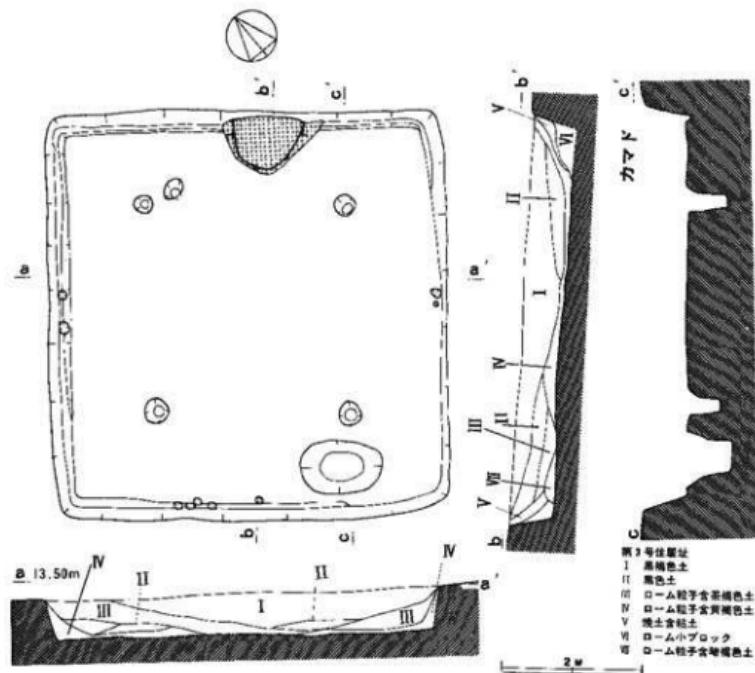
第15図 第2号住居址出土遺物(3)

第2号住居址

回収番号	種 樹	法 量	整形技術、形態の特徴	発 成	胎 上	色 調	備 考
第15回1 1	桜	口径—16.1cm	(外側)一口縫部・刷毛模。 体部へラけずり。 (内面)へラみがき。	良好	砂粒。密 赤色スコリ ア	褐色(一部、原色)	一次焼成時の焼成 不良箇所
2	桜	口径—16.6cm	(外側) 口縫部・横ナギ。 体部へラけずり	早腹にて 良好	砂粒。石英 空泡	赤褐色(一部)	
3	桜			良好	砂粒。石英	暗褐色	
4	桜	口径—15.1cm 器高—6.6cm	(外側)一全体に横方向のへラみが き。部分的に黒絶 (内面)一口縫部 刷毛模。 体部へラみがき。	普通	砂粒	赤褐色	内面剥落
5	桜	口径—14.1cm	(外側)一口縫部一横ナギ。 体部へラみがき (内面)へラみがき	普通	砂粒	赤褐色(内面、 黒褐色)	
6	桜	口径—12.2cm	(外側)一口縫部 刷毛模。 体部へ刷毛 (内面)一口縫部一刷毛模。 体部へ刷毛	普通	砂粒	赤褐色(内面、 黒色)	
7	桜	口径—12.9cm	(外側)一口縫部 ヨコナギ。 体部へラみがき (内面)へラみがき	堅膜良好	あらい砂粒	赤褐色	
8	桜	口径—12.9cm	(外側)一口縫部一刷毛模。 体部へラみがき (内面)へラみがき	普通	砂粒	赤褐色	
9	裏	口径 12.5cm	(外側)一口縫部一刷毛模。 胴部上半へラみがき (内面) 口縫部へラみがき、 胴部上半へラけずり	普通	砂粒	赤褐色	脚面、内外ともに 剥落 一次焼成を受けて いる。
10	裏	口径—26cm	(外側)一口縫部一刷毛模。 胴部上半へラけずり (内面) 口縫部一刷毛模。 胴部上半へラけずり。	堅膜良好	砂粒。石英	赤褐色	
11	裏	口径 22cm	(外側)一口縫部一刷毛模。封 胴部上半へラけずり (内面)一口縫部一刷毛模。 胴部上半一刷毛模。一部 へラけずり	普通	砂粒	赤褐色	
12	裏		(外側)一椭型下平へラけずり (内面)へラけずり	同上	同上	同上	11と同一個体

第3号住居址（第16図、第17図）

本址は、遺跡の中央部、D 6 区に位置する。主軸方向 N-40°-E を示す。長径5.7m、短径5.6mの隅丸方形を呈する。北壁中央部にカマドを有する。壁高は、0.45m~0.6m前後で、壁は、床から70°前後の角度で立ちあがる。南側コーナー部、南東壁をのぞいて、浅い壁下溝が認められる。ピットは、5個検出された。4個が主柱穴と思われる。深さは、0.4m~0.7mである。南側コーナー付近に、直径1.16m、短径0.75mの楕円形状のピットが検出された。貯藏穴と思われる。壁下には、微少なピットが9個検出された。土層の堆積は、レンズ状を示している。自然堆積と思われる。カマドは、北壁中央に確認された。白色粘土を主体として構成される。壁から若干下がった位置に粘土が取り付けられる。火床は、ゆるく傾斜して、煙出しに続き、煙出しは、垂直に近い。火床、及び焚口部は、緩やかにくぼんでいる。火床、及び焚口部には、0.2m前後の焼上地積が見られる。



第16図 第3号住居址実測図

第3号住居址出土遺物（第18図～第20図）

出土遺物は、縄文式土器、及び土師器である。

縄文式土器（第18図）

第III群（第18図1～5）1～2は、口縁部。4は、組み紐である。

第IV群（第18図6～14）浮島式土器。6～10は、半截竹管文に変形爪形文が配される。11～14は、三角文が配されるものである。

第VII群II b類（第18図15、16）微隆起線に沈線文を配するもの。

弥生式土器（第18図17）

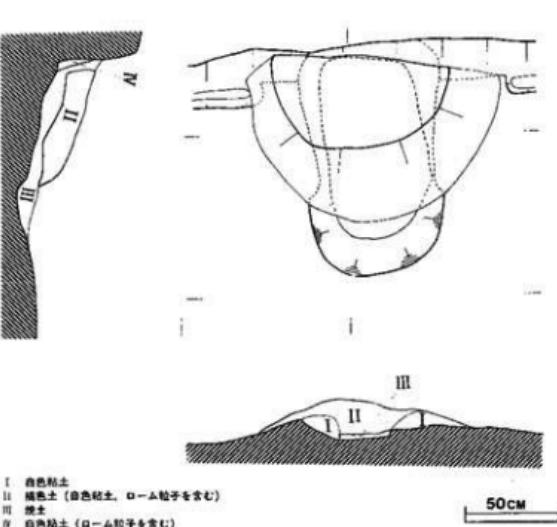
第IV群C（17）胴部で縄文を有するものが1片だけ出土している。

土師器（第19図）

表A（1）口径12.1cm、胴部最大径17.9cmである。口径に比して、胴部最大径が大きい。口縁部は、一端直立し、外反する。口縁部横ナデ、胴部は、ヘラけずりである。

表B（2、3）口径と胴部最大径が近いもの。2は、口縁部で、上方にゆるく外反する。3は、口縁部上端でゆるく屈曲し、直立する。両者とも、口縁部横ナデ、胴部は、ヘラけずりである。

瓶（4）口径29.7cm、器高25.3cmである。口径が胴部最大径より大きい。口縁部は、端部で外反する。口縁部横ナデ、胴部は、荒いヘラみがき。



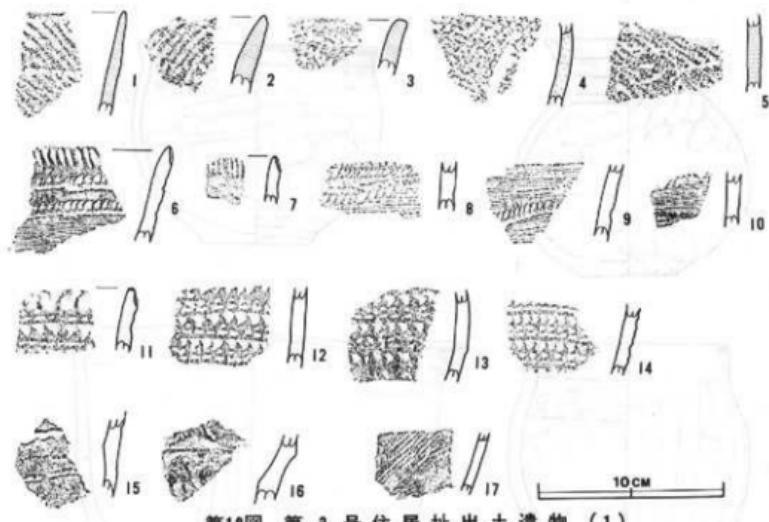
石製品（第20図）

滑石製の管玉、双孔円板が出土している。

1は、滑石製管玉。高さ2.2cmで半欠する。

2は、小型の双孔円板。径1.4cm、厚さ0.2cmである。3は、滑石製、周縁が打欠かれており円形を示す。

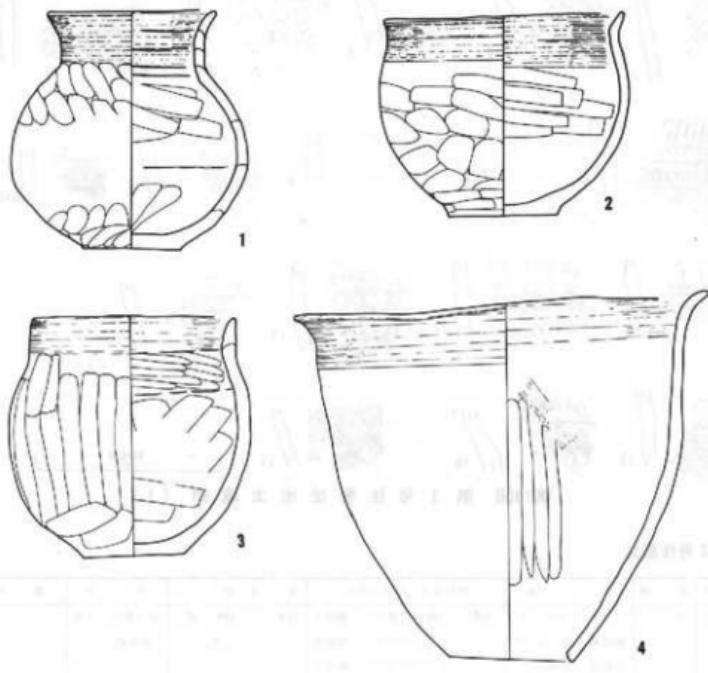
第17図 第3号住居址カマド実測図



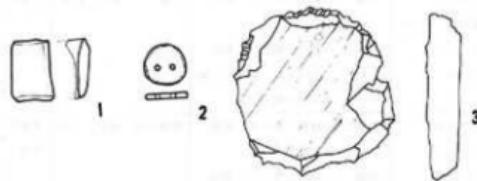
第18図 第3号住居址出土遺物(1)

第3号住居址

図版番号	器種	法量	整形技法、整型の特徴	焼成助土	色調	備考
第19図1	甕	口径—12.1cm 胴部最大径—16.9cm 底部径—7cm 器高—16.9cm	(外面)一口縁部一横ナデ。胴部上半—ヘラけずり。胴部中央—ヘラみがき。胴部下半—ヘラけずり。 (内面)一口縁部一横ナデ。胴部—ヘラけずり。 口径に比して、胴部較大径が大きい。口縁部は、直立ぎみに立ちあがり、上縁で外反する。	良好 砂粒、石英	暗赤褐色(下部—暗褐色)	
2	甕	口径—17.2cm 胴部最大径—17.9cm 底部径—7.75cm 器高—14.25cm	(外面)一口縁部一横ナデ。胴部—ヘラけずり。 (内面)一口縁部一横ナデ。胴部—ヘラけずり。	良好 砂粒、石英	暗赤褐色	
3	甕	口径—14.5cm 胴部最大径—17.3cm 底部径—7.2cm 器高—17cm	(外面)一口縁部一横ナデ。胴部—ヘラけずり。 (内面)一口縁部一横ナデ。胴部—ヘラけずり。部分的に輪積み痕が残る。	普通 砂粒、石英	黒褐色	
4	瓶	口径—29.7cm 底径—8.9cm 器高—25.3cm	(外面)一口縁部一横ナデ。胴部—荒いヘラみがき (内面)一口縁部一横ナデ。胴部—ヘラみがき。(胴部で瓶方向、底部付近で瓶方向)	堅硬良好 砂粒、石英	茶褐色(一部、黒色)	



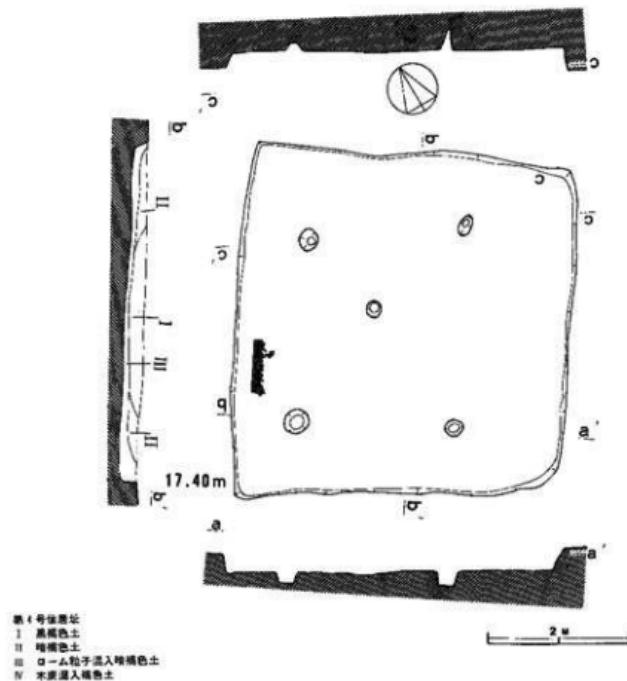
第19図 第3号住居址出土遺物(2)



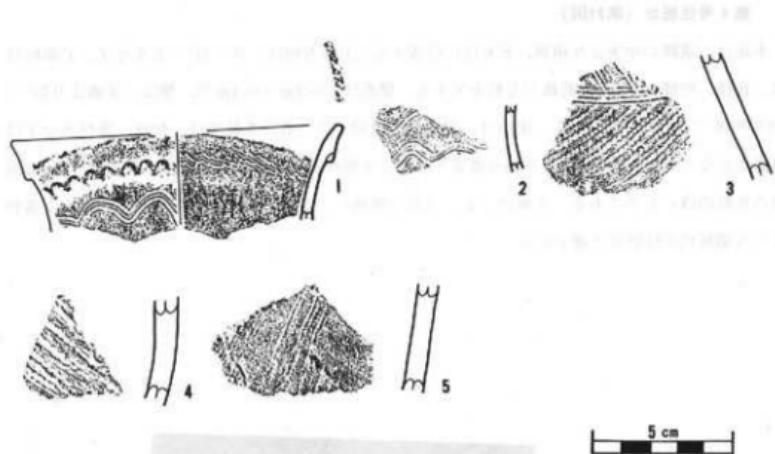
第20図 第4号住居址出土遺物(3)(S½)

第4号住居址（第21図）

本址は、遺跡の中央より南側、E 6区に位置する。主軸方向は、N-31°-Eを示す。平面形状は、長径、短径とも4.8m前後の方形を呈する。壁高は、0.2m~0.4mで、壁は、床面より70°~88°の角度で立ちあがっている。床面は、西方向に傾斜している。本址では、炉址、及びカマドは、確認されなかった。ビットは、5個所確認された。4個所が主柱穴と思われる。深さは、0.2m前後の比較的浅いものである。土層は、レンズ状に堆積しており、自然埋没と思われる。出土遺物より古墳時代の住居址と思われる。



第21図 第4号住居址実測図



第22図 第4号住居址出土遺物（1）

第4号住居址出土遺物（第22図～第24図）

出土遺物は、弦生式土器、及び土師器である。

弦生式土器（第22図）

第三類a 5 (1) 口唇部に縄文原体による押圧、隆起線上に縄文末端部による刺突が配される。隆起線から上に無文部、隆起線から下に櫛描波状文が配される。口縁部裏面にも、櫛描波状文が配される。

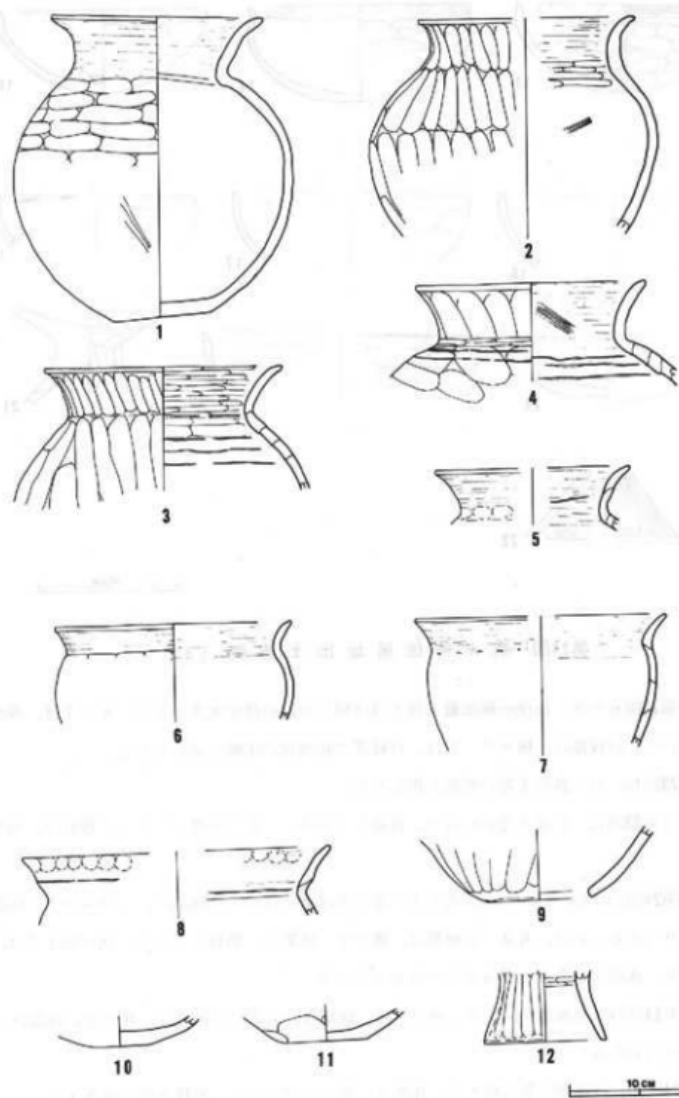
第三類b 1 (2) 櫛描波状文を配するもの。

第三類b 3 (3) 櫛描文下に縄文が配される。櫛描文は、直線的なものか。

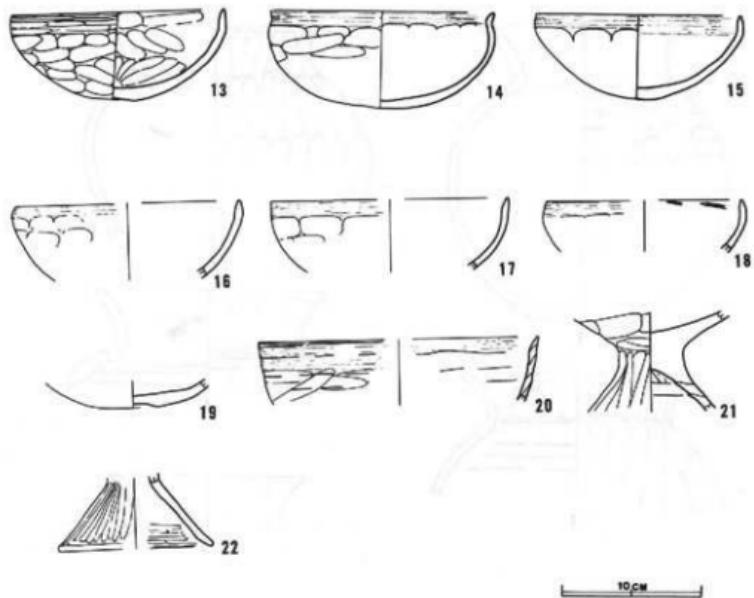
第四類C (4, 5) 胴部片であり、縄文が配される。

土師式土器（第23図、第24図）

甕A（第23図1～5）口径が胴部最大径に比して、かなり小さいもの。1は、ほぼ完存品。口縁部は、かなり急激に外反する。口縁部は、横ナデ。胴部は、ヘラけずりが施される。2は、口縁部がやや垂直ぎみに立ち上がり、上端部で外反する。口縁部、胴部には、縦方向にヘラけずりが行われる。3, 4は、1と同様に口縁部が急激に外反する。口縁部からヘラけずりが行われる。両者とも、胴部上半の輪積み痕が残っている。5は、若干小形。口縁部は、横ナデで屈曲部に指頭状の圧痕が認められる。



第23図 第4号住居址出土遺物(2)



第24図 第4号住居址出土遺物(3)

甕B（第23図6～8）口径が胴部最大径とほぼ同じか、口径が大きいもの。6、7は、器面が磨耗している。口縁部は、横ナデ。8は、口縁部に指頭状の圧痕が認められる。

甕（第23図10、11）甕形土器の底部と思われる。

台付甕（第23図12）台部と思われるが、貫通している。一応この類としたが、器形は、判然としない。

杯A（第24図13、15～19）13は、若干上げ底の小底部を持つ。口縁部は、ヘラミがき。体部は、ヘラけずりである。15は、丸底。口縁部は、横ナデ。体部は、磨耗している。16～18までは、口縁部横ナデ、体部は、荒いヘラミがきが行われている。

杯B（第24図14）上端部で、小さく外反する。底部は、丸底。口縁部は、横ナデ、体部は、ヘラけずりが行われる。

碗（第24図20）口縁部に荒い横ナデ。体部は、荒いヘラミがき、輪積み底が残存する。

高杯（第24図21、22）21は、杯部と脚部の中間部。比較的厚手である。ヘラけずりが行われる。23は、脚部。縦方向のヘラミがきが行われる。

第4号住居址

調査番号	名 称	法 量	整 形 技 術、形態の 特徴	焼 成 程 度	色 調	備 考	
第23組1	灰	口径—15.1cm 周部最大径— 19.6cm 底面—6.8cm	(外面)一口縫部一横ナデ。脇部上半 ヘラ けすり。胴部下半一(不鮮明)一部 刷毛目 (内面) 口縫部一横ナデ、胴部一刷毛目	普通 普通	石英、 砂粒、石英、 雲母	暗赤褐色(一 部黒褐色)	二次焼成を受けている。
2	灰	口径—15.5cm 周部最大径— 20.6cm	(外面)一口縫部一縱方向へうけずり。胴部 上半一縱方向へうけずり。脇部中 央付近から不鮮明になる。 (内面)一口縫部一横ナデ。脇部に縦方向 へうけずり。胴部一刷毛目	普通 普通	砂粒、石英、 雲母	暗赤褐色	二次焼成を受けている。
3	灰	口径—17cm	(外面) 口縫部一縦方向へうけずり。胴部 上半一縦方向へうけずり (内面)一口縫部一横ナデへうけずり。胴部 上半一刷毛目(脇部も真っ白)	良好 良好	砂粒、石英、 雲母	暗赤褐色	一部焼減
4	灰	口径—16.5cm	(外面) 口縫部 縦方向へうけずり後せい 横ナデ。脇部に縦方向のへうけ ずり。胴部上半一へうけずり。刷 毛目底 (内面)一口縫部一刷毛目。胴部上半に横柄 み紋が明顯に残る。	普通 普通	砂粒、石英 砂粒、石英	暗褐色	焼減
5	灰	口径—14cm	(外面)一口縫部一横ナデ。脇部に瘤状 の生長 (内面)一横ナデ	普通 普通	砂粒、石英 砂粒、石英	暗褐色	二次焼成を受けている。
6	灰	口径—17cm	(外面)一口縫部一横ナデ。脇部一磨滅のた め不明 (内面)一口縫部一横ナデ。胴部一磨滅	普通 普通	砂粒(多)、 石英 砂粒(多)、 石英	暗赤褐色	外面、内面と も全体的に磨 滅している。
7	灰	口径—18cm	(外面)一口縫部一横ナデ。脇部に筋模 痕、胴部、荒いへきみがき (内面)一口縫部一横ナデ。胴部一荒いへき みがき	堅緻良好 良好	砂粒、石英 砂粒	外一黒褐色、 内一暗褐色	
8	灰	口径—22.1cm	(外面)一口縫部一指頭状の圧痕による整形、 中央付近でわずかに隆起を示す。 胴部、墨耗 (内面)一口縫部一指頭状の圧痕後、刷毛目	普通 普通	細砂 細砂	赤褐色	内、外とも、 管軸、剥落部 分がある。
9	灰(底部)	底面径—7.0cm	(外面)一底部下半一縦方向へうけずり (内面)剥落	良好 良好	砂粒 砂粒	暗褐色	二次焼成を受けている。部分的焼減、剥 落。
10	灰(底部)	底面径—4cm		良好 良好	砂粒、石英 砂粒、石英	黒褐色、一部 茶褐色	
11	灰(底部)	底面径—6.1cm	(外面) 脇部下半一へうけずり (内面) 剥落	普通 普通	砂粒、石英 砂粒、石英、 雲母	外面一黒褐色 内面一茶褐色	
12		底面径—8.8cm	(外面)一縦方向へうけずり (内面)一貫通している。剥離不明	普通 普通	砂粒、石英、 雲母 砂粒、石英、 雲母	暗茶褐色	

同類番号	器種	法量	整形方法、形態の特徴	焼成度	胎土	色調	備考
第34回13	杯	口径-15.2cm 底直径-2.8cm 器高-0.15cm	(外面)一口縁部一横ナデ。体部へラケザリ。 (内面)ヘラみがき。	堅密良好	砂粒。石英、 雲母	赤褐色(一部 黒褐色)	
14	碗	口径-15.9cm 器高-6.9cm	(外面)一口縁部一横ナデ。体部へラケザリ (内面)口縁部へ横ナデ。体部へ重いヘラ みがき	良好	砂粒。石英、 雲母	赤褐色(内 面-茶褐色)	(外面)にスヌ 付着
15	杯	口径-14.7cm 器高-6cm	(外面)一口縁部一横ナデ。体部へ横ナ (内面)一口縁部へ横い横ナデ。体部へ横	良好	砂粒。石英、 雲母	赤褐色	内外とも、器 面が磨耗して いる。
16	杯	口径-16cm	(外面) 口縁部へラミがき、体部へラ みがき (内面) ヘラみがき	堅密良好	砂粒。石英、 雲母	黒褐色(内面 一部褐色)	
17	杯	口径-17cm	(外面)一口縁部一横ナデ。体部へラケザ (内面)一口縁部へ横ナデ。体部へ横	普通	砂粒。石英、 雲母	赤褐色	二次焼成を受けている。
18	杯	口径-14.05cm 口径-14.05cm	(外面)一口縁部へ横ナデ。体部へラミが き (内面)一口縁部へ一部横ナデ。他は体部 とともにへラミがき	堅密良好	砂粒。石英、 雲母	赤褐色	
19	杯(底部)	底周径-3.5cm		普通	砂粒。石英、 雲母	赤褐色	全体に磨滅 第二次焼成を 受けている。
20	杯	口径-20cm	(外面)一口縁部へ横い横ナデ。体部へラ みがき、垂積み痕が残る。 (内面)口縁部へ横ナデ	普通	砂粒。石英、 雲母	赤褐色(内面 黒褐色)	
21	高杯		(外面)一縁部へ裏方向のへラケザリ。杯部 へラケザリ (内面)脚部へ横積み痕が残る。	普通	砂粒。石英、 雲母		二次焼成を受 けている。
22	高杯		(外面)一縁部へ裏方向へラミがき (内面)一観音仕邊へラミがき	普通	砂粒。石英、 雲母	赤褐色	

第5号住居址（第25図）

本址は、遺跡の中央部、D5区とD6区の間、第3号住居址の西側に位置する。土軸方向は、N-16°-Wを示す。平面形状は、長径5.3m、短径4.4mの長方形を呈する。北西側は、第22号上塙に切られている。壁高は、0.2m~0.3mで、床面から75°~80°の角度で立ちあがる。北西部コーナー一部付近の壁は、ほとんど認められなかった。炉址は、中央付近に位置する。長径0.94m、短径0.65mの楕円形を呈する。ピットは、3個所検出された。いずれも、主柱穴と思われる。4穴と想定され、残りの1個は、土壤で切られているものと思われる。深土は、約0.2m前後で、比較的浅いものである。土層は、レンズ状の堆積を示しており、自然堆積と思われる。出土遺物より、時期は、古墳時代と思われる。

第5号住居址出土遺物（第26図～第29図）

出土遺物は、縄文式土器、土師器、石製模造品等々が出土している。

縄文式土器（第26図）

第Ⅲ群a（1、2、3）縄文原体の末端を回転させるもの。

第Ⅲ群b（3、5）縄文を配するもの。

第Ⅳ群1類（10~14）粗雑な燃糸文を地文として半截竹管文、及び爪形文が配されるもの。

第Ⅳ群2類（8、9）半截竹管文と連続爪形文が配されるもの。

第Ⅳ群4類（6、7）変形爪形文を配するもの。6、7とは、口縁上端に縱方向の連続した短沈線を施文する。

第Ⅳ群6類（15~17）縄文を配するもの。

第Ⅳ群II b類（18）沈線文を配するもの。

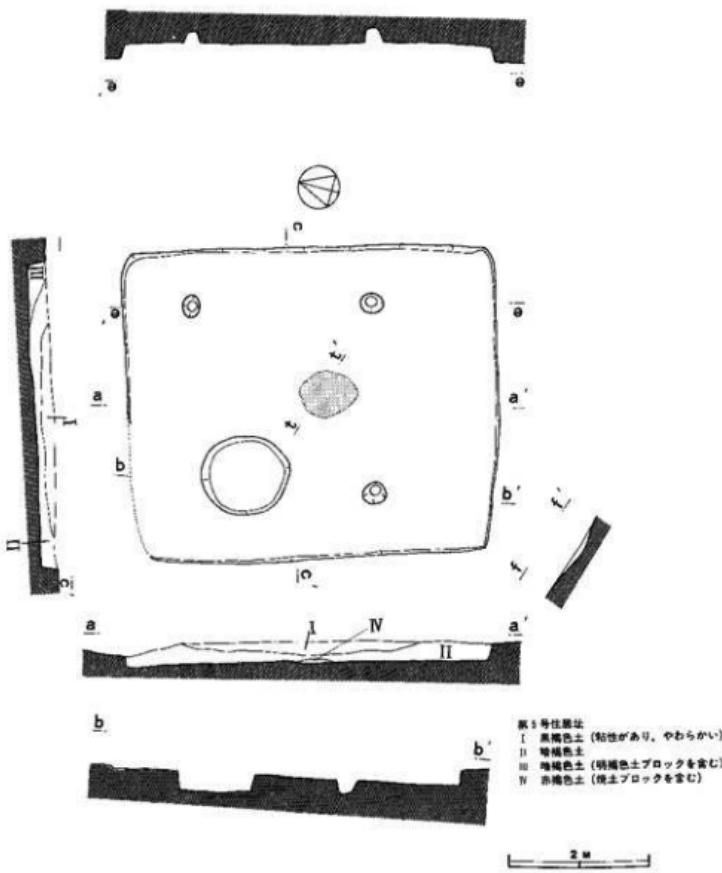
第X群土器（19~21）後期初頭の土器を一括する。20は、林名寺式土器か。21の底部は、本群に属するものか。

土師式土器（第27図、第28図）

甕A（第27図1~3、5）口径が胴部最大径に比して、小さいもの。1~3まで、口縁部は、「く」字状に外反する。1は、若干上げ底の底部を持つ。口縁部は、縱方向のへらけずり。胴部は、全面にへらけずりが施される。口縁裏面は、へらみがきである。2は、器厚が厚く、輪積み痕が裏面に残る。口縁部は、縱方向のへらけずり。3は、1、2に比して小型。口縁部は、横ナデ、胴部内面は、刷毛。5は、底部片。

甕B（第27図4）口径と胴部最大径が近い数値のもの。口縁部は、ゆるく外反し、上端で、垂直ぎみに立ちあがる。口縁部は、横ナデ。胴部は、へらけずり。

堆（第27図6）口縁部欠失。底面は、上げ底。内外面ともへらみがき。胴部は、そろばん下状

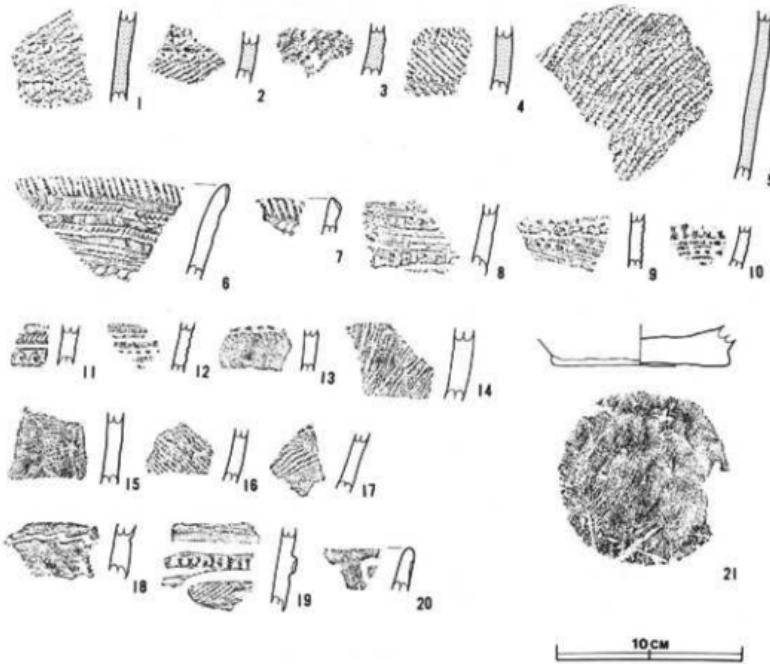


第25図 第5号住居址実測図

を早する。

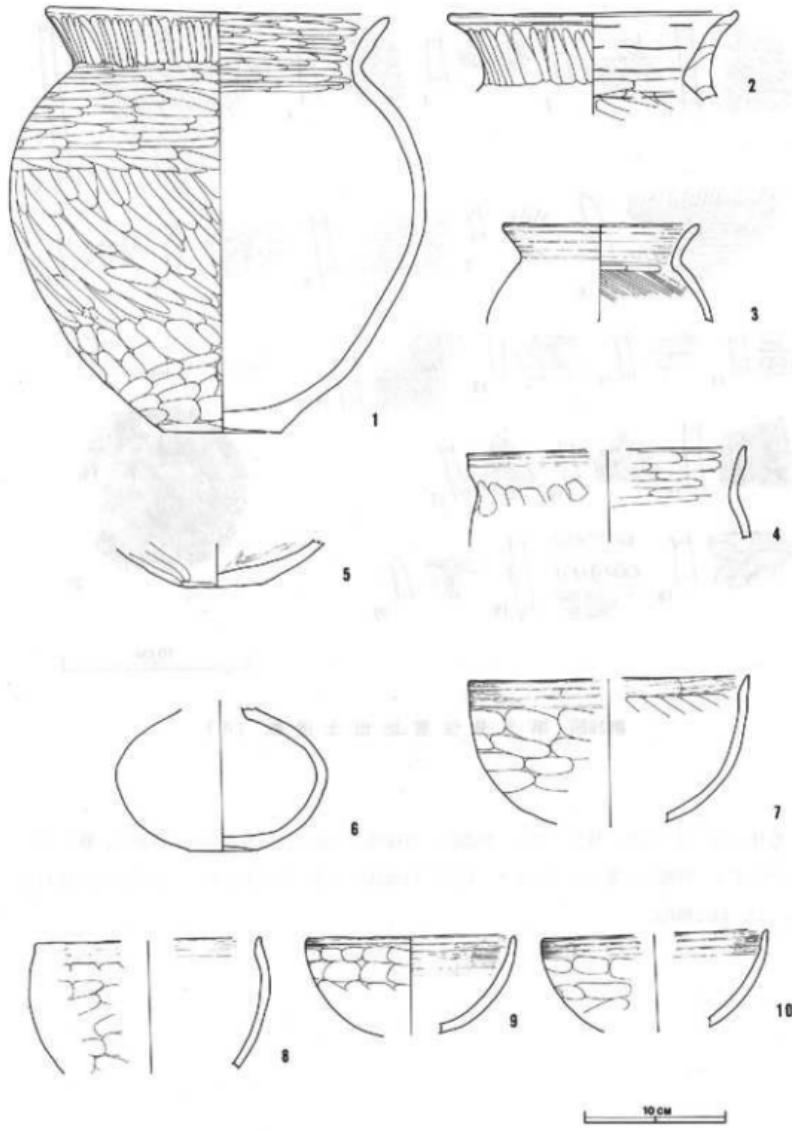
椀（7, 8）口縁が、垂直ぎみに立ち上がる。口縁部は、横ナデ。胴部にヘラけずりが行われる。

杯A（9, 10）口縁部は、なだらかに立ち上がる。口縁部は、横ナデ。体部にヘラけずり。内面に横ナデが行われる。

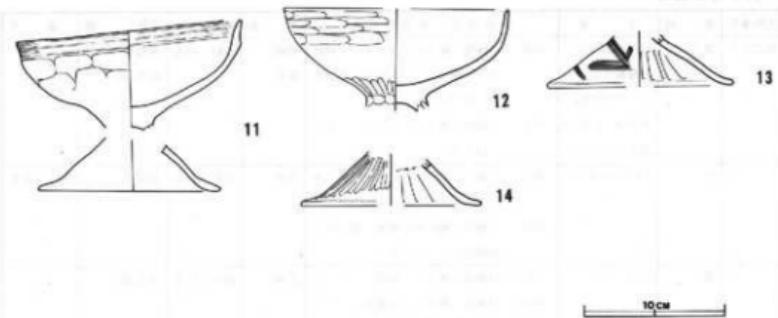


第26図 第5号住居址出土遺物（1）

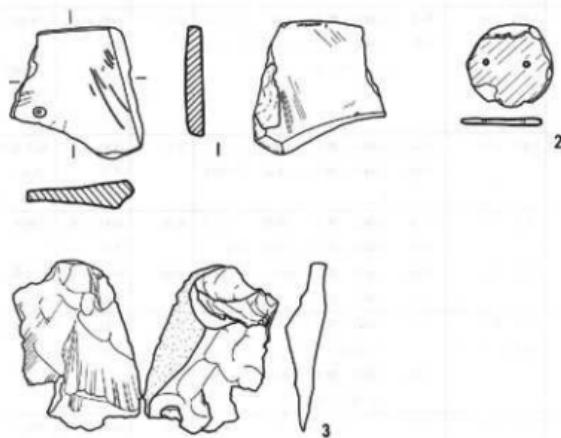
高杯（11～14）11は、接合しない。杯部は、口縁部でゆるい棱を有する。口縁部は、横ナデ、ヘラけずり。脚部は、荒いヘラみがき。12は、口縁部がゆるく立ち上がる。ヘラみがきが行われる。13、14は脚部。



第27図 第5号住居址出土遺物（2）



第28図 第5号住居址出土遺物(3)



第29図 第5号住居址出土遺物(4)(5%)

第5号住居址

調査番号	器種	法度量	鑑別方法、形態の特徴	良 壴	胎 士	色 調	備 考
第27号1	甕 A	口径=24.5cm 肩部最大径=29.45cm 底径=8.45cm 高さ=29.75cm	(外面)一口縁部 縦方向へうねり、肩部上半部一横方向へラケおり、肩部下半部一斜方向へラケおり (内面) 口縁部 橫方向へうねり、肩部一横毛目	堅強にて良好	砂粒、石英	茶褐色(一部 緑茶褐色)	
2	甕	口径=20.4cm	(外面) 口縁部 縦ナギ、縱方向へうねり (内面) 一口縁部一輪みがき残存、縦ナギ、底部下にヘラけおり	普通	砂粒、石英	茶褐色	第二次焼成
3	甕	口径=14cm	(外面)一口縁部一横ナギ、肩部へラカキ (内面)一口縁部一横ナギ、底部下にヘラけおり、肩部一横毛目	普通	砂粒、石英	茶褐色	
4	甕	口径=20cm	(外面)一口縁部一横ナギ、底部下にヘラけおり (内面)一口縁部一横方向へラケおり	普通	砂粒、石英	茶褐色	
5	甕(底部)	底径=5.8cm	(外面) 底下半 縦方向へうねり	良好	砂粒、石英	茶褐色	
6	甕	肩部最大径=15.05cm 底径=6.2cm	(外面)一ヘラみがき (内面)一ヘラみがき 底部厚=6.2cm	堅強にて良好	砂粒、石英	茶褐色	
7	甕	口径=20cm	(外面)一口縁部一横ナギ、底部へうねり (内面) 口縁部へラケおり、底部一斜方向へラケけり	良好	砂粒、石英、 雲母	(外面)一黒褐色 (内面)一暗褐色	
8	甕	口径=16cm	(外面)一口縁部一横ナギ、体部へうねり (内面)一口縁部一横ナギ、体部一斜方向へラケけり	良好	砂粒、石英、 雲母	茶褐色 (内面)一暗褐色	
9	杯	口径=15cm	(外面)一口縁部一横ナギ、底部へラカキ (内面)一口縁部一横ナギ、底部へ底足	普通	砂粒、石英、 雲母	赤褐色	
10	杯	口径=16cm	(外面)一口縁部一横ナギ、体部へうねり (内面)一口縁部一横ナギ	普通	砂粒、石英、 雲母	暗赤褐色	第二次焼成を受けている
第28号11	丸杯	口径=16cm 脚部厚=12.9cm	(外面)一口縁部一横ナギ、杯部へラケおり、脚部へラカキ。 (内面)一横ナギ、杯部へラカキ。	良好	砂粒、石英、 雲母	茶褐色	
12	高杯	口径=6cm	(外面)一へラけおり(みがき?) (内面)一横ナギ。	良好	砂粒、石英、 雲母	茶褐色	
13	高杯 (脚部)	脚部厚=13.4cm	脚部一横毛目 (内面) 脚部一横方向へうねり	良好	砂粒、石英	茶褐色	%
14	高杯 (脚部)	脚部径=12.85cm	脚部一へラけおり後、横毛目 (内面)一へラけおり、丸く縮合し、系縫が残る。	良好	砂粒、石英	茶褐色	%

第1号土壙（第30図、第35図）

遺跡の北側、B 6 区に位置する。主軸方向N-56°-Wを示す。径1m前後の円形を呈する。壁高は、0.15m~0.2mほどで、壁は、床面から65°~70°の角度で立ちあがる。床は、平坦である。遺物は、縄文式土器、弥生式土器が出土。いずれも細片。1は、第II類1類。表面に沈線文と刺突が配され、裏面に条痕が配される。2は、第III群b。縦文が配される。3~5は、弥生式土器でいずれも胴部片。

第2号土壙（第30図）

遺跡の北側、B 6 区に位置する。主軸方向N-85°-Wを示す。平面形状は、長径0.47m、短径0.43mほどの円形を示す。底面に粘土がはらされている。壁高は、0.12m~0.15mほどで、外方へ立ちあがる。床は、若干くぼんでいる。

第3号土壙（第30図）

遺跡の北側、B 6 区に位置する。主軸方向N-76°-Wを示す。平面形状は、長径0.8m、短径0.7m前後の楕円形を呈する。攪乱溝が入っている。壁高は、0.09m~0.15mで、北西側は、明確な立ち上がりを見せず、遺構確認面へ移行する。東側では、床面から65°前後の角度で立ちあがる。床は、中央部付近で若干くぼむ。

第4号土壙（第30図）

遺跡の北側、C 6 区に位置する。主軸方向N-18°-Wを示す。攪乱溝が入る。平面形状は、長径1.26m、短径0.9mの楕円形を示す。壁高は、0.1m~0.13m、壁は、東側で床面から約70°の角度で、西側は、ゆるやかに立ちあがる。床は、西側にゆるく傾斜する。

第5号土壙（第30図）

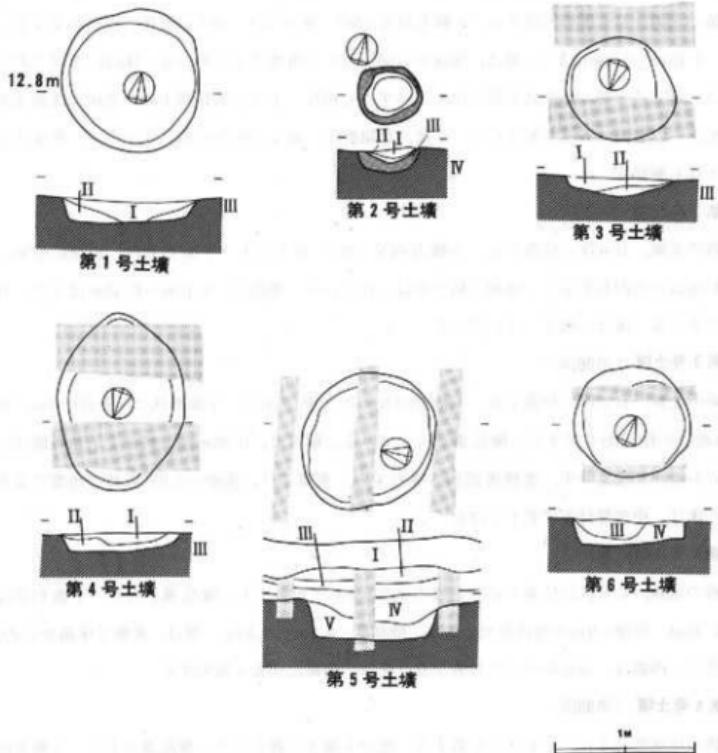
遺跡の中央部北より、C 6 区に位置する。他の土壙と一群をなす。攪乱溝が入る。主軸方向N-56°-Wを示す。平面形状は、長径1.03m、短径0.92mの楕円形を示す。壁高は、0.25m前後で、床面より70°~80°の比較的急角度で立ちあがる。床は、平坦である。

第6号土壙（第30図）

遺跡の中央部北より、C 6 区に位置する。攪乱溝が入る。主軸方向N-80°-Wを示す。平面形状は、長径0.85m、短径0.8mの円形を呈する。壁高は、0.12m~0.18m前後である。西側は、壁面より70°前後、東側は、90°前後の急角度で立ちあがる。床は、平坦であるが、西側にわずかに傾斜する。

第7号土壙（第31図）

遺跡の中央部北側、C 6 区とD 6 区の中間に位置する。攪乱溝が入る。主軸方向N-72°-Eを示す。平面形状は、長径0.95m、短径0.85mの楕円形を示す。壁高は、0.12m~0.18mで、床面より70°前後の角度で立ちあがる。床は平坦である。



第30図 土 壤 実 測 図 (1)

第1号土壤	第4号土壤	第6号土壤
I 高褐色土を含む黒褐色土	I 黑褐色土	I 混乱
II 黑褐色土を含む黄褐色土	II 黑褐色土	II 混乱(第2) ロームブロック注入
III ローム	III ローム	III 喷褐色土
第2号土壤	第3号土壤	IV 黑色土
I 黄褐色	I 表土(擾乱、第1耕作土)	V 黑褐色土
II 喷褐色土混白色粘土	II 第2耕作土	
III 砂粒混白色土	III 黑色土に表土混り、部分的	
IV 黑褐色土	IV に隙りあり、全体的にサラ	
第3号土壤	V ザラしている。	
I 黑褐色土		
II 黄褐色土		
III ローム		

第8号土壙（第31図、第35図）

遺跡の中央部付近、C 6区とD 6区の中間に位置する。擾乱溝が入る。主軸方向N-73°-Eを示す。平面形状は、長径1.7m、短径1mの長楕円形を呈する。壁高は、0.18m~0.29mで、床から80°~90°の急角度で立ちあがる。床は、平坦であるが東側で若干くぼむ。出土遺物は、縄文式土器が出土。いずれも細片。6は、第Ⅲ群。7~10は、第Ⅳ群で、貝殻波状文が配される。11は、弥生式土器か。

第9号土壙（第31図、第35図）

遺跡の中央より北側、C 6区に位置する。擾乱溝が入る。主軸方向N-0°-Wを示す。平面形状は、長径0.8m、短径0.72mの円形を呈する。壁高は、0.13m~0.18mで、床面から60°~80°の角度で立ちあがる。床は、平坦である。出土遺物は、縄文式土器である。いずれも細片。12、13は、第Ⅲ群。12は、口縁部。13は、半截竹管文が配される。

第10号土壙（第31図、第35図）

遺跡の中央より北側、C 6区に位置する。擾乱溝が入る。主軸方向N-40°-Eを示す。平面形状は、長径1.32m、短径1.12mの楕円形を呈する。壁高は、0.4m~0.45mで比較的深い。床面より、70°~80°の角度で立ちあがる。床は、平坦である。出土遺物は、縄文式土器細片が出土している。14は、第Ⅲ群。15は、弥生式土器。

第11号土壙（第31図）

遺跡の中央より北側、C 6区に位置する。擾乱溝が入る。主軸方向N-41°-Eを示す。平面形状は、長径1.07m、短径0.8mの楕円形を呈する。壁高は、0.2m前後で、床面より75°前後の角度で立ちあがっている。床は、平坦である。

第12号土壙（第31図）

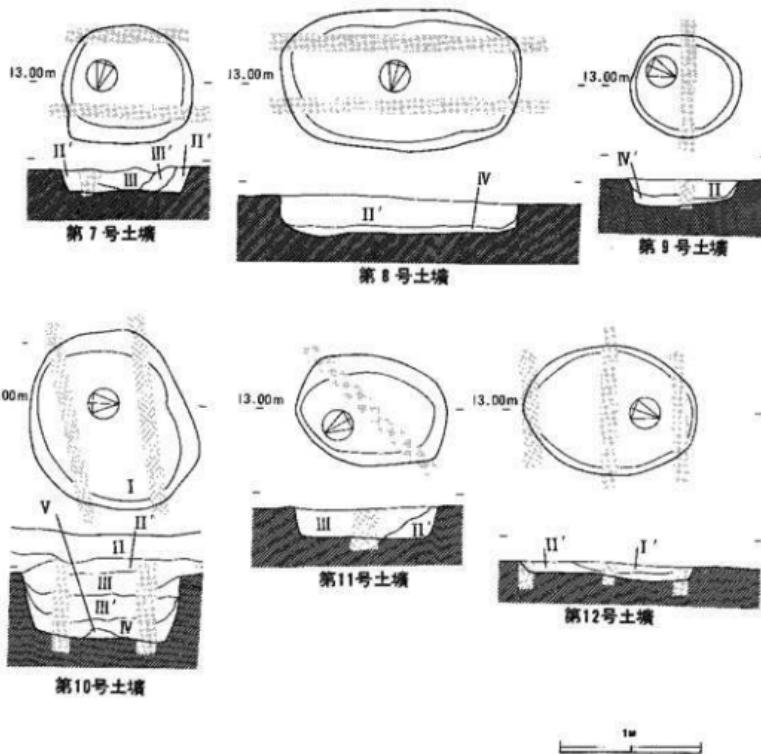
遺跡の中央北側、C 6区に位置する。擾乱溝が入る。主軸方向N-11°-Wを示す。平面形状は、長径1.25m、短径0.92mの楕円形を呈する。壁高は、0.07m~0.1mの浅いものである。壁は、床面より60°~70°の角度で立ちあがる。床は、平坦である。

第13号土壙（第32図、第35図）

遺跡の中央より北側、C 6区に位置する。擾乱溝が入る。主軸方向N-22°-Wを示す。平面形状は、長径1.66m、短径1.2mの楕円形を呈する。壁は、床面から引き続いてゆるやかに立ちあがる。床は、中央部が若干くぼんでいる。出土遺物は、縄文式土器細片が出土している。第Ⅳ群である。17は、第4類、貝殻波状文を配する。

第14号土壙（第32図）

遺跡の中央北側、C 6区に位置する。擾乱溝が入る。主軸方向N-2°-Eを示す。平面形状は、長径1.58m、短径1.35mの楕円形を呈し、北側に張り出しがある。壁は、床面から引き続



土層解説

第7号土壤	第13号土壤
I 深色	I 稲作土
II' 黑褐色土	II 稲作土
III' 黑色土であるが、II層よりは、少しおかげで色む。II層よりはやはりなし。	II' 第二次耕作土
IV 黑褐色土	III 黑色土
V 黑色土	IV 黑色土。II層と変化ないが、II層よりやはりなし。
第8号土壤	V 黑褐色土
II' 黑褐色土	VI 黑褐色土
III 黑褐色土	VI' 黑褐色土
第9号土壤	第11号土壤
II 第二混成	II' 黑褐色土
II' 増殖土	III 黑色土
IV 黑褐色土	第12号土壤
V 黑褐色土	II' 黑褐色土

第30図 土 壤 実 測 図 (2)

ゆるやかに立ちあがる。壁高は、0.12m～0.22mで、深度は、0.4mである。床は、中央部にかけてくぼんでいる。

第15号土壙（第32図）

遺跡の中央部、D 5 区に位置する。擾乱溝が入る。主軸方向N-73°-Wを示す。平面形状は、長径2.14m、短径1.81mの楕円形を呈する。壁高は、0.3m～0.4mで、床面より60°～80°の角度で立ちあがる。床は、南側に若干傾斜している。

第16号土壙（第32図）

遺跡の中央部、D 6 区に位置する。主軸方向N-0°-Wを示す。平面形状は、長径1.08m、短径1m前後の円形を呈する。壁高は、0.25m～0.3mで、壁は、床面から引き続いてなだらかに立ちあがる。床は、平坦である。

第17号土壙（第33図、第35図）

遺跡の中央部、D 5 区、第22号土壙、第19号土壙、第18号土壙の間に位置する。主軸方向N-0°-Wを示す。径2.5m前後の円形を呈する。北西部分を除いて、壁下に壁下溝が入る。壁高は、1m前後を示し深い。壁は、床から直角に近い角度で立ち上がっている。床は、平坦である。出土遺物は、弦生式土器が出土している。20は、口唇部に縄文原体による押圧、表面に（隆起線+押圧）が2条配される。21は、胴部。22は、底部。布目痕が配される。

第18号土壙（第34図、第35図）

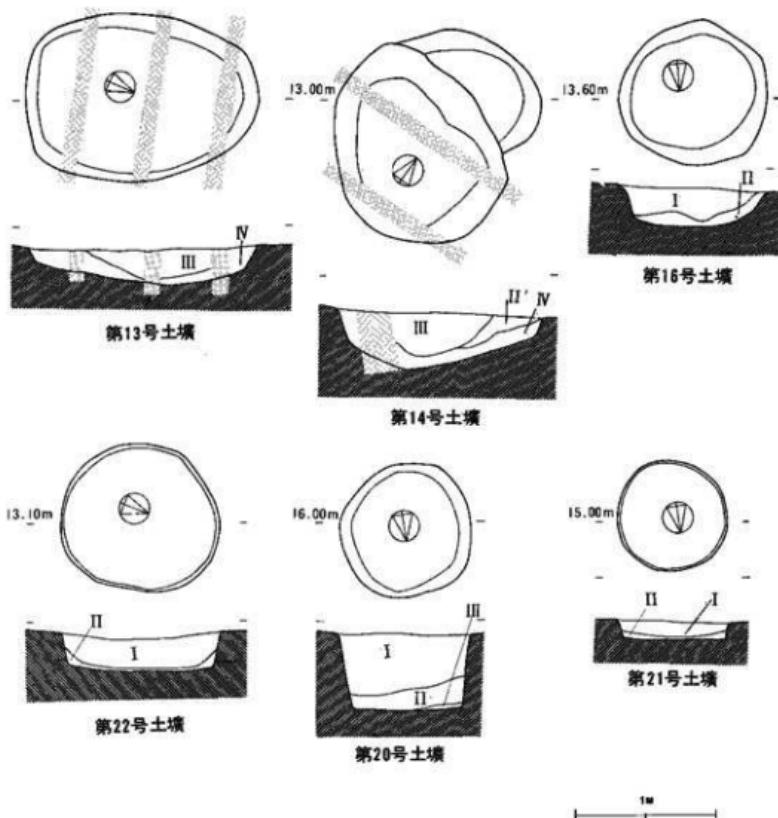
遺跡の中央部、E 5 区、第17号土壙の南側に位置する。主軸方向N-0°-Wを示す。平面形状は、長径2.6m、短径2.52mの円形を示す。壁高は、0.83m前後、深度は、1.35mである。壁は、床面から引き続いて直角に近い角度で立ちあがる。床は、中央部が深い。出土遺物は、縄文式土器細片が出土。第III群、及び第IV群が出土している。いずれも縄文が配される。

第19号土壙（第34図、第35図）

遺跡の中央、D 6 区、第22号土壙、第17号土壙の東側に位置する。主軸方向N-0°-Wを示す。平面形状は、径2.3m前後の円形を呈する。壁面下には、浅い壁下溝が全周する。壁高は、0.85m前後で、壁は、床面から直角に近い角度で立ちあがる。床は、平坦である。

第20号土壙（第32図、第35図）

遺跡の南端、F 6 区に位置する。主軸方向N-0°-Wを示す。平面形状は、長径0.98m、短径0.94mの円形を呈する。壁高は、0.5m～0.55mで、床面より、80°～85°の角度で立ちあがる。床は、平坦である。遺物は、縄文式土器、須恵器が出土している。縄文式土器は、第IV群4類半截竹管による平行沈線文を持つ。須恵器は、杯が出土。口径12cmで、口縁部に受部が付くもの、体部は、内外面とも回転ナデが行われる。



第13号土壤

I 黒色土
II 黒褐色土
III 黒褐色土, III層と変化ないが, II層より神りなし
IV 茶褐色土

第20号土壤
I 黒色土
II 増褐色土(泥炭色土, ロームブロックを含む)
III 茶褐色土(ロームブロック混入)

第14号土壤

I 黒色土
II 黒褐色土を含む黒褐色土
III 茶褐色土

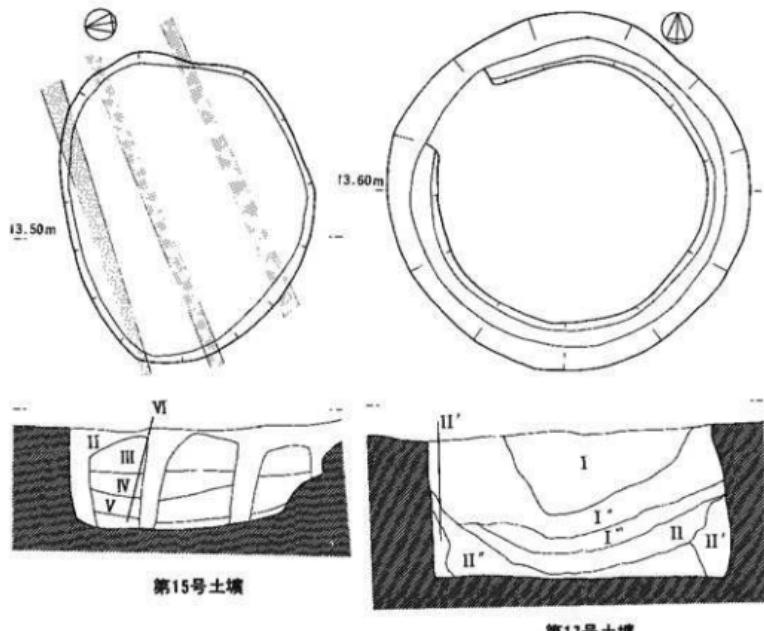
第21号土壤
I 黒色土
II 増褐色土
III 増褐色土(泥炭層)

第16号土壤

I 黒色土
II 黒褐色土を含む黒褐色土
III 茶褐色土

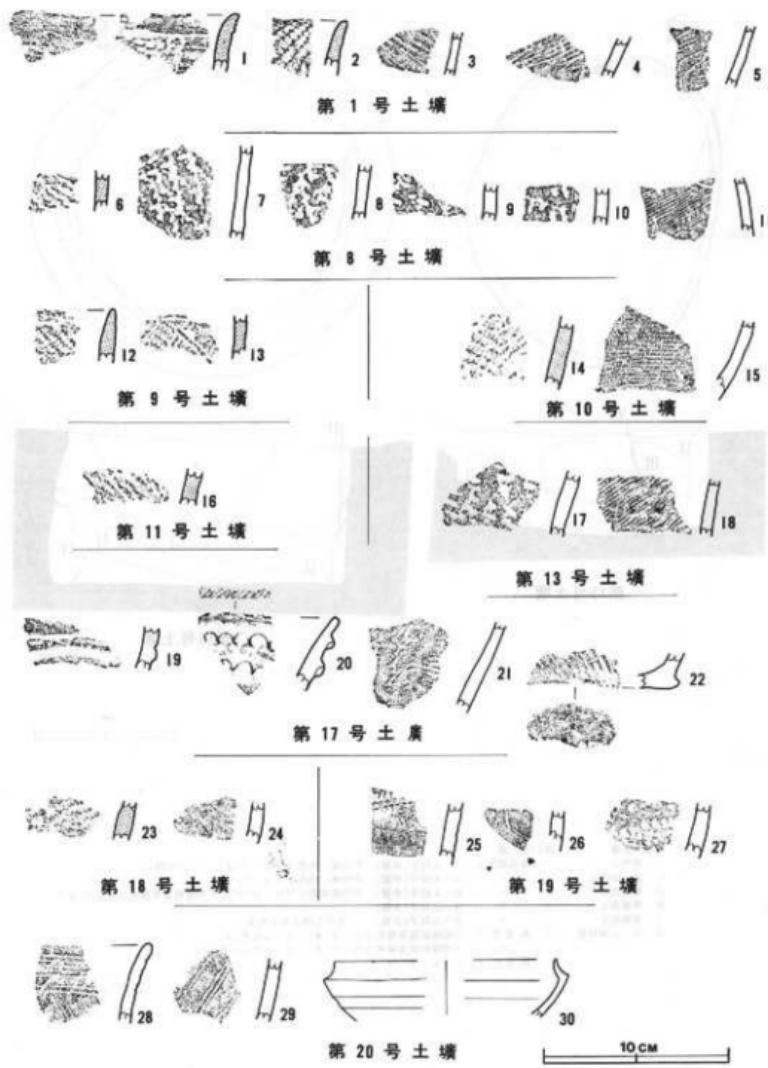
第22号土壤
I 黒色土
II 増褐色土
III 増褐色土(泥炭層)

第32図 土 壤 実 測 図 (3)

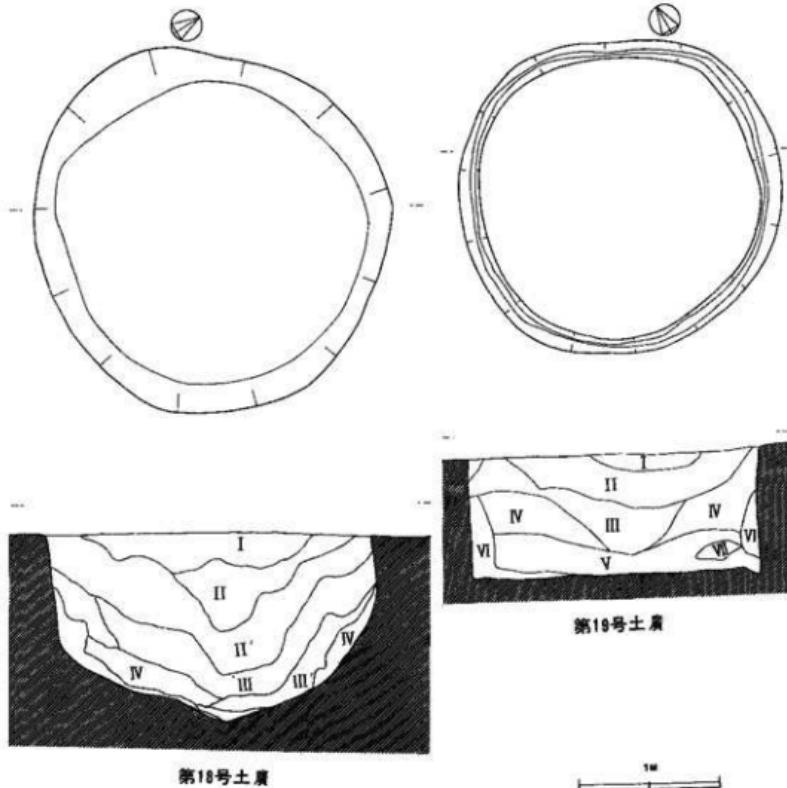


第15号土壤		第17号土壤	
I	耕作土	I	暗茶褐色土
II	第1耕作土	II	ローム粒子(少)
III	耕作熟土	II'	不明確、褐色小ブロック(少); I'より暗い
IV	耕作熟土	II''	ローム粒子(中量)
V	黑褐色土	II'''	不明確褐色小ブロック(中)
VI	黑褐色土	III	ローム粒子(中量)
	ローム層	III'	不明確褐色黃褐色ブロック(少)
		III''	不明確褐色黃褐色ブロック(少)
		IV	ローム粒子(少量)
		IV'	Iと同じ明るさである
		IV''	不明確軟質黃褐色ブロック(多), ローム粒子(少)
		IV'''	不明確軟質黃褐色ブロック(少), ロームブロック(少)
		IV''''	黒褐色土(ロームブロック)

第33図 土 壤 実 測 図 (4)



第34図 土 壤 出 土 遺 物



第18号土壤		第19号土壤	
I	暗茶褐色土：硬質褐色小ブロック(中)；ローム粒子(少)	I	黒褐色土層
II	暗褐色土：ローム粒子(少)；硬質褐色ブロック(少)	II	ローム粒子混入黒褐色土層
II'	" " : ローム粒子(少)；硬質褐色ブロック(少)	III	ローム粒子混入黒褐色土層
III	暗茶褐色土：軟質褐色ブロック(少)；ローム粒子(中)	IV	暗褐色土層
IV	茶褐色土：不明確軟質褐色ブロック(多)；ローム粒子(多)	V	ローム小ブロック混入褐色土層
IV'	暗茶褐色土：ローム粒子(少)	VI	ロームブロック
V	暗茶褐色土：木炭を含む	VII	黒褐色土混入黒褐色土層
V'	茶褐色土		

第35図 土 壤 実 測 図 (5)

第21号土壙（第32図）

遺跡の南側、E 6 区に位置する。主軸方向N - 0° - Wを示す。平面形状は、長径0.8m、短径0.78mの円形を呈する。壁高は、1.1m～1.2mで、壁は、床面より70°～80°の角度で立ちあがる。床は、平坦である。

第22号土壙（第32図）

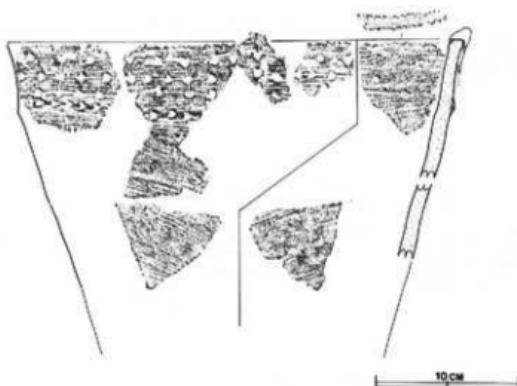
遺跡の中央部、D 5 |X、第17号土壙の北に位置する。本土壙は、第5号住居址を切っている。主軸方向N - 15° - Eを示す。平面形状は、長径1.15m、短径1.1mの円形状を呈する。壁は、0.22m～0.25mで、床面から75°前後の角度で立ちあがる。床は、平坦である。

第4節 グリット出土遺物

縄文式土器

第I群土器（第38図21～24）

縄文時代早期、燃系文系土器群に属するもの。いずれも胴部片である。縄文は、いずれもLの単軸格子体である。



第36図 グリット出土遺物(1)

第II群土器（第36図、第37図、第38図1～20）

縄文時代早期、条痕文系土器に属するもの。いずれも、胎土に纖維を含む。

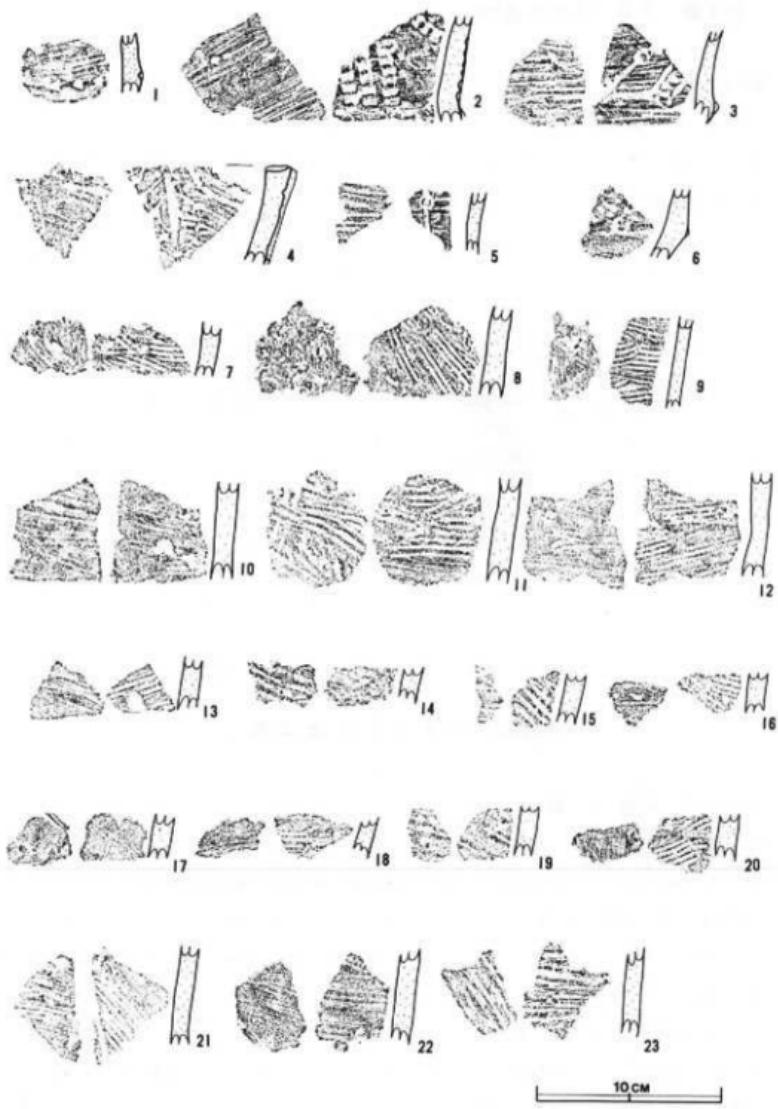
第1類（第37図1～6、第38図19）口縁部に沈線文、刺突等の文様帯を配するもの。1は、横位の微隆起線上に刺突が配される。3、5は沈線、隆起線上に円形竹管文が配される。3、6は、沈線間に刺突が配される。4は、口縁部、隆起線を中心に沈線文が配される。第2図19は、口縁部で刺突が配される。いずれも、裏面に条痕が配されるが、1、6は、調整痕だけである。第36図は、深鉢形。（隆起線+刺突）で区画し、縦位の刺突を沈線で連結している。

第2類（第37図7～23、第38図1～18、20）胴部片である。いずれも、表裏に条痕が配される。

第III群土器（第39図、第40図、第41図）

縄文時代前期、羽状縄文系の土器群に属するもの。いずれも、胎土に纖維を含む。

第1類（第39図1）正反の合の縄文原体を持つもの。1は、口縁部、半截竹管文が斜行する。



第37図 グリット出土遺物(2)



10 CM

第38図 グリット出土遺物(3)

施文順は、縄文→沈線である。

第2類（第39図5～33、第40図、第41図1～8）縄文が配されるもの。

a（第39図5、16～18）縄文原体の末端部を利用したループ文を配するもの。1は、口縁部片。16～18は、脣部片で器厚が比較的厚い。

b（第39図6～15、19～33、第40図）縄文を配するもの。6～15までは、口縁部でいずれもわずかに外反する。8、13、14は、羽状縄文が観察される。11は、口唇部に、縄文原体による押圧がある。14は、補修孔が認められる。縄文は、0段多条のものか。他は、脣部片。第3図19～30は、羽状縄文が認められる。

c（第41図1、4～7）軸に、やわらかな繊維状のもの、もしくは、縄文原体を使用した、不整然糸文を持つもの。4、5は、Rを2本同時に巻きつけている。

第3類（第39図2～4、第41図15～21）沈線文を有するもの。15～17は、あまり明確でないが、縄文→沈線の施文順をもつ。18、10は、半截竹管による沈線文を配する。

第4類（第41図22～27）底部片である。22は、衣表内面に調整痕が配される。

第IV群土器（第42図～第44図）

縄文時代前期、浮島系土器群に属するもの。

第1類（第42図1～18）粗雑な捺糸文を地文とするもの。1、2、8、9、12、14、17、18は、半截竹管文を配する。3、15は、半截竹管によると思われる連続爪形文が配される。

第2類（第42図19～21）連続爪形文が配される。19は、半截竹管文が加えられる。

第3類（第42図23～25、28～34）半截竹管による平行沈線文を配するもの。24は、縦位に、28、29は、横位に配される。29は、（隆起線+刺突）が加えられている。25、30～34は、幅広い半截竹管による平行沈線文を配する。2の類に属するのか明らかでない。あるいは、他の類か。

第4類（第43図1～10、13、21、23、29、34、35）口縁部は、貝殻腹縁による波状文を配するもの。1～11までは、口縁部片。口縁部は、直立かわずかに外反するものと思われる。口唇部が若干尖がっており、外側にカットされる。外側にカットされた部分に縦位の沈線文が連続的に配される。16は、口唇部が内側にカットされ、内面に縦位の沈線文が入る。

第5類（第43図12、22、30～33）所謂三角文が配されるもの。12は、口縁部。外側にカットされた口唇部に縦位の沈線が配される。

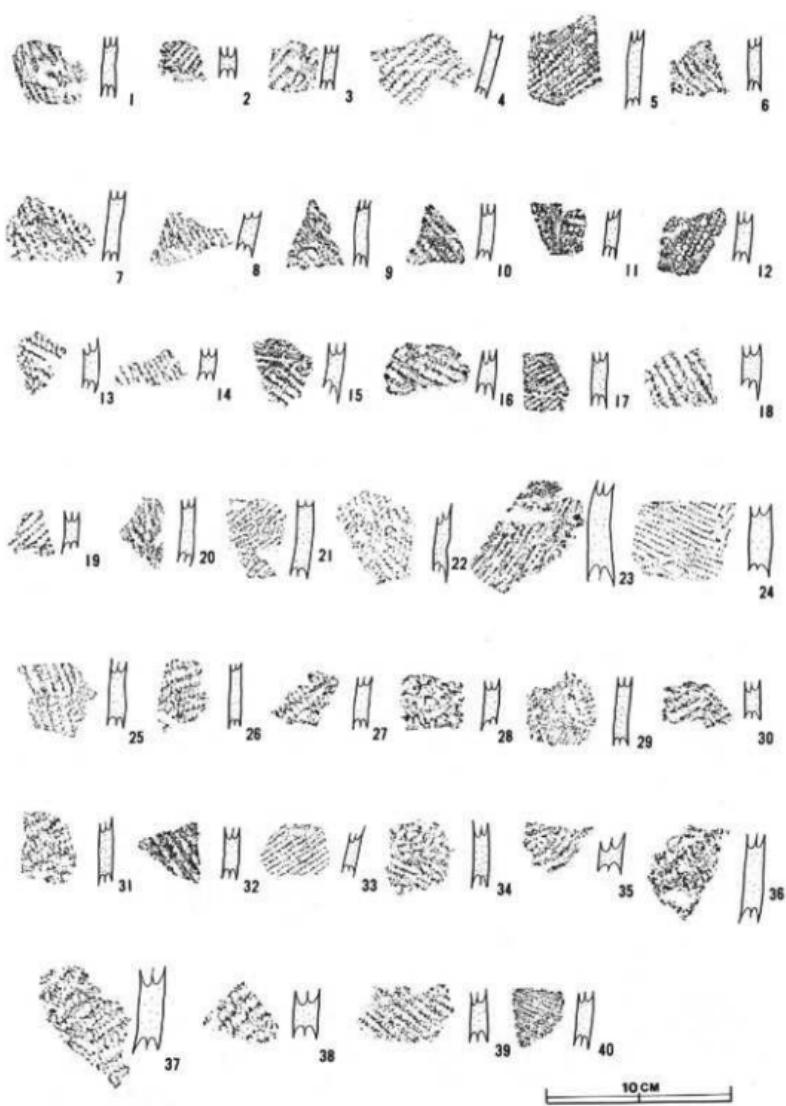
第6類（第42図35～40、第44図1～20）縄文を配するもの。

a（第42図35～40、第44図1～10）縄文を配するもの。第42図36～40は、口縁部。37、38は、フラットな口唇部、他は、若干尖がった口唇部を持つ。他は、脣部片。8、9は、結束の羽状縄文を配する。

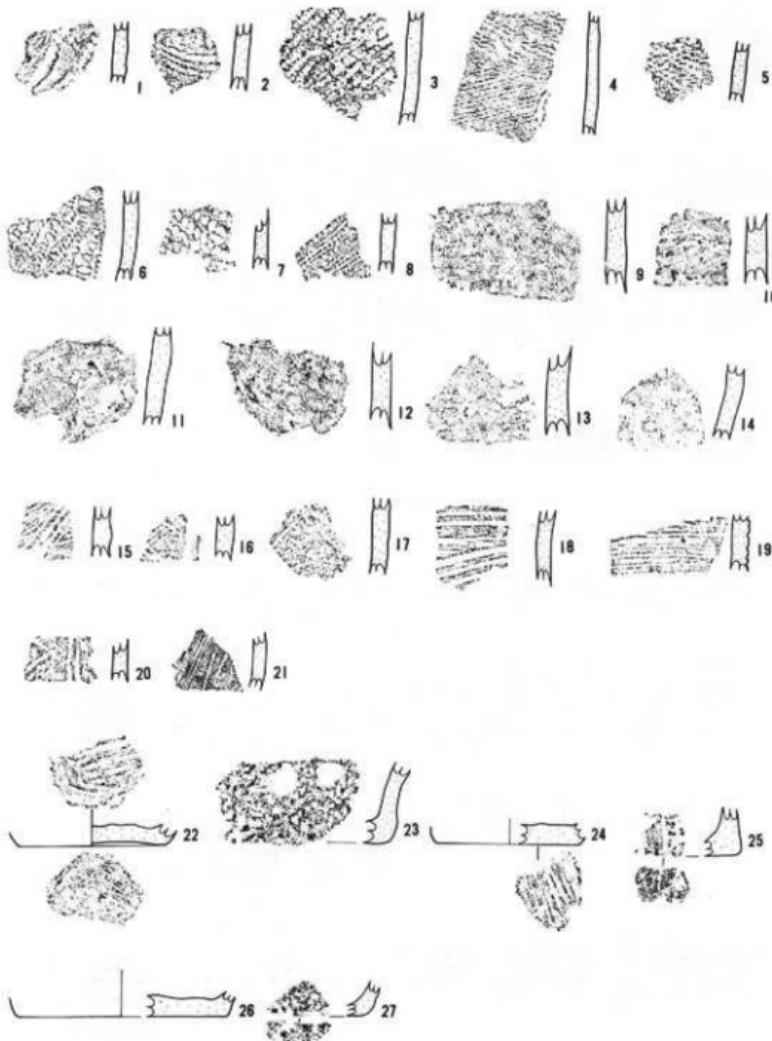
b（第44図11～20）「S」字状の結節回転文を配するもの。横位に配される。第V群と比して、



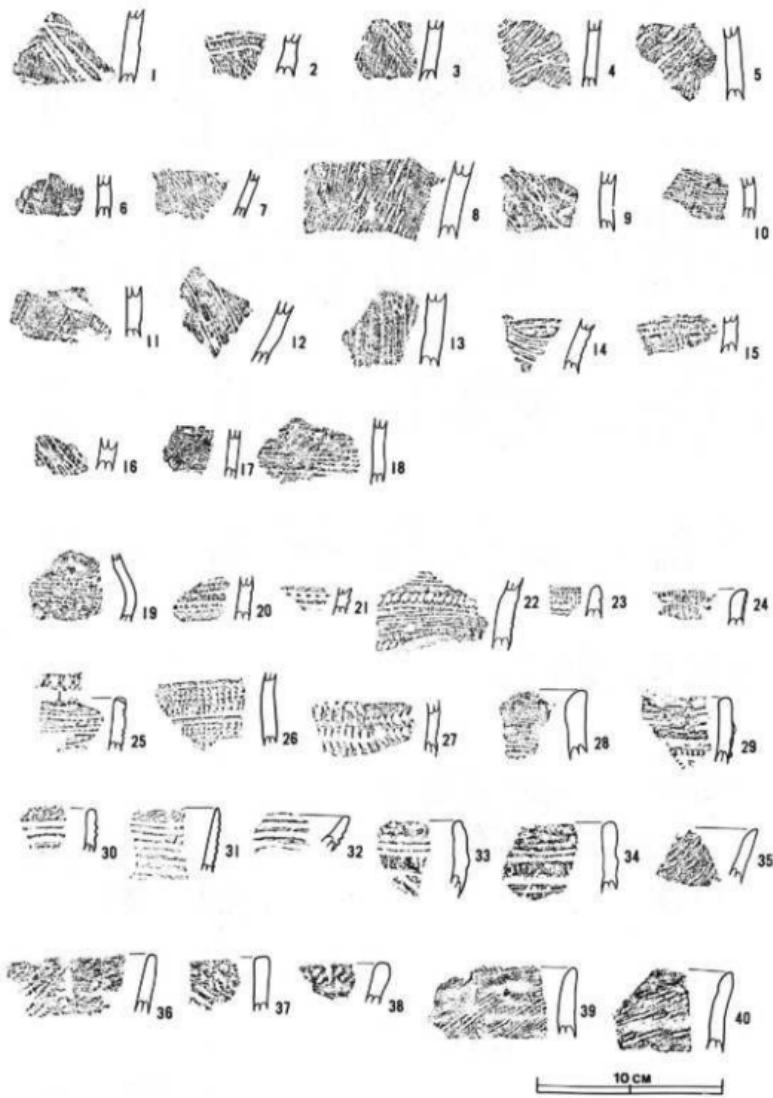
第39図 グリット出土遺物(4)



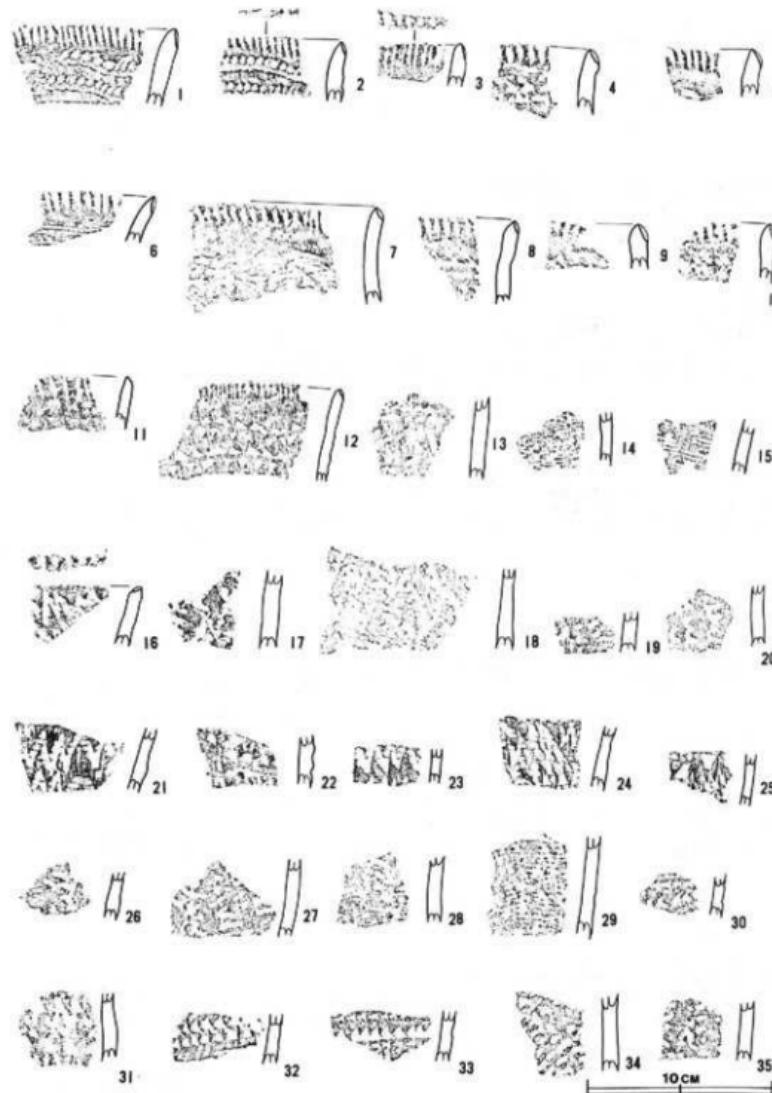
第40図 グリット出土遺物(5)



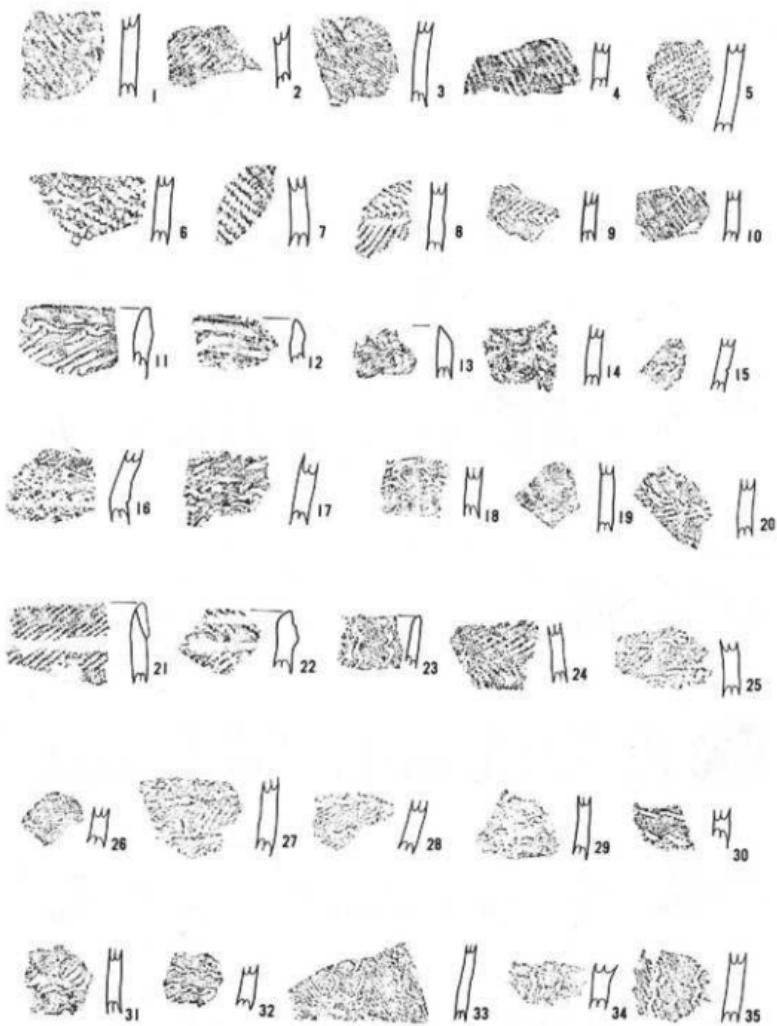
第41図 グリット出土遺物(6)



第42図 グリット出土遺物(7)



第43図 グリット出土遺物(8)



第44図 グリット出土遺物(9)

「S」字状の結節が確である点と、「S」字状の結節文の間が無文化されない点である。11～13までは、口縁部である。口唇部は、先端が尖がり外側にカットされる。

第V群土器（第45図1～13）

繩文時代前期末～中期初頭と思われるもの。三角形状を示す細い連続刺突文を配する。同時に連続刺突文を区画として、貝殻腹縁文を充填するもの。1は、口縁部。2列の刺突列で区画し、貝殻腹縁文を充填する。文様の分析点に、円形の刺突が配される。2、4、5、7、10、11、13は、刺部片。いずれも刺突列間に貝殻腹縁文が充填される。3、6、8、9、12、13は、2列、又は、1列の刺突列を配する。8は、口縁部、口唇部にも刺突が配される。9は、ゆるく「く」字状に屈曲するものと思われる。

第VI群土器（第44図21～35）

中期初頭に属するものと思われる。折り返し口縁、「S」字状の結節回転文を配するもの。1は、折り返し口縁。22は、幅広い降起帯上に繩文が配される。23、33～35は、縦回転の「S」字状結節回転文を配する。結節間は、若干の無文部がある。24～32は、横回転の結節回転文を配する。

第VII群土器（第45図15～19、22～24）

中期初頭に属するもの。三角形状の刺突。2本沈線間への短沈線充填等の文様を配する。15は、口唇部に（隆起線+連続刺突）が配される。17、18は、三角形状の刺突が沈線に沿って配される。22は、微隆起線に沿って刺突が配される。16、22、24は、2本沈線間に短沈線を充填する。16は、円形の盲孔に沿って、配される。

第VIII群土器（第45図20、21、25～33、第46図1～7、11）

中期中葉、阿重台式に属するものと思われる。

第I a類（第45図20、21、25、26、28～30）一列の結節沈線文を配するもの。20は、波状口縁で頂部が突出する。28～30は、口唇部にも結節沈線文が配される。

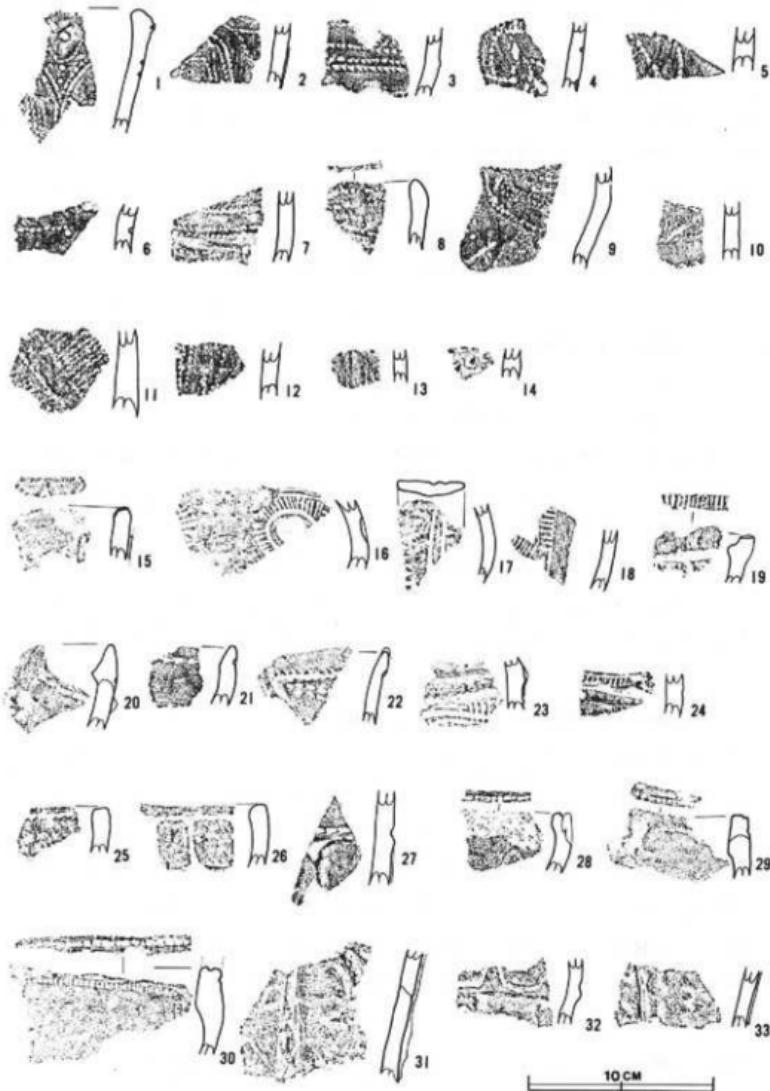
第I b類（第45図27、31～33）断面三角形状の微隆起線と一列の結節沈線文を配する。27、32は、微隆起線を配するが、結節沈線文は、微隆起線に沿わずに、独立して存在する。

第II a類（第46図1～4）沈線文を配するもので、1本引きの沈線で文様を配するもの。1は、微隆起線に沿った、1列の結節沈線文を配し、微隆起線下に波状の沈線文が配される。3、4は、波状の沈線文が配される。

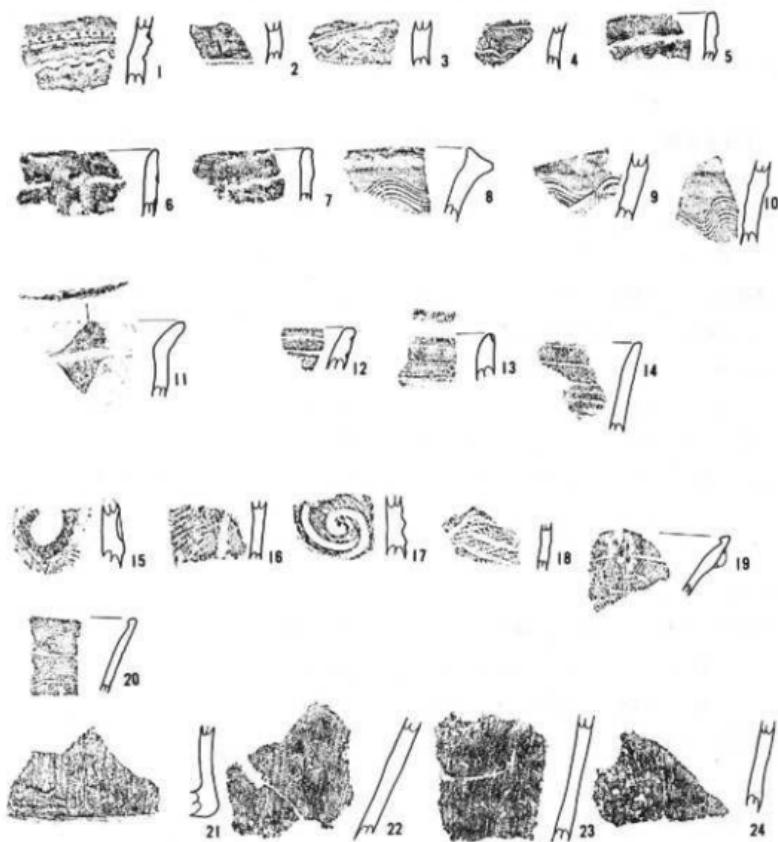
第III類（第46図5～7、11）無文のもの。5～7は、同一個体。微隆起帶状を示す。11は、口縁部断面が「く」字状に外反する。

第IX群土器（第46図12～14）

口縁部に、側面体压痕文を配するもの。繩文原体は、比較的細いものである。



第45図 グリット出土遺物(10)



10 CM

第46図 グリット出土遺物(II)

第X群土器（第46図15～18、21～24）

後期初頭に属するもの。15、16は、広義の「磨消繩文」系、17、18は、繩文→沈線の掘之内式土器である。21～24は、同一個体、底部付近で、研磨されている。一応この類としておいた。

第XI群土器（第46図19～20）

後期中葉、加曾利B式と思われるもの。19は、波状口縁で、小突起が付される。

弥生式土器

第II類土器（第47図1～4、14）

沈線文系の土器群を本類とした。1～4まで、いずれも胸部上半と思われる。1本描き沈線によって渦文を描くものと思われる。14は、頭部片。縱方向に沈線が配される。

第III類土器（第47図5～13、15～25）

a（第47図5～13）横描波状文をもつもの。5、6は、口縁部。いずれも、口唇部に繩文原体による押圧がある。5は、口縁表面に上向きの連弧文が配される。6は、折り返し口縁。横描文による格子状の文様が配される。10、12は、横描波状文を配する。9は、鋸歯状の文様。11は、上向きの連弧文を配する。7、8、13は、直線的な文様を配する。

b（第47図15～25）頭部文様は、不明である。口縁部は、1段から2段の複合口縁を有し、段部に刺突が配されるもの。15、16は、口唇部に繩文原体による押圧がある。17～19は、口唇部にスリットを有し、複合部を2段以上配するものと思われる。段部に刺突がある。22は、複合口縁部に繩文を配している。

第IV類（第48図、第49図、第50図1～11）繩文を配する胸部片である。

a（第50図10、11）口縁部。口縁部上端から繩文が配される。

b（第48図、第49図、第50図1～9）繩文を有する胸部片。

第VI類（第50図12～17）底部片である。12、13は、木葉痕を有する。

石器（第51～第53図）

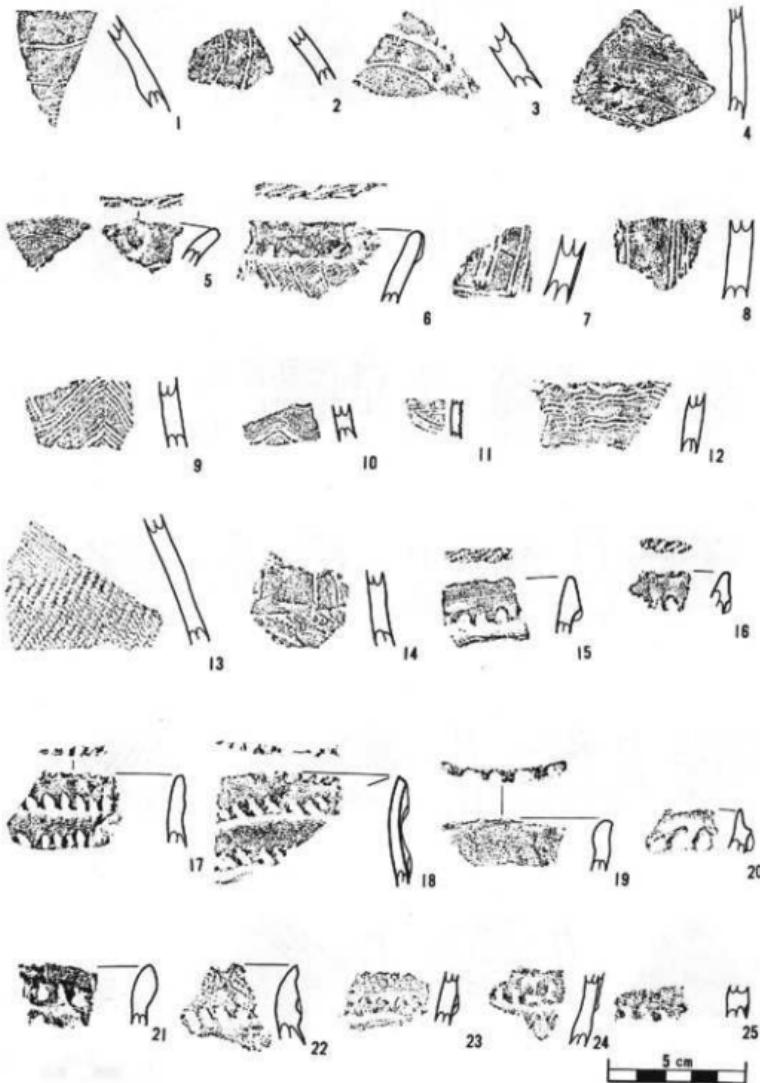
本遺跡から出土した石器は、少量であり、出土量は、表のとおりである。

石鏽（第53図1～3）

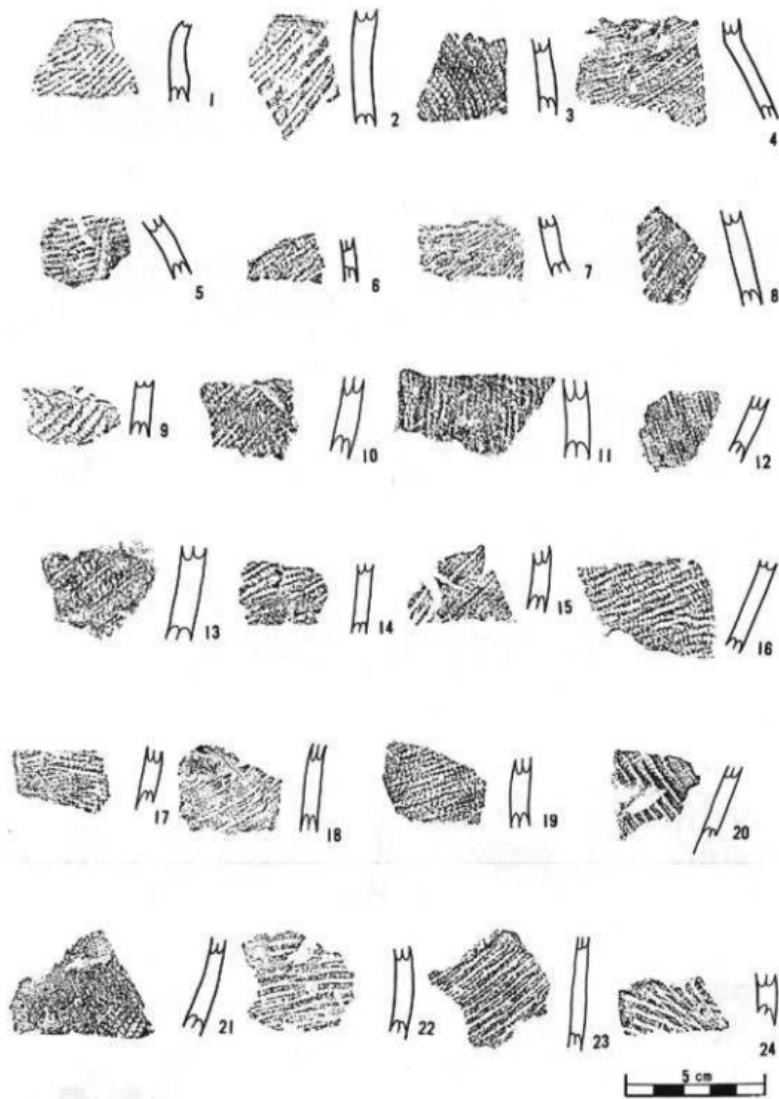
1は、三角形状を呈す。石質の関係か剥離が難である。2は、基部に抉りがある。表裏とも入念な押圧剥離が行なわれる。3は、二等辺三角形状を呈す。表裏とも入念な押圧剥離が行なわれる。

スクレイバー（第53図4）

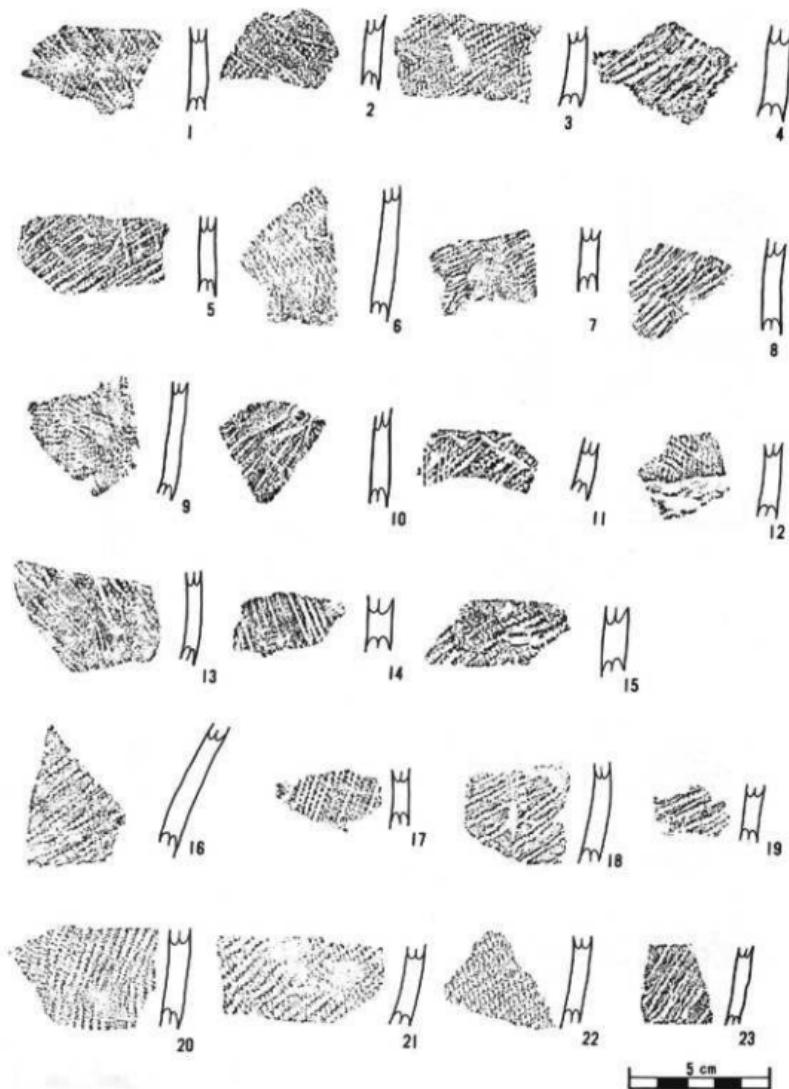
縦長剥片を利用し、打撃面と逆方向の両側にスクレイバーエッジを形成する。一方は、ノッチ、



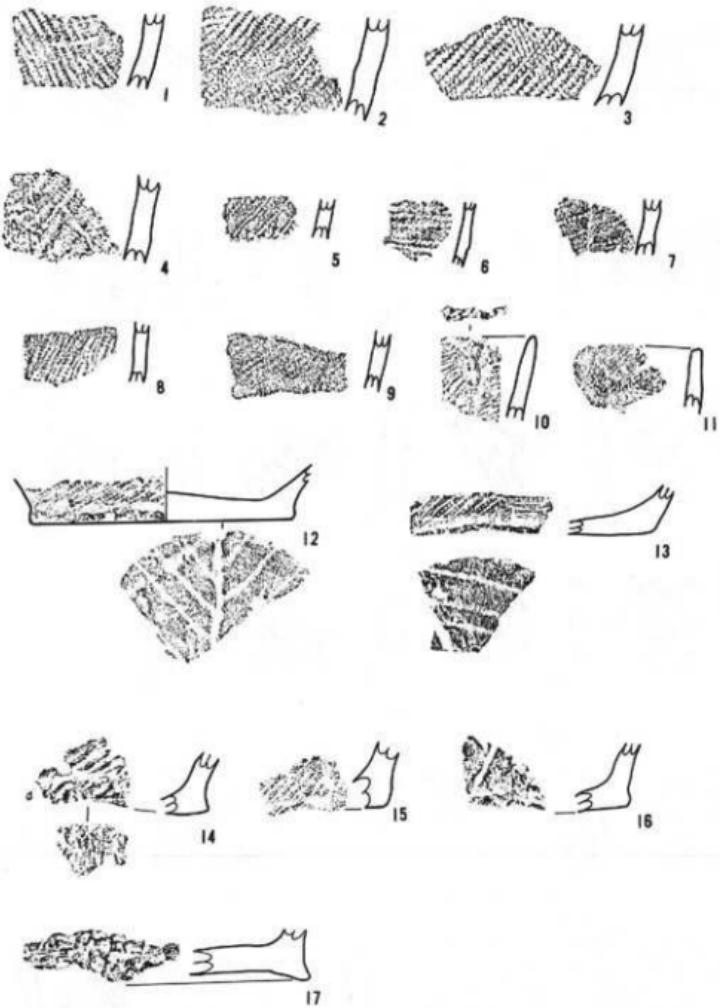
第47図 グリット出土遺物(1)



第48図 グリット出土遺物 (1)



第49図 グリット出土遺物(14)



第50図 グリット出土遺物 (15)

状を呈する。又、加工のない両サイドにも使用痕が認められる。

礫器（第51図、第52図）

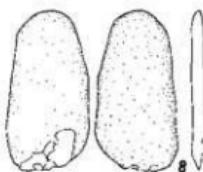
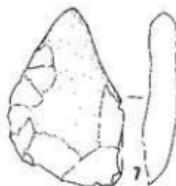
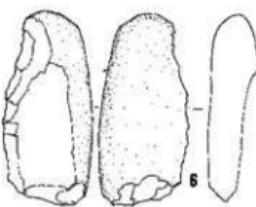
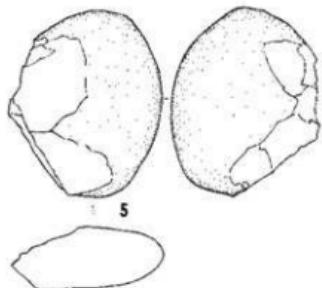
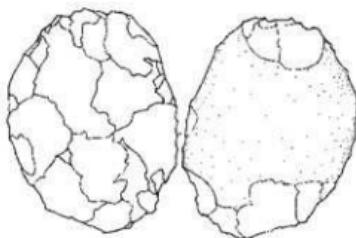
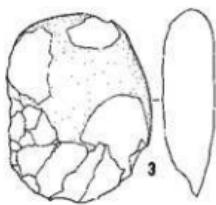
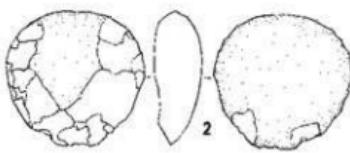
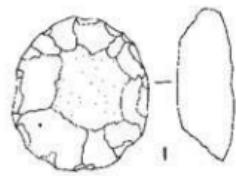
A（第51図1～5）円形の小型礫を素材とするもの。1～3は、中央部に若干の自然面を残し、周囲の大部分を加工して、刃部とするもの。4は、剥片を利用していいる。裏面上下端部にも加工が加わっている。5は、両面から刃部が形成される。

B（第51図6～8）縦長の小型礫を素材とするもの。6は、側面片側を加工剥離し、刃部は、両面から形成される。7は、周囲の大部分を加工する。片面剥離。8は、端部にのみ剥離が加えられている。

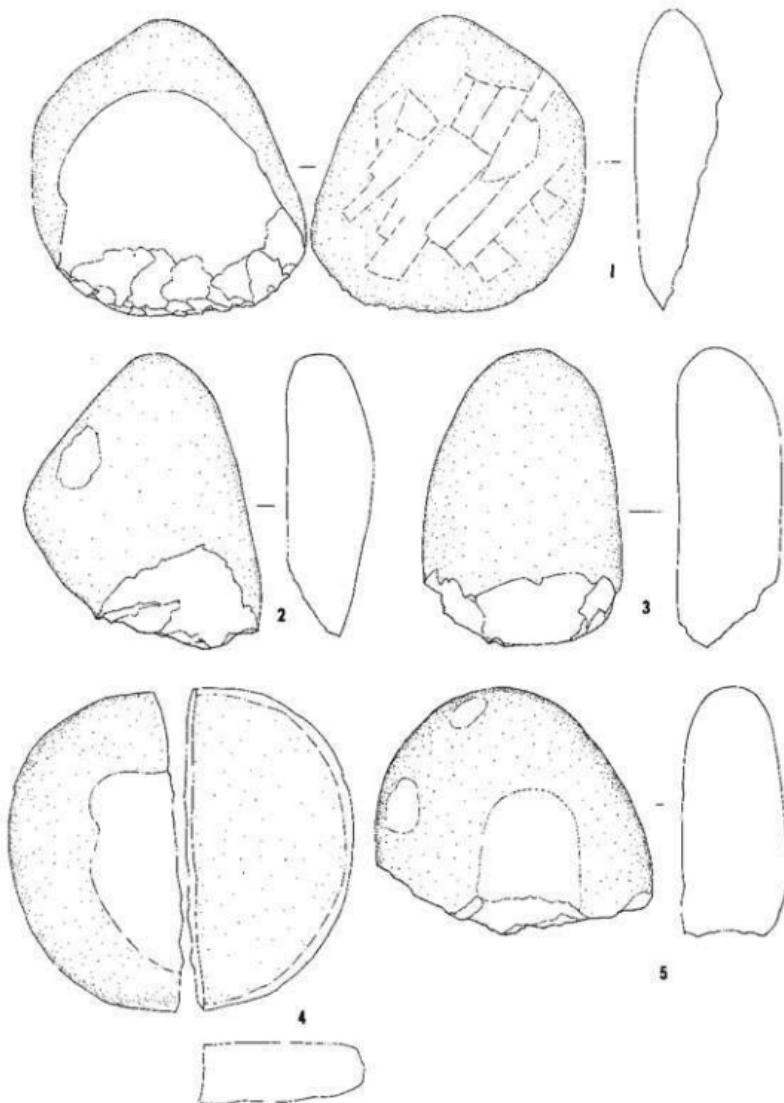
C（第52図1～3）大型の礫の端部に刃部を形成するもの。1は、大きな剥離を入れ、刃部を片側からの比較的入念な剥離加工によって形成している。裏面に引っかき傷状の擦痕が認められる。2は、片面から剥離によって刃部を形成する。3は、縦長の礫を素材として、端部に片面からの剥離加工を行って刃部を形成するもの。

磨石（第52図4、5）1は、半欠する。周囲に敲打痕が認められ、中央部に使用痕がある。5は、半欠する。中央部に、わずかに使用痕が認められる。

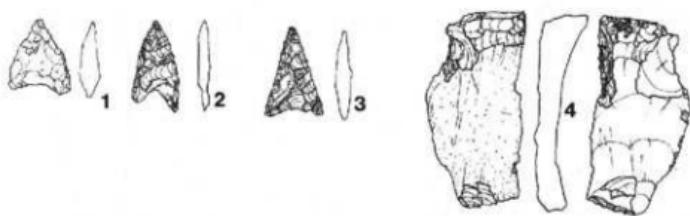
器種	個数	図版番号	出土位置	石質	器種	図版番号	出土位置	石質	器種
石鎌	3	第53図1	6号住跡	安山岩	石鎌	第51図6	M	砂岩	礫器
スクレ イバー	4	2	C6c1II	チャート	石鎌	7	B6c1I	砂岩	礫器
礫器	14	3	E6d2II	頁岩	石鎌	8	第1号住居跡Y	緑泥片岩	礫器
石鎌	1	4	C6c1II	チャート	スクレ イバー	第52図1	D5e3I	砂岩	礫器
石皿	2	第51図1	土壤8	砂岩	礫器	2	C6d1I	砂岩	礫器
		2	C6d3II	花崗片麻岩	礫器	3	D6n1I	角閃安山岩	礫器
		3	E6a1I	砂岩	礫器	4	C6c3II	砂岩	敲石
		4	C6f2II	花崗片麻岩	礫器	5	D5e3I	砂岩	敲石
		5	C6f1II	チャート	礫器				



第51図 グリット出土遺物(6)(S $\frac{1}{2}$)



第52図 グリット出土遺物(II) (5ヶ)



第53図 グリット出土遺物 (18) (5%)

第5節 まとめ

縄文時代

当遺跡から、縄文期に属する遺構は発見されなかったが、縄文式土器、及び縄文時代に属すると思われる石器が少量出土している。前章、及び表で遺物の内容は触れているので、ここでは、編年の位置について述べておきたい。

第II群土器　早期後半条痕文系の土器群である。表裏に条痕を配し、胎土に纖維を含む。本遺跡で出土した口縁部文様は、沈線文を配し円形竹管等々の刺突文を配するものである。「茅山式」^{注1}土器と推定される。当時期の資料は、潮来町狹間貝塚から良好な資料が出土している。^{注2} II群土器は、狹間貝塚出土の土器に後続するものと思われる。この群に、礎器がともなうものと思われる。この礎器は、安塚遺跡でも出土している。

第III群土器　前期羽状縄文系の土器群である。全体的には、「黒浜式」土器に属するものと思われる。この内には、組み紐（第18図4）、正反の合（第39図1）等々も含んでいるが、ループ文、比較的整然とした縄文を配するもの、口縁部に沈線文を配するもの等が主体である。非常に雑な無筋の縄文を配するものが出土していない点が特徴である。又、第2種Cは、所謂、不整捺糸文を持つグループである。あるいは、これらが、第IV群1類の系譜となるものであろうか。

第IV群土器　前期浮島系の土器群である。第1類～第3類までは、貝殻文を含まないグループである。特に、第1類は、粗雑な捺糸文を地文として、沈線文を配するものである。これらは、広義の「浮島1式土器」としておきたい。第4類は、貝殻文を主体とするもので、浮島2式土器と思われる。第5類は、三角文を持つ土器群である。浮島3式と思われる。第6類bは、「S」字状の結節文を配する。これらは、結節が雑である点、結節間が無文化されない点と、口縁部断面形状が第3類aに共通する点で、この類とし、一応第VI群土器とは区別した。明らかに、第VII群と共通する結節文を有する。

第V群土器　前期末～中期初頭にかけてのものと思われるが明確ではない。三角形状の細い連續刺突文を区画として、貝殻版縁文（エッジ側）を充填するもの。本群は、当地方で筆者の知る限りにおいて類例を知らない。充填貝殻文という点で「興津式」に系譜を辿り得るが、細部は異なっている。くわしくは、類例の増加を待ちたい。

第VI群土器　中期初頭に属すると思われるもの。折り返し口縁、「S」字状の結節文を持ち結節間は無施文部となる。本群は、「下小野式」と思われる。

第VII群土器　中期中葉、「阿玉台式」土器と思われる。本群は、「阿玉台式」土器中でも古い部分に属するものと思われる。隆起線文に一列の結節沈線文、一本描き沈線による波状文が配されるものである。特徴的な点は、口唇部に一列の刺突列を配する点である。これらは、西村氏編

年によれば、1 b 式土器に相当するものと思われる。

弥生時代

当遺跡から弥生期に推定される遺構は、住居址が1軒検出され、住居址内、及びグリット内よりすべて破片であるが、弥生式土器が出土している。ここでは、遺構が少ないので、土器を中心としてまとめておきたい。

第II類土器 沈線文系の土器群である。1本描き沈線等によって溝文を配するものと思われる。本類は、「足洗式」に比定される。徳宿遺跡、安塚遺跡よりも、少量「足洗式」が出土している。^{注7}

第III類土器 條描文系の土器群であるが、所謂、II a 文様帶の縦区画は、2例（第7図2・12）^{注8}を除いて存在しない。口縁部文様帶（1文様帶）は、複合口縁を有する。端部には、刺突及び繩文原体末端による刺突が加えられる。複合口縁部には、無文のものと縄文を配するものの2例が認められた。胸部文様帶には、縄文が配されるわけであるが、2種類の縄文原体を使用した羽状縄文は検出されなかった。

以上、本遺跡出土の弥生式土器は、2時期に分離されるべきものと思われる。第II類は、「足洗式」土器である。徳宿遺跡の第II類、安塚遺跡の第II類、ミシマ遺跡第2類に共通する。第III類は、上述した特徴により、明らかに「十上台式」土器併行期（本遺跡群では、「安塚遺跡」）には属さず、それ以前に位置する。しかも、胸部文様帶に羽状縄文を含まない。従って、ここでは、複合口縁を有し、條描文を持つが、胸部に羽状縄文を持たない時期としておきたい。

古墳時代

古墳時代に該当する遺構は、第1B号住居址から第5号住居址までの5軒の住居址が検出され、各住居址からは、比較的多数の土師器が出土している。ここでは、遺構、遺物から、住居址の時期についてまとめておきたい。

遺構

5軒の住居址が検出、調査された。この内、最も特徴となる点は、カマドと炉址の有無である。炉址を有する住居址は、第2号住居址、第5号住居址の2軒である。カマドを構築する住居址は、第1B号住居址、第3号住居址である。第4号住居址は、炉址、カマド両者とも確認できなかった。炉址を有する住居址は、主軸方向を北西側に向けており、ほぼ共通する。カマドを有する住居址の主軸方向は、第1B号住居址が北西であるのに対し、第3号住居址は、北東方向を示し、共通していない。

遺物

土師器を中心としてまとめる。ここでは、器形、技法を中心として各住居址ごとに個体数の多

い壺、杯を中心として検討したい。

壺A

(器形) 一口径に比して胴部最大径がかなり大きいもの。第2号住居址例では口縁部が若干立ちぎみにゆるく外反するのに対し、第4号、第5号住居址例は、明確に「く」字状に外反する。第4号住居址例の一部(1、2)には、胴部上半との屈曲部から若干立ちぎみに移行し、端部で若干外反するものが見られる。これは、第3号住居址例でさらに明確化する。

(整形技法) 一第2号住居址例口縁部は、斜方向の刷毛痕が存在する。第4号、第5号住居址例は、ヘラけずり横ナデであり、内面に若干の刷毛痕が残存する。第3号住居址例は、横ナデである。

壺B

(器形) 一口径と胴部最大径が近いか、口径が大きいもの。第2号住居址例は、立ちぎみにゆるやかに外反し、端部で心持ち直立する感がある。第5号住居址例でも同様であるが、端部から明瞭に立ち上がる。第4号住居址例では、指頭状の押圧が見られ、前述の口縁に比して若干外反気味である。第4号住居址例では、系統の異なる小型品も見られる。

(整形技法) 一基本的に、壺Aと同様である。第2号住居址例は、口縁部に刷毛横。第4号、第5号住居址例は、横ナデであるが一部内面に刷毛痕が残る。

杯A

(器形) 一第2号住居址例は、口縁部から底部までかなりふくらむと移行し一部は、最大径が体部にあるものも存在する。第5号住居址例では、第2号住居址例に比して底部への傾斜が急になり、第4号住居址例ではその傾向がさらに強くなる。

(整形技法) 一第2号住居址例では、口縁部に横ナデ、刷毛横が見られるが、第4号、第5号住居址例では、横ナデ、ヘラけずりに統一される。

杯B

(器形) 一体部から立ち上がり口縁部付近で屈曲して外反する。第2号住居址例では、最大径は口縁部にあり体部は比較的スムーズに底部に移行する。内面に稜がある。第4号住居址例は、体部に最大径があり、器高が低くなる傾向を持つ(第2号住居址例は、完形ではないが)。

(整形技法) 一第2号住居址例では、口縁部に横ナデ、刷毛横が見られるが、第4号住居址例では、横ナデである。

遺構・遺物

以上で検討した遺構の特徴、及び遺物の差異等を考慮して、時期をまとめてみたい。

第Ⅰ期(第2号住居址)

本期は、第Ⅱ期とともに炉址が配される。第Ⅱ期と土器様相に極端な変化はないが、整形技法に若干の変化があり、この期は、刷毛痕が残存する。口縁部に斜行、及び刷毛横の整形が行なわれる。この点で第Ⅱ期と区別した。

第Ⅱ期（第4号、第5号住居址）

第5号住居址は、炉址を有し、第4号住居址は、炉址、カマド共に検出されなかった。土器様相は、第Ⅰ期に比して、口縁部にまでヘラけずりが行なわれ、横ナデもみられ、第Ⅰ期に見られた刷毛痕は、姿を消し、内面に若干残存するだけである。土器様相の微妙な差では、第5号住居址→第4号住居址であろう。

第Ⅲ期（第3号住居址、第1号住居址）

第1号、第3号住居址は、カマドを有する点、第Ⅰ、Ⅱ期と明確に区別される。第1号住居址は、非常に簡単なカマドを有するが土器が少量である。第3号住居址の土器様相は、第Ⅰ、Ⅱ期とは区別される。口縁部横ナデが行なわれ、甕Aの口縁部に特徴がある。

以上、第Ⅰ期～第Ⅲ期までに分離した、この内第Ⅰ期と第Ⅱ期とは、きわめて近い関係を有する。若干問題を有するが、第Ⅰ期、第Ⅱ期を「和泉式」の段階としておきたい。第Ⅲ期は、鬼高I式土器としておきたい。

注

1. 赤星直忠・岡本 勇 「茅山貝塚」 横須賀市博物館研究報告— 1957
2. 西村正衛 「茨城県潮来町狭間貝塚」 早稲田大学教育学部学術研究22 1973
岡本 勇 「三浦市鶴ヶ島古遺跡」 横須賀市博物館研究報告五 1961
3. 西村正衛 「茨城県稻敷郡浮島貝ヶ窪貝塚」 早稲田大学教育学部学術研究15 1966
4. 西村正衛 「茨城県興津貝塚」 早稲田大学教育学部学術研究17 1968
西村正衛 「茨城県取手町向山貝塚」 早稲田大学教育学部学術研究16 1967
5. 篠 喜彦・岡田茂弘・江森正義 「千葉県香取郡下小野貝塚の発掘」 考古学雑誌36-3 1950
6. 西村正衛 「阿玉台式土器縦年の研究の概要」 早稲田大学大学院研究科紀要18 1972
7. 伊東重敏 「茨城県足洗発見の幼児葬に使用されていた弥生式土器について」 考古学雑誌40-4 1955
- 井上義安 「常陸足洗発見の弥生式櫛縫」 古代19・20 1956
- 井上義安 「北茨城市足洗遺跡における甕棺調査概報」 古代32 1959

- 川崎純徳他 「赤浜遺跡発掘調査報告」 茨城県高萩市教育委員会 1972
8. 山内清男 「縄文式土器、総論」 日本原始美術 I 1964

参考文献

- 井上義安他 「茨城県における弥生文化の編年的研究—勝田市洞山、東茨城郡大洗町磐船山の土器について」 古代学研究42・43 1966
- 井上義安他 「勝田市中根大和田・笠谷・野沢前・清水遺跡—磐船山式土器の研究」 那珂川の先史遺跡 第2集 1968
- 井上義安他 「茨城県大洗町長峯遺跡」 大洗町教育委員会 1973
- 「茨城県史料 考古資料編—古墳時代一」 1974
- 「茨城県史料 考古資料編—先土器・縄文時代一」 1979
- 宮田 稔編 「茨城県吹上遺跡—第三次調査の記録」 茨城県大洗町教育委員会 1977
- 茂木雅博他 「小澤野」 茨城県東海村教育委員会 1978
- 井上義安編 「茨城県富士山遺跡 I」 1979
- 高野寺畠道跡調査団 「高野寺畠道跡調査報告書」 茨城県勝田市教育委員会 1979
- 馬日順一 「弥生式土器—東北、南東北1～2」 考古学ジャーナル148, 151 1978

第5章 安房西古墳群

第1節 調査の経過

安房西古墳群の発掘調査は、昭和51年7月20日より昭和51年8月31日まで行なわれた。

昭和51年7月20日 発掘調査開始。グリット発掘開始。



第1図 安房西古墳群位置図 (S 1 : 25,000)

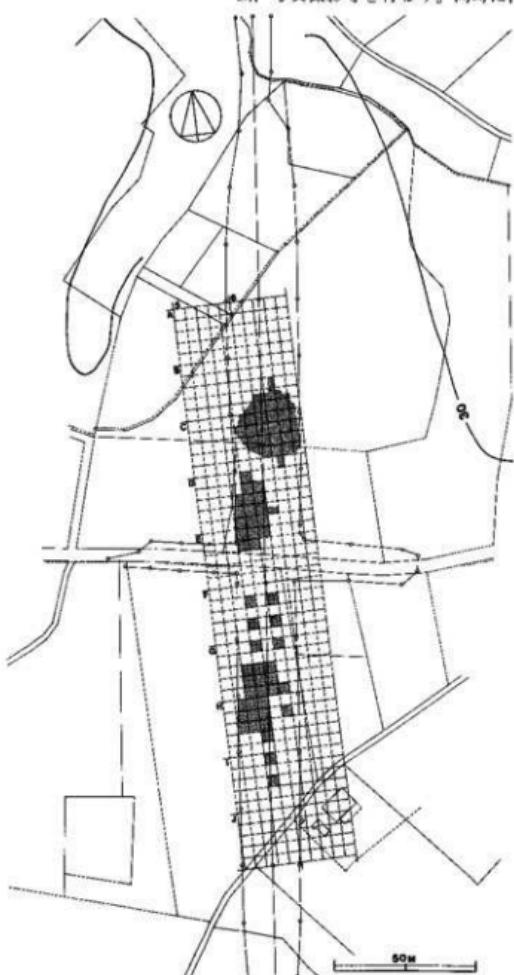
7月21日～7月26日 グリット発掘。第3号方形周溝造橋、第4号方形周溝造橋のプラン確認、拡張作業を行なう。第4号は、南西側に張り出し部を持つことが判明。

7月26日～7月30日 第3号方形周溝造橋、第4号特殊周溝造橋の掘り込み、実測、写真撮影等を行なう。同時に、第2号墳の周溝確認のためグリット発掘。

7月30日～8月2日 第2号墳周溝掘り込み。

8月3日～8月20日 第2号墳、実測、写真撮影。第1号墳周溝確認のためグリット発掘。周溝掘り込み、南側墳丘の除去、主体部、周溝部の敷石を確認、調査する。

8月20日～8月31日 第1号墳、実測、写真撮影を行ない終了する。



調査区は、遺跡付近の鹿島線水戸起点(28.2km)を起点として、磁北を中心 200m 方眼を組み、大区画を $20\text{m} \times 20\text{m}$ の中区画に分割し、さらに $4\text{m} \times 4\text{m}$ の小区画に分割する。グリット・ナンバーは、北から南へアルファベットを用い、西から東へは数字とする。このグリットを基準として、路線区内の調査を行なった。

第2図 安房西古墳群地形図

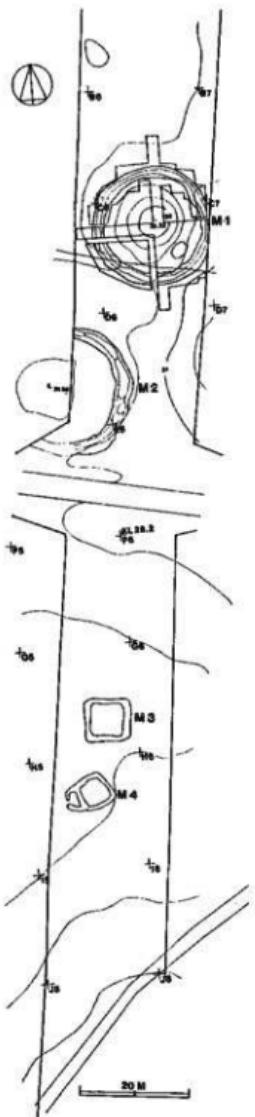
第2節 遺跡の位置と環境

安房西古墳群は、鹿島郡鉢田町大字安房に位置する。北浦と鹿島灘にはさまれて、細長く形成される鹿島台地の北端部であり、北浦の北に位置する。北浦北端部は、巴川と七瀬川に流入する支流によって複雑な地形を形成する。

旭村飯田地内から流れる七瀬川は、台地より多くの小河川が合流し、北浦に注いでいる。安房の台地は、畠田の北側、北東方向に延びる小河川によって形成される谷と七瀬川、及び七瀬川の支流で徳宿側台地の南を東方向に延びる小河川によって形成される谷によって三角形状を呈する。

安房西古墳群は、この三角形状を呈する台地の北西側、七瀬川に若干突出する部分に位置する。突出する部分は、北、及び南から支谷、亜支谷が入り込み、安房側とは多少の隔絶感がある。標高は、おおむね30m前後で比較的フラットな台地面を示す。現在は、雜木林および畠地である。古墳群は、おおむね標高31m～32mの台地上に分布する。現在で畠地内に分布する古墳の多くは削平されている。総数50基をこえる群集墳である。

安房古墳付近で正式な調査が行なわれた遺跡に、鹿島線関係で調査した徳宿遺跡（弥生時代）、塙遺跡（縄文時代、弥生時代、古墳時代）がある。古墳関係では、付近に引地古墳群、東光寺古墳群があり、対岸には、飯名古墳群、飯名古墳、稻荷古墳、大塚古墳群、徳宿側台地には、星合古墳、徳宿古墳群がある。七瀬川に面するこれらの古墳群の集中は、当時の強大な文化圏を推定せしめる。今後の保存、調査に重大な関心がはらわれなければならない。



第3図 安房西古墳群全体図

第3節 遺構・遺物

本遺跡は、当初の分布調査によって、2基の墳丘を有する古墳と、耕地拡張のため削平されたという古墳の計3基の古墳の存在が予想された。発掘調査の結果、2基の円墳と2基の方形周溝遺構の計4基が確認された。

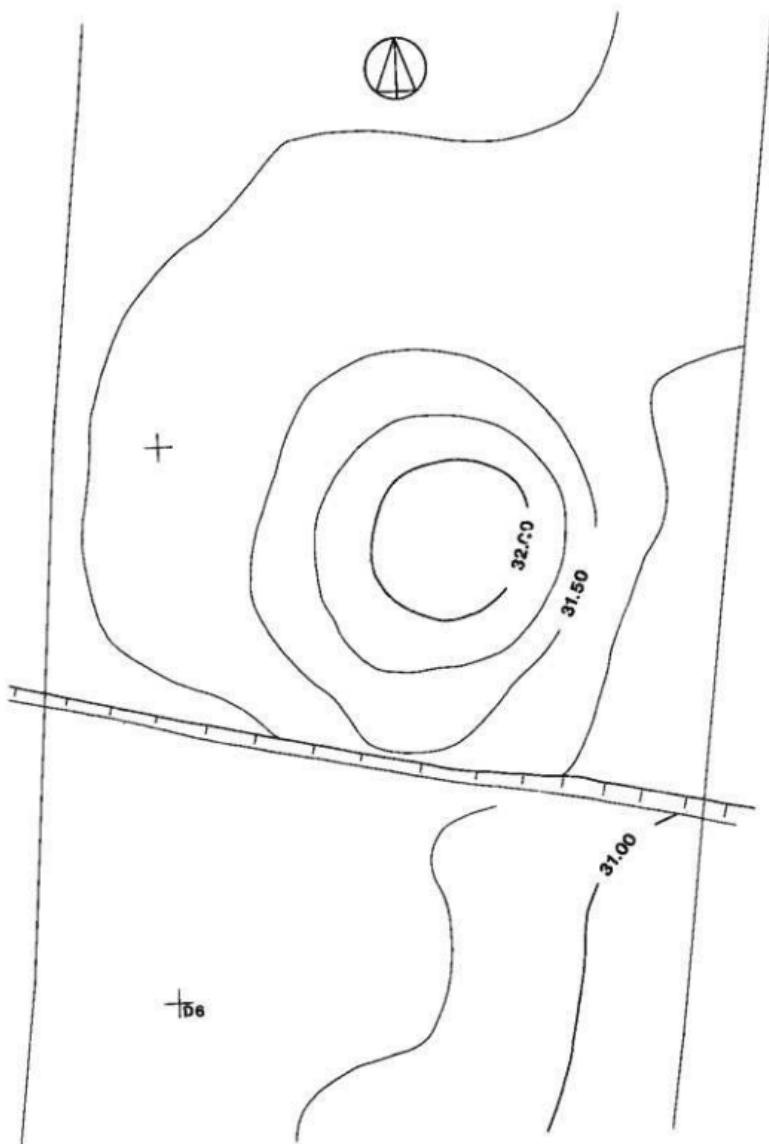
第1号墳（第4図、第5図）

第1号墳は、調査区の北側C6・B6地区にあり、現丘は、東西23m・南北27m・高さ0.7mほどの橢円形をなしている。墳丘のほとんどは、山林であったが、南側の一部は耕作地として一部削平されている。

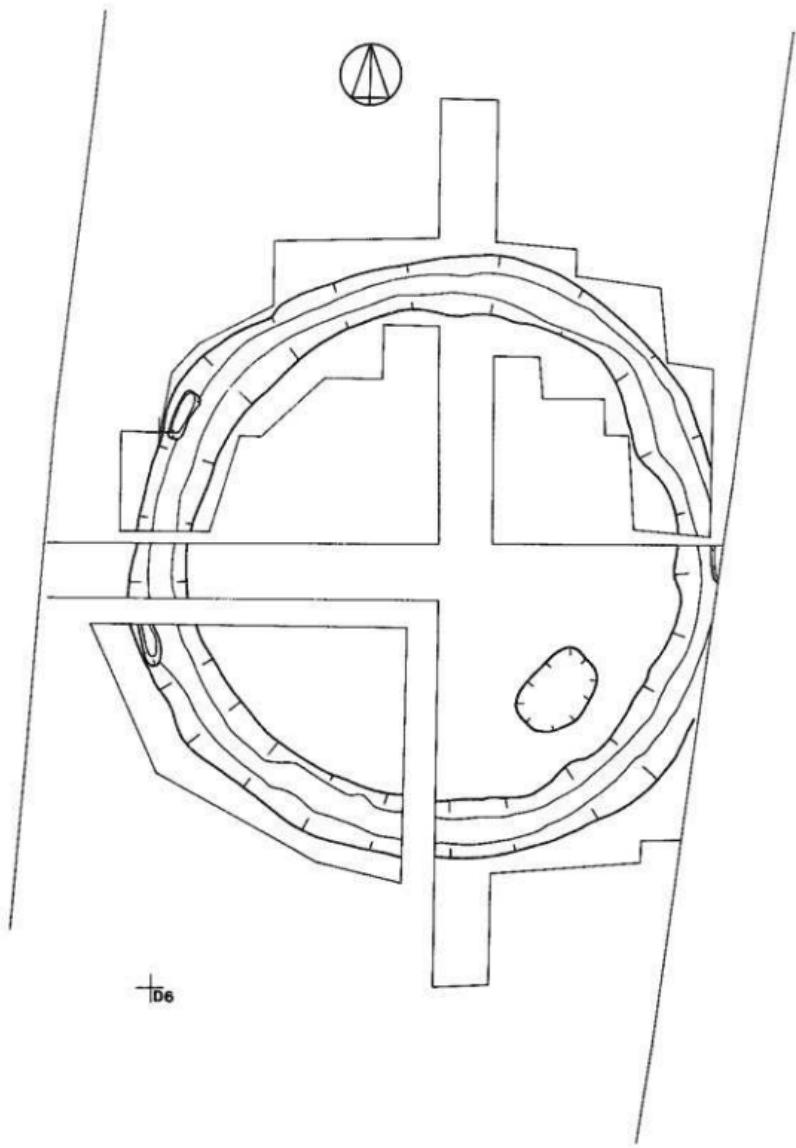
調査は、南北、及び東西に、グリットを一列通して、周溝を確認し、さらに、周溝を全幅すべく拡張した。同時に、主体部確認のため、南東側全面を、調査した。主体部は、確認したが、後世の盗掘を受けていた。

第1号墳の規模は、内径—東西に17.5m・南北に17.8m、外径—東西に21.5m・南北21.5mの円形を呈する。東側周溝の一部は、調査区外である。周溝は、幅4.4m～5m前後を呈し、深さ0.8m～1.2mのゆるい「V」字状を示している。周溝の南東側、主体部付近に集石が見られた。層位的には、周溝埋土の最上位に位置する。埋土は、レンズ状に流れ込んでおり、自然堆積と思われる。

主体部は、墳丘の中心より東南の周溝よ



第4図 第1号墳地形図 (S1/200)



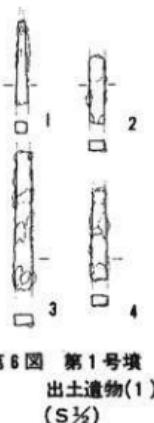
第5図 第1号墳実測図 (S1/200)

りに確認された。長径3.34m、短径2.50mほどの隅丸方形の掘り方を有する。内部の埋葬施設は、雲母片岩による組合式の箱式石棺であったらしいが、かなり古い時代に盜掘にあつたらしく石材のはほとんどは、取り去られていた。主体部からは、原位置を失って、須恵器片と鉄鎌片が出土している。

周溝内埋葬施設と思われる土壙が3個所確認されている。いずれも、長径0.45m、短径0.12mの楕円形を呈し、外底面に、若干斜めに掘り込まれている。西側に2個所、東側に1個所存在する。

第1号墳出土遺物（第6図、第7図）

第1号墳の出土遺物は、主体部、及び周溝から須恵器が、主体部から、鉄鎌と思われる鉄製品片が出土している。鉄製品は、幅0.5cm～0.6cmで、断面は、長方形を呈している。

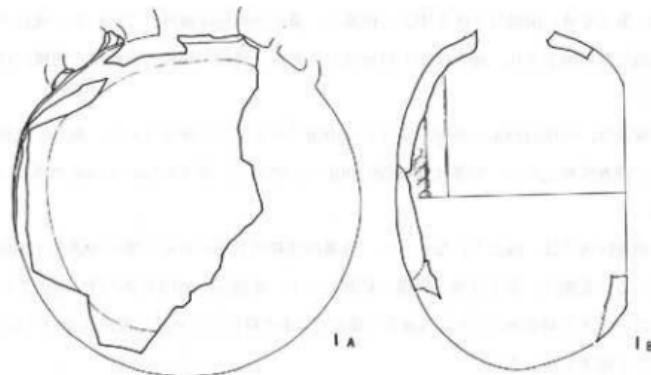


第6図 第1号
出土遺物(1)
(S%)

第1号墳出土遺物

開拓番号	器種	法 直	蓋	蓋形状、形態の特徴	施威	底 土	色 調	備考
第6図1	提紙	高さ 12.4cm 底一約18.8cm		底部一回転模ナデ 底部に刺突状有り 天井部内面に折頸状の押え がある。環狀の把手	4.	1.2mm前後の 小粒沙0.2mm 前後の白色粒 砂	Hue5YR灰灰色 (断面)Hue7.5YR 青に近い緑色で、 サンドイッチ状を 示す。	同軸 主体部フク土
2	長颈瓶	口径-12.6cm		口縁部一回転模ナデ 口縁部は、外反する。	5.	内容物が少な い。	Hue2.5YR-1黄灰 色	同軸
3	瓶	胴部最大径- 15.8cm		胴部一回転模ナデ	5.	内容物が少な い。	(外面)-Hue2.5Y 另一灰黃色 (内面)- Hue2.5Y %灰黃色	同軸 胴部部に付 着
4	長颈瓶	高台径-13.9cm		高台部一回転模ナデ	5.	内容物が少な い。	Hue2.5Y%灰黃色 内面に付着物 がある。	
5	瓶	胴部最大径- 28.8cm		胴部一回転模ナデ 肩部一断面椭曲部から肩部にかけて、 ゆるやかに傾を増す。	5.	2mm-3.2mmの 繊沙0.5mm- 1.2mmの黒色 砂粒0.2mm前 後の白色粒砂	Hue10YR灰褐色	同軸
6	高台付杯	高台径-8.9cm		体部下部一回転模ナデ、高台部一回転 模ナデ 底部一回転ヘラケナリ 高台は、わずかに外反する。体部にか けて、わずかな傾がある。回転模ナデ が入る。	5.	1.2mm-2.8mm の石英沙0.2 mm-1.0mmの 白色粒	HueN5灰灰色	同軸
7	高台付杯	高台径-7.3cm		体部下部、高台部とも回転模ナデ 高台部は、ほとんど直立する。体部に 平行する部分で傾を有しない。	5.	0.2mm前後の 白色粒砂	Hue10YR灰褐色	同軸 内面に付着

[図本集] 墓出土品



1 A

1 B



1 C



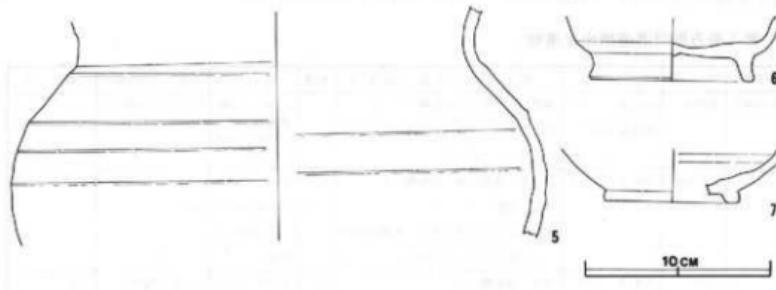
2



3



4



10 CM

第7図 第1号墳出土遺物(2)

第2号墳（第8図）

第2号墳は、第1号墳の南側D5区を中心に位置し、墳丘の約半分は線外にている。現丘のはとんどが耕作地のため削平され、高さは、0.41mほどである。墳丘の規模もそれほど明確には把握されなかつた。

第2号墳の規模は、内径約18m、外径24mほどの円墳であるものと推定される。墳丘と同様に周溝も3m以上が調査区外である。周溝は、幅約0.48m～0.65mで、深さ0.5m～0.8mの浅い「U」字状を呈する。

主体部は、調査区内では、確認されなかつた。周溝内埋葬用と思われる土壙が周溝の2箇所から検出されている。北側は、第1号墳と同様の形態を示す。東側は、楕円形状の浅いものである。調査区内は、ほとんどが耕作地であり、当地方で盛んなゴボウ耕作のため深い擾乱を受けており、遺物は、ほとんど出土していない。

第3号方形周溝造構（第9図）

第3号墳は、第2号墳の南側G5区に位置する。等高線がテラス状にめぐる部分であるが、地表面からの観察では、古墳の存在を推察することはできなかつた。

第3号墳の規模は、東西内径6m、外径8.3m、南北は、内径5.8m、外径7.7mの方形を呈している。主軸方向は、ほぼ真北を示す。周溝部は、幅1m内、深さ0.3m～0.5mで「V」字状に掘り込まれているが、一部でさらに直角に近い角度で、2段に掘り込まれている。底面は、平坦もしくは「U」字状を呈している。

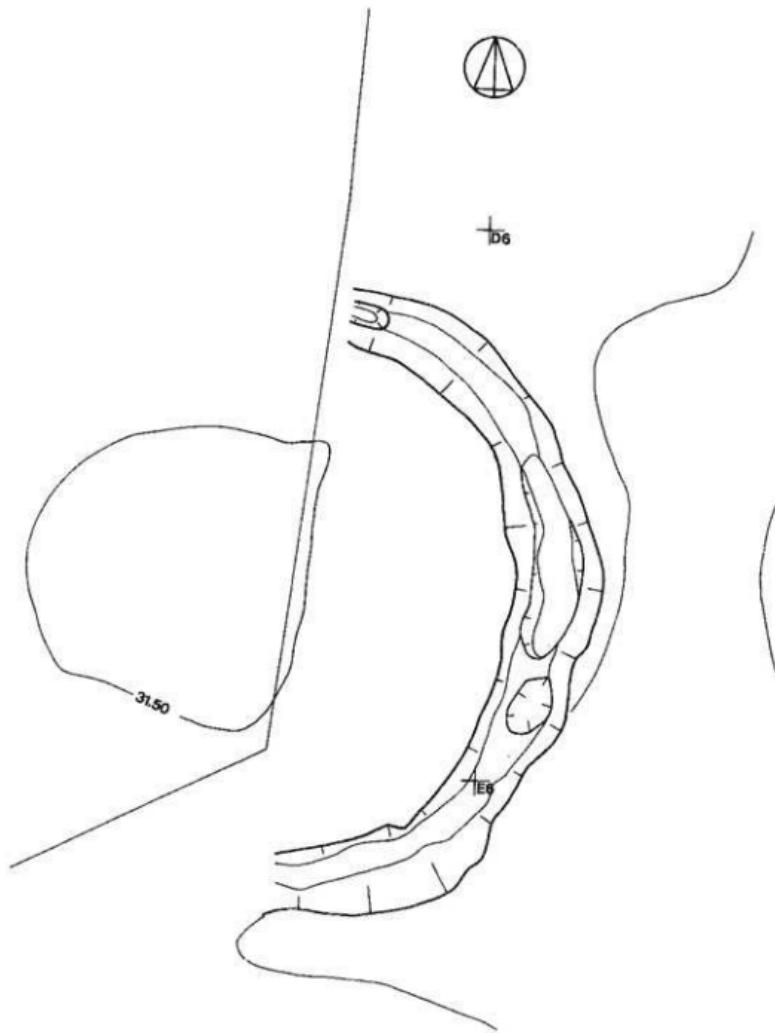
主体部等の埋葬施設は、検出されていない。遺物は、東北コーナー部に須恵器片が出土している。

第3号墳出土遺物（第10図）

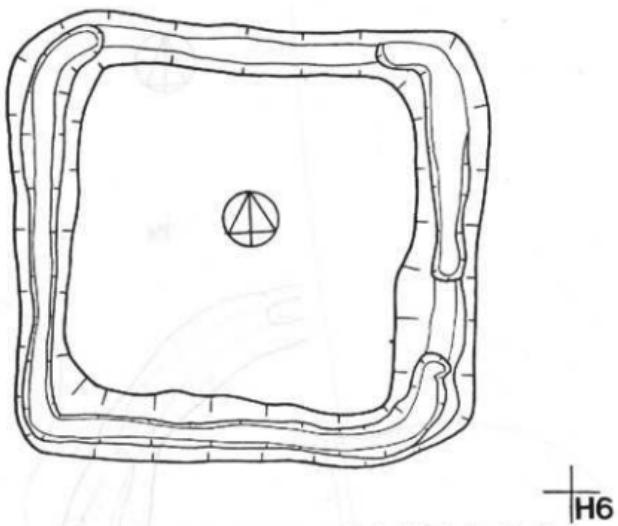
東北コーナー部から出土した須恵器片は、細片が多く、しかも、接合する資料が少なかつた。復元実測できたのは、3個体である。1は、細首の壺になるものか。

第3号方形周溝造構出土遺物

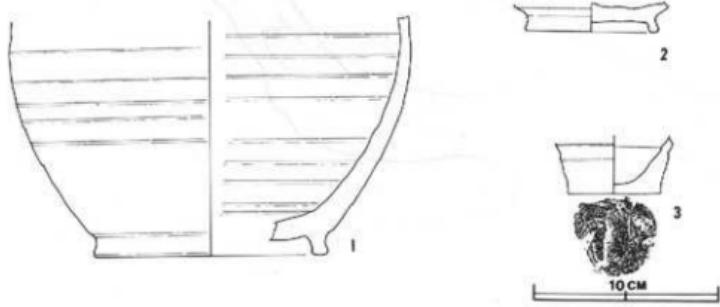
因数番号	着種	法量	整形後法、形質の特徴	焼成	動上	色調	備考
第10441	長瓶底	高台径=12.8cm 副部最大径 21.8cm	副部、高台部とも回転模ナメ 高台部はほぼ直立。副部最大径に向かって、跡方に縦を増す。	5.	2.2cm～3.0mm 成後の石英、 0.2mm～0.8mm の白色粒	Hue2.5YR5度灰色	
2	高台付杯 (?)	高台径 7.3cm	高台部、体部下部一回転模ナメ。 底部一回転ヘラけずり。 高台部は、若干外反する。体部へ移行する段階で若干の縫を有する。	4.	2.0cm～3.5mm の石英、0.2mm ～0.8mmの白 色粒	Hue10YR5度灰 色	
3	不明	底部径=5cm	体部一回転模ナメ 底部一手持ちヘラけずり	5.	1.2mm～2.5mm の石英、0.2mm 前後の白色粒	Hue10YR5度灰 色	同上



第8図 第2号墳実測図 (S 1/200)



第9図 第3号方形周溝造溝実測図 (S1/100)

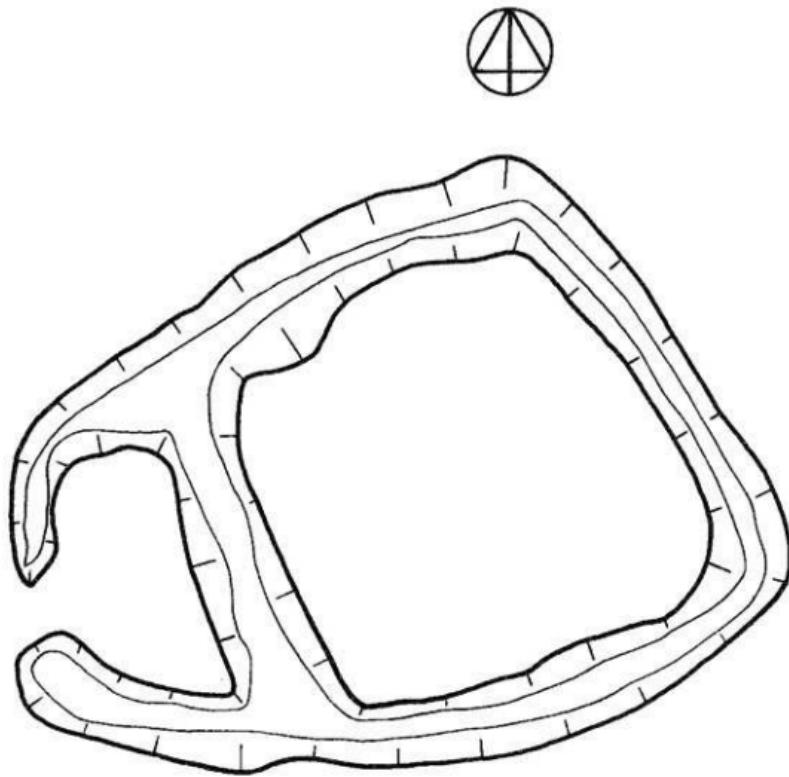


第10図 第3号方形周溝造溝出土遺物

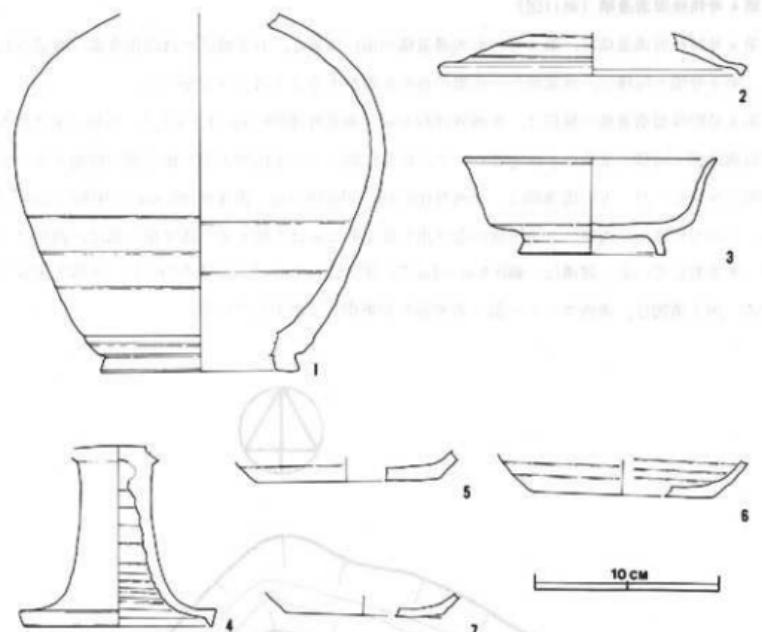
第4号特殊周溝造構（第11図）

第4号特殊周溝造構は、第3号方形周溝造構の南に位置し、H5地区のはば中央部に確認された。第3号墳と同様に、地表面から古墳の存在を推察することはできなかった。

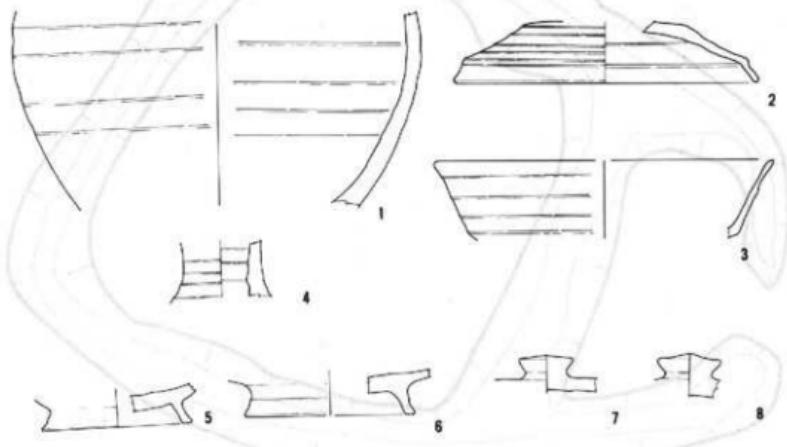
第4号特殊周溝造構の規模は、東西外径約9m・南北外径約6.5mほどである。当初、第3号方形周溝造構と同様の造構かと推定されたが、拡張に従って、半円状の造り出し部が付加することが明らかとなった。方形周溝部は、東西外径4.4m・内径6.3m、南北外径6.6m・内径4.9mを計る。この方形部分の西側に、半円状の造り出し部が約2mほど加わる。造り出し部は、西部にブリッヂを有している。周溝は、幅0.8m～1mで、深さは0.3m～0.5mほどの「U」字状を呈している。出土遺物は、南西コーナー部に須恵器片が集中して出土している。



第11図 第4号特殊周溝造構実測図 (S1/100)



第12図 第4号特殊周溝造構出土遺物



第13図 グリット出土遺物

第4号特殊周溝造構出土遺物

形状と出土地点

器皿番号	器種	法 量	整形技術、形態の特徴	地成	胎 土	色 調	備 考
新12図1	長颈瓶	高台部径—10.7 cm 肩部最大径—20 cm	肩部一回転横ナゲ、高台部一回転横ナ ゲ 高台部より、随々に径を増し、肩部上 半で最大径を計る。肩部は、比較的急 に口縫に移行する。	5.	2.0mm～4.2mm の繊少、2mm 前後の黒色粒	Hue2.5YR5灰灰色 褐色	肩部 肩部に珠付有 肩部に自然釉
2	壺	基部径—16.6cm	体部一回転横ナゲ、天井部は、回転ヘ ラケナリ 基部内面に若干の凹みが認められる。	3.	2.0mm～3.8mm の繊少、0.2mm ～1mmの白色粒(少)	Hue10YR5灰灰色 褐色	回転
3	高白竹杯	口径—13.7cm 器高—5.2cm 高台径—8.1cm	口縫部、体部一回転横ナゲ 底面一回転ヘラケナリ 高台部は、外反し、体部に移行する部 分で棱を有する。	3.	0.2mm～1mm の繊少、2mm～ 4mmの白色粒(多)	外面—Hue10YR 5灰、灰黃褐色 内面—Hue10YR 5灰、褐灰色	回転
4	高杯	基部径—10.2cm	体部 外面一回転横ナゲ 内面一回転横ナゲ、内面接合部 付近で、まさあけ窓	4.	2mm～4mm繊 (極少)、0.2mm ～1mmの白色 粒(少)	Hue2.5YR5灰灰色 褐色	回転
5	杯	底部径—10cm	体部 外面一回転横ナゲ 内面一回転横ナゲ 底面一手持ちヘラケナリ	5.	2mm繊少、0.2 mm～2mmの白 色粒(多)	Hue5YR5灰灰色 底面にヘラ記 号	回転
6	杯	底部径—9.5cm	体部一回転横ナゲ 底面一手持ちヘラケナリ	5.	4mm繊少、0.3 mm～1mmの白 色粒(少)	Hue5YR5灰灰色	回転
7	杯	底部径—8.5cm	体部一回転横ナゲ 底面一手持ちヘラケナリ	5.	1.2mmの繊少 0.2mm～1mmの 白色砂粒(多)	Hue5YR5灰灰色	



第14図 須恵器底部拓影図（第1号墳、第4号墳）

グリット出土遺物

図版番号	器種	法量	整形技法、形態の特徴	焼成	胎土	色調	備考
第13図1	長颈壺	胴部最大径—22cm	胴部一回転模ナデ	5.	0.2mm～1mmの 細砂(少)、1.8 mm～4.8mmの 礫(少)	Hue7.5Y5/灰色	回転
2	壺	基部径—16.4cm	体部一回転模ナデ 底部一寸は、回転へけずり	4.	1.5mm～4.0mm の礫、0.2mm ～1mmの細砂 (少)	Hue2.5Y5/灰色	回転
3	高台付杯	口径—18.4cm	体部一回転模ナデ 口沿が、器高に比して大きい。高台が 付くものと思われる。	4.	1mm～1.3mmの 砂粒(少)、0.2mm 前後の白色粘 砂	Hue2.5Y5/灰色	回転
4	長颈壺		胴部一回転模ナデ	5.	1.5mm～2.2mm の石英、0.2mm 前後の白色粘 砂	Hue2.5Y5/灰色	回転
5	高台付杯	高台径—8.2cm	体部、高台部一回転模ナデ 底面一回転へけずり	5.	2.5mm～3.0mm の長石(中), 0.2mm～1mmの 白色粘(多)	(外面)—Hue5Y5/灰色 (内面)—Hue2.5Y5/灰色 (底面)—Hue5Y5/灰色	回転
6	高台付杯	高台径—9.2cm	体部、高台部一回転模ナデ 高台面は、外反する。	5	1.8mm～2.8mm 石英(少)、0.2 mm～0.8mm白 色粘(少)	HueN5/灰色	
7	壺	つまみ径—2.9cm つまみ高—1.4cm	つまみ部一回転模ナデ 擬定模様つまみ	4	0.2mm～1mmの 細砂(少)	Hue7.5Y5%, 灰色	
8	壺	つまみ径—3.4cm つまみ高—1.3cm	つまみ一回転模ナデ 擬定模様つまみ	4.	0.2mm～1mmの 白色粘(少)	Hue7.5Y5%, 灰色	

第4号特殊周溝造構（第12図）

南西コーナー部から須恵器片が出土している。本造構も、第3号方形周溝造構と同様、細片が多く複合復元できる資料は、少ない。1は、細首壺と思われる。肩部には、釉が付着する。最大径は、胴部中央より上位にある。高台が付く。2は、壺。3は高台付杯、4は、高杯脚部。

第4節 まとめ

本調査では、古墳2基、方形、又は特殊周溝遺構2基を調査した。ここでは、状況の悪い第2号墳を除いて、まとめてみたい。

第1号墳

本古墳は、所謂、「変則的古墳」と言われるもので、主体部が旧表土下にある。茂木氏の編年^{注1}では、第Ⅲ期に当る。杉山氏の分類では、B-ロー-0である。本古墳の時期については、一応、茂木氏の編年と杉山氏の分類、及び、市毛氏の總括^{注2}を考慮して、一応、7世紀中葉～8世紀初の間としておきたい。以下、第1号墳の特徴をまとめておきたい。

敷石について

敷石は、第1号墳東南周溝上に認められた。位置的には、主体部南側を取り囲むように配置される。層位は、岡版を参照していただく他はないが、敷石は、明らかに周溝埋土最上位に位置している。敷石下の埋土の状況は、墳丘部、周溝外部両側から流れ込みレンズ状に堆積していることが観察される。自然堆積と推定しうるものである。従って、周溝が自然埋没した後に、敷石が行なわれたものと思われる。平面的には、個々の石は、散乱した状態であった。

こうした、周溝上に敷石を配する例は、鹿島町宮中野古墳群に多数認められる。^{注3}

主体部について

主体部は、当初設定したトレンチにからなかった。周溝を全掘する過程で両側墳丘全面を排除して検出された。位置は、前述したように東南側の周溝近くである。平面形状長方形の掘り方が確認されたが、埋土は雲母片岩を交えた搅乱が明瞭であった。中央部に、石棺の基部と思われる長方形状の掘り込みが認められる。第1号墳の主体部は、箱式石棺であると推定されるものの、当地方の例にもれず、石材がぬき取られていた。しかし、わずかの救いは、主体部、搅乱層の中から出土した須恵器である。当地方の須恵器編年が確立していないので、何んとも言えないが、有力な資料であると思われる。

周溝内土壙について

第1号墳、第2号墳において周溝内に土壙が認められた。いずれも、周溝外側に掘り込まれている。2の土壙が、埋葬用のものと推定されるが、確証はない。今後の検討を有するものである。

第3号方形周溝遺構、第4号特殊周溝遺構について

本遺構は、2例ともに墳丘が全く認められず、又、全掘したにもかかわらず、埋葬施設が認められなかった。従って、上述のような名称を付したわけである。両者ともに、周溝内に須恵器

細片が若干浮いた状態で山上することに特徴がある。第4号特殊周溝造構は、張り出し部を有する特異な形をしている。方形周溝+張り出し部と相応される。いずれにせよ、こうした類似を持つ造構の増加を待ちたいが、周溝から出土した須恵器は良好な資料である。これらの造構は、大局的には、安房古墳群の一員であり、「変則的古墳」よりさらに古墳の軌道を逸したものであることには、まちがいないものと思われる。

注

1. 市毛 熊 「東国における墳丘墓に内部施設を有する古墳について」 古代第41号 1963
2. 茂木雅博 「箱式石棺の編年に関する一試論-霞ヶ浦を中心として-」 上代文化第36号 1966
3. 杉山晋作 「所謂『変則的古墳』の分類について」 茨城考古学第2号 1969
4. 茨城県教育委員会 「宮中野古墳群調査報告」 1970
5. 注4と同じ。総括中で市毛氏は、「石敷きは、……周溝上にある点にその意義が認められるもの」であり「周溝を越って石棺に到達するので、周溝が凹んでいたので不便な」ためであるとしている。ただし、第83-K号墳で杉山氏は、「下から2層目暗褐色土層の上面に存在」(P15)しており、「墳丘築造当時のものであるかは……疑問となる点がある」とし、「送葬儀礼よりも、石棺の石材抜き取りの際に派生したもの」(P17)の方が妥当であるとしている。

第6章 安塚遺跡

第1節 遺跡の位置と環境

安塚遺跡は、鹿島郡鉢田町大字安塚に位置する。本遺跡は、北浦と鹿島灘にはさまれた鹿島台地の北西部に位置する。鹿島台地は、30m～50mの標高を有し、特に北浦に面した側で北浦に流



第1図 安塚遺跡位置図 (S 1 : 25,000)

れ込む支流が、谷、支谷、亜支谷を形成し複雑に入り込んだ台地を形成する。この台地上には、各時期の遺跡が密集して存在する。

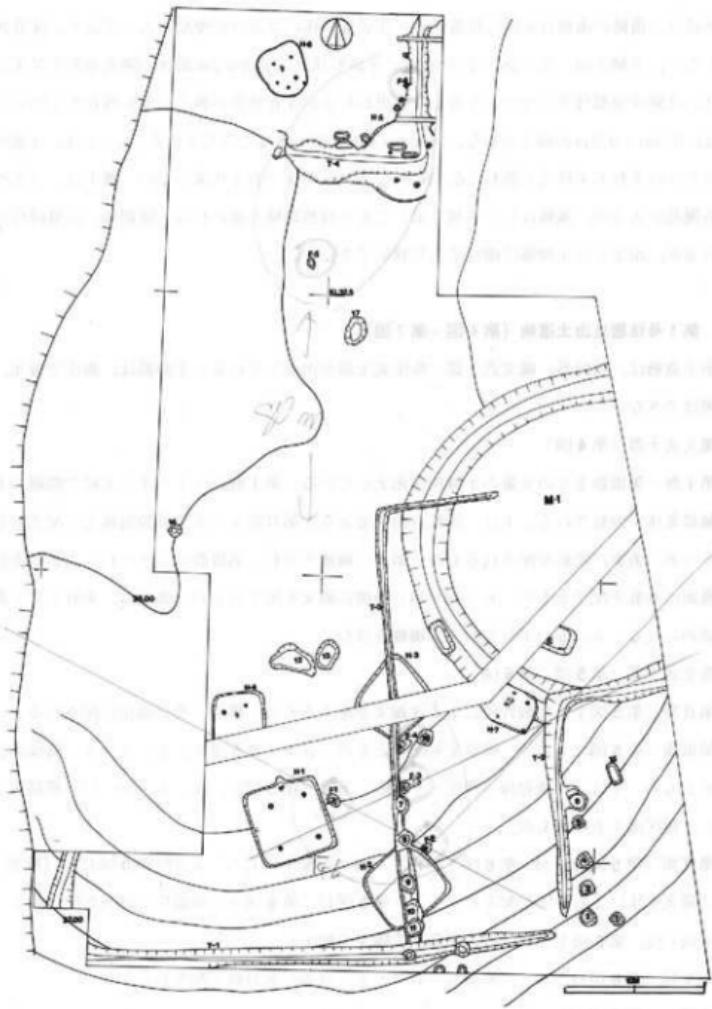
鉢田町中心街は、七瀬川と巴川の沖積物に浅く埋められる。鹿島台地側、畠田の南側で奥深く入り込む支流によって形成される谷と安塚の南に入り込む支谷によって先端の尖がった舌状の台地が形成される。先端部は、さらに亜支谷によって北側と南側の台地に分断される。この北側の台地が安塚遺跡であり、まさに北浦に直面する位置にあるわけである。標高は、25m前後で台地上は比較的フラットな面になっている。現在は、畑作が行なわれている。水田との比高差は、約20mである。

付近には、北側に昭和53年～昭和54年にかけて発掘された畠田遺跡がある。古墳時代の集落址であり、縄文時代～弥生時代まで含んでいる。南には、縄文時代の貝塚である二重作遺跡がある。二重作遺跡からは、弥生式土器も出土している。

第2節 調査の経過

昭和51年9月1日～昭和51年12月13日 発掘調査

昭和52年12月14日～昭和51年3月31日 整理作業



第2図 安塚遺跡全体図

第3節 遺構・遺物

第1号住居址（第3図）

本址は、遺跡の南側G5区に位置する。住居址全体にゴボウの擾乱が入っており、保存状態はよくない。主軸方向、N-18°-Eを示す。平面形状は、1辺が5.5m前後の隅丸方形を呈する。本址は、北側中央部付近にカマドを有したと思われるが保存状態が悪く一部が残存するだけである。壁は、0.3m-0.5mの深さを有し、床面から60°-70°の角度で立ち上がる。ピットは、4個所検出された。いずれも主柱穴と思われる。深さは、0.2m前後であまり深くない。覆土は、ゴボウ溝による擾乱が入るが、堆積はレンズ状を呈しており自然堆積と思われる。時期は、古墳時代と推定されるが、出土した土師器は細片であり判定できない。

第1号住居址出土遺物（第4図～第7図）

出土遺物は、土師器、繩文式土器、弥生式土器が出土している。土師器は、細片で復元、及び作図はできない。

繩文式土器（第4図）

第I群～第III群までの少量の土器片が出土している。第I群C（1～4）大粒で間隔のあいた単軸絡条体が回転される。1は、回転方向を変える。第II群a（5）只股腹縁文が配される。d（6～8）表裏に条痕が配されるもの。胎土に纖維を含む。第III群a（9～11）表面に条痕を配し裏面に条痕を配するもの。b（12～14）表面に繩文を配するもの。裏面は、条痕がなく調整痕が認められる。a、bいずれも胎土に纖維を含む。

弥生式土器（第5図、第6図）

第II類（第5図1）半截竹管による沈線文を配するもの。横位、及び縦位に配される。

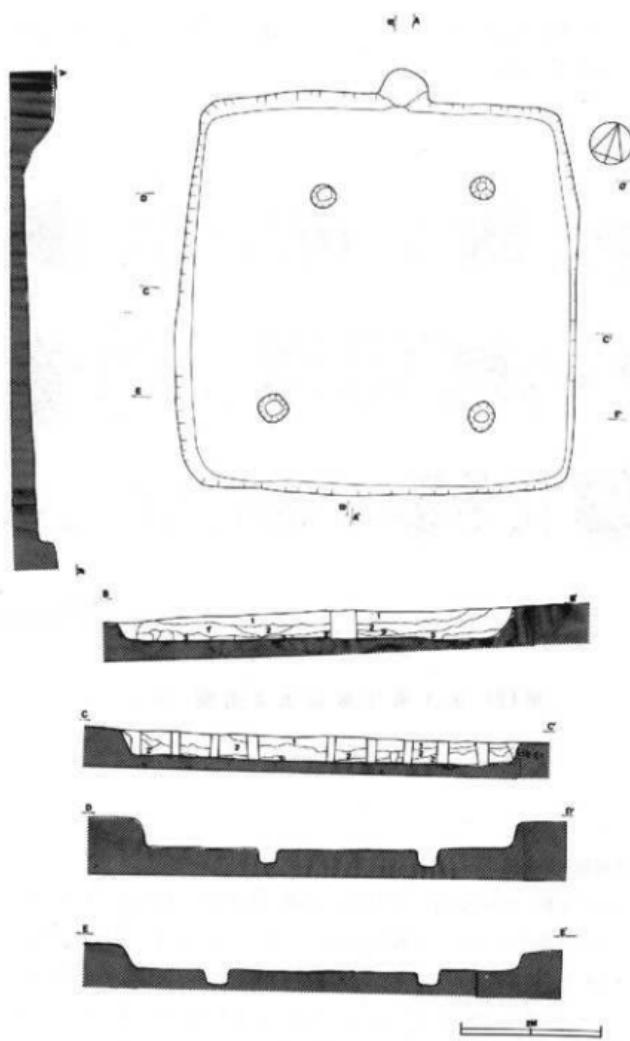
第III類（第5図2～11） 條描文を配するもの。b1（第5図3、5、7～9）條描波状文を配するもの。7は、（隆起線+押圧）がある。b2（第5図2、4、6、10、11）條描波状文を配し、縦区画を有するもの。

第IV類（第5図12～24、第6図1～10） 繩文を配するもの。a3（第5図12）口縁部。口唇部に繩文原体による押圧が配される。b（第5図13、第6図9）頸部片で繩文が配される。c（第5図14～24、第6図1～9、11）胴部片で繩文を配する。

第V類（第6図11、12） 底部片。いずれも、底面に布目紋が配される。

土製品（第7図1）

弥生式土器に伴うと思われる紡錘車が一点出土している。径4.4cm前後、厚さ3.3cmの比較的厚いものである。側面に4本櫛による波状文が配される。上下両面には、円形竹管文が放射状に配

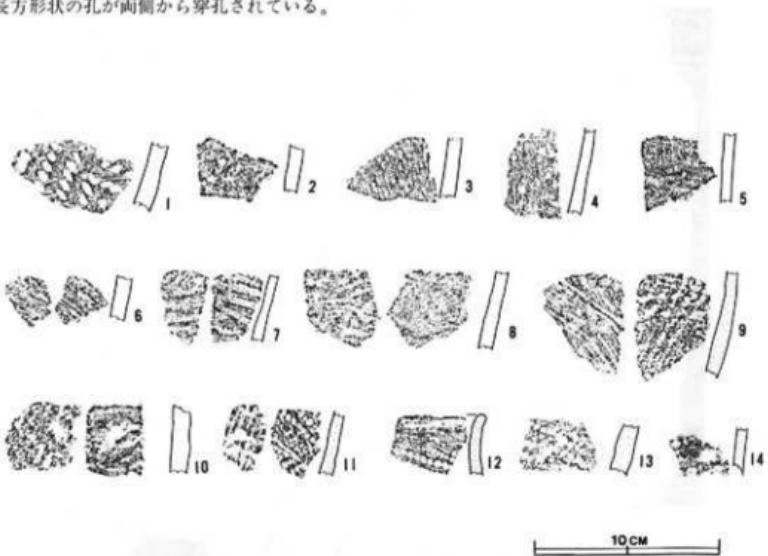


第3図 第1号住居跡実測図

される。

石製品（第7図2）

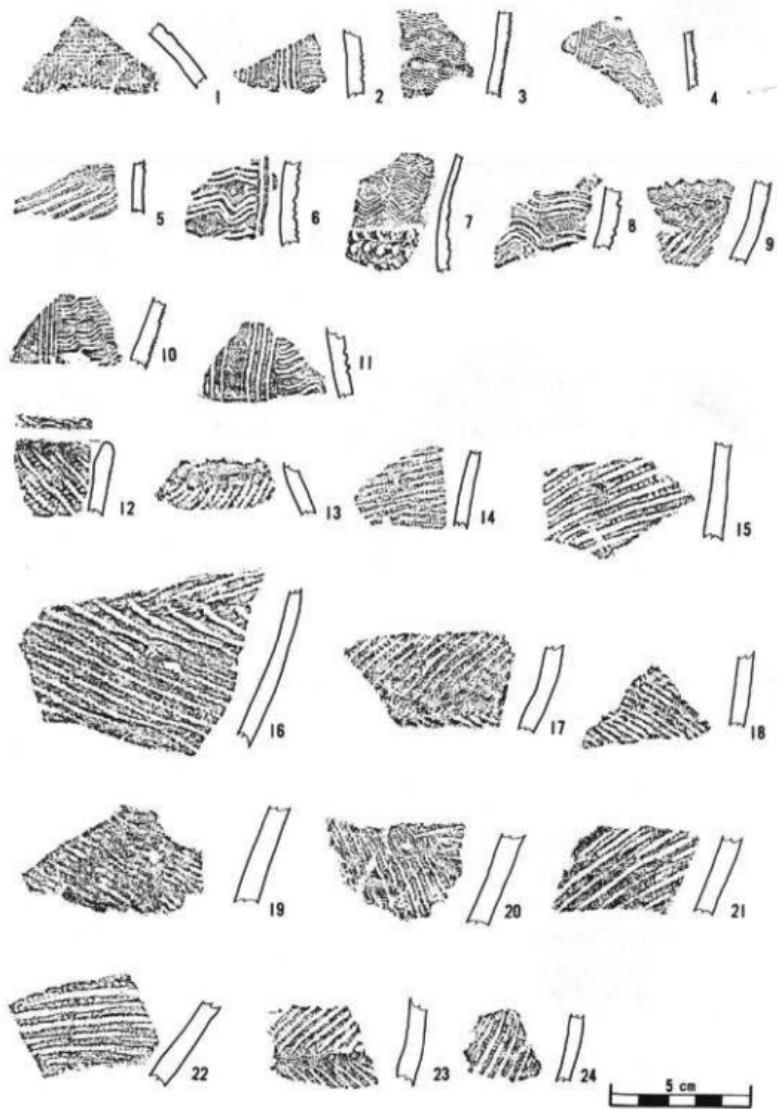
半円形状の勾玉と思われる石製品が出土している。先端部が欠失しているので断面はできない。長方形状の孔が両側から穿孔されている。



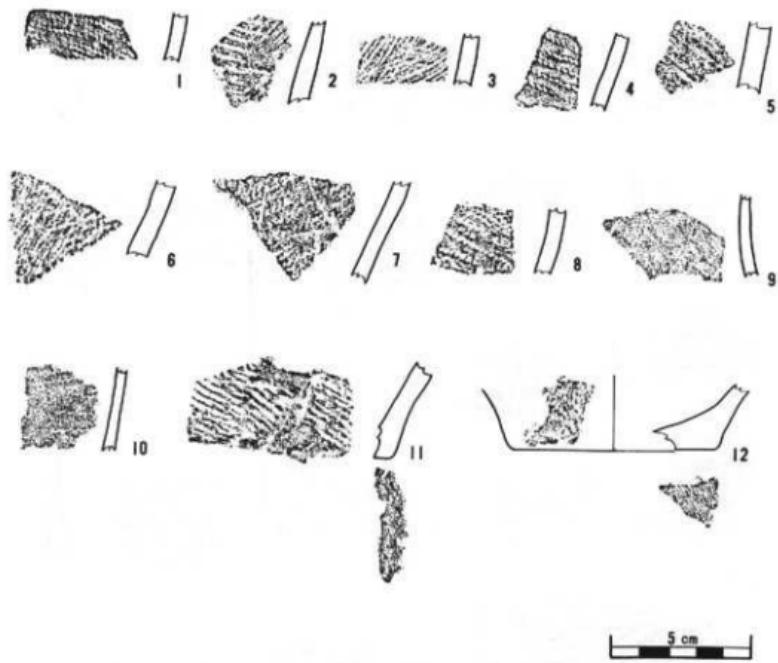
第4図 第1号住居址出土遺物（1）

第2号住居址（第8図）

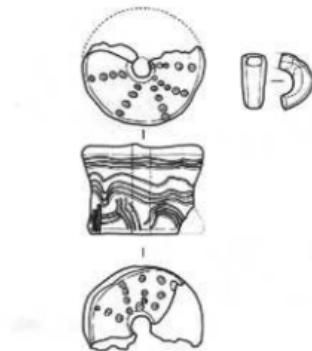
本址は、遺跡の南側、H 6区、第3号住居址の南側に位置する。住居址全体にゴボウの搅乱が入っており、保存状態はよくない。主軸方向は、N-57.5°-Eを示す。平面形状は、長径-5.5m、短径4.9m前後の隅丸長方形を呈する。住居址中央部を、第3号溝、第8号土壙～第11号土壙に切られている。壁高は、0.1m～0.3mの深さを有し、床面から45°前後の角度で立ち上がる。炉は、確認されなかった。第3号溝、及び、土壙で切られているものと思われる。ピットは、1個だけ検出し、主柱穴と思われるピットは、確認されなかった。土層断面は、レンズ状に堆積しており、自然堆積と思われる。本址の時期は、出土している土器より、弥生期と推定される。



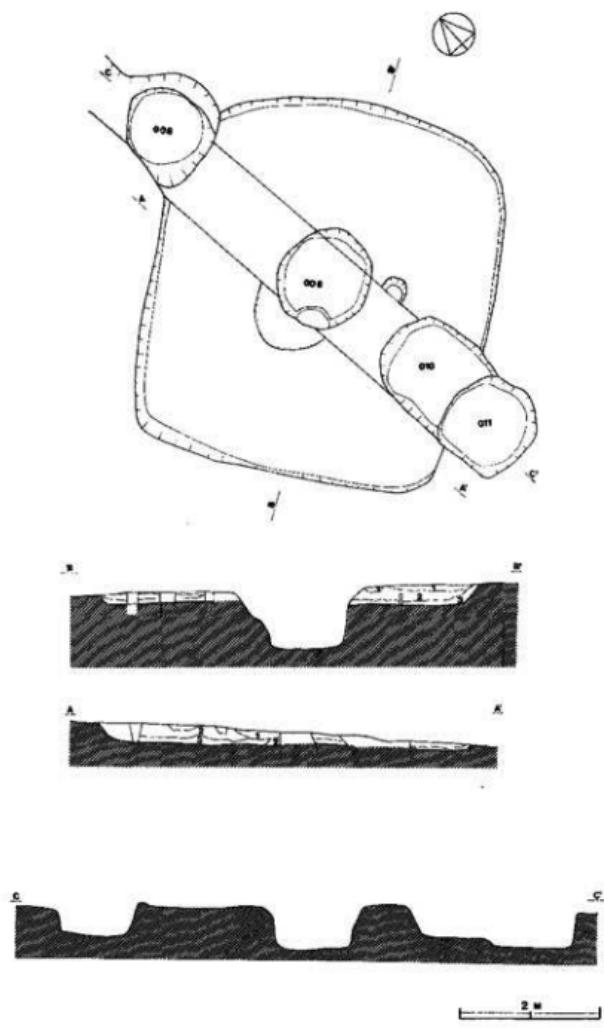
第5図 第1号住居址出土遺物（2）



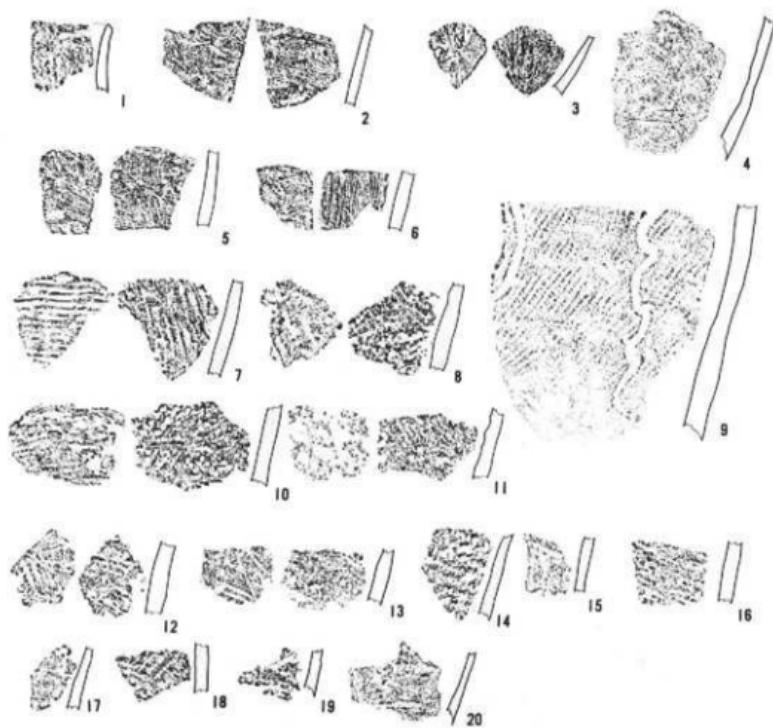
第6図 第1号住居址出土遺物(3)



第7図 第1号住居址出土遺物(4)(5%)



第8図 第2号住居址、8号・9号・10号・11号土礫実測図



第9図 第2号住居址出土遺物（1）

第2号住居址出土遺物（第9図～第14図）

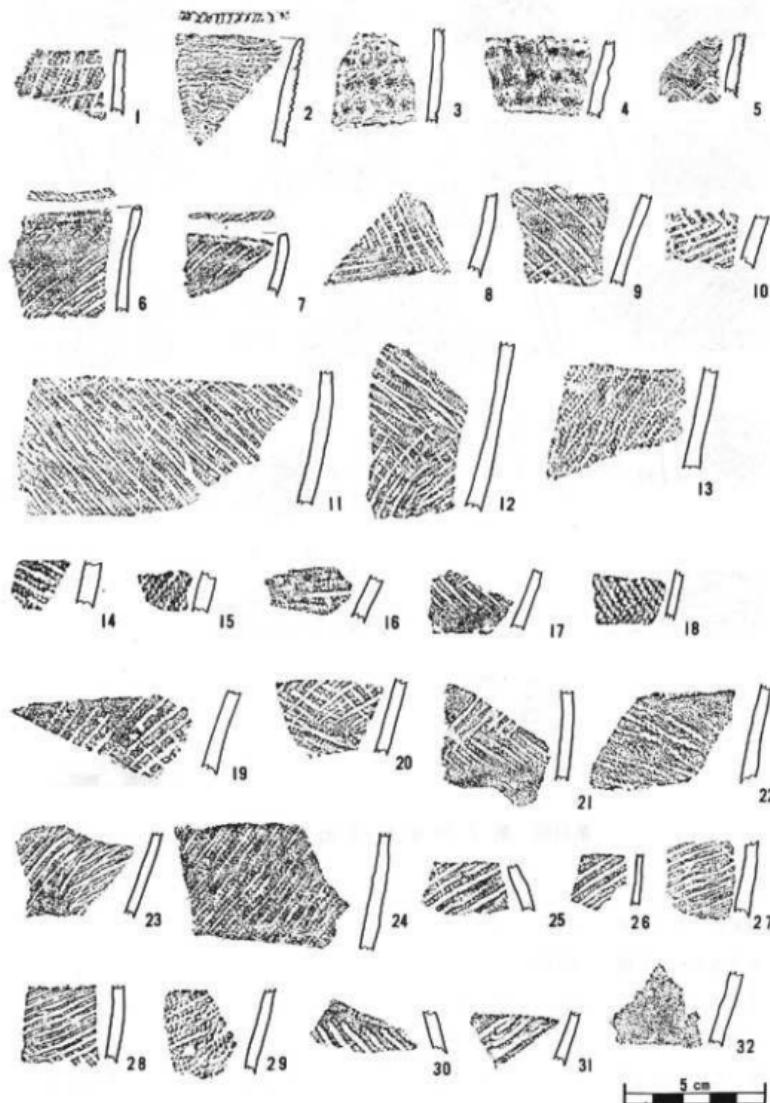
出土遺物は、縄文式土器、弥生式土器、石鎌、磨製石斧、紡錘車が出土している。

縄文式土器（第9図）

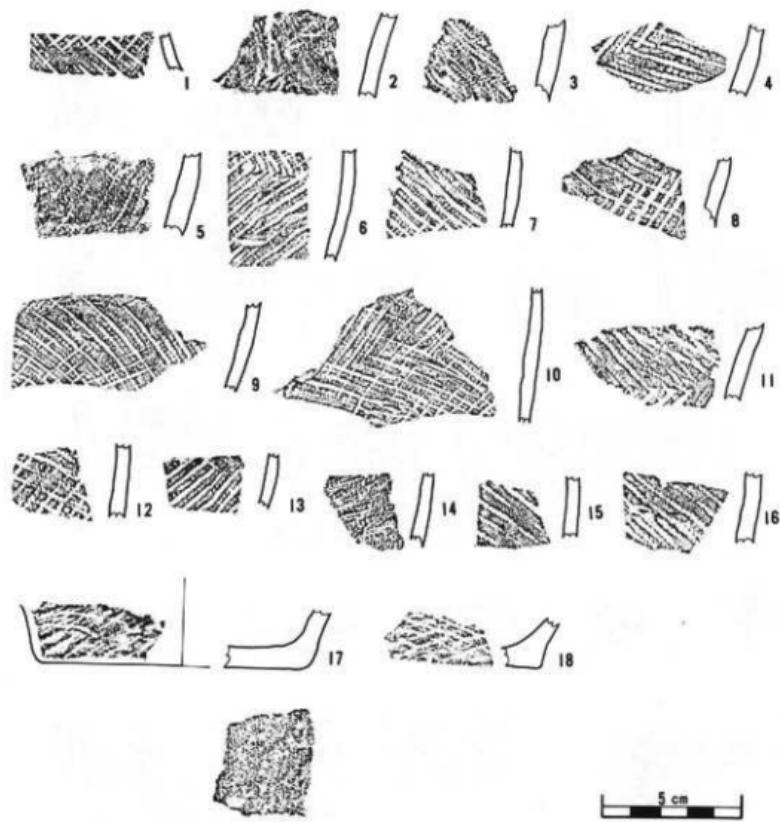
第I群 b (1) 単軸絡条体を有するもの。

第II群 c (2～6) 表裏両面に擦痕状の調整痕があるもの。

第III群 (7～8, 10～20) 縄文+条痕、及び縄文を有するもの。a (7, 8, 10～13) 表面に縄文、裏面に条痕を配するもの。b (14～20) 表面に縄文を配するもの。



第10図 第2号住居址出土遺物（2）



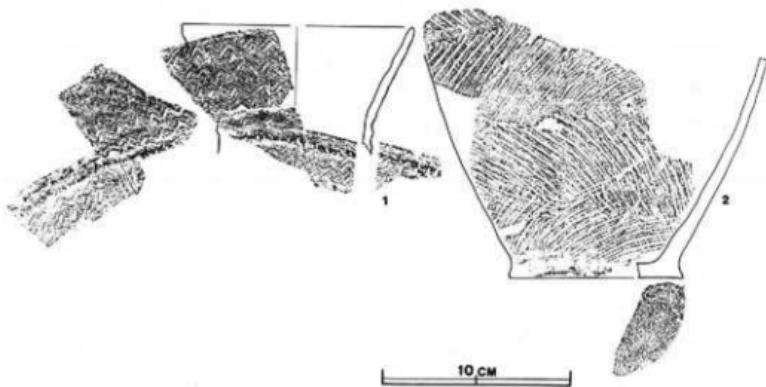
第11図 第2号住居址出土遺物（3）

第V群（9） 繩文+沈線のもの。

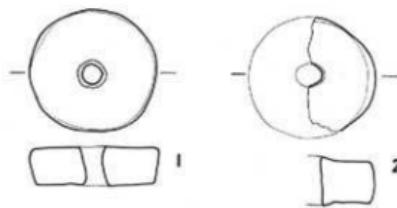
弥生式土器（第10図～第12図）

第I類（第10図1） 繩文+沈線のもの。

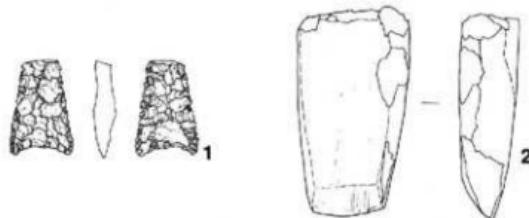
第III類（第10図2～5、第12図1） 摃描文をもつもの。2は、口唇部にスリットを持つ。3、4は、微隆起線に押圧が配される。第4図1は、口縁部の器形が推定される。口径約12.4cm。口縁部は、外反する。（隆起線+刺突）で文様を分離する。上位の文様帶には、波状摃描文が入る。下位の文様帶には、波状摃描文と縱区画が配される。縱区画間は、無文化される。



第12図 第2号住居址出土遺物(4)



第13図 第2号住居址出土遺物(5)(5%)



第14図 第2号住居址出土遺物(6)(5%)

第IV類（第10図6～32、第11図1～16） 繩文を配するもの。羽状繩文が配される。

- a（第10図6、7）口縁部。口唇部に繩文原体による押圧がある。口縁部から繩文が配される。
- b（第10図25、30、第11図1）頸部、及び胴部上半のもの。繩文が配される。
- c（第10図8～24、26～29、31、32、第11図2～16）胴部片である。
- d（第11図17、18、第12図2）底部片。17は、底面に布目痕がある。第4図2は、底径9.2cm前後で、底面に布目痕がある。

土製品（第13図）

紡錘車が2個出土している。1は、完存品。径4.5cmの円形。2は、半欠する。

石製品（第14図）

石鎌、磨製石斧が出土している。石鎌は、先端部が欠失する。磨製石斧もやはり、基部が欠失する。整形時の剝離が側面に残る。全体的に入念に研磨されている。刀部は、片側から研磨して形成されている。

第3号住居址（第15図）

本址は、遺跡の南側、G6区、第4号住居址と第7号住居址の間、第2号住居址の北側に位置する。主軸方向は、N-41.5°-Eを示す。平面形状は、長径5.1m、短径4.4m前後で、若干ゆがんだ不整方形を呈する。第3号溝、及び水道溝によって切断されている。壁高は、0.1m～0.15mでわずかに確認される。北壁は、ほとんど確認されない。壁は、床面から45°前後のゆるやかな立ち上がりを示す。床址、及びピットは、検出されなかった。従って、住居址としての確証はない。時期も明らかでない。

第3号住居址出土遺物（第16図～第17図）

出土遺物は、繩文式土器、弥生式土器が出土している。

繩文式土器（第16図）

第II群c（1）表裏両面に条痕文が配される。口縁部、口唇部に格条体による压痕文がある。

第III群b（2）繩文が配されるもの。

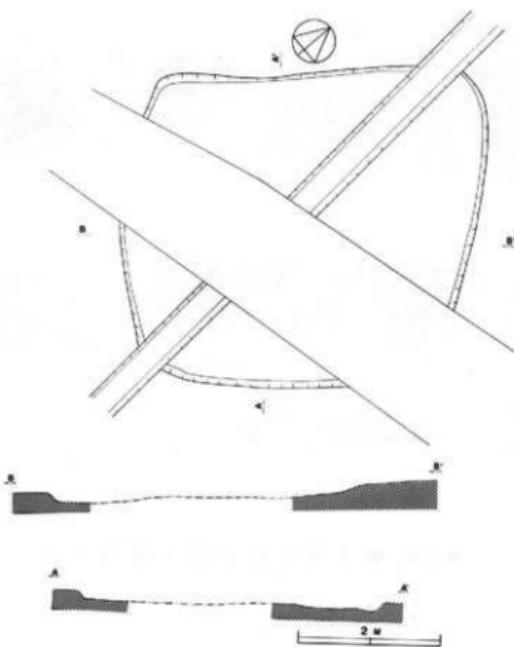
弥生式土器（第17図）

第IV類（第17図1～9）繩文を配するもの。

a1（第17図3～5）口縁部。口縁部から繩文を配するもの。5は、口唇部に繩文原体による押圧がある。

a2（第17図1）a1と同様であるが、繩文原体が異なるもの。

a3（第17図2）口縁部を無文とするもの。口唇部に繩文原体による押圧がある。



第15図 第3号住居址実測図

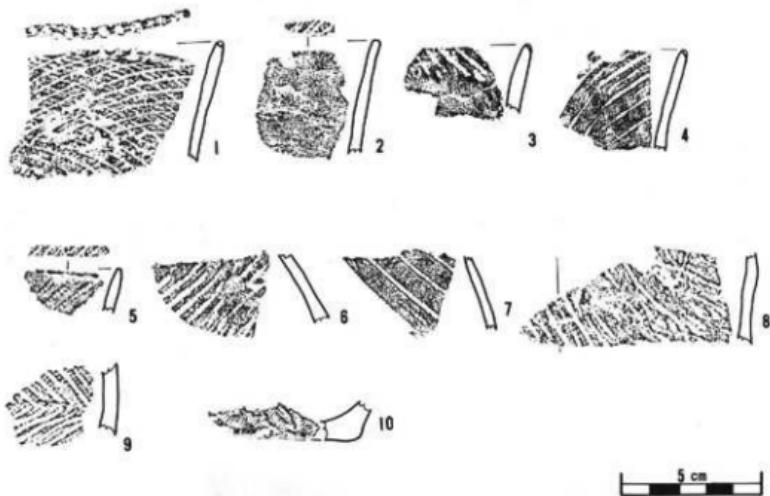


第16図 第3号・住居址出土遺物（1）

b (第17図 6～7) 頭部片、又は胴部上半部。

c (第17図 8, 9) 胴部片。8は、胴部片で、小型土器と思われる。

第VI類 (第17図10) 底部片である。



第17図 第3号住居址出土遺物(2)

第4号住居址(第18図)

遺跡の南側、G5区、第3号住居址の西側に位置する。住居址全体が、ゴボウ溝によって搅乱され、保存状態はよくない。南半部は、水道溝によって切断されている。主軸方向、N-8°-Wを示す。平面形状は、長軸不明(溝に切られているため)、短軸約3.7m前後で、隅丸の方形を呈するものと想定される。壁高は、0.5m前後と比較的深く良好な状態である。壁は、床面から75°前後の角度で立ち上がる。炉は、中央より若干北側に検出された。長径0.9m、短径0.6m前後の楕円形を呈する。ピットは、2個出土している。いずれも、主柱穴と思われる。床面から0.3m~0.4mの深さをもつ。床面より、弥生式土器、高杯等々を出土している。時期は、弥生期と思われる。

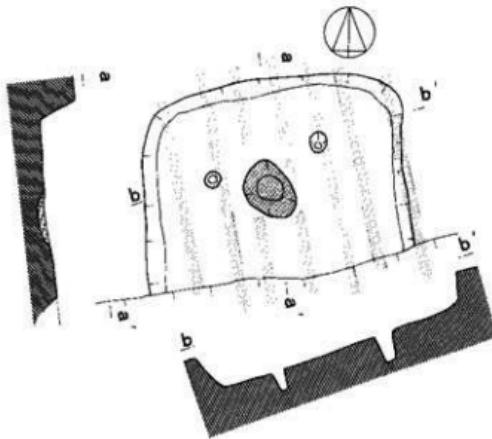
第4号住居址出土遺物(第19図~第22図)

出土遺物は、縄文式土器、高杯等の弥生式土器が出土している。

縄文式土器(第19図)

第I群b(1~3) 単軸絡条体を有するもの。1は、口縁部片。

第I群c(4~8) 粒の荒い、間隔のあいた単軸絡条体を配するもの。回転方向を変えている。



第18図 第4号住居址実測図

第二群 c (9) 表裏両面に条痕が配される。口唇部に格条体圧痕文が配される。

d (10, 11) 表裏両面に条痕が配されるもの。

第三群 b (12, 13) 表面に繩文が配されるもの。

c (14) 表面に、(隆起線+刺突)が配されるもの。

第五群 (15~23) 後期初頭に属するもの。16は、広義の「磨消繩文」を配する。17は、波状口縁で頂部に貫通孔がある。15, 18~20は、桶状工具による沈線文。21~23は、無文。

弥生式土器 (第20図~第22図)

第三類 (第20図 1~4) 楯描文を配するもの。

a1 (1, 2) 口縁部片。外反する。口唇部に繩文原体による押圧がある。楕描波状文を配する。

b1 (3) 頸部片。(隆起線+押圧)下に波状文が配される。

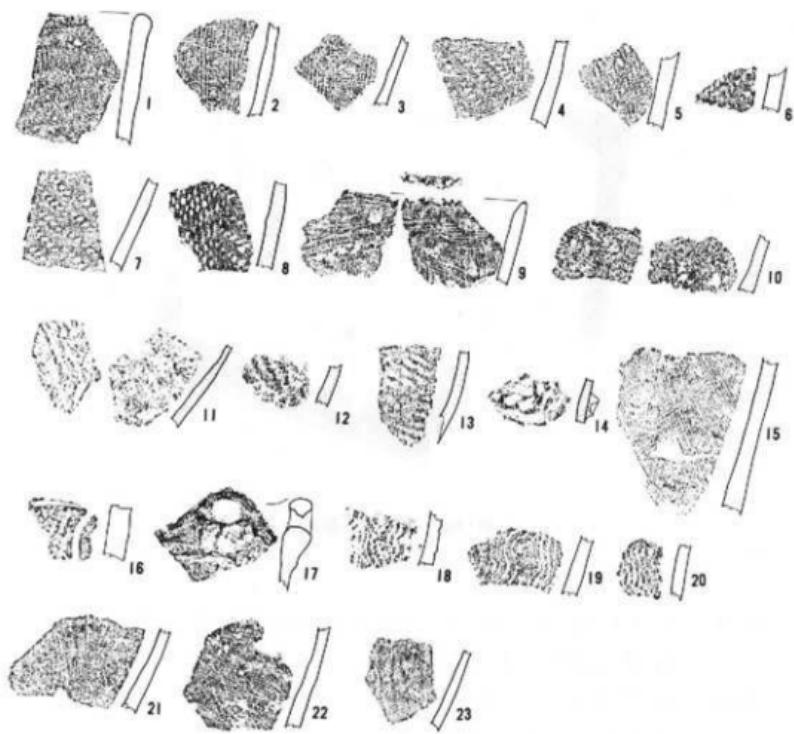
b2 (4) 3本の(隆起線+刺突)下に縱位X画が配される。

第五類 (第20図 6, 7, 第22図) 無文のもの。

a (第20図 6, 7) 口縁部裏面に折返しが認められる。表面は、無文で輪積み痕が観察される。

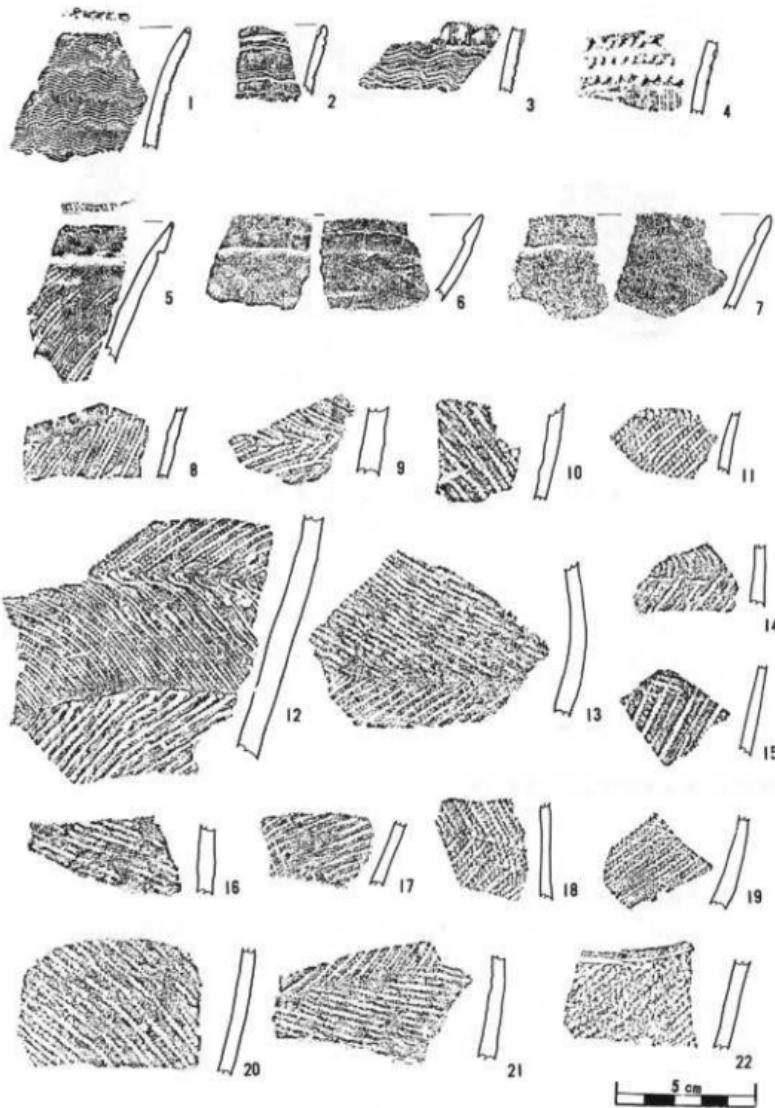
b (第22図), 高杯である。底部径 - 5 cm 前後。1対の孔が配される。表面は、荒いヘラナデが行なわれる。口縁部は、欠失する。

第四類 (第20図 5, 8~22, 第21図 1) 脊部に繩文が配されるもの。

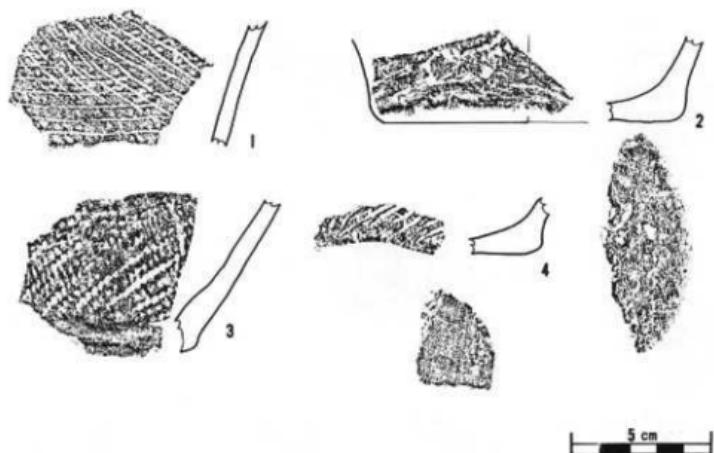


第19図 第4号住居址出土遺物(1)

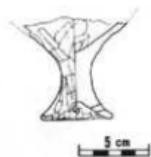
- a (第20図5) 口縁部。折返し口縁を持つもの。
- b1 (第20図8~22) 脊部片である。b2 (第21図1) b1と同様であるが、縄文原体が異なるもの。
第VI類 (第21図2~4) 底部片。2, 4は、布目痕を持つ。



第20図 第4号住居址出土遺物（2）



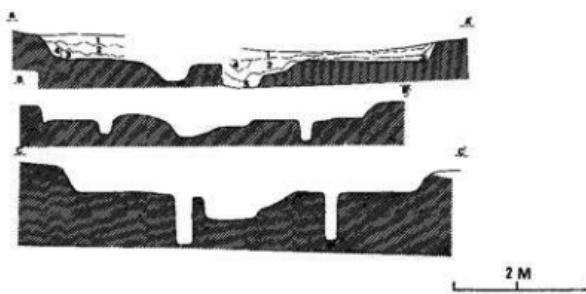
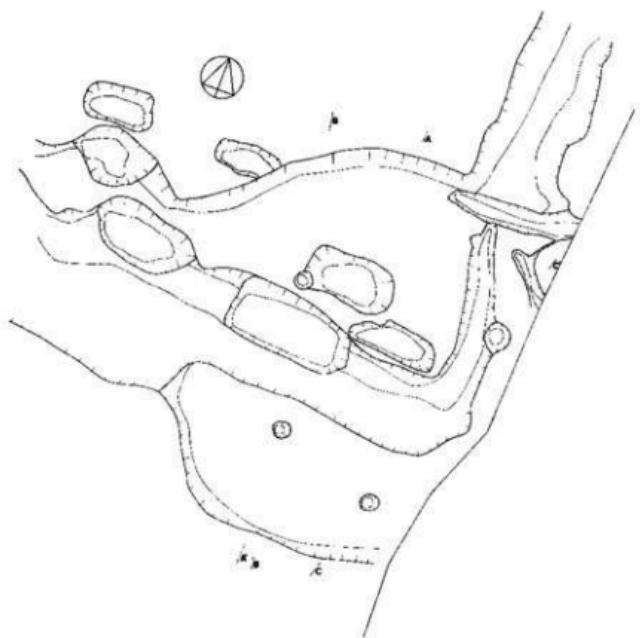
第21図 第4号住居址出土遺物（3）



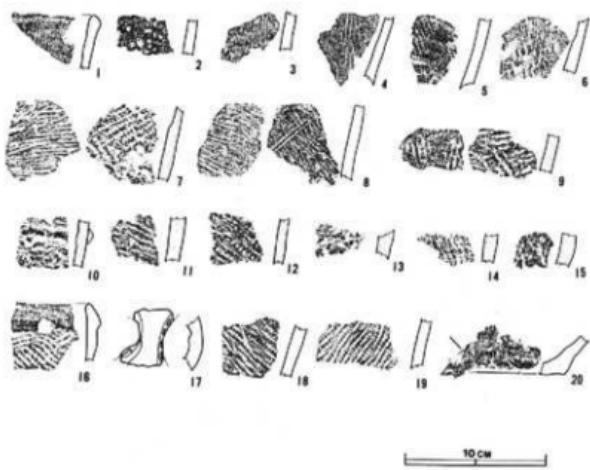
第22図 第4号住居址出土遺物（4）

第5号住居址（第23図）

本址は、遺跡の北側、E 6区、6号住居址の西側に位置する。第4号溝、擾乱によって、かなり破壊されている。西側は、かなりひどく擾乱されている。又、東側が一部調査区外である。主軸方向は、N - 9° - Wを示す。長径5.8m前後、短径不明であるが、隅丸方形状を呈するものと思われる。壁高は、0.25m ~ 0.4m前後で、床から65° ~ 80°の角度で立ち上がる。炉址は、確認されない。溝、及び擾乱で切斷されるものと思われる。ピットは、4個所検出された。いずれも支柱穴と思われる。20cm ~ 25cmのものと、70cm前後のもの2種類がある。覆土は、かなり擾乱されているが、堆積状態から自然堆積かと思われる。時期は、出土遺物から弥生期と思われる。



第23図 第5号住居址実測図



第24図 第5号住居址出土遺物（1）

第5号住居址出土遺物（第24図～第28図）

出土遺物は、縄文式土器、及び弥生式土器である。

縄文式土器（第24図）

第I群（1～6） 単軸絡条体を施文するもの。1は、口縁部。

第II群 d（8） 表面、裏面ともに条痕文を配するもの。

第III群 a（7, 9） 表面に条痕→縄文を配し、裏面に条痕を配するもの。

第III群 b（11～15） 表面に縄文を配するもの。

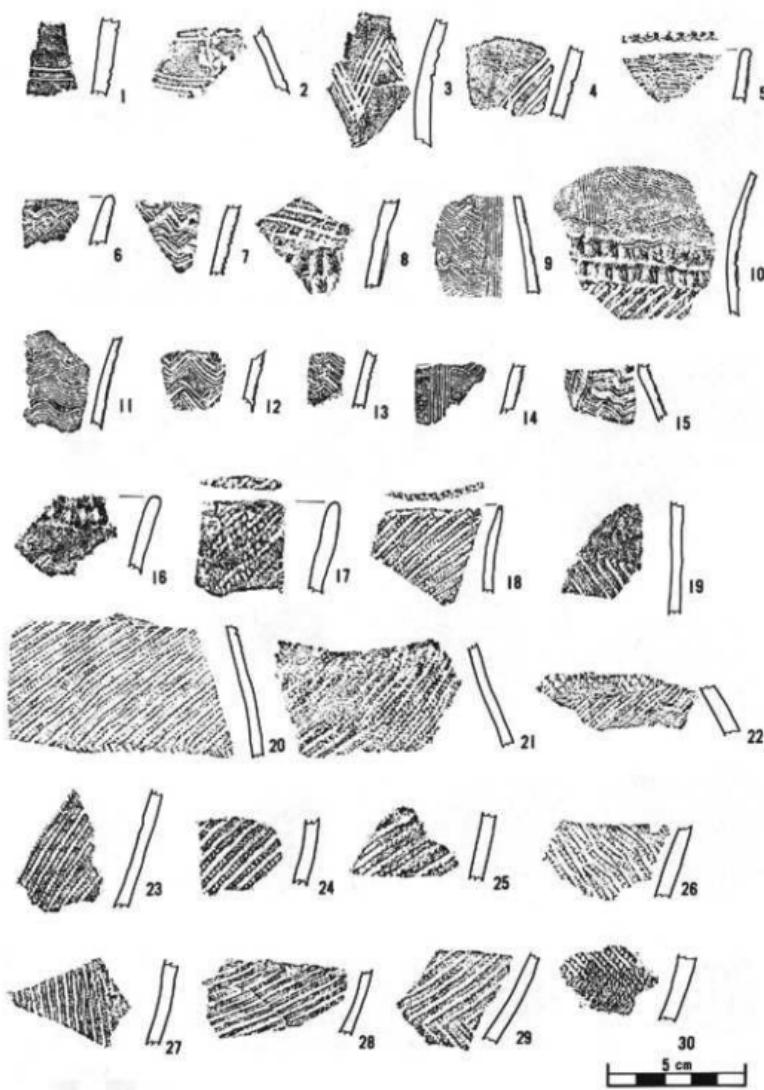
第III群 c（10） 表面に隆起線が配されるもの。

第V群（16～20） 後期初頭に属するもの。16は、口縁部無文帶、微隆起線文を持つ。あるいは、前段階のものか。17は、把手部。20は、底部である。

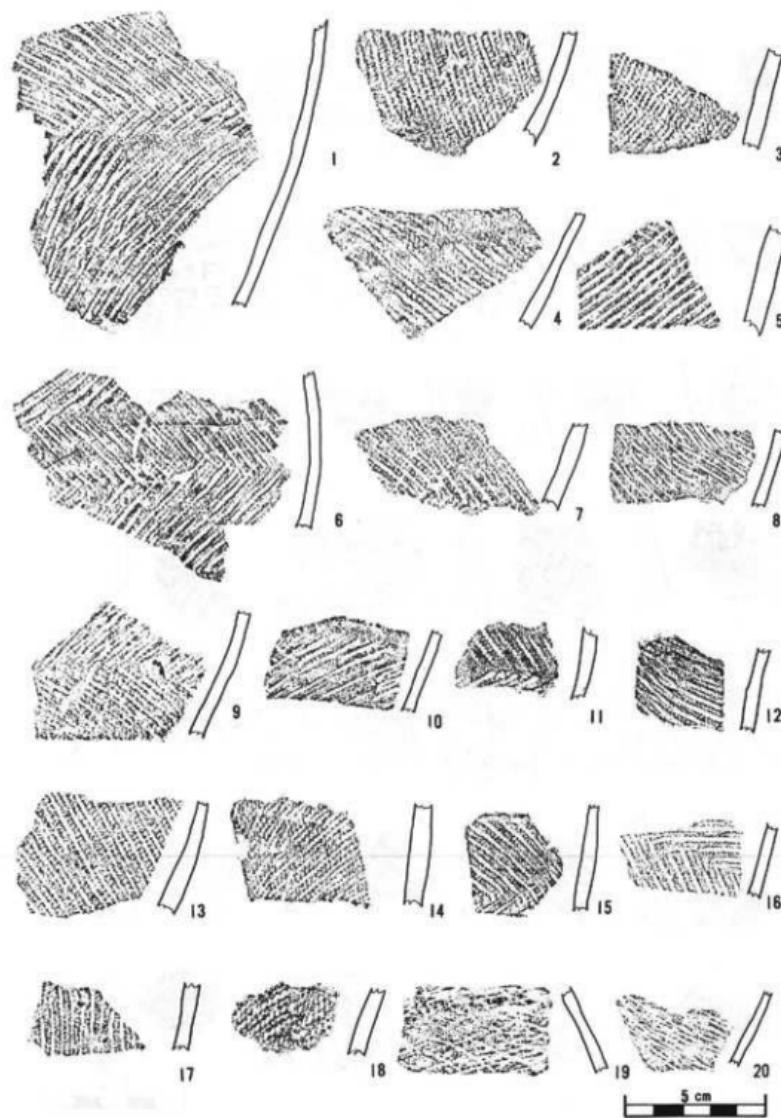
弥生式土器（第25図～第28図）

第II類（第25図 1, 2, 4） 半截竹管による沈線文を配するもの。

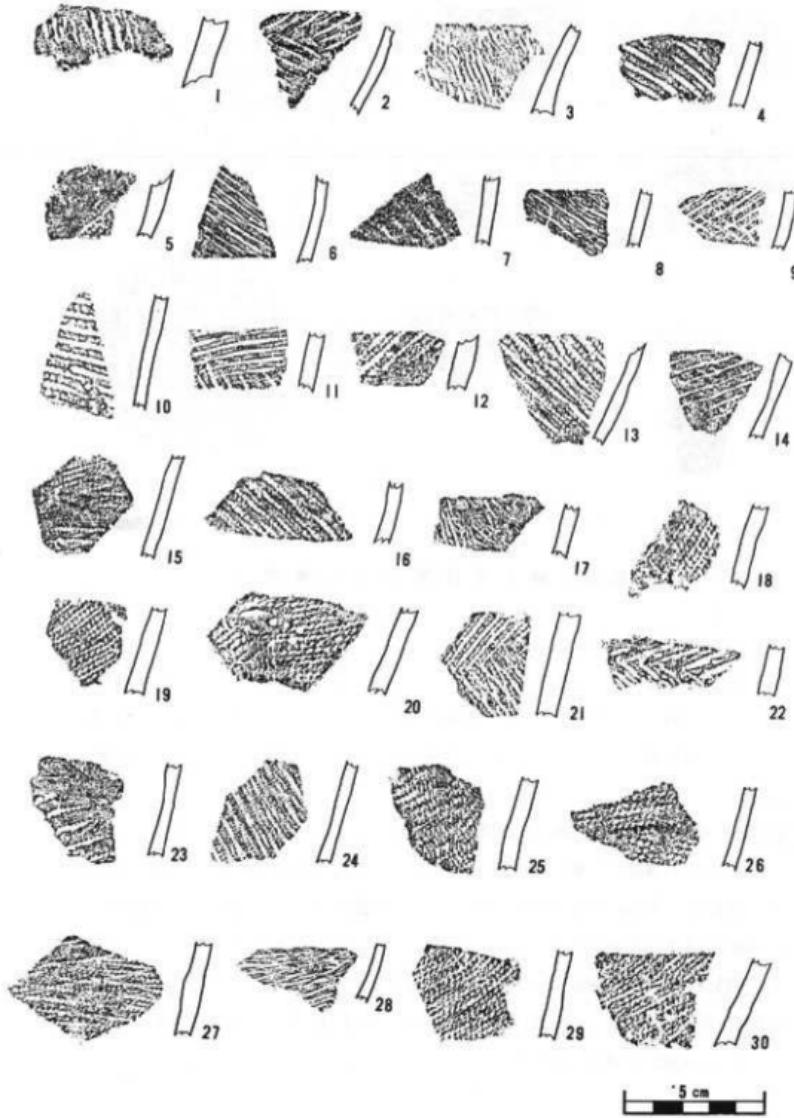
第III類（第25図 3, 5, 7, 8～15） 極描文を有するもの。



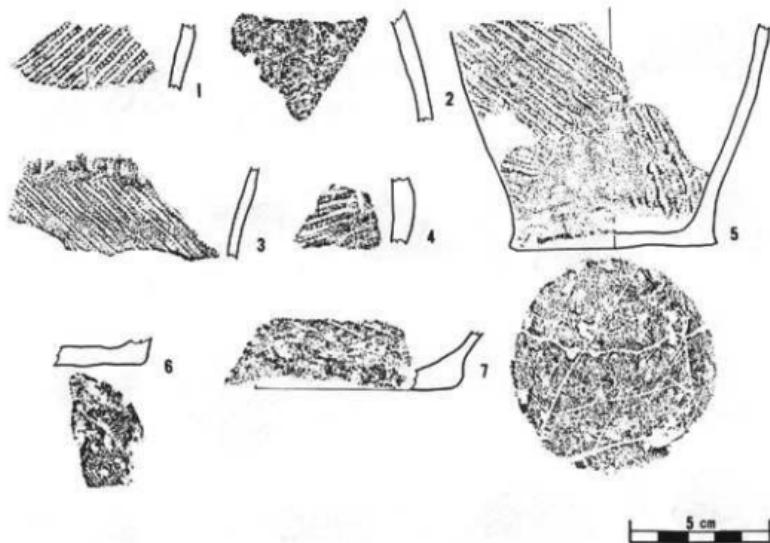
第25図 第5号住居址出土遺物（2）



第26図 第5号住居址出土遺物 (3)



第27図 第5号住居址出土遺物(4)



第28図 第5号住居址出土遺物(5)

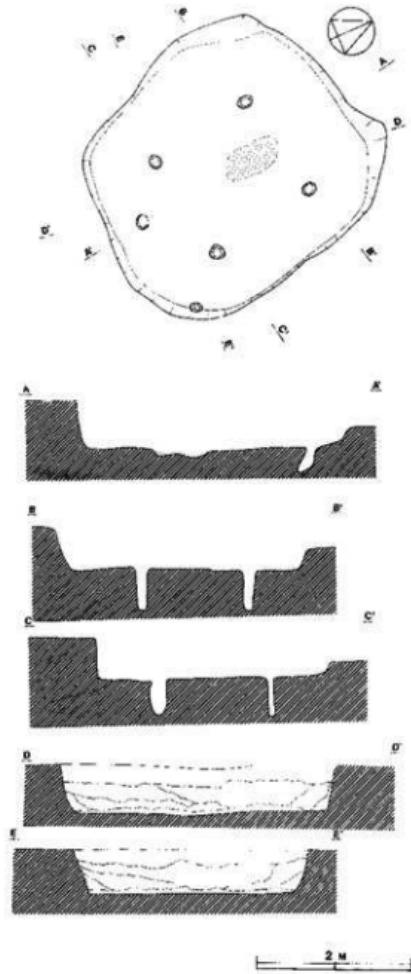
a1 (5, 6) 口縁部片。波状櫛描文を配するもの。5は、口唇部に縄文原体による押圧がある。
 b1 (3, 7, 11~13) 頭部片。3は、鋸歯状の櫛描文。他は、波状櫛描文を配する。b2 (9, 10, 14, 15) 縦区画が入るもの。10は、(隆起線+刺突)が2列配される。隆起線→縄文の施文順である。

第IV類(第25図16~30, 第26図, 第27図, 第28図1~4) 縄文を配するもの。

a1 (16~18) 口縁部から縄文を配するもの。17, 18は、口唇部に縄文原体の押圧がある。
 b1 (第25図19) 頭部に無文帯を配するもの。b2 (第25図20~22, 第26図19, 第28図2) 頭部、又は、胴部上半と思われるもの。

c (第25図23~30, 第26図1~18, 20, 第27図1~30, 第28図1, 3, 4) 脚部片。

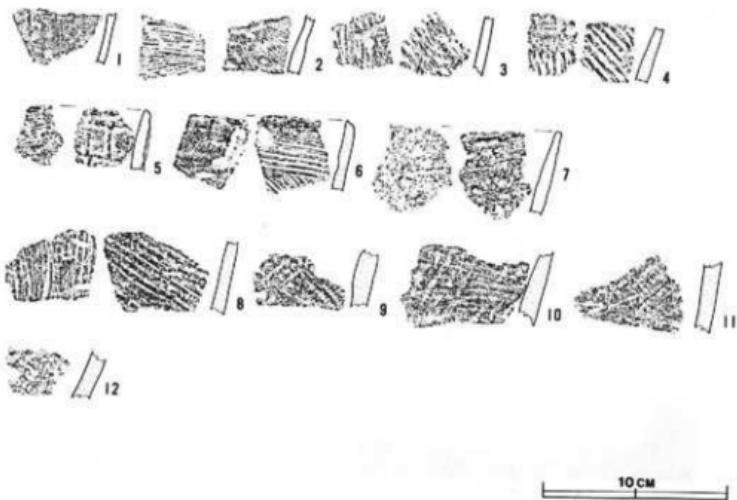
第VI類(第28図5~7) 底部片。5は、底径7.6cm前後。表面に縄文、底面に木葉痕が配される。6は、底面に木葉痕が配される。



第29図 第6号住居址実測図

第6号住居址（第29図）

本址は、遺跡の北側、E 5区、第5号住居址の西側に位置する。主軸方向は、N-10°-Wを示す。平面形状は、長径3.6m、短径3.3m前後と比較的小さく、ややくずれた隅丸方形を呈する。壁高は、0.15m～0.6mまで、南側の壁高が低い。壁は、床面から75°～85°の比較的急な角度で



第30図 第6号住居址出土遺物（1）

立ち上がる。炉は、中央部に位置する。ピットは、5個所確認された。4個所が主柱穴と思われる。床面から0.5m前後の深さである。土層断面は、レンズ状に堆積しており、自然堆積と思われる。時期は、出土遺物より弥生期と推定される。

第6号住居址出土遺物（第30図～第40図）

出土遺物は、縄文式土器、壺、甕、高杯等の弥生式土器が出土している。

縄文式土器（第30図）

第I群 b (1) 単軸絡条体を配するもの。

第II群 b (2) 口縁部。微隆起線が配される。表裏に条痕が配される。

c (6) 口縁部。外側にカットされた口唇部に絡条体圧痕文が配される。

d (3～5, 6, 7) 表裏に条痕文を配するもの。

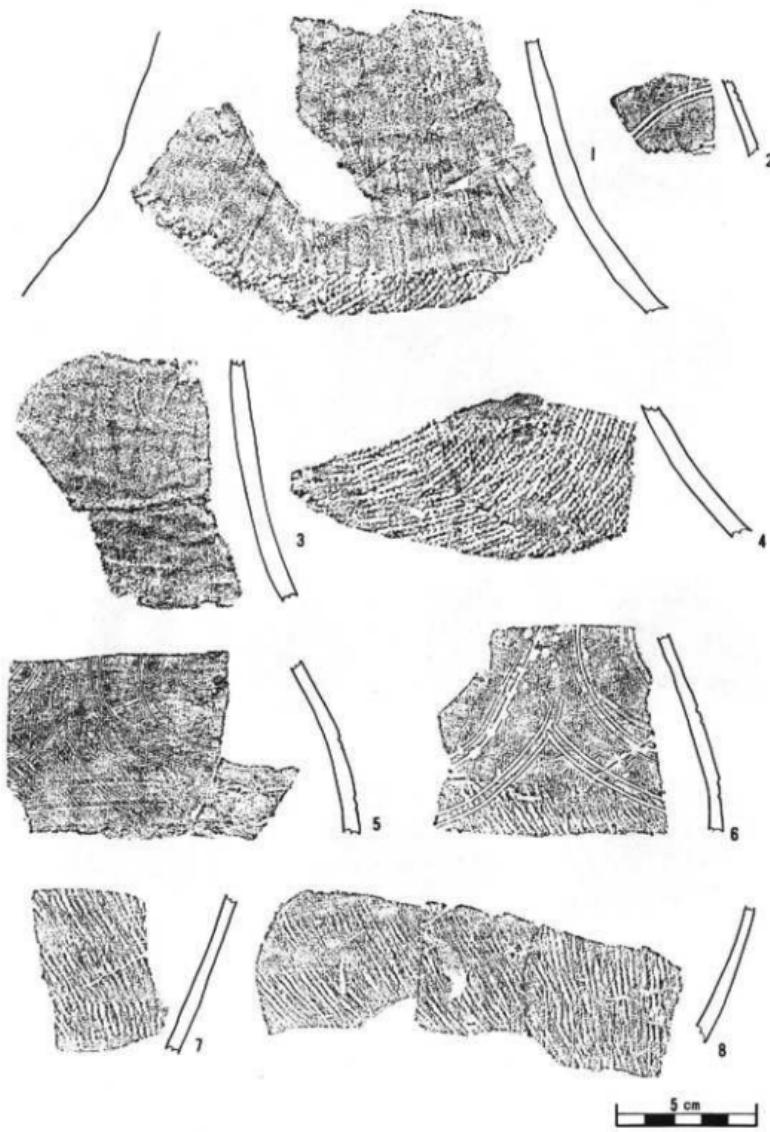
第III群 a (8) 表面に縄文、裏面に条痕が配されるもの。

b (9～12) 表面に縄文を配するもの。

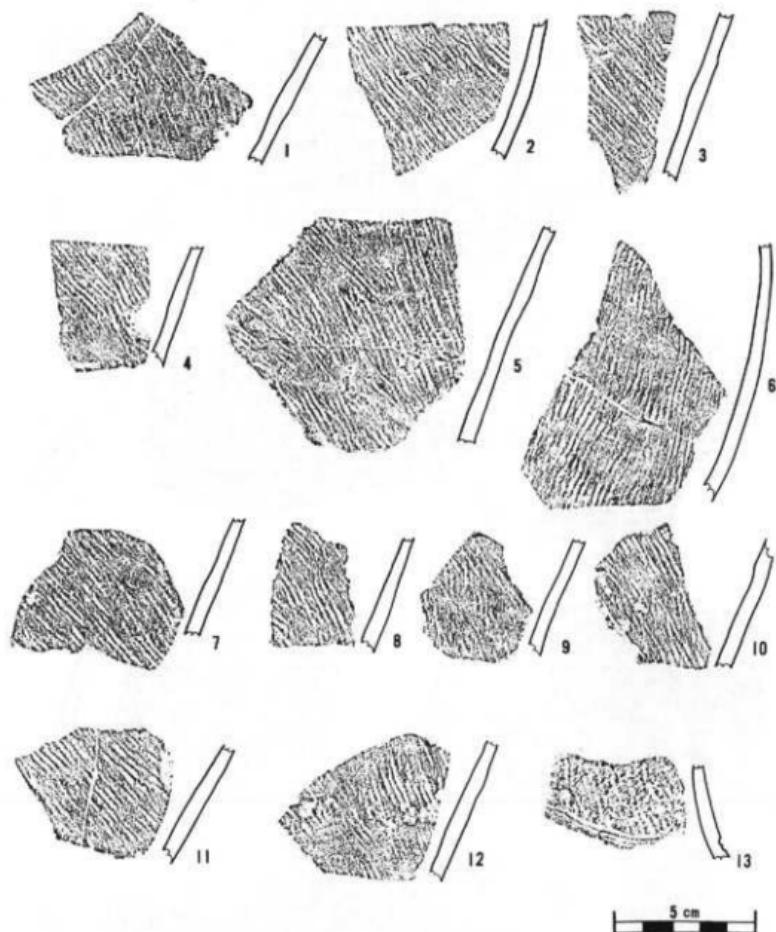
弥生式土器（第31図～第40図）

第I類（第32図13） 縄文+沈線のものか。頸部に、櫛状工具による横位沈線が配される。

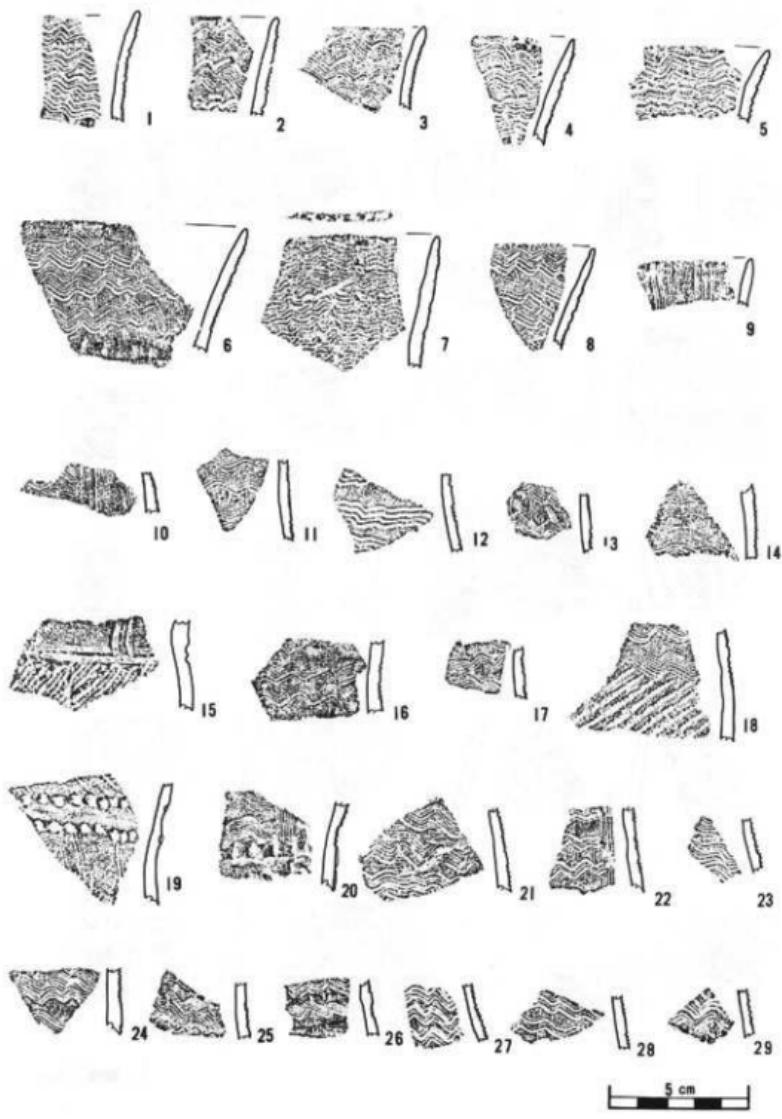
第II類（第31図、第32図1～12） 沈線文系の土器群である。1, 3, 4は、長頸壺。頸部と



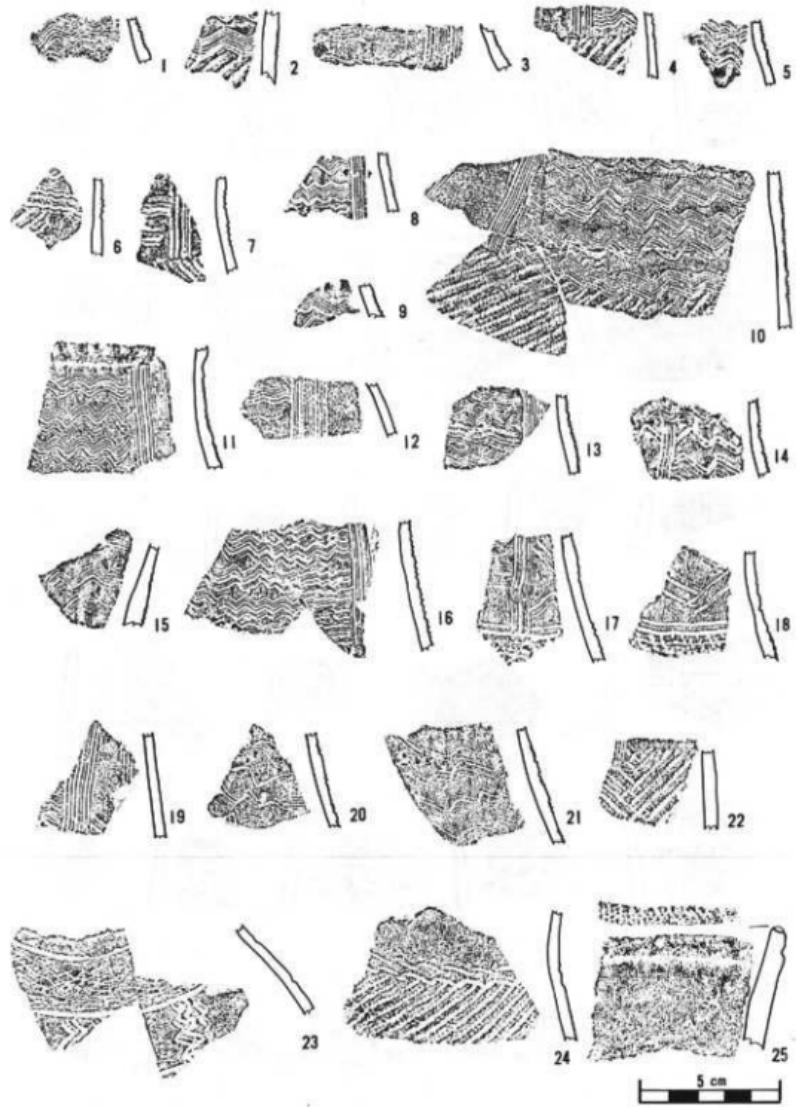
第31図 第6号住居址出土遺物（2）



第32図 第6号住居址出土遺物(3)



第33図 第6号住居址出土遺物(4)



第34図 第6号住居址出土遺物(5)

思われる。1, 3は、無文部を持つ。2, 5, 6は、半截竹管文によって溝文を描く。5, 6は、同一個体と思われる。第31図7, 8, 第32図, 1~12は、胸部片である。第31図5, 6と同一個体と思われるが接合しなかった。

第三類（第33図、第34図1~22） 梯描文を配するもの。

a1（第33図1~8）口縁部。梯描波状文を有する。7は、口唇部に繩文原体による押圧がある。

a2（第33図9）口縁部。梯描波状文を有し、縦区画を有するもの。

b1（第33図11~14, 16~18, 21~29, 第34図1, 2, 5, 6, 9, 20~21）梯描波状文を配するもの。（現状で縦区画がないもの）12は、比較的太目の波状文である。

b2（第33図10, 19, 20, 第34図3, 4, 7, 8, 10~14, 16, 19, 22）縦区画+梯描波状文のもの。第33図19, 20, 第34図9, 11は、（隆起線+押圧）の横位区画がある。

c（第33図15, 第34図17, 18）半截竹管により文様を描くもの。17, 18は、縦区画が配される。横位区画内に刺突が充填される。

d（23）横位帶状の2本沈線間に網目状撚糸文を充填させるもの。縦位の波状文が配される。きわめて、特異なもの。

第四類（第34図24, 25, 第35図, 第36図, 第37図, 第38図, 第39図1~10）繩文が配される。

a1（35図3, 5~11）口縁部から繩文を配するもの。口唇部に、繩文原体による押圧がある。

3は、（隆起線+繩文原体末端による押圧）で区画する。9~11は、繩文原体末端による押圧がある。

a2（第35図1, 2）aと同様であるが、繩文原体が異なるもの。

a3（第34図25）口縁部に無文帶を配するもの。

b1（第36図16, 第37図10, 13~14, 第38図18, 21, 第39図9）頭部に無文部を持つもの。

b2（第36図5, 10, 第37図1, 2, 第38図19, 第39図7, 10）頭部、又は胸部上半部のもの。

c（第35図12, 13, 15~22, 第36図1~4, 6~9, 11~15, 17~23, 26~28, 第37図1, 3~9, 12, 15~17, 第38図1~17, 19~28, 第39図1, 3~6, 8）胸部片である。

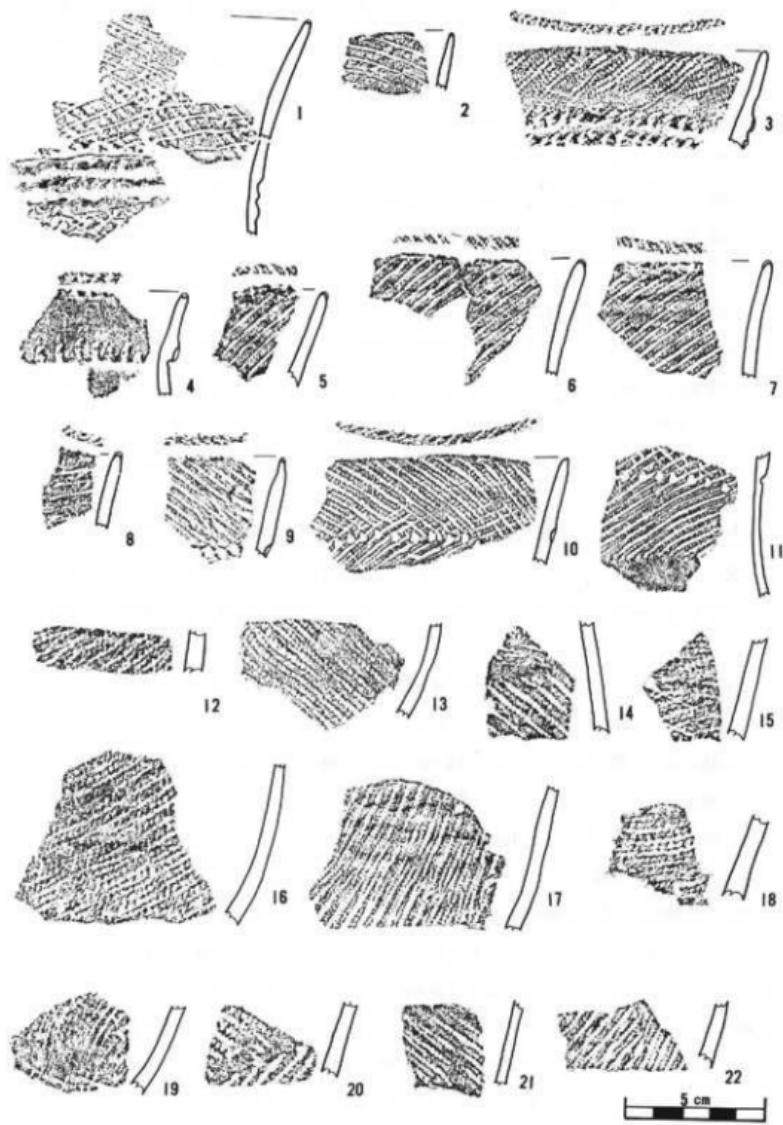
第六類（第39図11~13, 第40図7）底部片。13は、布目痕。12は、木葉痕。11は、無文である。

第40図7は、底径13cm前後で、底面に布目痕がある。器面の繩文は、第二類のものか。

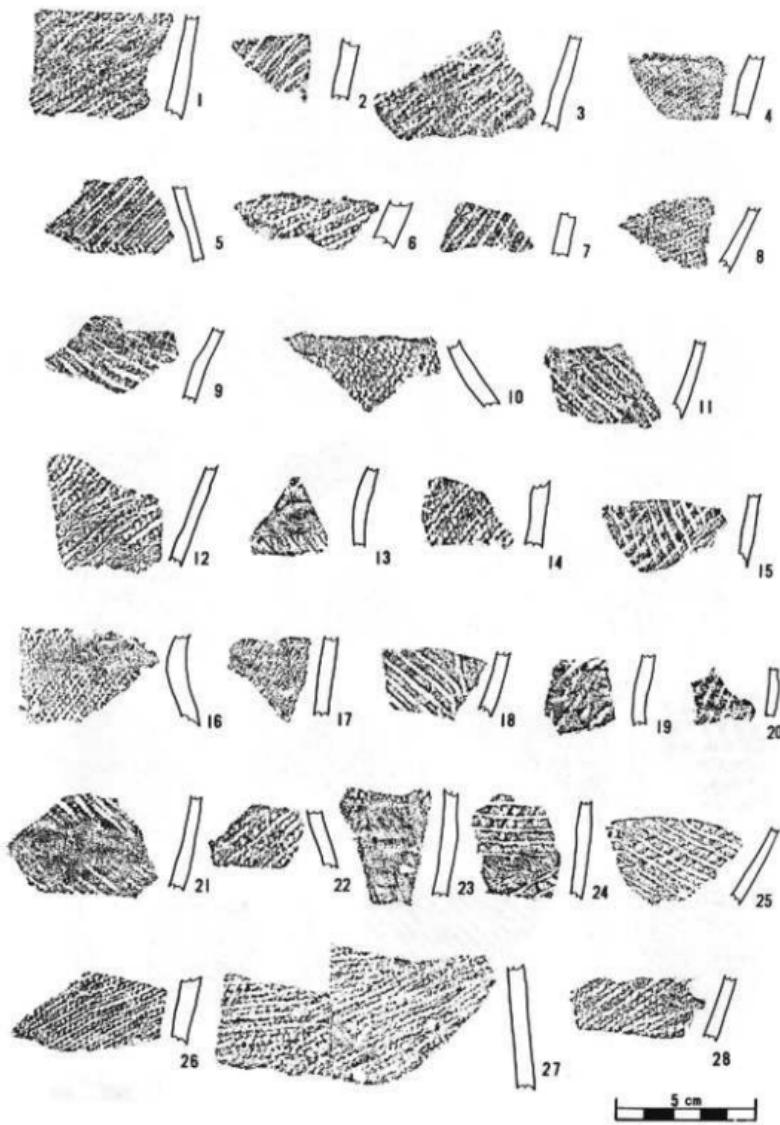
第六号住居址からは、5個体の土器が実測可能であった。個々に説明したい。

第40図1——壺形土器、上半部である。口径14.4cmを計る。口唇部には、繩文原体による押圧がある。頸部でゆるやかに屈曲する。最大径は、胸部にあるものと思われる。文様は、2条の（隆起線+刺突）で分割される。上位、下位ともに、縦区画のある梯描波状文を配している。下位の梯描文下には、繩文が配される。

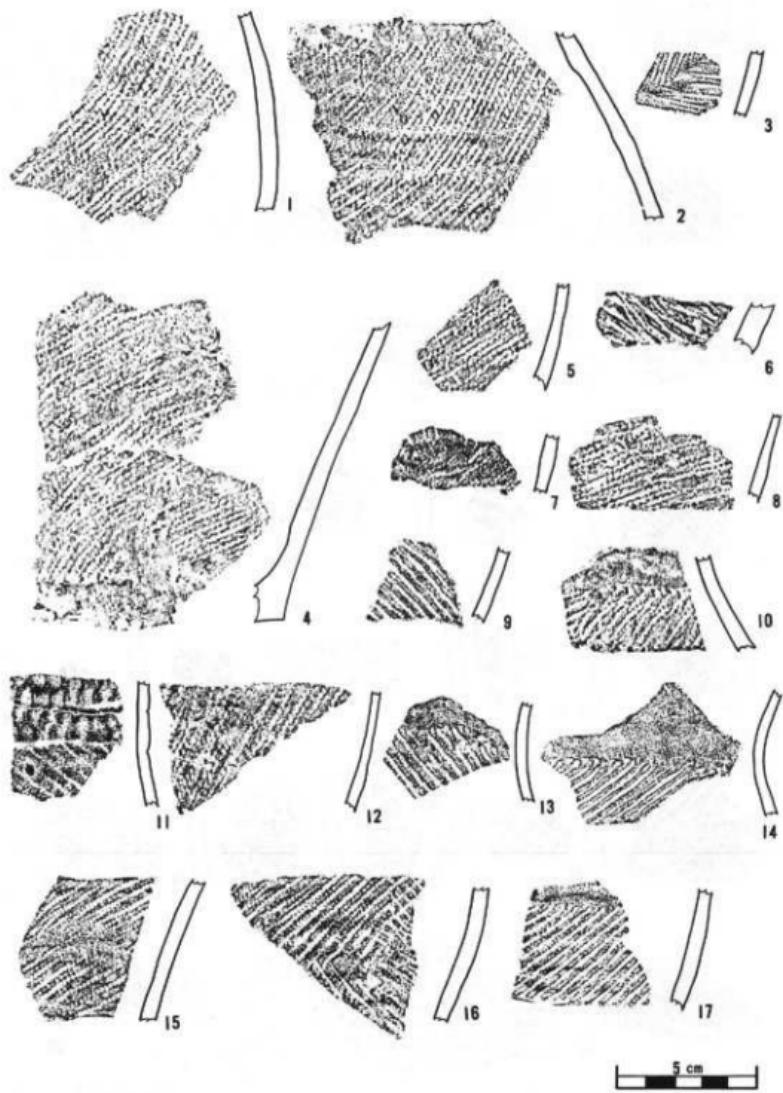
第40図2A・B——壺形土器上半部である。口径14.2cm。口唇部に繩文原体による押圧がある。器



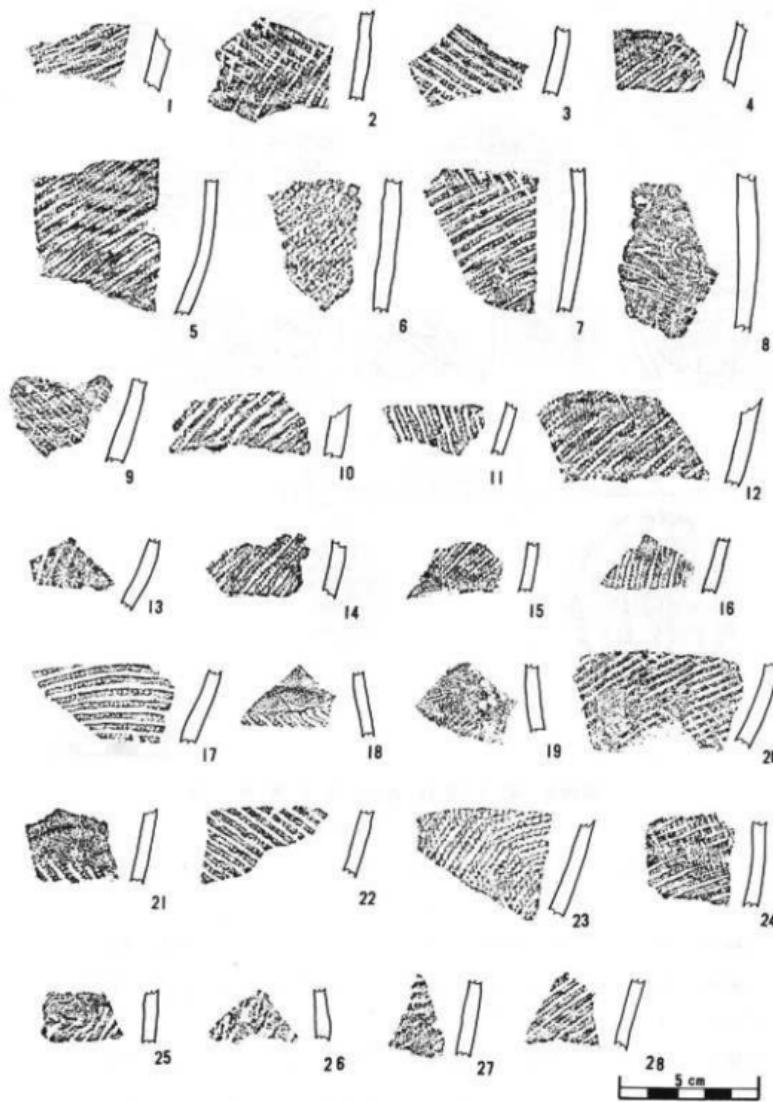
第35図 第6号住居址出土遺物(6)



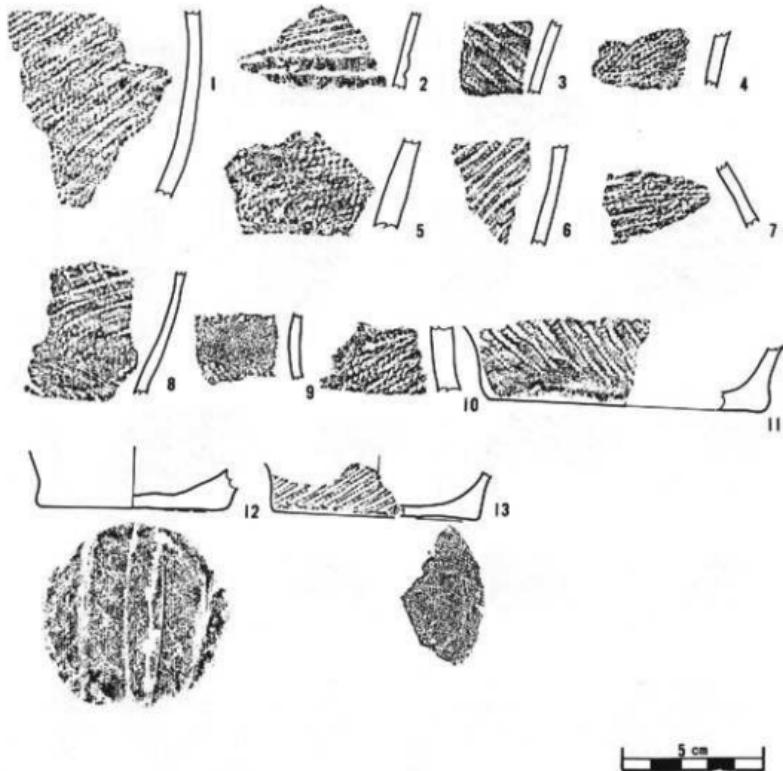
第36図 第6号住居址出土遺物(7)



第37図 第6号住居址出土遺物(8)



第38図 第6号住居址出土遺物 (9)



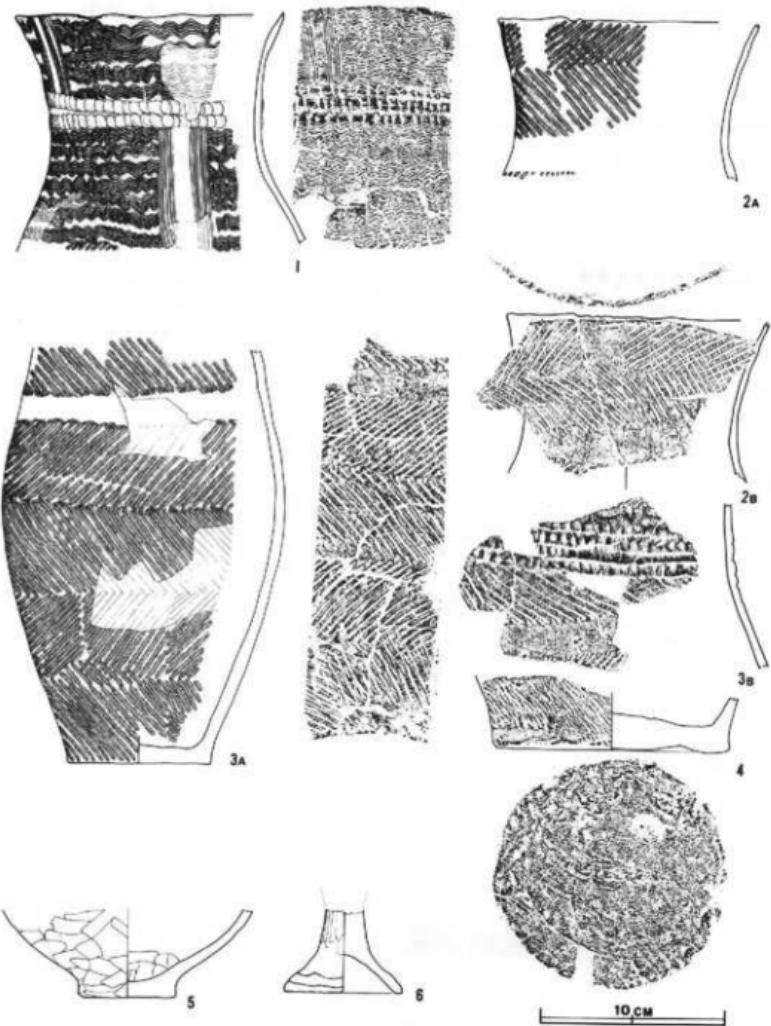
第39図 第6号住居址出土遺物 (10)

形は、1とはほぼ同様である。文様は、羽状繩文が配される。頸部屈折部付近で、無文帯を形成する。

第40図3、4——同一個体と思われるが接合しなかった。壺形土器、胴部。底径7.8cm。胴部に羽状繩文が配される。胴部最大径付近より上に無文帯が形成される。無文帯の上には、4条の（隆起線+押圧）が認められる。

第40図5——壺形土器。底部付近。底径5.3cm。胴部にかけて、径がかなり大きくなるものと思われる。器面は、ヘラなどで行なわれる。器面の無文化、及び器形が特異である。

第40図6——高杯形土器脚部。底径6.4cmを計る。胴部には、輪積み痕が残され、縦位のヘラみがきが行なわれている。



第40図 第6号住居址出土遺物 (11)

第7号住居址（第41図）

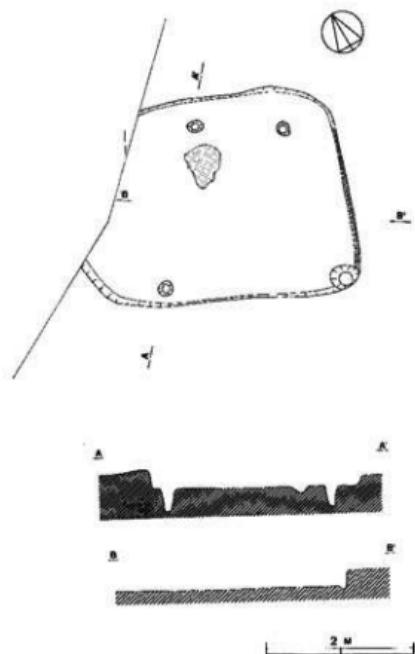
本址は、遺跡の南側、G 6 区、第3号住居址の東側に位置する。北西側を、第3号溝によって切断されている。主軸方向は、N-67°-Wを示す。長径不明、短径2.8mの隅丸長方形を呈するものと思われる。壁高は、0.2m~0.3mで浅く、壁は、床面から85°~90°の急角度で立ち上がる。東側壁下には、深い壁下溝が認められる。炉址は、中央部より若干北側に位置する。短径0.5m、長径0.6mの不定梢円形を示す。ピットは、4個出土している。位置は、不規則である。深さは、0.2m~0.3mである。本址は、出土土器より弥生期と推定される。

第7号住居址出土遺物

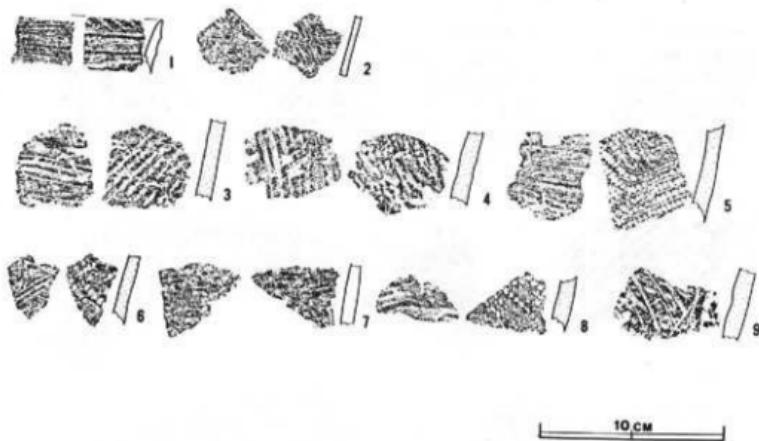
出土遺物は、縄文式土器、弥生式土器である。

縄文式土器（第42図）

第II群 b・c (1) 表面に微隆起線を横位に配し、外側にカットされた口唇部に格条体圧痕文



第41図 第7号住居址実測図



第42図 第7号住居址出土遺物(1)

を配するもの。縦条体压痕文は、裏面にも見られる。

第II群d(12)表面、裏面ともに擦痕状の調整痕を持つもの。

第III群a(5~8)表面に条痕→繩文を配し、裏面に条痕が配されるもの。

第III群d(9)表面に沈線文が配されるもの。

弥生式土器(第43図~第45図)

第III類(第43図6, 8)櫛描文を持つもの。

b1(6)櫛描波状文を持つもの。

b2(8)縦区画+波状文を持つもの。

第IV類(第43図1~5, 7, 9~13, 第44図1~3)繩文を配するもの。

a1(第43図1~3, 5)口縁部。1~3まで、口唇部に繩文原体による押圧がある。5は、繩文原体末端による刺突列を配し、文様帯を区画する。

b1(第44図3)頸部片。繩文が特異である。

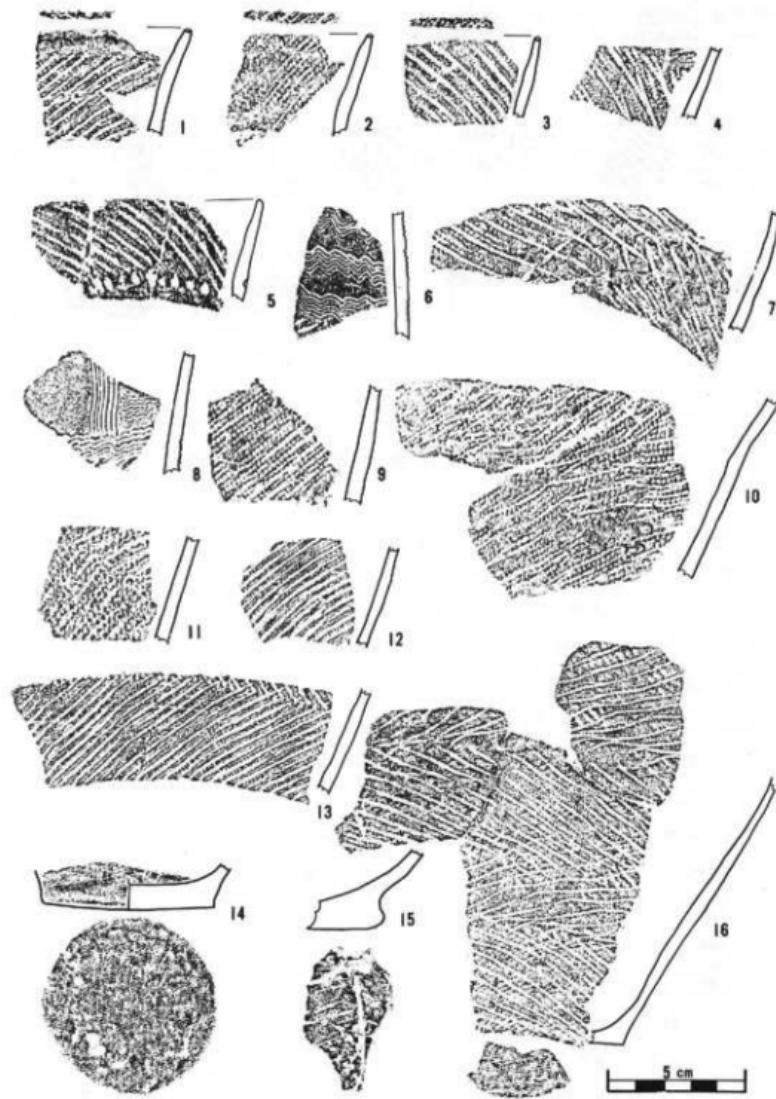
c(第43図4, 7, 9~13, 第44図1, 2)胴部片である。

第VI類(第43図14~15)底面片。14, 16は、底面に木葉痕が配される。

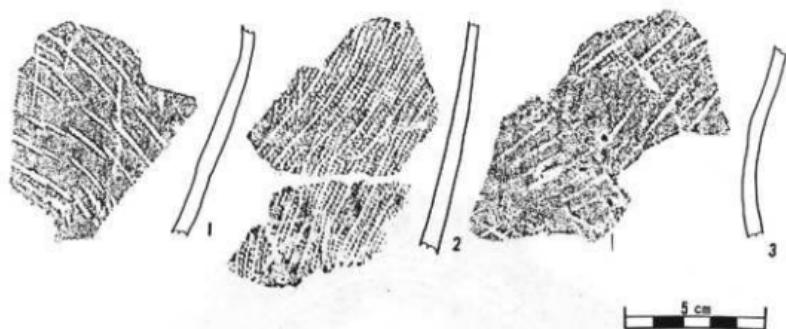
本址からは、器形が判明されるものが、3個体出土している。以下、個々に説明していきたい。

第45図1——大形壺の上半部と思われる。口径は、不明。頸部屈曲部は、21.4cmを計る。口唇部には、繩文原体による押圧がある。2条の(隆起線+押圧)を2ヶ所配し、文様を分帶する。

上部は、無文帯、下部には、繩文を配する。繩文は、附加条第2種の羽状繩文を配する。



第43図 第7号住居址出土遺物（2）



第44図 第7号住居址出土遺物(3)

第45図2——筒状の小形土器である。口径4cm、底径3.7cm、器高8cm前後の筒形である。表面には、荒く繩文が配される。裏面は、輪積み痕が残存する。

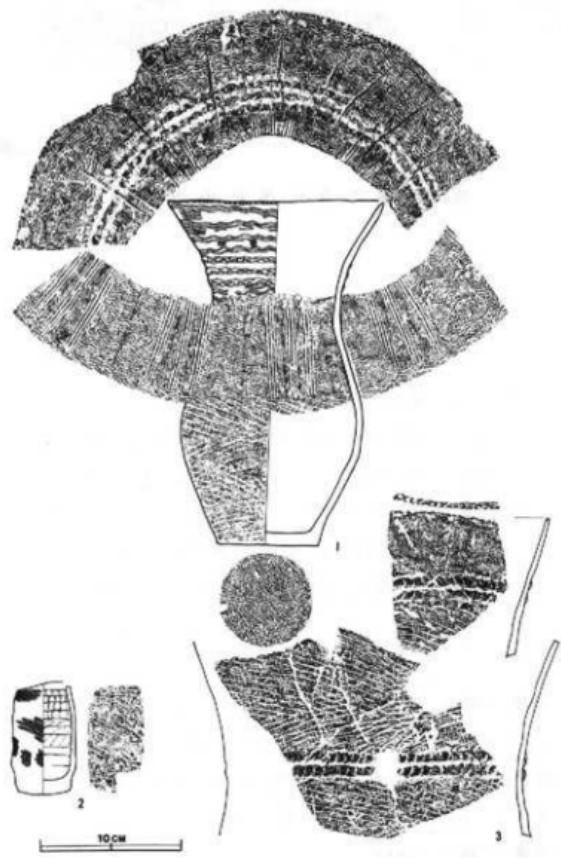
第45図3——壺形土器。口径15.3cm、頸部径9cm、胴部径13cm、底部径7.2cm、器高24.2cmを計る。最大径は、口縁部にあり、頸部でゆるく展開し、胴部に移行する。胴部の最大径は、やや下方にある。口唇部に繩文原体による押圧がある。文様帶は、3帯ある。口縁部と頸部は、(降起線+押圧)で区画する。口縁部文様帶は、波状文が配される。頸部文様帶は、3本1組の櫛描文で4単位の区画が行なわれる。胴部は、附加条第2種による羽状繩文が配される。底面には、布目痕が配される。

第1号溝(第46図、第47図)

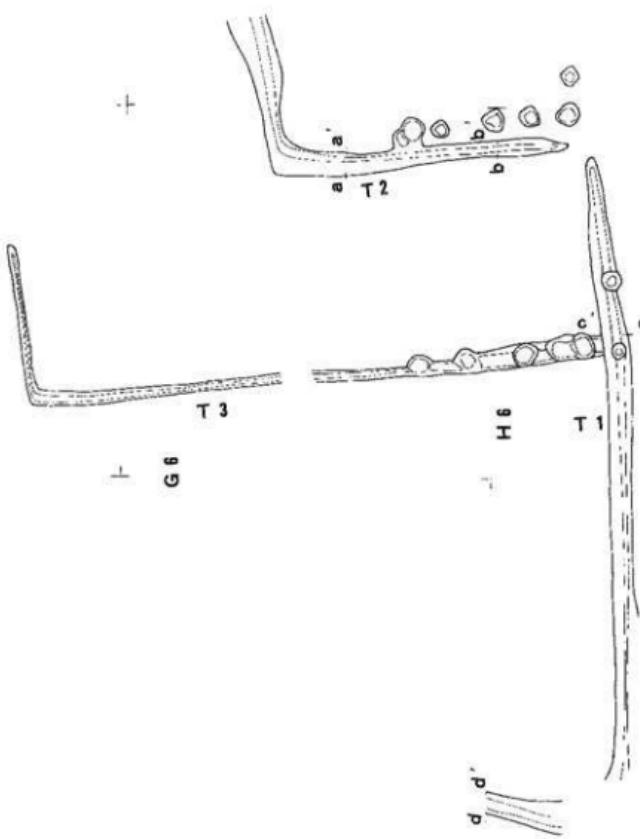
遺跡の南端部に位置する。H 6区～H 5区にかけて、東西に延びる。H 4区、遺跡の南西部まで、約34m前後直線的に延びて、北方向に直角に屈曲する。幅1.2m前後で、掘り込みは浅くU字状を示す。遺物は、ほとんど出土せず、時期は、不明である。

第2号溝(第46図、第47図)

遺跡の東側に位置する。H 6区～G 6区にかけて、北方向に延び、G 6 e 3区で東方向に直角に屈曲する。幅が1m～1.5mで、掘り込みは、浅く「U」字状を呈する。遺物は、ほとんど出土していないが、本址は、第1号墳の周溝を切断しており、第1号墳より新しい時期のものと思われる。



第45図 第7号住居址出土遺物 (4)



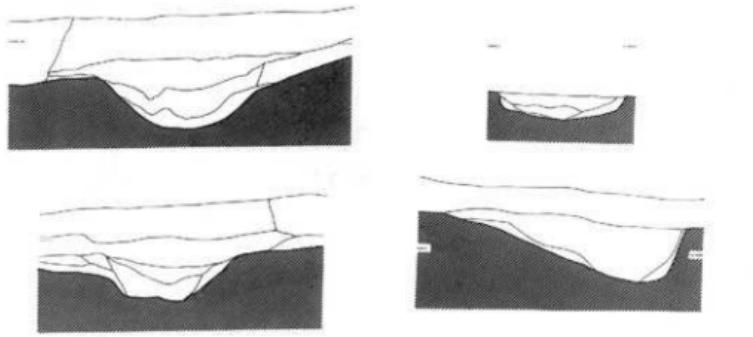
第46図 溝（第1号、第2号、第3号）実測図

第3号溝（第46図）

遺跡のはば中央部に位置する。H 6区～F 6区にかけて、北方向に延び、F 6 b 3区で、東方向に直角に屈曲し、F 6 d 3区で終結する。幅0.5m前後で、「U」字状に掘り込まれているが、壁は、直角に近い角度で底面に移行する。本址は、第2号住居址、第3号住居址を切断し、第1号墳周溝を切っている。第1号墳より新しい時期のものと思われる。

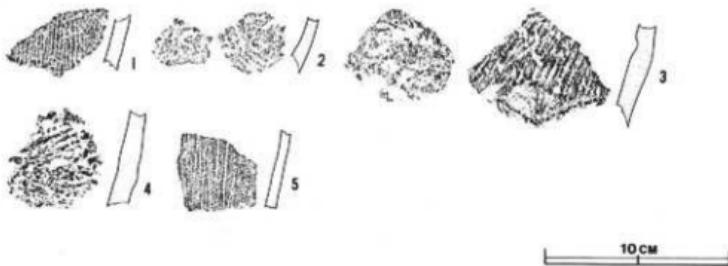
第3号溝出土遺物（第48図、第56図）

第3号溝とは関係しないが、覆土より、縄文式土器、弥生式土器が出土している。



第47図 溝土層断面図

第1号溝、第2号溝
 I：耕作土層、熟土層
 II：暗褐色土層
 III：暗褐色土層（ロームブロックを含む）
 III'：暗褐色土層（ロームブロック、炭化物を少しまじ）
 IV：明褐色土（黒色土ブロックを含む）
 V：茶褐色土層
 V'：茶褐色土層（やや赤みをおびている）
 V'':：茶褐色土層（ロームブロックを含む）



第48図 第38号溝出土遺物

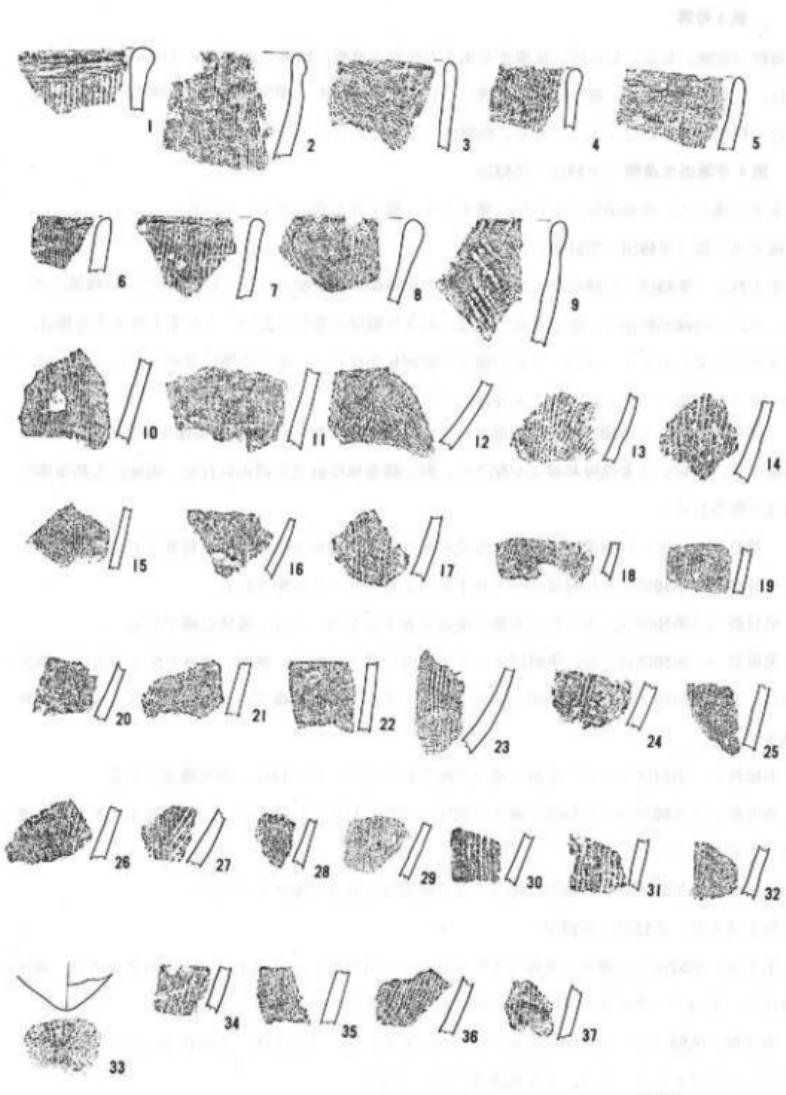
縄文式土器（第48図、第56図15）

第I群 b (1, 5, 第56図15) 摺糸文系の土器群である。15は、口縁部と思われる。

第II群 d (2, 3) 表面、及び裏面に条痕文が配されるもの。

第III群 b (4) 表面に縄文が配されるもの。

弥生式土器（第56図16～19）いずれも第IV類Cで胴部片である。



第49図 第4号溝出土遺物（1）

第4号溝

遺跡の北側、E5、E6区に位置する南北方向から直角に屈曲し、E5e3区で終結する。幅は、1.5m～2.5mで、掘り込みは、浅く「U」字状を示す。第5号住居址を切断している。又土壙状の現代擾乱がかなり入っている。時期は、不明である。

第4号溝出土遺物（第49図～第53図）

第4号溝とは、直接関係しないが、覆土より、縄文式土器が出土している。

縄文式上器（第49図～第51図）

第I群 b（第49図）口縁部から單方向回転の單軸絡条体が配される。1～9まで、口縁部。2、8、9は、口縁部断面が、厚くなる。他は、あまり器厚の変化はない。1が若干外反する他は、直立ぎみに立ちあがる。9は、LRの縄文が綴回転される。一応この類に含めておく。10～32、34～37は、刺部片である。33は、尖底部。

第II群 b・c（第50図2）口縁部。口唇部は、外側にカットされ、絡条体压痕文が配される。表面には、横位に3条微降起線文が配され、軽い絡条体压痕文が認められる。裏面にも絡条体压痕文が配される。

第II群 c（4）口唇部に絡条体压痕文が配される。瘤が2個付着する特異なもの。

第II群 d（第50図2）口唇部にヘラ状工具によるスリットが配される。

第II群 e（第50図3、5～17）表裏に条痕を有するもの。3は、波状口縁である。

第III群 a（第50図19～27、第51図1～6）表面に縄文を配し、裏面に条痕を配するもの。第50図23、27、第51図2等々は、表面が条痕→縄文であることが明瞭である。第51図3、4は、羽状縄文である。

第III群 b（第51図7～17）表面に縄文が配されるもの。12～14は、羽状縄文である。

第III群 c（第50図18）口唇部に縄文の押圧が認められる。口縁部には、隆起線文が配され、裏面に条痕が配される。

第III群 e（第51図18）口縁部に縄文、及び側面体压痕文が配されるもの。

弥生式土器（第52図～第53図）

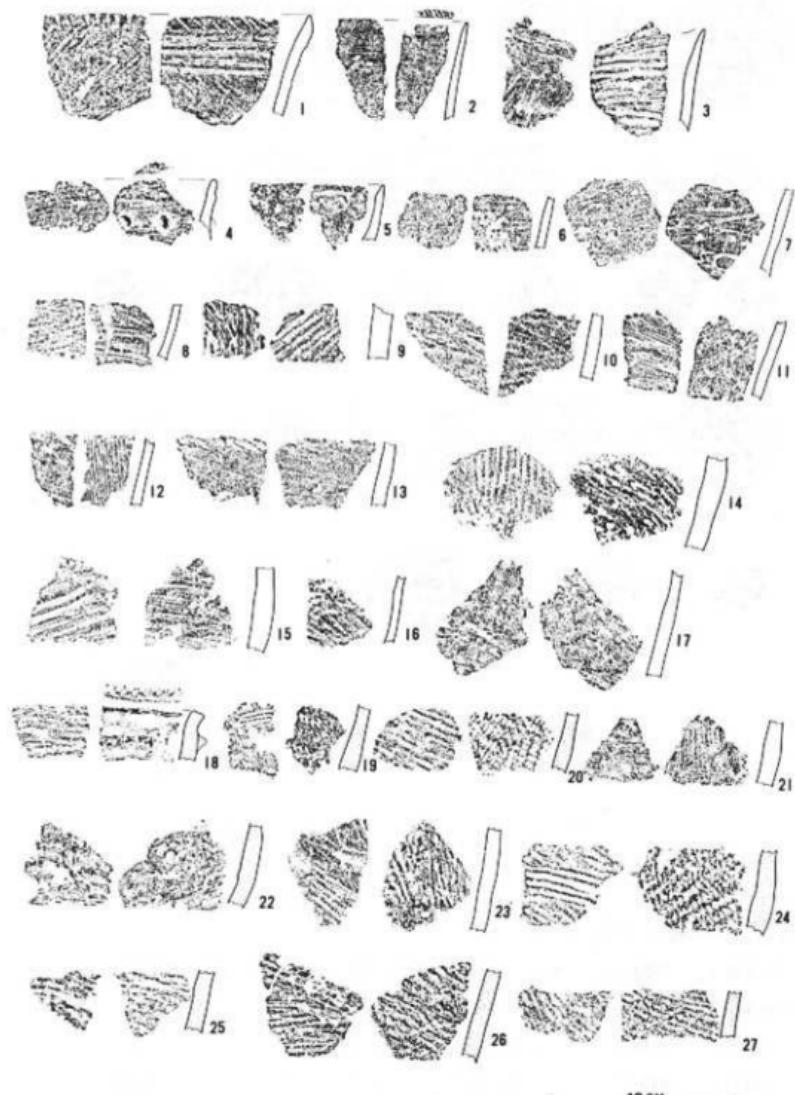
第I類（第52図1）縄文+沈線文を配するもの。口唇部にヘラ状工具による刺突がある。縦区画後に、上向きの連弧文が3段～4段配される。施文具は、3本櫛である。

第II類（第52図2～5）沈線文系の土器群である。2、4、5は、半截竹管による溝文が配されるものと思われる。3は、1本櫛沈線によっている。

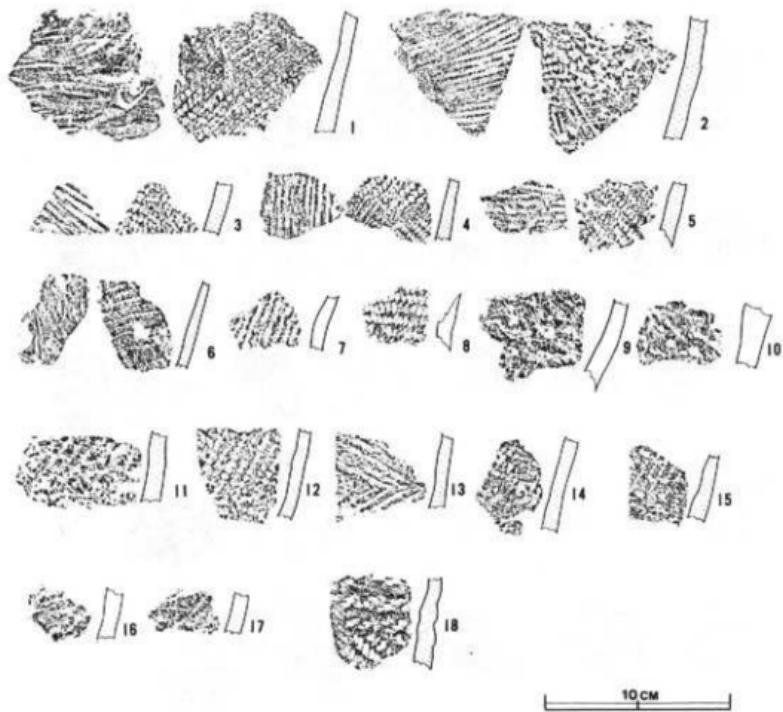
第III類 b 1（第52図8、9）横描波状文を配するもの。

第III類 b 2（第52図6、7）横描波状文を縦区画に配するもの。

第IV類 a 1（第52図10～12）口縁部。口唇部に縄文原体による押圧がある。10は、羽状縄文。



第50図 第4号溝出土遺物(2)



第51図 第4号溝出土遺物（3）

11は、頭部屈曲部に無施文部がある。

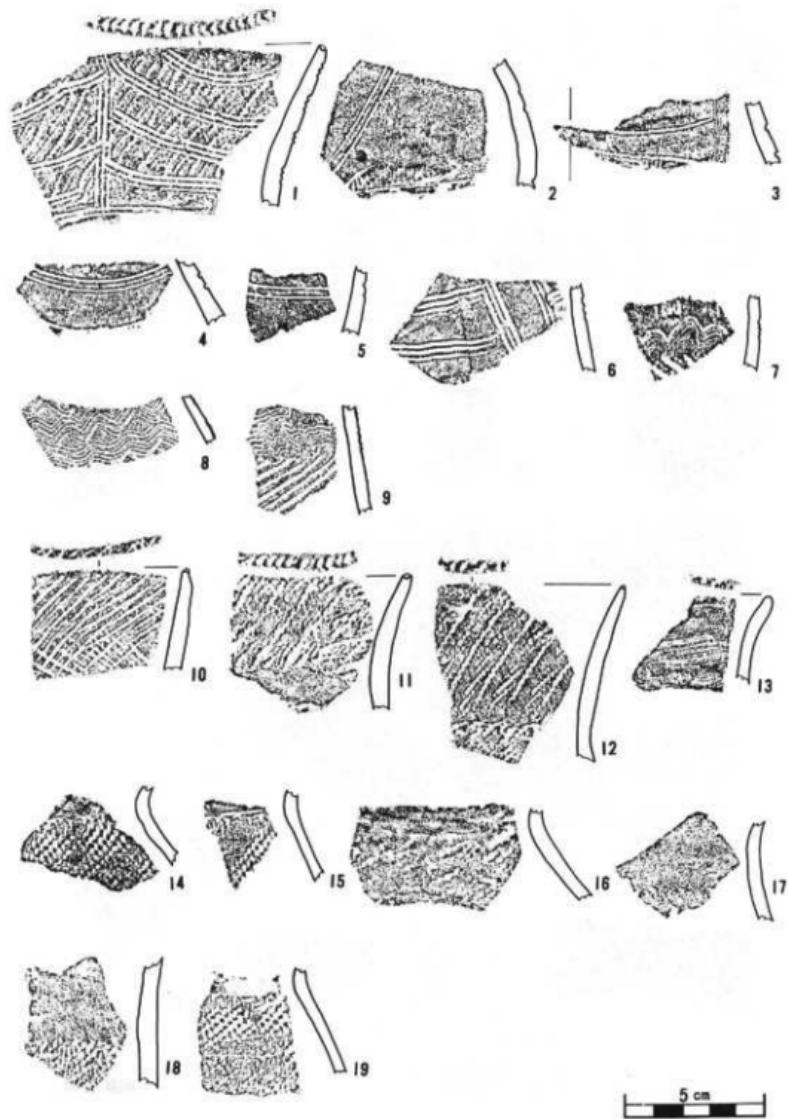
第IV類a 3（第52図13）口縁部。口唇部に繩文原体による押圧、擦痕状の調整痕が認められる。

第IV類b 1（第52図14～19）頭部屈曲部。無文部が認められる。

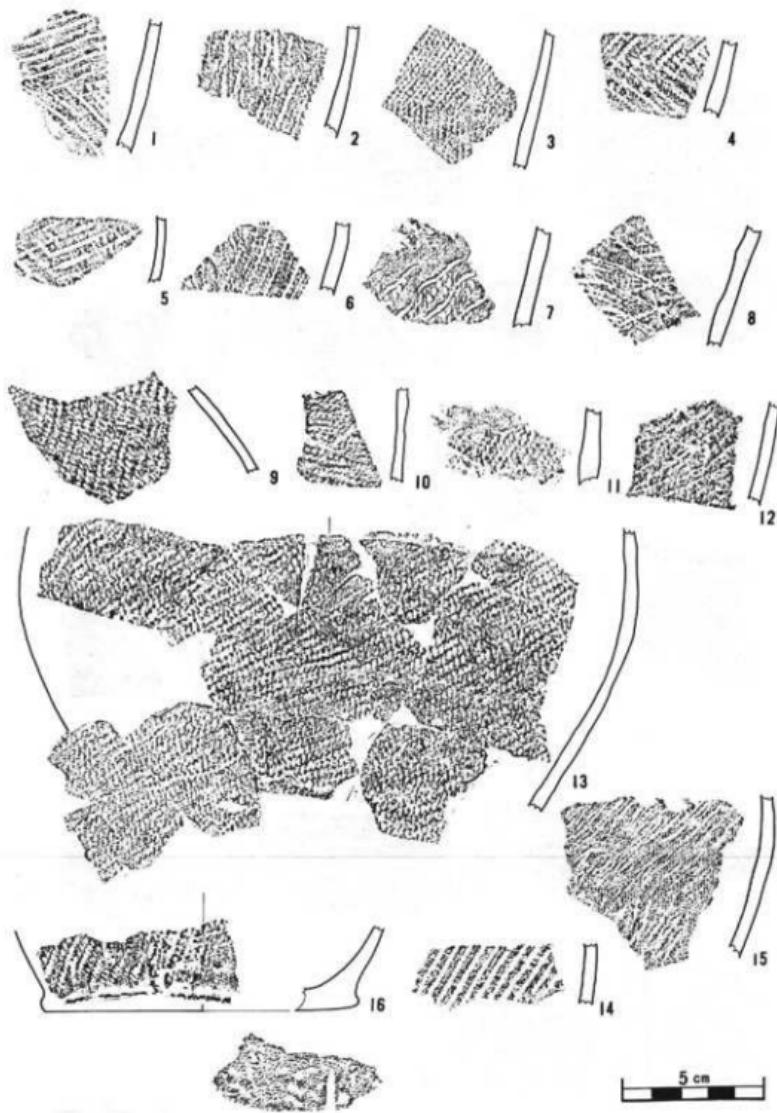
第IV類b 2（第53図9）9は、胴部上半。13と同一個体か。

第IV類c（第53図1～8, 10～15）胴部片である。1は、羽状繩文。13は、胴部最大径22.2cmで、単方向回転の繩文が配される。

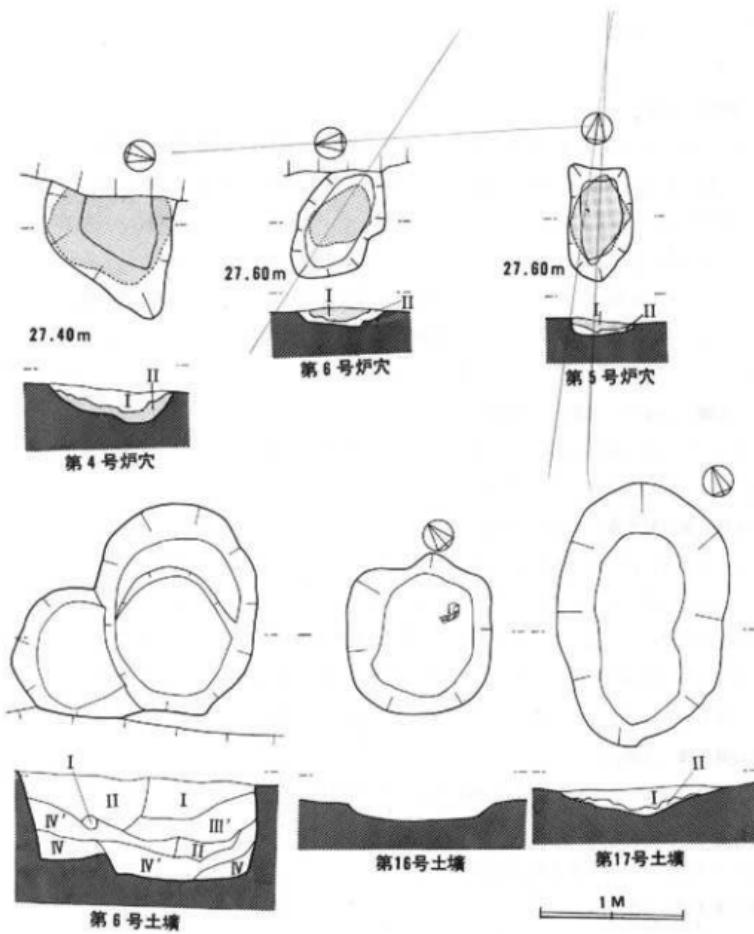
第VI類（第53図16）底部片。底面に布目痕が配される。



第52図 第4号溝出土遺物 (4)



第53図 第4号溝出土遺物(5)



第4号炉穴
I 苔褐色土層（焼土を少量に含む）
II 苔褐色土層（焼土を多量に含む）

第5号炉穴
I 苔褐色土層（焼土を多量に含む）
II 苔褐色土層（焼土を少量に含む）

第6号炉穴
I 苔褐色土層（焼土を多量に含む）
II 苔褐色土層（焼土を少量に含む）

第8号土壤
I 噴褐色土
II 噴褐色土（ロームブロックを含む）
III 明褐色土
III' 明褐色土（ロームブロックを含む）
IV 苔褐色土
IV' 苔褐色（ロームブロックを含む）

第17号土壤
I 苔褐色土層（褐色土ブロックを少し含む）
II 噴褐色土層（褐色土ブロックを多量に含む）

第54図 炉穴，土壤実測図—1

炉穴（第46図）

炉穴は、第1号～第6号まで、6基検出された。いずれも長楕円の土壙に焼上が含まれている。第1号、第5号を除いて、いずれも溝址に切られている。第1号～第4号までは、G6区に位置する。第5号は、E5区、第6号は、E6区に位置する。第1号炉穴は、長径1.1m、短径0.7mである。第5号炉穴は、長径約0.8m、短径0.6mである。いずれも、長楕円形を呈する。

炉穴からの出土遺物は、わずかである。第1号炉穴と第3号炉穴からは、縄文式土器が出土している。第1号炉穴出土土器（1）は、第Ⅲ群、第3号炉穴出土土器（2～5）も、第Ⅳ群土器である。

土壙（第54図、第55図、第56図）

土壙は、第1号～第17号まで、17基検出された。17基の内、第1号～第11号土壙までは、第2号溝、第3号溝と関係するものと思われる。

第1号～第11号土壙（第2図、第8図）

いずれも、直径1m～1.4m前後の円形を呈する。深さは、0.6m～0.8m前後で、床は、平坦である。第2号土壙～第6号土壙までは、G6区からH6区にかけて位置し、南北方向に向かって、直線的に並んでいる。第1号土壙は、第2号土壙の東側に位置する。これらの土壙群は、南北方向に延びる第2号溝と平行して位置する。第7号～第11号土壙は、G6区からH6区にかけて位置し、南北方向に向かって直線的に並んでいる。これらの土壙群は、第3号溝中に存在する。

第12号土壙（第55図）

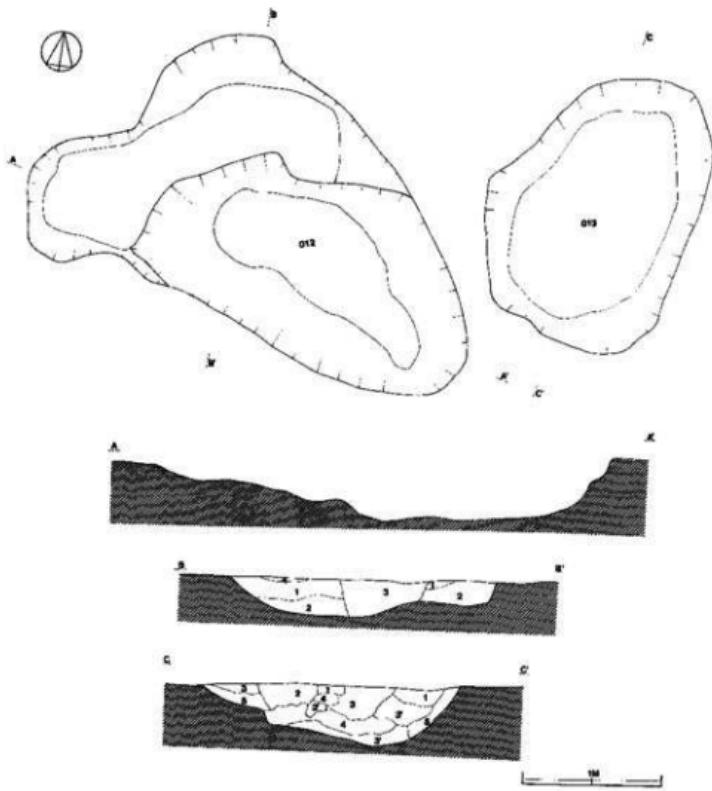
G5区に位置する。長径3.4m、短径1.9mの不定楕円形を呈する。深度0.26mで、北西側が若干高くなっている。壁面は、床面からゆるやかに立ち上がっている。出土遺物は、縄文式土器がわずかに出土している。第Ⅰ群、第Ⅲ群である。

第13号土壙（第55図）

第12号土壙の東側、G5区に位置する。長径2.6m、短径1.48mの楕円形を呈する。深さは、0.42mである。壁面は、床面からゆるやかに立ち上がっている。

第15号土壙（第55図、第56図、第57図）

第4号炉穴の東側に位置する。長径1.14m、短径10.03mの円形状を呈する。深度は、0.12mであり、比較的浅い。本土壙からは、第Ⅱ群に属すると思われる複元可能な縄文式土器が出土している。口径28.4cmで、なだらかに径を減ずる深鉢形土器である。底部が欠失する。洞部は、無文。外側にカットされた口唇部に格条体压痕文が配される。口縁部裏面には、縦位の格条体压痕文、及び格条体を引いたと思われる沈線状の文様が配される。胎土は、若干の纖維が配され、多量の金雲母が入る点特色がある。9は、微隆起線に格条体压痕文が配される。11は、尖底部である。



第55図 土 壤 実 測 図 (2)

第17号土壌（第2図）

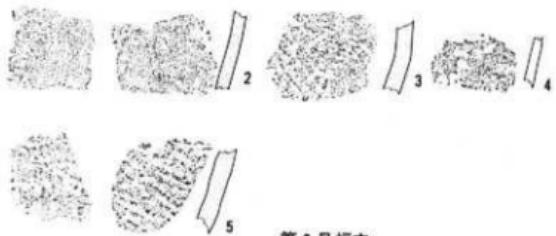
遺跡の北側、F 6区に位置する。長径1.87m、短径1.22mの楕円形を呈する。深さ0.2mで、中心部からゆるやかに立ち上がる。遺物は、縄文式土器片が少量出土している。いずれも第III群である。

第1号墳（第58図）

第1号墳は、遺跡の中央部東側、F 6区、F 7区、G 6区、G 7区にかけて検出された。調査前の観察では、墳丘は確認されなかった。耕作により削平されたものと思われる。西側は、第3号溝、南西～中央部にかけて水道溝によって、南側は第2号溝によって切断されている。



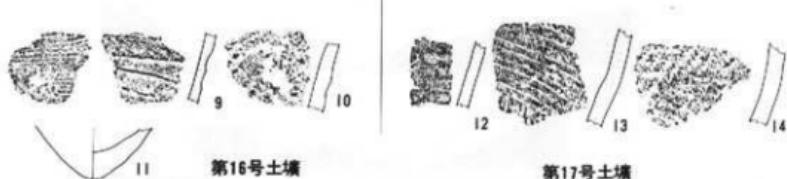
第1号炉穴



第3号炉穴

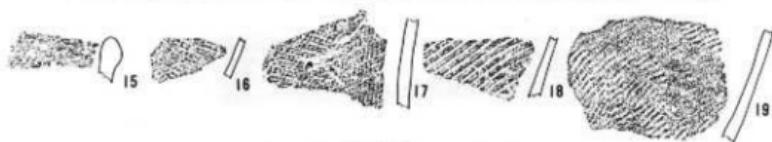


第12号土壤



第16号土壤

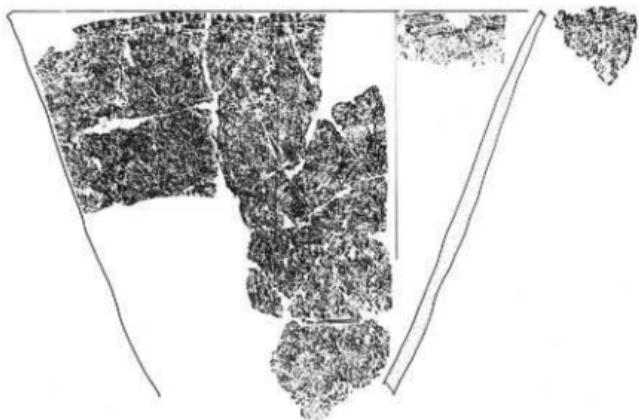
第17号土壤



第3号溝

10 CM

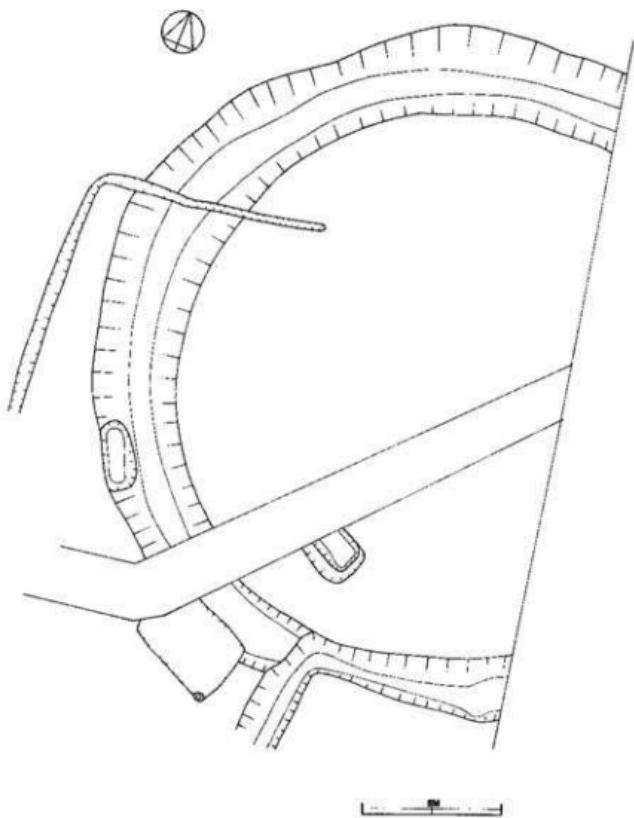
第56図 炉穴土壤溝出土遺物



第57図 第16号土壙出土遺物

規模は、内径約20m、外径26m～27m前後の円形を呈するものと思われる。周溝は、幅2.4m～3.4mほどの幅を有する。深さは、0.6m～1m前後で「U」字状を示す。

主体部は、南西部周溝側に検出された。水道溝によって切断されている。短径1.8m前後、長径は不明であるが長方形の掘り方を有するものと思われる。後世の石材ぬき取りが行なわれたらしく、石材は、ほとんど存在しない。周溝内より埋葬施設と思われる土壙が南西部に1基検出された。長径2.4m、短径1.1mの楕円形を呈する。周溝の外側に寄った部分に位置している。主体部、周溝ともに遺物の出土はなかった。



第58図 第1号墳実測図

第4節 グリット出土遺物

縄文式土器

各グリットより、縄文時代早期を中心として、若干の、前期末、中期、後期の各時期の土器が出土した。量は、あまり多くなく、出土した土器をほとんどすべて固化した。分類に当っては、次のような基準のもとに行なった。

第I群 撫糸文系土器群

- a - 回転方向を変えて、口縁部に文様帯を持つもの。
- b - 口縁部より單一方回転の撫糸文を配するもの。
- c - 粒の大きい、間隔のあいた絡条体で、回転方向を変えて羽状構成をしているもの。

第II群 条痕文系土器群（微隆起線文、絡条体压痕文を配するもの）。わずかに纖維を含む。

- a - 貝殻腹縁文を有するもの。
- b - 微隆起線文を配するもの。
- c - 絡条体压痕文を有するもの。
- d - 沈線文を有するもの。
- e - 条痕文を有するもの。（又は、擦痕状の調整痕があるもの）。

第III群 条痕+縄文のもの。（表面に縄文を配するもの）。

- a - 表面-縄文、裏面一条痕を配するもの。
- b - 表面-縄文、裏面に条痕が配されずに、調整痕が残存するもの。
- c - 表面に隆起線が配されるもの。
- d - 表面に側面体圧痕文が配されるもの。

第IV群 前期末、貝殻腹縁文等を持つもの。

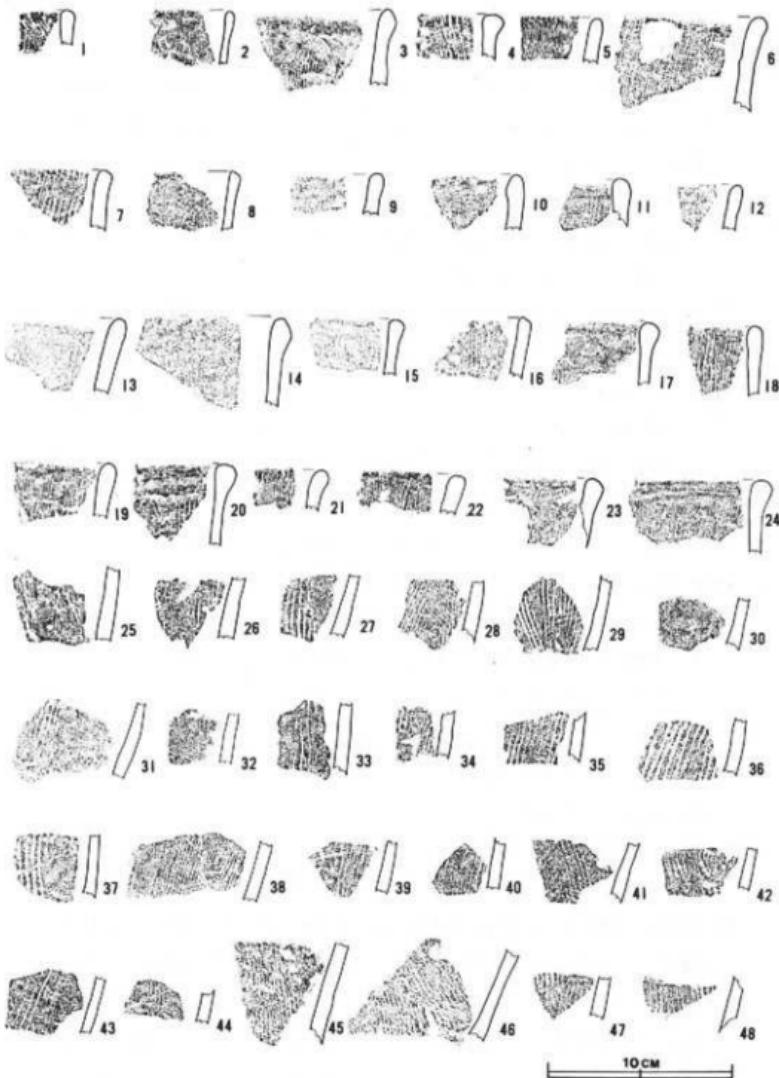
第V群 後期初頭の土器群

第VI群 後期中葉に属すると思われる土器群

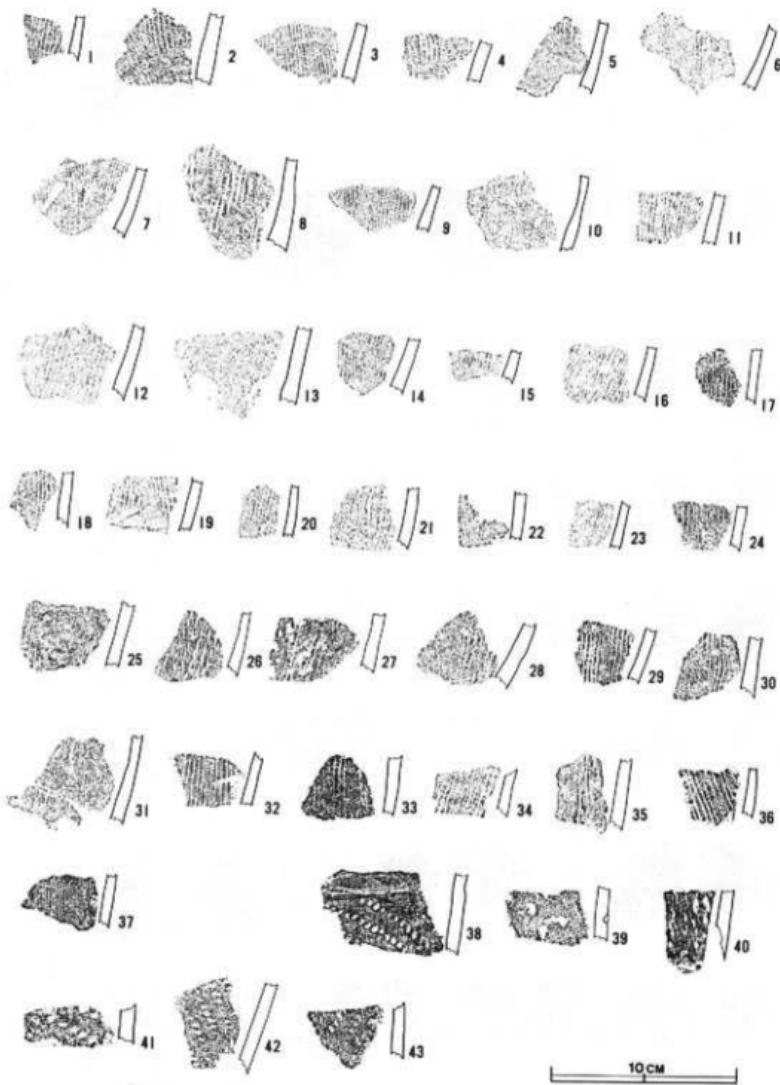
第1群（第59図、第60図） 単軸絡条体を有する。縄文時代早期、撫糸文系の土器群である。

- a (第59図1) 口縁部片。単軸絡条体の回転方向を変えて、文様帯を形成するもの。
- b (第59図2~48、第60図1~37) 単軸絡条体を有するもの。第59図2~24は、口縁部片である。口縁部断面が若干厚くなる。器厚は、0.8cm前後であるが、2、8は、薄い。いずれも、口縁部から單一方回転施文される。第59図28~48、第59図1~37は、胴部片。第59図28は、回転方向を変えている。

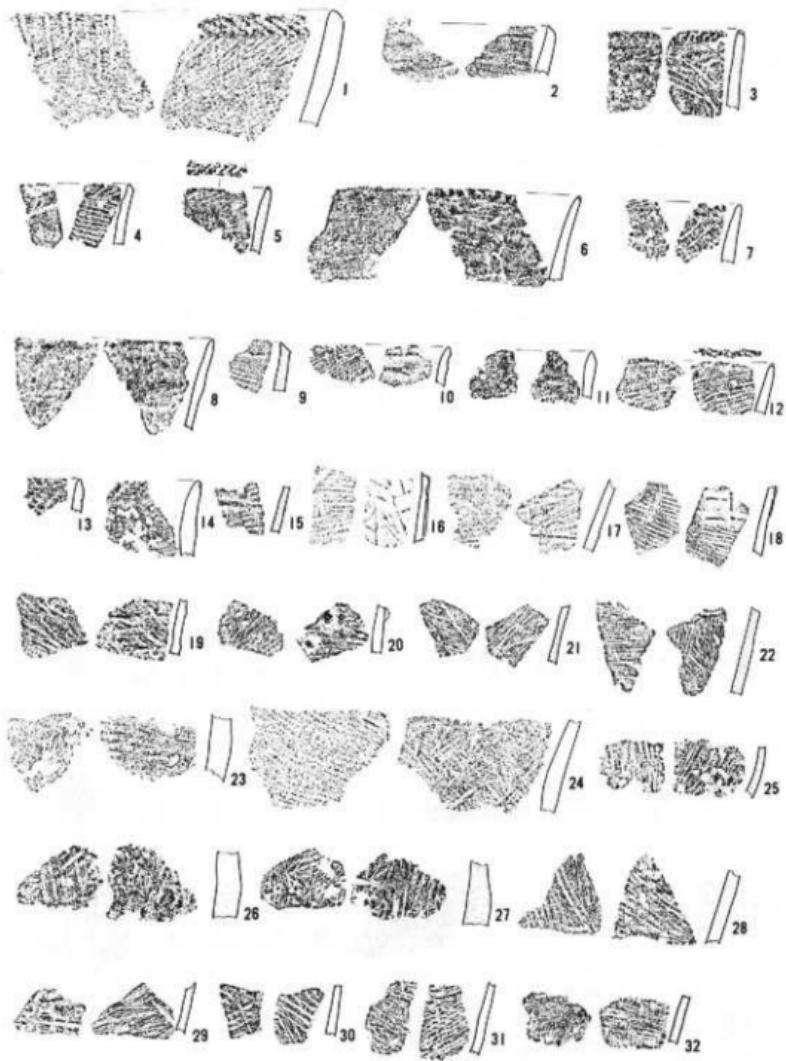
- c (第60図38~43) 粒の大きい、間隔のあいた単節斜縄文を配するもの。



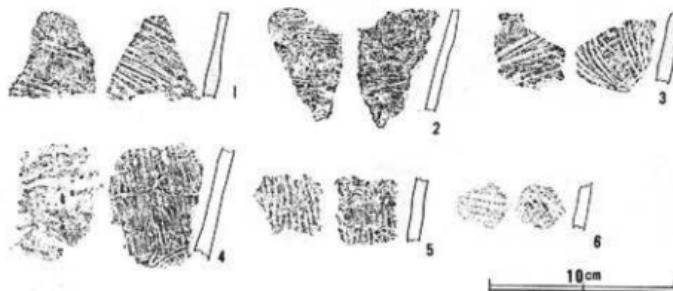
第59図 グリット出土遺物（1）



第60図 グリット出土遺物 (2)



第61図 グリット出土遺物（3）



第62図 グリット出土遺物(4)

第二群（第61図～第62図） 繩文時代早期、条痕文系の土器群に属するもの。繊維が少量混入する。

a (第61図3, 5, 13, 14) 口唇部に貝殻腹縁を押圧するもの。5, 14は、口縁部断面が比較的丸く、3, 13は、外側にカットされる。いずれも、裏面には調整痕が認められる。

b (第61図10, 16～20) 微隆起縞文が配されるもの。16は、比較的複雑な文様構成である。17～19は、横位の単純なものである。20は、瘤が配される特異なもの。

c (第61図1, 2, 4, 6, 9, 11, 12) 口唇部、及び口縁部裏面に単軸絡条体が配される。1, 11は、外側にカットされた口唇部に絡条体压痕文が配される。絡条体压痕文は、口縁裏面にも配される。4, 6, 9は、外側にカットされた口唇部に絡条体压痕文が配される。11は、口唇部に配される。

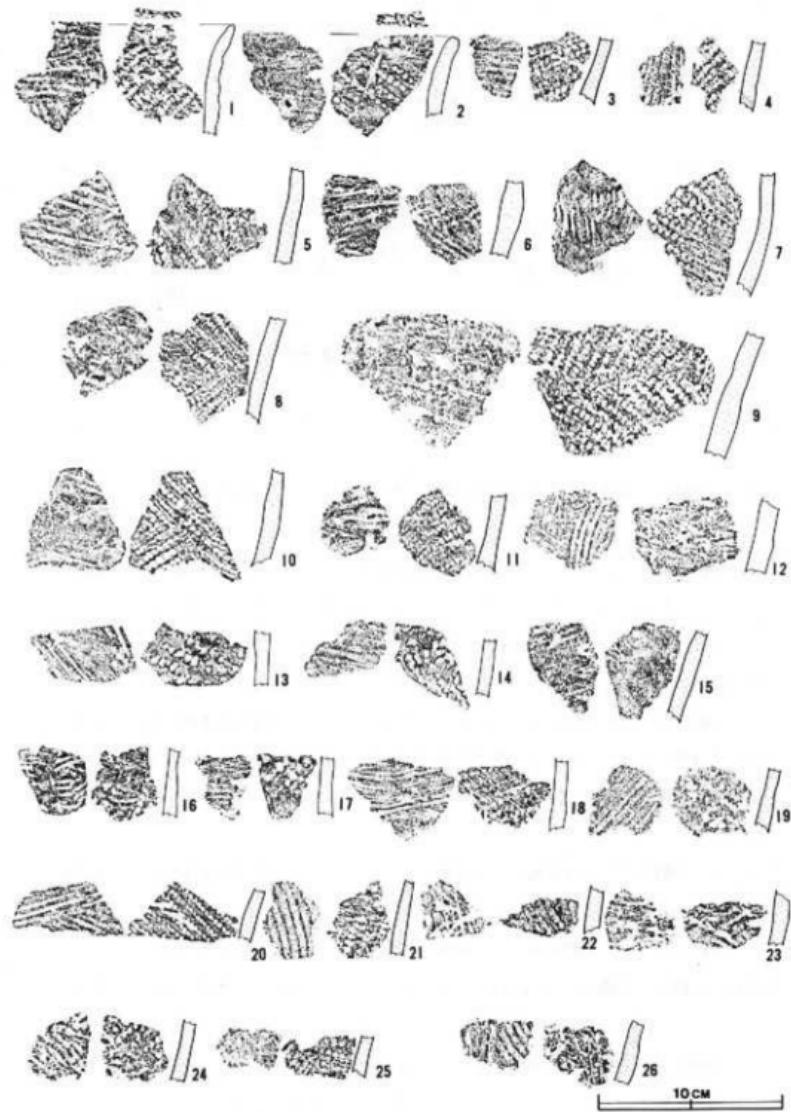
c, d (第61図7) 口縁裏面、及び外側にカットされた口唇部に絡条体压痕文が配される。口縁部に、条痕文を地文として沈線文が配される。

e (第61図21～32, 第62図1～6) 胴部片。表面、及び裏面に条痕文が配される。

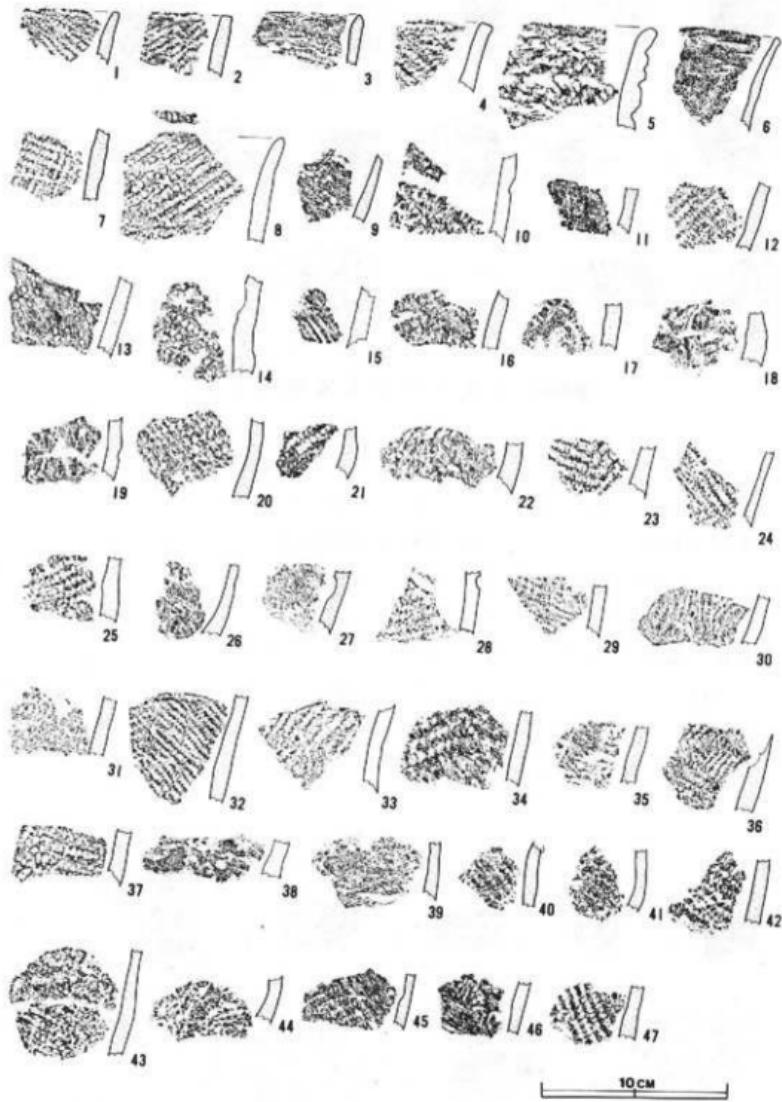
第三群（第63図～第65図） 繩文時代早期、繩文＋条痕文系土器群に属するもの。胎土に繊維を含む。

a (第63図1～26) 表面に繩文を配し、裏面に条痕文を配するもの。1, 2は、口縁部片。口径部に繩文原体による押圧がある。8～10, 14は、羽状繩文を有する。

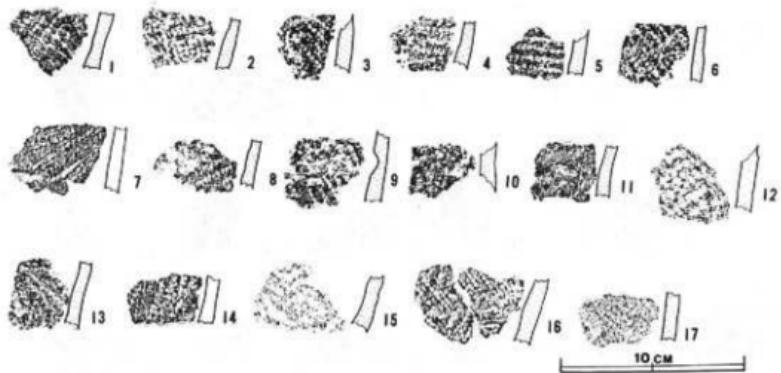
b (第64図1～4, 6～47, 第65図1～17) 表面に繩文を配するもの。裏面は、調整痕が認められ。条痕は、配されない。1～4, 6, 8は、口縁部片。8は、口唇部に繩文が押圧される。



第63図 グリット出土遺物（5）



第64図 グリット出土遺物（6）



第65図 グリット出土遺物 (7)

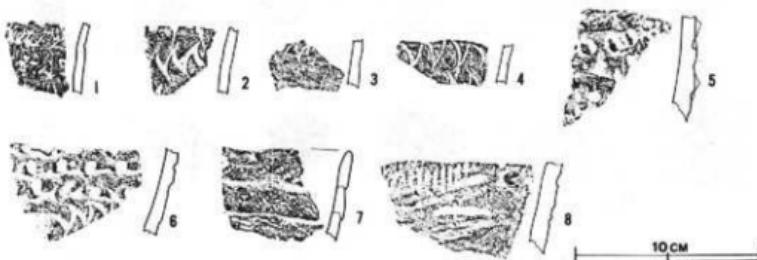
d (第64図5) 表面に、縄文が配され、横位に侧面体圧痕文が加わるもの。

第IV群 (第66図1~8) 縄文時代前期後半、貝殻腹縁文を有する浮島式土器と思われる。1~6まで、波状貝殻文が配される。5, 6は、貝殻腹縁による刺突が配される。7は、「S」字状の結節回転文を配する。輪積み痕が残っている。

第V群 (第67図) 縄文時代後期初頭に属するもの。

a (第67図1, 2, 5~7, 12, 14) 隆起線文が配されるもの。1は、小突起があり、貫通孔が配される。6は、微隆起線によって、口縁部無文帯を区画し、(隆起線+刺突)が垂下する。

b (8, 9, 11, 13) 縄文+沈線のもの。



第66図 グリット出土遺物 (8)



第67図 グリット出土遺物 (9)

c (15, 16, 18~21) 沈線文を配するもの。16, 18は、1本描き沈線により、格子状に配する。20, 21は、櫛状工具による沈線文を配する。

d (17) 底部片。一応、この類に入るものと思われる。

第VI群 (第67図22~26)

繩文時代後期中葉に属するもの。22~25は、横位の充填繩文部分に「ハ」字状の沈線文を配す

る。26は、粗製土器である。

弥生式土器

弥生式土器は、次のような基準で分類した。

第I類——縄文+沈線文系土器群

第II類——沈線文系の土器群

第III類——櫛描文を配するもの

第IV類——縄文を配するもの

第V類——無文のもの

第VI類——底部。

a 1 波状文

a 2 縦区画を配するもの

a 3 折り返し口縁

a 4 直線状の櫛描文

a 5 裏面に波状文

b 1 波状文

b 2 縦区画

b 3 直線上の櫛描文

c 半截竹管

a 1 附加条第一種の縄文

a 2 附加条第二種の縄文

a 3 口縁部に無文帶

a 4 裏面に縄文

b 1 頸部に無文部を持つ

b 2 頸部に縄文を配する

b 3 S字状の結節回転文

c 胎部片

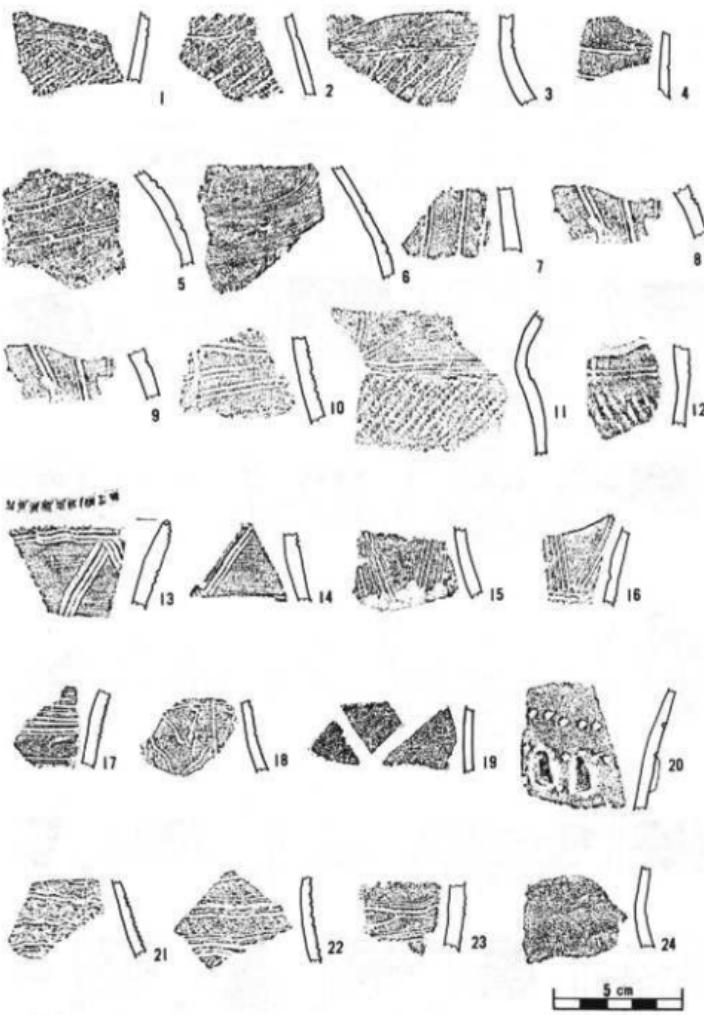
第I類（第68図1、2） 縄文+沈線文を有するもの。1は、半截竹管文。2は、1本描沈線文である。

第II類（第68図3～12、18、19） 沈線文配するもの。5～9は、半截竹管文によって満文を描くものと思われる。3は、頸部で屈曲し、沈線文が配される。11は、頸部で屈曲し、3本櫛（？）の沈線文が配される。10は、葉脈状の文様が、半截竹管文で描かれる。18は、半截竹管文で、矢羽根状の文様を配する。19は、1本描沈線で格子状の文様を配する。

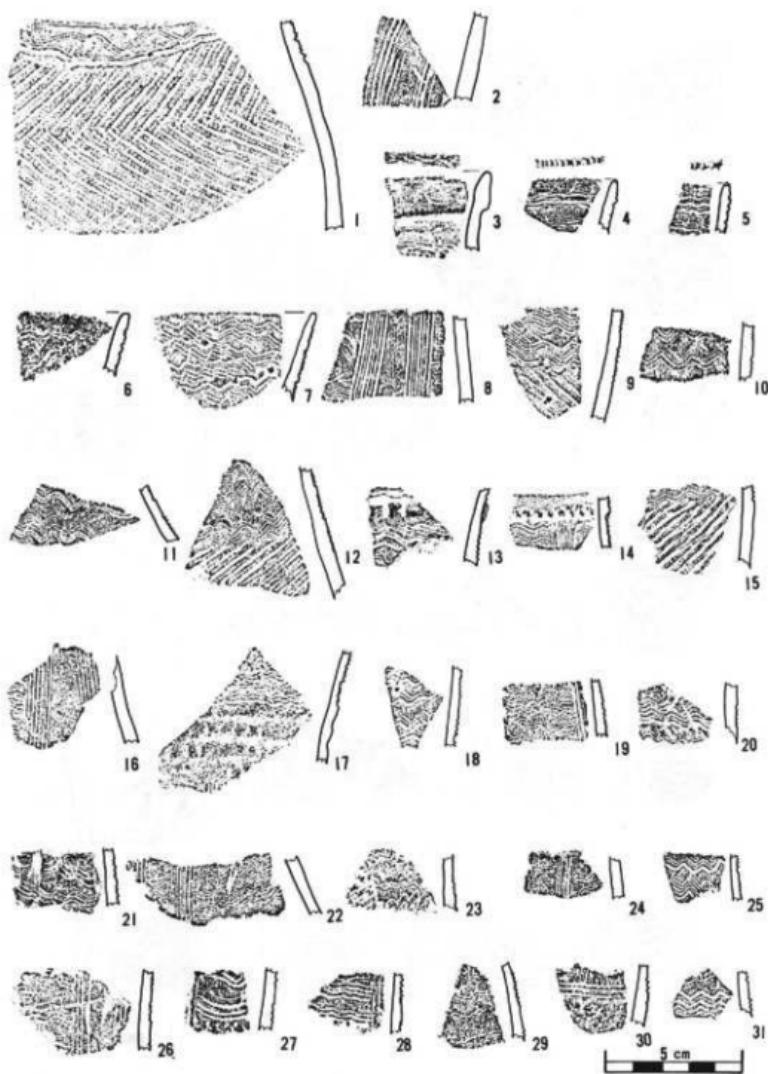
第III類（第68図13～17、21～24、第69図） 櫛描文を配するもの。

a 1（第69図4～7）口縁部片。波状櫛描文が配されるもの。4、5は、口唇部にヘラ状工具によるスリットが配される。

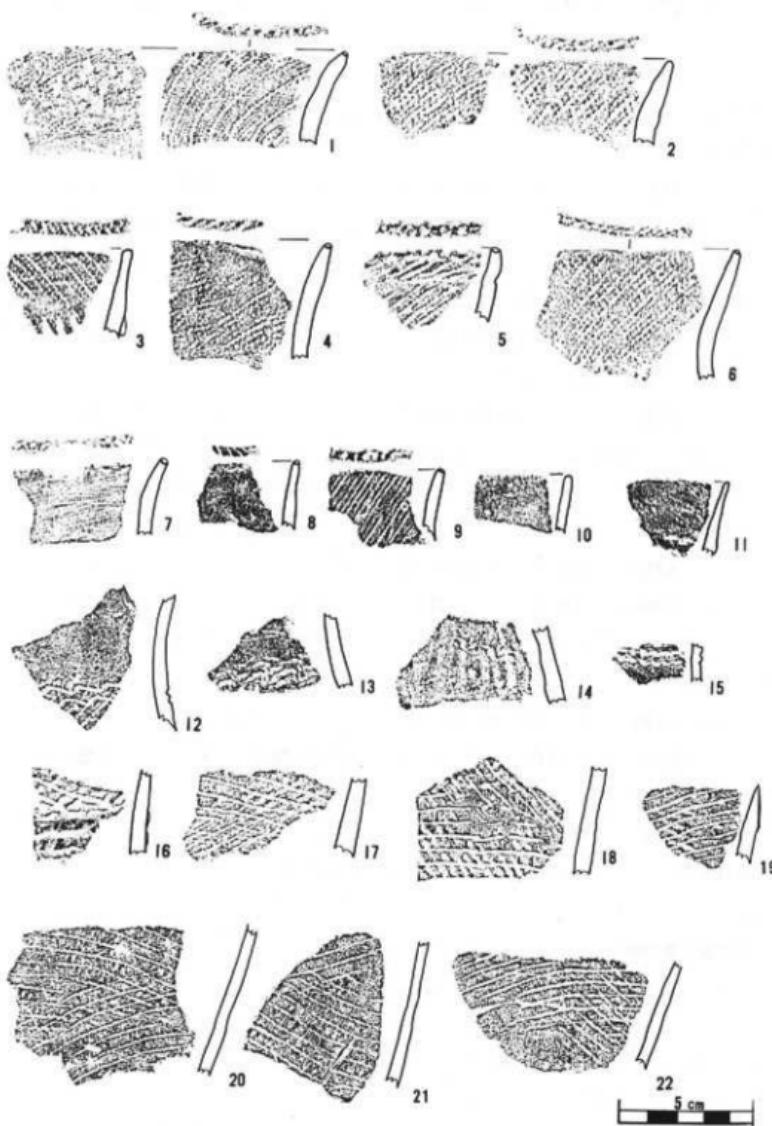
a 3（第69図3）折り返し口縁を有するもの。口唇部に縄文原体による押圧がある。波状櫛描文を配するものと思われる。



第68図 グリット出土遺物 (10)



第69図 グリット出土遺物（11）



第70図 グリット出土遺物 (12)

a 4 (第68図13) 口縁部。口唇部にスリットが配される。口縁部には、鋸歯状の描描文が配される。

b 1 (第68図17, 21~24, 第69図1, 8~13, 15, 18, 20, 21, 23, 25, 29, 31) 頭部に備 描波状文を配するもの。現状では、縦区画がないもの。13, 17は、(隆起線+刺突)の横区画が配される。

b 2 (第69図2, 8, 14, 17~19, 22, 24, 26~28, 30) 頭部に備 描波状文+縦区画を配するもの。17は、(隆起線+刺突)で区画し、上位に波状文、下位に波状文+縦区画が配されるものと思われる。

第IV類 (第70~第75図) 縄文を配するもの。

a 1 (第70図3~6, 9, 11) 口縁部。3~6は、口唇部に縄文原体による押圧が配される。3, 11は、区画の(隆起線+刺突)が配される。

a 3 (第70図7, 8, 10) 口縁部に無文帯があるもの。7は、口唇部に縄文原体による押圧がある。8は、口唇部に、スリットが配される。

a 4 (第70図1, 2) 口縁部に縄文を配し、裏面にも縄文が配されるもの。口唇部に縄文原体による押圧がある。

b 1 (第72図4, 第74図20) 頭部に無文帯を配するもの。

b 2 (第70図16, 第71図1, 6, 第72図5, 9, 14, 15, 22, 第73図25, 第74図18, 第75図11~14) 頭部片、又は、胴部上半に縄文を配するもの、第70図16, 第73図1は、区画(隆起線+刺突)が配される。

b 3 (第70図12~15) 頭部に無文帯を配し、「S」字状の結節回転文が配されるもの。

c (第70図17~22, 第71図2~5, 8~14, 16~23, 第72図1~3, 6~25, 第73図1~24, 第74図1~7, 19, 21~25, 第75図1~10, 15~26) 脇部片である。

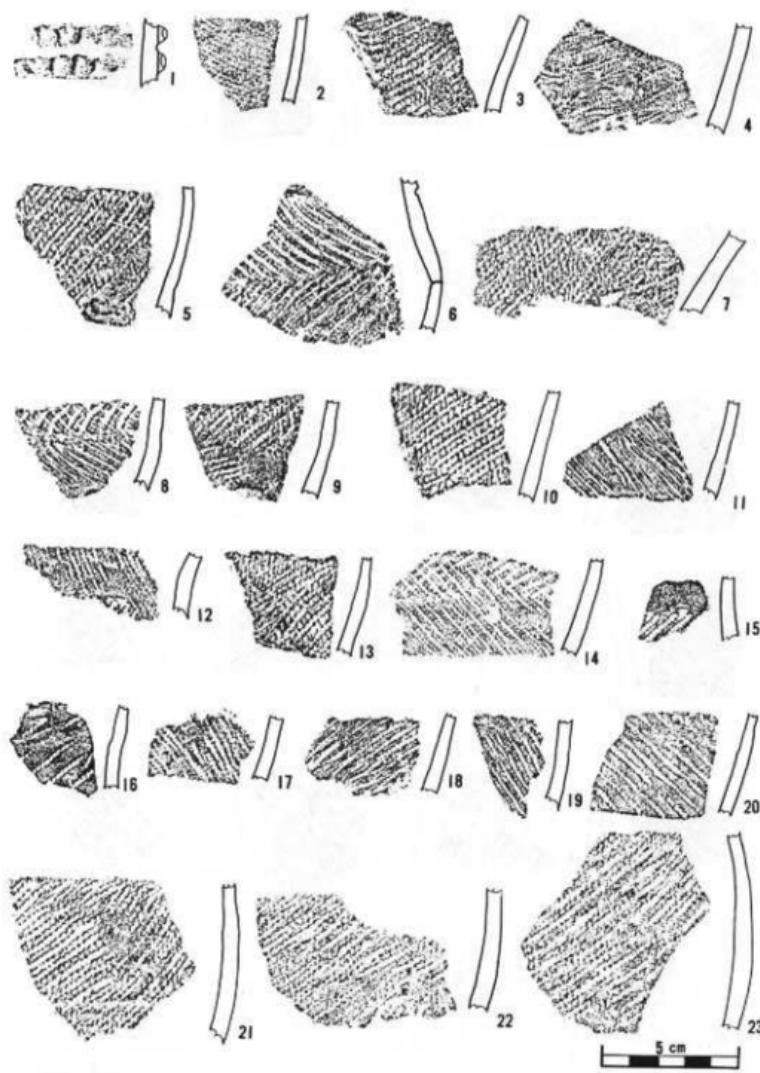
第VI類 (第76図~第77図) 底面部である。第76図1, 3, 7~11, 第77図1~5は、底面部に布目痕が配されるもの。第76図2, 4, 6は、木葉痕を配するもの。

土製品 (第78図)

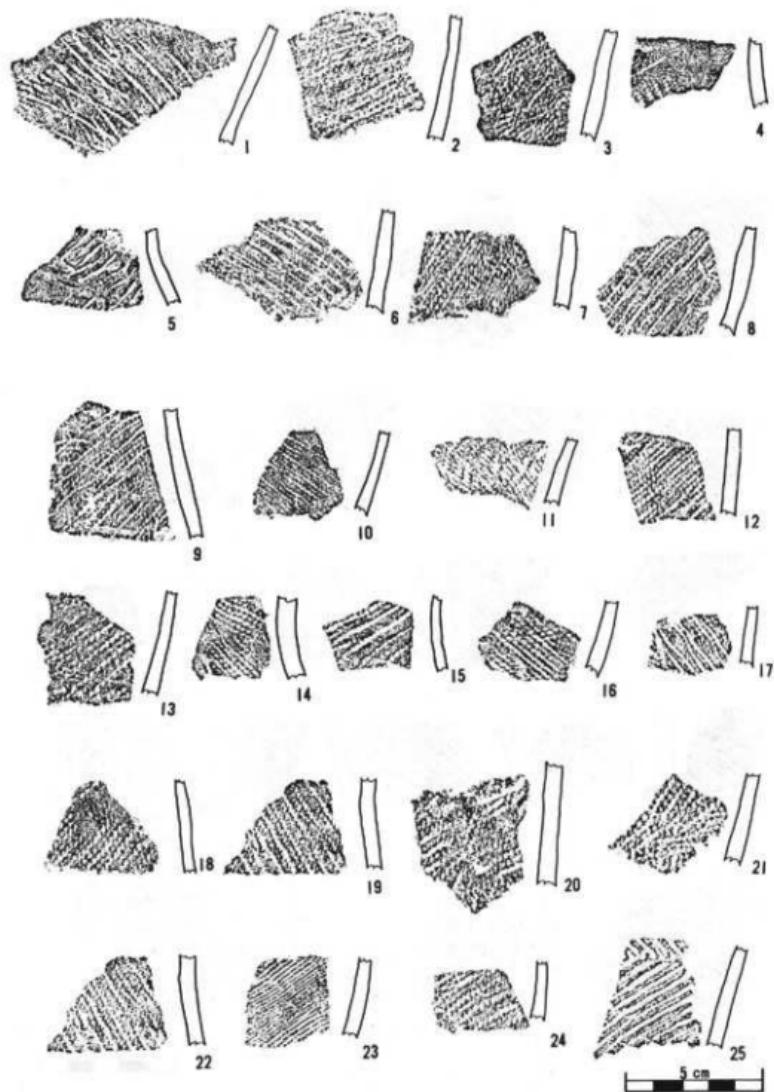
土玉 (1, 2) には円球状を呈する土玉が2個出土している。1は、G 6区より出土。重量は、15g。2は、E 6区より出土。重量は、12.5gである。

管状土錐 (3~6) 小型で細長い管状土錐が4個出土している。いずれも、G 6区より出土している。3は、重量4g。4は、0.1g。5, 6は、1gである。

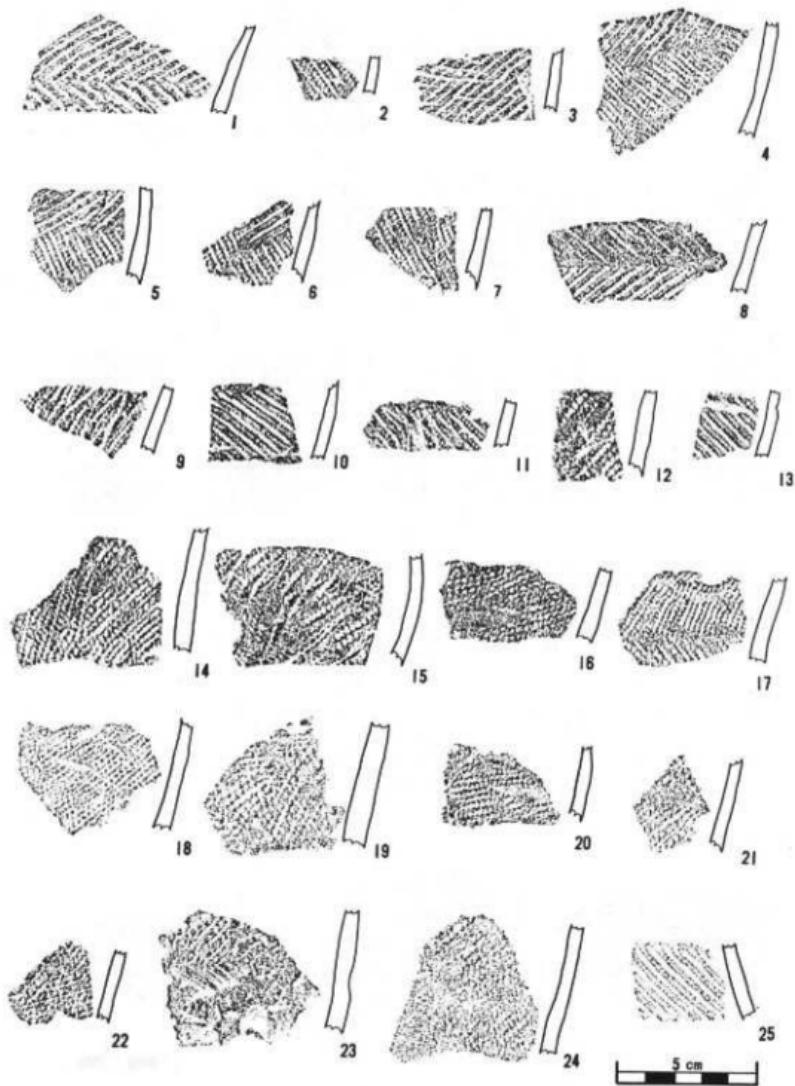
土製円盤 (7~9) 土器片を利用した土製円盤が3個出土している。器面の文様は、縄文式土器第I群である。7は、E 5区より出土。重量16g、周囲を研削している。8は、第4号溝出土。



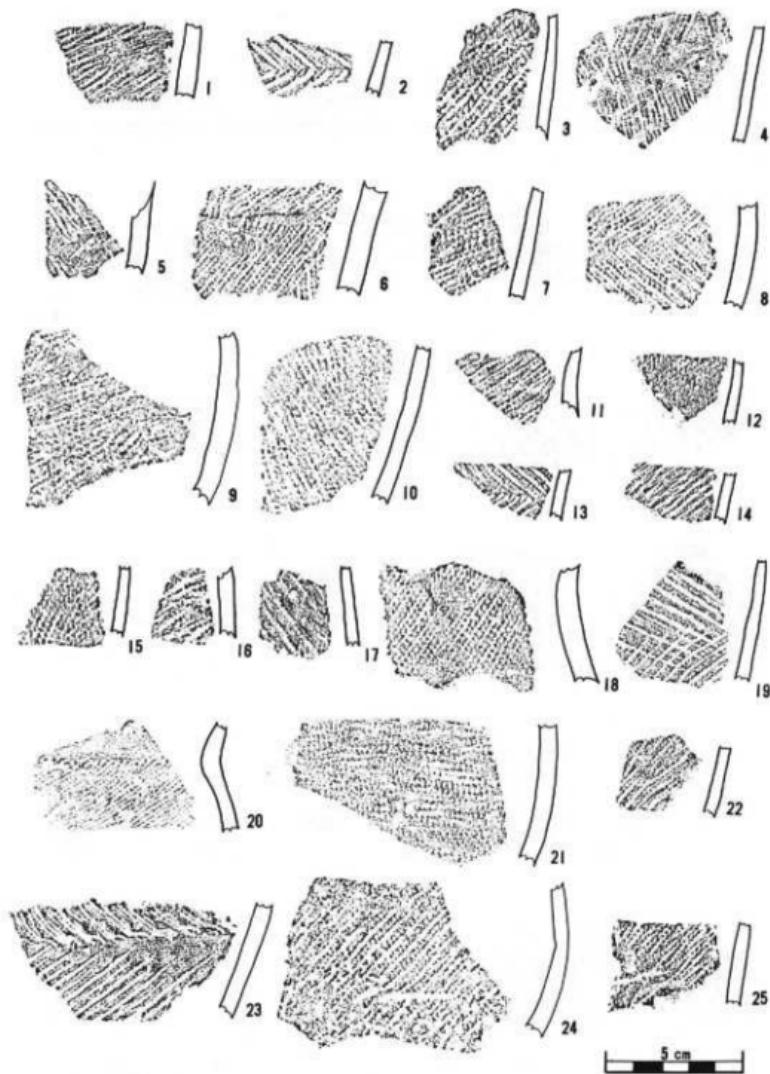
第71図 グリット出土遺物 (13)



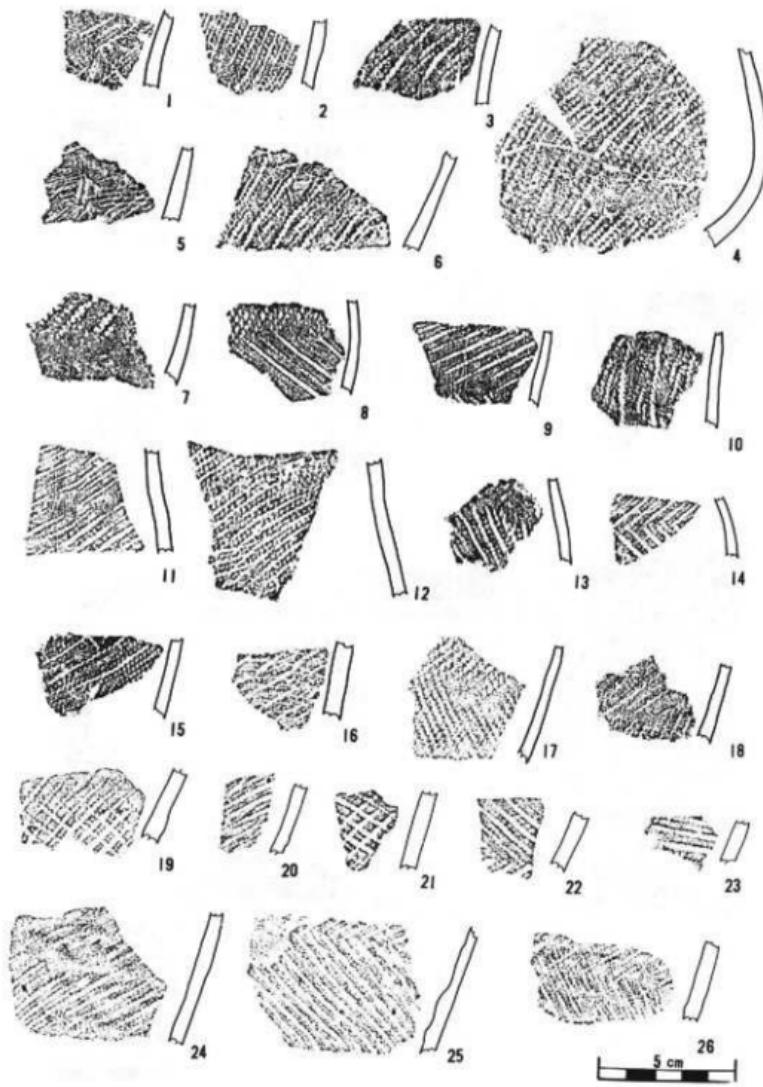
第72図 グリット出土遺物 (14)



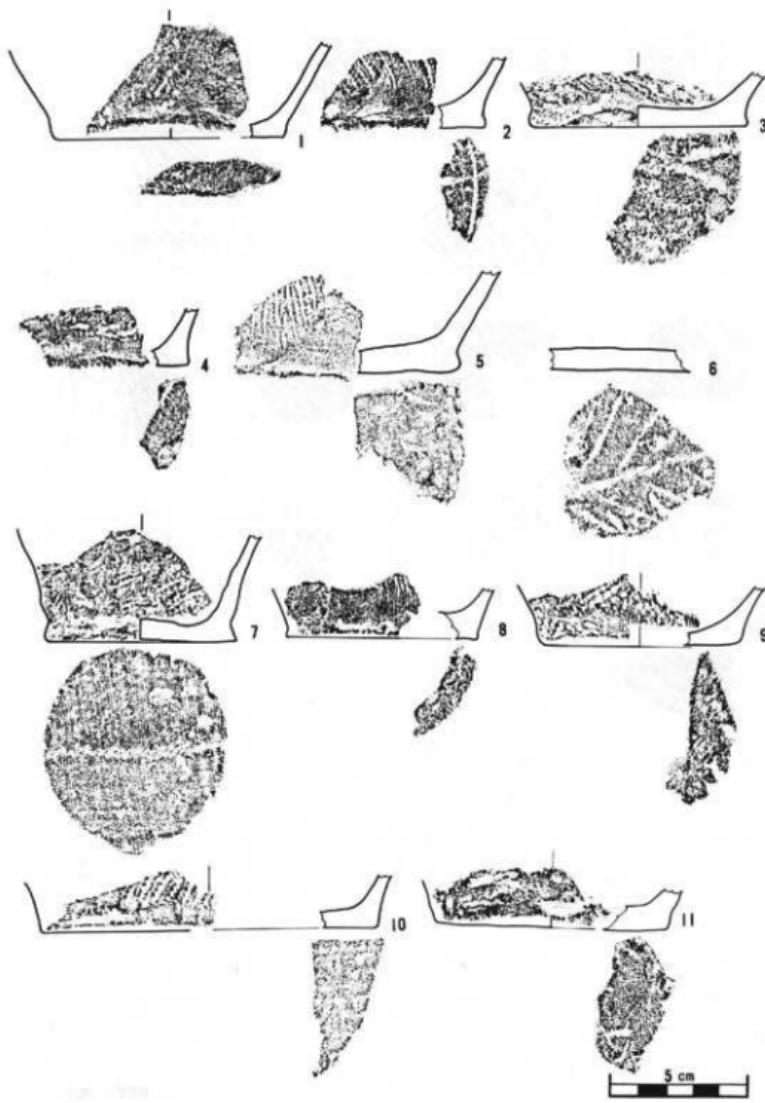
第73図 グリット出土遺物 (15)



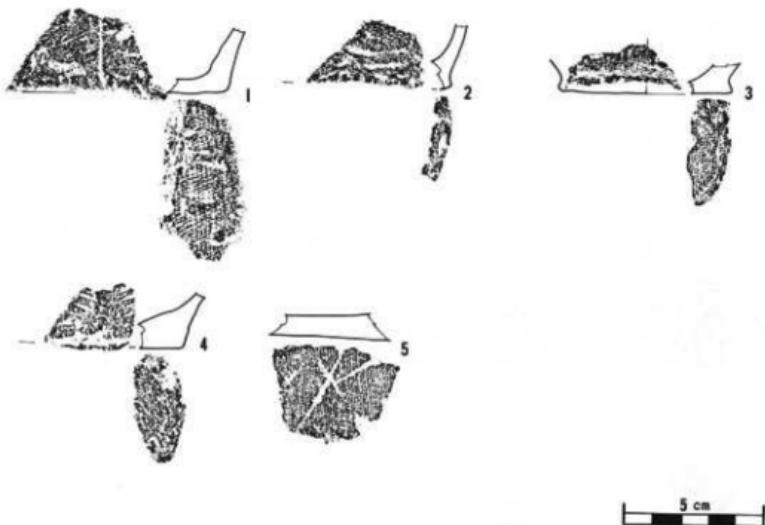
第74図 グリット出土遺物 (16)



第75図 グリット出土遺物 (17)



第76図 グリット出土遺物 (18)



第77図 グリット出土遺物 (19)

重量12.5 g、9は、F 5区出土。重量は、7 g。

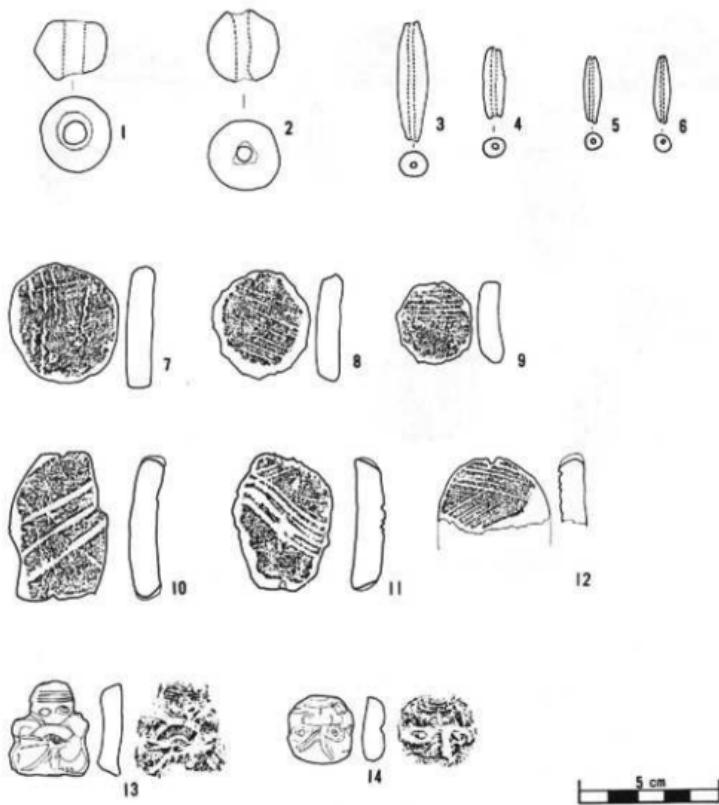
土器片錐（10～12）土器片を利用した錐が、3個出土している。器面の文様は、縄文式土器第V群である。12は、破損品。

泥面子（13、14）スタンプ状に作り出されたと思われる小型の面、人形が2個出土している。文様は、表面のみ刻印されている。

石器（第79図～第85図）

石器は、総数57点出土した。内容は、表1のとおりである。いずれも、縄文時代と思われ、大部分は、早期に属するものと思われる。1点だけ弥生時代に属すると思われる大型蛤刃石斧が出土している。

石核（第79図1～3）上下両端から剥離が加わるもの。端部は、細かい階段状の剥離が認められる。側面が凸レンズ状を呈する。1は、方形を呈し、左右からも加撃されている。2、3は、礫面を残す。2は、上端からの細長い剥離が明瞭である。これらは、他の石核とは分離されたが、一応石核として、図示する。（楔形石器と思われる）



第79図 グリット出土遺物（20）

スクリイバー（第79図4～7）4、5は円形に近い形態で小型である。6は、両側面にスクレーバーエッジが形成される。7は、打面を除いた全周にエッジが形成される。

尖頭器（第79図8）長さ11cm、最大幅2.8cmの柳葉状の大型品。剥離は、主として、片面から行なわれている。

石鎌（第79図9）三角形を呈する。

局部磨製石斧（第80図1～7）長さ5cm～8cmの小型の石斧である。主として、側面部に剥離が行なわれ、平坦部、及び刃部に研磨が行なわれる。刃部は、両面とも研磨によって形成される